

見参にいらんと申て令参て申ける度居よりくせさせ給ていみじく用ゐられけりさてひしと天下を治めてけりそれは一番に帝道をときていさめ申けり次には王道をときて教へ申けりこの二度御心になはす第三度のたびこの君かなはじと見まいらせて覇業を説て用られにけり秦の始皇と申君も覇業の君とこそ申なれ後に又魏の齊王の時に范叔と云臣の世をとりたる衛鞅をいみしき者と云けれと蔡澤と云者出来て衛鞅のいみじかりしか後に車裂にせられたりなど申をかし王臣も一期生無爲無事にこともなくて過るこそいよけれと論じて范叔の蔡澤に論まけてさらはとて世の政事を蔡澤に譲りていりこもりければ蔡澤うけとりて誠に王臣一生はをたふくてやみにけりあはれこのもしき者とも或蔡澤がめでたきよりも范叔か我世を道理に折て去てのきける心ありかたかるへし漢家の聖人賢人のありさま是にてみなあらぬへし唐太宗の事ハ貞觀政要にあきらけし佛のさとりにも菩薩の四十二位までたつるも善惡のさとり分際みな思ひまらる事也今神武以後延喜天曆までくたりつゝこの世を思ひつゝくるに心も詞も不及さりなからこの代にのみて思ふに神武より成務まで十三代ハ王法俗諦ばかりにていさゝかのやうもなく皇子々々打つぎて八百四十六年の過にけり仲哀より欽明まで十七代ハかくをちあがりて安康武烈の王もまじらせたまひて又仁徳仁賢めてたくて過にけり三百九十四年也十三代よりも十七代ハすくなくして欽明に佛法わたりはしめて敏達より聖徳太子のをさなくおひします五ッ六ッわたる所の經論偏にをさなき人にうちまかせて見解て王に申させたまひて敏

達用明崇峻三代ハ過ぬその次に女帝の推古にひしと太子を攝政にて佛法に王法いたもたれてをばしませの敏達より桓武まで二十二代この平安の京へうつるまでを一段とらハその間の二百卅六年これ又十七代の年の數よりもすくなしこのやうにて世の道理のうつりゆく事をたてんには一切の法はたゞ道理と云一三の文字かもつ也其外にいなにもなき也僻事にの道理なるをちりわかつことのはまれる大事にてある也この道理の道を劫初より劫末へあゆみくだり劫末より劫初へあゆみのはる也是を又大小の國々の初より終りさまへくだりゆく也この道理をたつるにやうくさまくなるを心得ぬ人ハ心得させん料に少々心得やすきやうにかきあらはし侍へし

一冥顯和合して道理を道理にてとほすやうハ初めなり  
是ハ神武より十三代まで歟

二冥の道理のゆうくとうつり行を顯の人はえ心得ぬ道理これは前後首尾のたかひくしてよきもよくてもとほらずわるきもわるくてもはてぬを人のえ心得ぬなり

これは仲哀より欽明まで歟

三顯には道理かなとみな人ゆるしてあれ冥衆の御心にかなはぬ道理なり

これはよしと思つてしつることのかならず後悔のある也その時道理と思つてする人の後に思ひあはせてさとり知也  
これハ又敏達より後一條院の御堂の關白まで歟



四當時さたしぬる間は我も人もよき道理と思はどに智ある人の出てこれこそいはれなけれと云とき誠にさありけりと思ひ返す道理也

是の世の末の人のふかくあるへきやうの道理也これまた宇治殿より鳥羽院などまで歟五初より其儀兩方にわかれてひし〜と論してゆくほどにさすかに道理は一こそあれば其道理へい、かちて行ふ道理なり

是は地體に道理を志れるにはあらねと志かるべくて威徳ある人の主人なる時は是を用る道理也

是は武士の世の方の頼朝まで歟

六かくのごとく分別しがたくてとかく或は論じ或は未定にてすぐるほどにつひに一方につきておこなふ時わろき心のひく方にて無道を道理とあしくはからひてひがごとになるか道理なる道理也

是はすべて世のうつりゆくさまの僻事が道理にてわろき時法の世も落くだる時々道理也

これ又後白河よりこの院の御位まで歟

七すべて初より思くはだつる所道理と云ものをつや〜われも人もあらぬあひだにたゝわたるにあたかひて後をかへりみず腹に寸白などやむ人の當時發らぬ時喉の渴ばとて水などを飲てまばしあればその病發りて死行にもをよふ道理也

是は此世の道理也されは今は道理いふものはなきにや

このやうを日本國の世のはしめより次第に王臣の器量果報をとろへゆくにあたがひてかゝる道理を作りかへ〜して世の中は過る也劫初劫末の道理に佛法王法上古中古王臣萬民の器量をかきひしと作りあらはする也されはとかく思とも叶ふまじけれかなはてかく落する也かくは有と内外典に滅罪生善と云道理遮惡持善といふ道理諸惡莫作諸善奉行といふ佛説のきら〜として諸佛菩薩の利生方便といふもの、一定また有也これをこの初の道理とも心得あはすべき也いかに心得あはすべきぞといふにさらに〜人これを教ふべからず智恵あらん人の我知解にてしるべき也但もしやと心の及ひの詞ゆかんほどをば申ひらくべし大方ふるき昔のこといた〜かたはしを聞に皆よるつゝあらる心ばえの人にてあるし置事はめてかすか也これをみて申さんことはひとへに推量のやうなれば又此比の人は信をおこさぬ事にて侍らんざればこまかに申かたしをろ〜は又やがて事のけすらひをば左様にやと云とは書付侍ぬさて世のすえさまは事のしけくなりて盡しかたく侍れども清和の御時はじめて攝政をおかれて良房の大臣いでき給ひし後その御子にて昭宣公の我甥の陽成院おろし奉りて小松御門をたて給ひしより後の事を申べき也先道理うつりゆく事を地體によく〜人は心うべき也いかに國王と云け天下のさたをして世を鎮め民を慰むべきに十がうちなるをさなき人を國王にはせんぞと云道理侍ぞかし次に國王とてすえまいらせて後はいかにわろくとも只さてこそあらめそれを我御心より起りて



をりなんとも仰られぬにれしれろしまいらすべきやうなし是を云そかし謀反とは云ふ道理又必然の事にて侍ぞかし其にこの陽成院をれろしまいらせられしをばいはれず昭宣公の謀反也と申人や世々侍るつや〜とさも思はず又申さぬぞかし御門の御ためかぎりなき功にこそ申しつたへたれ又幼主とて四五より位につかせ給をまかるべがらずとのさたすはせにならせ給てこそと云人や又侍る昔今つくまじき人を位につくる事なければをさなしとてきは王位はたねなんすればこの道理によりてをさなきをきらふことなこれ等にて物の道理をばあるべき也大方世のためよかるべきやうを用る何ことにも道理詮とは申也世と申と人と申とは二の物にてはなき也世とは人を申也その人にとりて世といはるゝ方はをばやけ道理とて國の政事にかゝりて善惡をさだむるを世とは申也人と申は世の政にもものぞまらずべて一切の諸人の家の内までをおだしくあはれむ方の政事を又人とは申也其人の中に國王より初めてあやしの民まで侍ぞかしそれに國王には國王ふるまひよくせん人のよかるべきに日本國のならひは國王種姓の人ならぬすぢを國王にひすましと神の代より定めたる國也その中には又同じくはよからんをとねがふは又世の習ひ也それに必しも我からの手こしにめでたくをはします事のかたければ御うしろみを用て大臣と云臣下をなして仰合せつゝ世をばをこなへと定めつる也この道理にて國王もあまりにわろくならせ給ぬれば世と人との果報にれされてはたもたせ給はぬ也其わろき國王の運のつきさせ給ふにまたやう〜のさまの侍也

- 一 太神宮八幡大菩薩の御教へのやうには御うしろみの臣下とすこしも心をわかずをばはしませとて魚水合體の禮と云ことを定められたる也これ許(肝要)にて天下の治り亂るゝ事は侍る也こやねの尊に天照大神の殿内に侍ひてよくふせぎまもれと御一諾をはるかにしするのたがうべきやうの露ばかりもなき道理をえて藤氏の三功と云ふ事いできぬその三と云は大織冠の入鹿を誅し給しこと永手大臣百河の宰相が光仁天皇をたてまいらせし事昭宣公の光孝天皇を又たて給しこと此三也初には事ありたり昭宣公の御ことば清和の後にさたかに出來たる事也其後すべて國王の御命の短き云はかりなし五十に及ばせ給たる一人もなし位をおりさせ給て後はみな又久しくおはしますめり是等は皆人しりたれど一度に心にうかふ事なけれいらるさきやうなれどこれをまつ申あらはすべし
- 一 清和は僅かに御歳三十一治天下十八年なり
- 一 陽成は八年にておりさせ給ぬ八十一までおはしませ世もあらせ給はす
- 一 光孝はたゞ三年これはさらにいできおはしたる事にて五十五にて初てつかせ給ふ
- 一 宇多は三十年にて位をさりて御出家六十五までおはします
- 一 醍醐は卅三年まで久しくて御年四十六にてたゞ是ばかりめてたき事にておはします
- 一 朱雀は十六年にてあれど卅にてうせ給ふ
- 一 村上は廿一年にて四十二まで也これ延喜天曆とてこれこそすこしながくればはしませ
- 一 冷泉は二年にて位をおりて六十二までたれいしませと只陽成と同一御事なり



一 圓融の十五年にて卅四  
 一 花山は二年にて四十一にておはしませと云にたらず  
 一 一條は廿五年にて卅二幼主にてのみおはしませは久しきもかひなし  
 一 三條は五年なり東宮にてこそ久しくおはしませとも又かひなし  
 一 後一條は二十年なれど廿九にて又幼主にて久しくおはしませし  
 一 後朱雀は九年にてれどなくおはしませども卅七又はとなし  
 一 後冷泉は廿三年にて四十二これこそしほとあれどひとへに只宇治殿のまゝ也  
 一 此國王の代々の若死をせさせ給にてふかく心うべき也高きも賤きも命のたふるにすぎて作りかためたる道理をあらはす道はあるまじき也日本國の政を作りかふる道理はれりのみかどの世をよろしめすべき時代に落する事のだしき程國王の六十七すまでもおはしませば攝籙の臣の世をねこなふと云一段の世はあるまじき也さすがに君とならせればしまして五十六すまで脱履もなくあらんには只昔のまゝにてこそ有べけれ誠に御年のわかて初は幼主の攝政にてやう／＼さばかりにならせ給へども我と世をしらんと思食はどの御心はなし攝籙の臣の器量めてたくてその御まつり事をたすけて世を治めらるれば事もかけざるほとに君は世(世勅)が内外にて皆うせ給ふ也是はそは大神宮のこの中はと君の君にて昔の如くえあるまじけれ此料にこそ神代よりよく殿内をふせぎまもれといひてしかばその子孫に又かく器量あひかなひて生れあひ／＼してこの九條の右丞

相の子孫の君の政をば佐んずるぞと作りおはせられたる也さて其後太上天皇にて世をよろしめすへし又またまぬれは  
 一 白河鳥羽後白河と三代は七十六五十にみなあま／＼して世をばしめすになんさればこのとわりは是にて心得られぬ  
 一 さて後二(三)條院久しくおはしませすべきに事をはさずして四十にてうせおはしませ事ぞねばつかなければそれほむと世の衰ふべき道理のあらはるゝなるべし後三條院の御心に甲召はどの有けんはいかにめでたかりけんさてともいへかくもいへ時にとりて世をしらし召君と攝籙臣とひしと一御心にてちがふことの返々侍まじきを別に院の近臣と云者の男女につけて出来ぬればそれが中に居ていかにも／＼この王臣の御中をあしく申し(なり)てあはれ俊明(明)まではいみしかりける人哉(い)を詮には君のしらしめすへきなり今は又武者の出来て將軍とて君と攝籙の家とおしてめて世をとるることの世のはてには侍はどに此武將をみなうしなひはて誰にも郎従となるべき武士ばかりになしてその將軍には攝籙の臣の家の若公(公無)をなされぬる事のいかに／＼宗廟神の猶君臣合體して昔にかへりて世をまばしをさめんと思召たるにて侍ればその始終を申とほし侍へき也されば後三條院は四年これよりの事をこまかに申へしこの後は事はよりて位たりて後世をしらんとおはしめしはだて、我のとくうせさせ給しかど白河院七十七まで世をよろし召き是は臣下の御ふるまひになれば久しくおはしませす也



一次に鳥羽院又五十四までおはしますべきに又後白河五代の御門の父祖にて六十六までおはします太上天皇世をしろし召ての後その中の御子御孫の位の久しさとさの事はむやくなれば申に及ばすわざとせんやうに程なくかはらせ給ふめりその次にこの院の御世になりてすてに後白河院うせさせられたりして後承久まで既に廿八年になり侍りぬる也

一延喜天曆までは君臣合體魚水の儀まことにめでたしとみゆ北野の御事もせめて時平と御心たかはぬかたのゑるしなるべし

一冷泉院の御後ひしと天下は執政臣につきたりとみゆそれにとりて御堂までは攝籙の御心の時の君を思ひあなづりまいらせる心のさはくどなくて君のあしくおはします事をばめてたく申なほしくおはしますを君のあしく御心得て圓融一條院などより我をあなづる歎世をわが心にまかせぬこそなごたほしめしけるは皆君の御僻事とみゆ

一宇治殿の後冷泉院の御時世をひしとらせ給ひし後にすこしは君をあなづりまいらせて世をわが世に思はれけるかたのまじりにけるよなごみゆ

一後三條院これをさ御覽してこの事あれと思召て今はたゞ脱履の後われ世をしらんと思召てけりされどこの宇治と後三條院とはさはおはしめせどもあしかりけりくどみな思ひなほしくして王道へ落しすえて世の政はやみくしけるよなごみゆ

一白河院の後ひしと太上天皇の御心の外に臣下といふもの、詮にたつ事のなくて別に近臣とて白河院には初は俊明等も候すゑには顯隆顯頼など云者ともいできて本體の攝籙の臣

を此下さまの人のおはしけるに又かなしうおされてをれば、からながら又昔のすゑはさすがにつよくのこりて鳥羽後白河の初め法性寺のまてはありけりとみゆ

一この中に白河院の知足院殿をひしと中あしくもてなしてれひこめてその知足院の子法性寺殿を別にとりはなつやうにつかひたてさせ給たる御ひか事のひしと世をはうしなひつるにて侍也これにつけてさたかに冥顯の二の道邪神善神の御たがひ色にあらはれ内にこもりてみゆる也なれども鳥羽院は最後さまにおぼしめし、りけん物を法性寺殿に申あはせてその申さるゝまゝにて後白河院位につけまいらせて立なほりぬべきところにかやうに成行は世のなほるまじければすなはち天下日本國の運のつきはて、大亂のいできてひしと武者の世になりし也その後攝籙の臣と云者の世中にとりて三四番にくだりたる威勢にてきらもなく成にし也其後わづかに松殿九條殿この二人いさゝか一人の人に似たる事ともあれどかくなりぬる上のなさけにてこそあれ松殿は平家にうしなはれ九條殿は源將軍にとり出されたる人にて國王の御意にまかせて攝籙臣をわが物にたのみもしにくみもするすぢのこそくどうせぬる上はよきもあしきもれなしき事にて今はやみぬるにたいまはしこの院の後京極殿(真經)を攝籙になされたりしこそこはめでたき事哉と見えしはまに夢のやうにて頓死せられにき近衛殿と云父子の家には生れて職には居ながらつや／＼どかいはらひて世のやうをも家の習ひをもすべてしらす聞はず見ずならはぬ人にてまかも家領文書かへてかくもられぬかへされずしていまだうせずまなではするにてひ



しと世は王臣の道はうせはてぬるにて侍よとさはく見ゆる也それに王も臣もまちかき九條殿の世の事を思はれたりしちからの正道なるかたは宗廟社稷の本なればそれがとぬるべきにや今左大臣の子を武士の大將軍に一定八幡大菩薩のなさせ給ひぬ人のする事にあらず一定神々のしいださせ給ひぬるよとみゆる不可思議の事の出来て侍りぬる也これを近衛殿など云さたのはかの者は我家にかゝることなしはちかましくいはるゝを誠になどをもふ人もあるとかやたかしき事とはたゞ是等也わが身うるはしく家をつぎたる人にてこそさやらの事はたろかながらもいふべけれ平將軍が亂世に成さたする謀反の詮に二位の中將よりつやく物もしらぬ人のわかしくおろかしくしたるに攝籙の臣の名ばかりさつけられて怨靈にわざとまもられて我家うしなはれん料に久しくいきたるぞと意思ひしらぬほどの身にして家の耻也などいはくや大菩薩の御心にかなふべき不足言と云はこれ也すこしは世のうつり物の道理のかはりゆくやうは人これをわきまへかたければその料に是は書つけ侍れどこれを見ん人も我心にいれ入せんずればさらにかなふまじとこはいかしく侍べきされは攝籙家と武士家をひとつになして文武兼行して世を守り君をうしろみまいらすべきになりぬるかどみゆる也是につきて昔を思ひ出今をかへり見て正意にねとしすえて邪をすて正に歸する道をひしと心得べきにあひ成て侍ぞかし先これにつきて是は一定大菩薩の御はからひか天狗地狗の又しわざかとふかく疑ふべしこの疑ひにつきて昔より怨靈と云者の世をうしなひ人をほるばす道理の所侍を先佛神に

祈らるべき也

一百川の宰相いみじく光仁をたて申しと又其あどの王子立太子論せしに桓武をいたておほせまいらせられたれどあまりに沙汰しすこして井上内親王を穴をえりて獄を作りてこめまいらせなんどせしかば現身に龍に成て遂に蹴殺させ給ふと云ゆり一條攝政は朝成の中納言を生靈にまうけて義孝の少將までうせぬと云ゆりあきひらは定方右大臣の子也宰相の時は一條攝政は下臈にて競望のあひだ放言し申たりけり大納言所望の時は攝籙臣になられたるにまいりて昔は左右なく上へのぼる事もなかりけるにや久しく庭に立てたましくよび入ておはれたるに大納言に我なるべき道理を立てけるをうちきいて往年納言の時は放言せられき今は昔闇の昇進我心にまかせたり世間いはかりがたき事ぞと云てやがて内へいられにければなめならず腹立て出けるに車にまづ笏を投入けるに二に破れにけりさて生靈となれりどこを江帥もかたりけれ三條東洞院はあさ平が家の跡也それへは一條攝政の子孫のぞまざなど申ゆり何方の大納言は天曆の第一の皇子廣季親王の外祖にて冷泉院をとりつめまいらせたり顯光大臣は御堂の靈になれり小一條院の御舅なりし故などかやうに申也されども佛法と云ものさかりにて知行の僧おほかれはかやうの事はたゞれども殊の外なることをばふせくめりまめやかに底よりたふとき僧をたのみて三寶の益をばうるなり九條殿は慈惠大師御堂殿は三昧和尚無動寺座主また宇治殿は滋賀の僧正などかやうに聞ゆめりふかく世を見るには讚岐院知足院どの靈のさたのなくてた



我家をうしなはんと云事にて法性寺殿は子ながらあまりに器量の手かぐべくもなればにや我御身にはあながちの事もなし中の殿のとくうせざま松殿九條殿の事にあはれやうこの多殿のたび／＼とられ給ひて今まで命をいけてあそひてこの家をうしなはれぬる事と後白河一代わけくれ事にあはせ給ふことなどはあらたにこの怨靈も何もたゞ道理をうるかたの報ふる事にて侍也ひとあたりはたゞやす／＼とある事の一大事にはなる也讚岐よりよびかへしまいらせて京におきたてまつりて國一なごまいらせて御作善候べしなごいて歌うちよませまいらせてあらましかばこうほごの事あるまじ知足院殿をも申うけて法性寺殿の御沙汰にば宇治の常樂院にすね申ていませ少し庄ごも、まいらせておなしくあそびして管絃もてなしておはしまさしかばかうほごの事はあるまじき也法性寺殿はわが親なれば流刑のなきこそまう(誓)の事と思はれたまけるにやそれはいはれたれご我身にあらたなるたゞりはなけれどもいかに／＼はからひは是ほごのやうをふかく思ひどかぬ所に事はいでくる也人間界には怨憎會苦かならずはたす所也たゞ口にて一言われにまさりたる人を過分に放言しければ當座にむずとつき殺して命をうしなはる、也怨靈と云は詮はたゞ現世ながらふかく意趣をむすびて仇にとりて小家より天下にもおよびてそのかたきをほりまろばかさんとして讒言をらす事を作りいだすにて世のみだれ又人の損する事はたゞ同じ事也顯にそのむくひをはたさねは冥になるばかり也聖徳太子の十七條の中に嫉妬をやめよ嫉妬の思ひはそのきはなしかしこく愚なる事又たまきのはしなきが如

し我一人ぬえりとと思ひそといましめて寶あるもの、うれへいやす／＼とほる也石を水になけいる、やう也まづしき者のうれへはかたくてとほる事なし水にて石をうつやう也と仰られたるこそ三事の詮にては侍るを世の末さま當時の世間にはさるいましめのあるかとだにも思はでわざと是をめでたき事に思てすこしもたましひあらんと思ひたる人は物ねたみと自是他非と追従賄賂にて是がひとへに世をもたんにはんの候はんぞなあさやか／＼と侍るものかなと治れる世には官人を求む亂れたる世には人官を求むこの比の十人大納言三位五六十人故院の御時までも十人が内外にてこれ侍しがゆけいのせうの檢非違使は數もさだまらず一度の除目をみれば靱負尉兵部尉四十人をとるたびなし千人にもなりぬらん人官を求めてそくらうわきざしを尋ねてねがふ者は近臣格勤の男女にてあらんには左右におよばぬことぞかしさまでは思ひよらすまことには末代惡世武士が世になりはて、末法にも入にたればたゞちりばかりこの道理をも君もおぼしめし出てこはいかにとおどろきさめを給てさのみはいかにこの邪魔惡靈の手にもいるべきと思召近臣の男女もいさ／＼か驚けかしのみこそ念願せられ侍れ又武士將軍をうしなひて我身にはおそろしき物もなくて地頭／＼とてみな日本國の所當ともちたり院の御ことをは近臣のわき地頭の得分にてこそぐれば急まずと云事なし武士なれば當時心になはす者をはかれ／＼とにてみつれば手むかひするものなし只心にまかせてんこひしと案したりと今は見ゆめりさて是等の僻事のつもりて大亂になりて此世は我も人もほろびは



てなんざらん大の三災はまたしき物をさすがに佛法の行ひものゆりたり宗廟社稷の神も  
 きらくとあんめりたゞいさゝかの正意とりいだして無顯無道の事すこしなのためになり  
 てさすがに是をわきまへたる人僧俗の中に二三人四五人などはあるらん者を是を召出て  
 天下につかへられよかし事の詮には人の一切智具足してまことの賢人聖人はかなふまじ  
 すこしも分く主とならん人は國王よりはしめまいらせて人のよしあしをみしりてめ  
 しつかひればします御心一が安かるべき事の詮になる事にて侍也それがわざとするやう  
 に何事にもさながら鳥を鶉につかはるゝとにて侍るめればつやゝとよのうせ侍りぬる  
 ぞとよ又道理と云物はやすくと侍ぞかしそれわきまへたらん臣下にて武士の勢あらん  
 をめしあつめて仰せきかせばやその仰せことは先武士といふ者は今は世のすゑに一定  
 當時あるやうにもちゐられて有べき世の末になるとひしとみゆされのやうの勿論也  
 其うへにこの武士をわろしと思召て是にまさりたるともからいでくべきにあらざるの  
 やうにつけても世の末ざまいよゝゝわろき者のみこそあらんずれ此ともがらほるばさ  
 んする逆亂いにかばかりの事にてかゝり有べきなれに冥に天道の御沙汰の外に顯に汝等を  
 にくも疑ひもをばしめすといなき也地頭の事こそ大事なれ是のしづかにゝよくゝ  
 武士に仰合せて御はからひあるべき也これとめられまいらせしとてむかへ火を作りて  
 朝家をおとしまいらする事もあるべからずさればとて又おぢさせ給ふべきともあら  
 ぬ也たゞ大方のやうの武士のともからが今は正道を存すへき世になりたる也此東宮この

將軍と云はわづかに二歳の少人也これを作りて給ふことはひとへに宗廟の神の御沙汰  
 あらひなる東宮も御母はみなし子になられたり祈念すへき人もなし外祖父の願力のこた  
 ふらんをばえらねどもかゝると今いでき給ふへしやは將軍又かゝる死して源氏平氏の氏  
 つやゝとたゆへしやはそのかはりにこそねをもちゐるべしやは一定たゞことにはあら  
 ぬ也昔よりなりゆく世をみるにすたればてゝ又おこるべき時にあひあたり是にすきてい  
 うせんとていかにうせんずるぞ記傳明經もすこしのこれり明法を令もちりはかりは  
 わんめり顯密の僧徒も又過失なく聞え百王を數ふるに今十六代のこれり今此二歳の人々  
 のおとなしく成て世をいうしなひも果て興しもたてんずる也これ今廿年またんまで武士  
 僻事すなくひがことせずは自餘の人の僻事はとめやすしと仰きかせて神社佛事祠官  
 僧侶によせらるならん庄園さらにもつらしくよせたびて此世を猶うしなはん邪魔をは神  
 力佛力にておさへ悪人叛逆の心あらんともがらをはその心あらせぬさきにめしとれと祈  
 念せよとひしと仰けれどこのまいなひ獻序すこととめられよかし世にやすかりぬべき  
 事哉とこそ神武より今日までの事がらをみくだして思ひつゝくるに此道理はさすがにの  
 こりて侍るものとさとりれ侍れおほの申べき事のおほきやたゞ塵ばかり書付侍ぬ  
 これをこの人々れとなしくおはしまさんより御覽せよかしいか思召ん露ばかりをらこ  
 ともなく最眞實の世のなり行さま書付たる人もよも侍らじとて只一すぢの道理と云もの  
 侍を書置侍りぬる也又この詮一侍りけり人と申者は詮がせんには似るを友とすと申事



のその詮にて侍る也それが世の末にわろき人のさながら一心に同心合力してこの世をとりて侍にこそよき人は又同じく相かたらひて同心に侍べきによき人のあらはやの合力にも及ぶべきあな悲しやと思ひつゝいさゝか佛神の御沙汰をあふぐばかり也用る時は虎となるべき人のさすかに候らん者をよきもの世のやうを見てさし出ぬにこそ侍らめかくこの世のうせゆく事の君も近臣もそら言にて世をおこなひるめりそら言と云もの朝儀の方にいさゝかもなきこと也そら事と云ものを用られんによき人の世にえあるまじき也さやうの事も中々世の末に民の正直なる將軍のいできてたゞさは直るかた有まじきにかゝる將軍のかく出来る事の大菩薩の御はからひにて文武兼備して威勢有て世をまもり君をまもるべき攝籙の人を設て世のため人のため君の御ために參らせらるゝをば君の之御心得おはしまさぬにこそ是こそゆゝしき大事にて侍れ是は君の御爲攝籙の臣と將軍と同じ人にてよかるべしと一定てらし御沙汰の侍るものを其故あらは也謀反すぢの心はなくしかも威勢つよくして君の御後見せさせむと也かく御心得られよかし陽成院御事ていならんためなごこそいよゝめでたかるべけれそれをふせきたはしめしての君こそ大神宮八幡の御心にてたかはせおはしまさんずれを構て君のさとらせ給ふべき也この藤氏の攝籙人の君のため謀反のかたの心づかひはけづりはてゝあるましを定められたるなりさてしかも君のわろくおはしまさんずるをつよくうしろみまいらせて王道の君のすぢをたがへすまもり奉れとて侍れば陽成院のやうにねいしまさん君は御爲こ

そあしからんずれさる君はまたねばろけにはおひしますまじき程ならん君は又よき攝籙をそねみ思しめさばやは叶んずる大神宮大菩薩の御心にてこそあらんずれこの道理は少しもたかうまじひしとさたまりたる事にて侍る也始終おちたゝんずるやうの道理をもこの世の末の昔よりなりまかる道理の宗廟社稷の神の照させ給ふやうをもあらせ給はであさき御沙汰とこそ承り侍れ物の道理吾國のなりゆくやうはかくてこそひしとは落居せんずることにて侍れ法問の十如是の中にも如是本末究竟等と申ことなりかならず昔今はかへりあひてやうは昔今なれり變るやうなれども同じすぢにかへりてもたふる事にて侍る也大織冠の入鹿をうたせ給て世はひしと遮惡持善の事り理には叶ひにしぞかし今又この定なるべきにこそ此様にてこそひしと君臣合體にてめてたからんすれ猶おろくこの世のやうをうけたまひれば攝籙の臣に（さ）ておもては用ゆる由にて底に奇怪の物に思召もてなして近臣は攝籙の臣を讒言するを君の御意に叶ふことゝしりて世をうしなひるゝ事は申てもいふはかりなき僻事にて侍也これは内々に家の家主随分の後見までたゝ同し事にて侍也それが随分（備）の後見と主人とひしとあひ思ひたる人の家のやうに治りよき事は侍らぬ也まして文武兼行の大織冠の苗裔國王の御身に不和のなからひにてたかひに心をおきてあらんと云とは冥顯首尾始中終過現當いさゝかも事の道理に叶ふみち侍りなんやあわれこの道理こそいかにも末にはひしとつくりまからんずらめとこそかねてよく心得ふせて侍れそれがいかに申ども叶ふまじき事にて侍るそとよ世の末



に世の中はをだしかるまじと云道理の方へふどうつりし侍る也それを悪魔邪神はひしとわろからせんと取なす處に時運去からしめぬれば又三寶善神の化益の力及ばす成てんすと事出来てはおとろへしまかりてかく世の末と云ことになりたり侍ぞかしそのやうは時の君のつよくうるさき攝籙の臣をあらせしはやと思召御心の世の末さまにはいよ／＼又つよく出来る也このひが事のゆゑしき大事にて侍る也それに文武兼行の攝籙の臣のつよ／＼としていかにも／＼之引はたらかすまじきがいでもんやうに君の御意にかなはぬとはなにごとかはあるべきに世は損せんずる也この道理を返々君のおほしさととりてこの御僻事のふつと有まじき也君は臣をたて臣の君をたつるかことわりのひしとあるぞかしてのことわりをこの日本國を昔よりさためたるやうと又この道理によりて先例のさは／＼とみゆると是を一々に思召あはせて道理をだにも心得とはさせ給ひなばめでたかるべき也遠くは伊勢太神宮と鹿島の大明神と近くは八幡大菩薩と春日の大明神と昔今ひしと議定して世をばもたせ給ふ也今文武兼行して君の御うしろみ有べしとこの末代どうつりかうつり／＼もてまかりてかく定められぬる事はあらはなることぞかしそれに漢家の事はたゞ詮にはその器量の一事きはまれるをとりてそれがうちかちて國王とはなることゝ定めたりこの日本國の初より王胤は外へうつる事なし臣下の家又定め置れぬそのまゝにていかなる事いてくれどもけふまでたがはす百王の今十六代のこりたる程はよのやうはふつとたかふまじき也こゝにかゝる文武兼行の執政を作り出して宗廟社

ほはうこは  
さばその  
人の異報  
たのまし  
く強剛に  
して引動

稷の神のまいらせられぬるをにくみそねみ思召しては君は君にてえおはしますまじき也日本にも臣の君をたつる道げに／＼と二おんめり一にはまづ清盛公が後白河院をわろかまゝいらせて其御子御孫にて世を治んとせしやう本曾が又一戦に勝て君をおしこめまいらせしすぢこのやうは君を立とは申べくもなければも武士が心の底に世をしらしめす君をあらためまいらするにて有也されば世を亂す方にて立まいらせ世を治る方にてたてまいらする二のやう也みだす方の謀反の義なりそれはすえとほる道なし今一々國を治るすぢにて立まいらするは昭宣公の陽成院をわろしまいらせて小松の御門をたてまいらせ永手大臣百川宰相と二人して光仁天皇を立まいらせし武烈天皇うせ給て繼體天皇を臣下ともものもとめ出まいらせし是らは君のため一定この君わろくてかはらせ給へしとその道理定りぬこの君いて給て此日本國は始終めでたかるべしと云道理のひしと定りしかのこれによりて神明の冥には御さた有にかはりまいらせて臣下の君を立まいらせし也さればあやまたずこの御門の末こそは皆つがせ給てけふまでこの世はもたへられて侍れさの／＼と此二のやうの侍ぞかしそれに今この文武兼行の攝籙の出来たらんするをえて君のこれをにくまん御心出来なば是日本國の運命のきはまりになりぬと悲しき也この攝籙の臣はいかにも／＼君にそむきて謀反の心のねこるまじき也たゞすこしはうごは(報強)にてあなづり／＼こをあらんずれをば一同に事にのそみて道理によりて萬のことのおこなはるへき也一同に天道にまかせ參らせて無道に事をおこなひ冥罰をまたるべ



悔慢なく  
云ふ

き也末代さまの君のひとへに御心にまかせて世をおこなひせ給ふ事いできなり百王までをだにまちつけずして世の亂れんする也たゞはからず理にまかせて仰ふくめられて御覽の有べき也さてこそ此代いしばしをもさまらんすれとひしとこれの神々の御はからひの有てかく沙汰しなされたることあきらかに心得らるゝをかまへて神明の御のからひの定にあひかなんと思召はからひて世を治めらるべきにて侍也冥衆はおひしまさぬにこそなぞ申はせめてあさましき時うらみまいらせて人のいふ言ぐさ也誠には劫末までも冥衆のおひしまさぬ世の片時もあるまじきましてかやうに道あるやうに人の物をはからひ思ふ時は殊にあらたにこそ當時も覺えれこれいさしつめて此將軍はことを申やうなるはかゝる事の當時あれはそれすがりて申ばかり也此意はたゞいつもこと將軍にてもこのおもひきを心得て世の中をは君のもたせ給ふべきぞかし將軍が謀反の心のねこりて運のつきん時は又やすくどうしならんずる也實朝がうせやうにて心得られぬ平家のほろびやうもあらは也これは將軍が内外あやまたざらんを恐るなくにくまれんことのおしからんずるやうをこまかに申也このづちはわろき男女の近臣の引いたさんする也こゝをしろしめさんことの詮にて侍るべき也この以外の事とも書つけ侍りぬるものかなこれ書人の身ながら我する事とい少しもおほえ侍らぬ也申はからなしくあられ神佛ものゝたまふ世ならばとひまいらせてまし

一さてもこの世のかはりの繼目に生れあひて世の中の眼前にかはりぬる事をかくけさ

くどみ侍る事こそ世にあはれにもあさましくもおほゆれ人は十三四まではさすがにをさなきほど也十五六ばかりは心有人の皆なにもわきまへまらるゝと也この五年か間是を見聞てすべてむげに世に人のうせはて侍也その人のうせゆくつぎ目こそいかに申べしどもなけれどもおろく尤この世の人心得しらるゝべきふしなれば思ひ出して申そふる也今の世の風儀は忠仁公の後を申べきにやそれは猶上代也一條院の四納言の比こそはいみじき事にて侍めれ僧もその時にあたりて弘法慈覺智證の末流ども仁海皇慶慶祚などありけり僧俗のありさまいさゝかその風儀のちりばかりづゝも残りたるかと覺ゆるはいつまでぞと云に家々を尋ぬべきにまつは攝籙の臣の身々次にはその庶子どもの末孫源氏の家々次々の諸大夫どもの侍る中にこの世の人は白河院の御代を正法にしたる也尤可然くおり居の御門の御世になりかはるつぎ目也白河院の御世に候けん人は近々までも在しかば是を心得べし一條院の四納言のすゑも白河院のはじめまで同し程のことのやうくうすく成にてこそあれ白河院御脱履の後一落おちくだれども猶またその跡はたがはず後白河院の時になりて一の人の法性寺殿一の人の庶子の末の花山忠雅又經宗伊道相國閑院にいまちかく公能子三人實定實家實守公教子三人實房實國實綱公通實宗父子これらまで又源氏に雅通公諸大夫に顯季か末の隆季重家勸修寺に朝方經房日野に資長兼光父子これを見聞し人々は是等まで塵ばかり昔のにはひに有けるやらんとその家々のおほかたの器量へねはぬき中の難ども沙汰の外也光頼大納言かつらの入道



とて在しこそ末代にぬけ出て人にほめられしか二條院の時の世の事一同にさせよと云  
 仰ありけるをふつに辭退して出家してけれの誠によりけるにや但大納言になりたる事  
 こそれほつかなければ諸大夫の大納言は光頼にぞはしまりたりなんど人にいはるめるまて  
 也かゝらん人のならて候ゑんなどや思ふべからん昔は諸大夫なにかと器量ある士をいさ  
 たなかりきさやうのころの勿論也久しくかやうの品秩さだまりて諸大夫の大納言光頼に  
 はしまりたるなといる、事の上品の賢人のいはるべき事にいなきぞかし末代にこの  
 難いあまり也いかさまにもよくゆるされたりけるものにこそ此人々の子共の世になり  
 ていつやと生れつきより父祖の氣分の器量のけづりすて、なきに孫共になりての當  
 時ある人々にて在ばとかくよき人ともわろき人とも云にたらぬ事にて侍也さて又一の人  
 の四五人までならひて出來ぬその中に法性寺殿の子共の攝政になられたる中に中殿の子  
 近衛殿(又松殿)九條殿の子どもに師家良經也て、共に三人の中に九條殿の社稷の心に  
 しみたりしかはにや兄二人の子孫に人ど覺ゆる器量の一人もなし松殿の子に家房とい  
 ひし中納言つよくもやと聞えしを世にも及はて早世してき九條殿の子ども昔のにはひ  
 につきつべし三人までとりくになのめならず此世の人にはめられき良通内大臣の廿  
 二にてうせにし名譽有入口良經執政臣になりて同じく能藝羣にぬけたりき詩歌能書昔  
 に耻ず政理公事父祖をつげり左大臣良輔の漢才古今に比類なしとまで人思ひたりき卅五  
 にて早世すかやうの人どもの若死して世の中かゝるべしとはあらぬあな悲しく、今良

經後京極殿の子にて左大臣只一人のこりたるばかりにてこと兄々の子息の人かたにてま  
 よふばかりにや其外家々に一人もとるべき人なし諸大夫家にもつやと人もなき也職  
 事辨官の官の名ばかりの昔なれを任人のなきがごとしおのづから有ぬべきも出家入道と  
 のみきこゆはかもとめ二三(三四)人なと出くる人も有なんものをすべて人を求めら  
 ればこそ有りてすてられたらんこそたのもしくも聞えめされのいかせんするや此  
 人のなきをこの中に實房の左府入道とて生のこりたるが只この世の人の心になりたる  
 とかや

一僧中に山に青蓮院座主の後いさ、かもにあふべき人なしうせて後六十年におほく  
 あまりぬ寺には行慶覺忠の後又つやと聞えず東寺と御室に五宮まで也東寺長老の  
 中に寛助寛信など云人こそ聞えければさかりざまに理性三密などは名譽有けり南京房  
 に忠信法務流されて後の誰こそなき申べき寸法にも及ばす寛珍ぞあしうも聞えず中  
 へ當時法性寺殿の子にてのこりたる信圓前大僧正上なる人のにはひになりぬべきにこ  
 を又慈圓大僧正弟にて山に残りたるにやさればこのいかにすべき世にか侍らんこの人  
 のなきを思ひつゝくるにこそあたにくさく心もなくてまつべき事もたのもしくもなけ  
 れば今の臨終正念にてとく頓死をし侍なりやとのみこそ覺ゆれ(此)世のすゑにあざ  
 やかに(あな)あさましと見えてかゝれいなりにけりと覺ゆるるしに攝録經たる人の  
 四五人へ並てつゝらと侍ぞや是の前官にて一人あるだにも猶あり難き職どもを小童べ



のうたひて舞ことばにも九條殿の攝政の時の入道殿下小殿下近衛殿下當殿下と云て舞けり  
 りそれに良經攝政に又なられにしか五人になりき天台座主に慈圓實全眞性承圓公  
 圓と五人あんめり奈良に信圓雅圓覺憲信憲良圓ありき信憲も覺憲かいきたりしになり  
 たりしやらん十大納言十中納言散三位五十人にもやなりぬらん僧綱に正員律師百五  
 六十人になりぬるにや故院御時百法橋と云てあざみけん事のやさしさよ僧正の故院の御  
 時に(ま)でも五人に過ぎりき當時正僧正一度に五人いできて十三人まで有にや前僧正  
 又十餘人在にこそ衛府のかぞへあへぬ程なればとかく申に及ず官人をもとむと云事い  
 ひ出すべき事ならず人官をもとむるも今のうせにけり成功と猶もとむるになさんと云  
 人なしされば半にも及ばてなすをいみじきに今のたるとかやそれによりてこの官位の  
 事のかくの有ともさてあらる事にて有けり又世のすゑの手本とも覺えたり大方心ある  
 人のなきこそ申ても悲しけれか一の人の子のねほさよこの慈圓僧正の座主に  
 成しまでの山に昔よりかそへよく攝録の家の人の座主になりたる飯室の僧正尋禪と  
 仁源行玄慈圓とた四人とこそ申しが當時は山ばかりにだに一の人の子一度にならび出  
 来て十人にもあまりぬらん寺奈良仁和寺醍醐と四五十人にもやあまりぬらん一度に攝  
 録臣四五人まで前官ながらならひてあらんに道理にてこそあれ又宮たちの入道親王と  
 て御室の中にも有がたかりしを山にも二人ならびておはしますめり新院當今又二宮三  
 宮の御子など云て數あらずをさなき宮々法師にて師共の許へあてがはるめり世滅松

てはひしれ  
 紀に日本  
 透に日本  
 ひもよめ  
 ふさよめ  
 れはたに  
 取れたに  
 それに  
 ぬくまみ  
 簡者み  
 云てある

に聖徳太子の書置せ給へるもあはれにこそひしと叶ひて見ゆれ是を昔のされば人の子を  
 まうけざりけるかど世に疑ふ人おほかりぬべしよく心えらるべき也昔の國王の御子  
 とおほかれど皆姓を賜へせてたの大臣公卿にもなされるは親王たち御子も沙汰におよ  
 はず一の人の子も家をつぎて攝録してんと思はぬ外は皆只の凡人にふるまはせて朝家に  
 つかへさせられきつぎの人の子も人がましかりぬべき子をこそ取出せさなきの只は  
 ひしれてやみすれのある人の皆よらてもあつかふもなし今の世に宮も一の人の  
 子もまた次々の人の子もさながら宮ふるまひ攝録の家嫡ふるまひにて次々もよき親のや  
 うならせんとわろき子共をあてがひてこの親々の取出せいかくはなるなるへし又僧の中にも  
 其所の長吏をへつれ又その門徒として出世(家敷)の師弟の世間の父子なれ我も  
 とそのたちわけのおほさよされば人なしといかにもしかるべき人の多さこそとぞい  
 ふべきありれ有若亡有名無實なといふことばを人の口につけて云ひ只此料にこそ  
 かればいよ縹素みな怨敵にして鬪諍誠に堅固也貴賤同く無人して言語まじき  
 道斷侍りぬるになんしもてまかりての物の果に問答したるか心のなぐさむ也  
 一問され今の力およはすかうて世になはるまじきか  
 一問されいやすくなほりなん  
 一問すでに世くだらばはてたり人亦なかん也あともなくなりたるにこそあかるにやすく直  
 りなんといかに



答分々のいひさて申也一定やすくとなほるべき也

一問そのなほらするやう如何

答人のうせかれと君と攝籙臣と御心一にてこの在人の中にわろけれどもさりとて僧俗をかいえりししてよからん人をたゞ鳥羽白河の比の官の數に召つかひてその外をばふつと捨らるべき也不中用の物をまことしくすてはて目を見せられずはめでたくとしてなほらんずる也隨分になほると云は是也昔の如くには人のなければ叶ふまじゑりたゞしたらんずる寸法の世こそはわろながらよく直りたるこの世にてあらんずれ

一問この官のおほさ人のねほさをばいかにすてんとていすてられんずるぞ

答すつと云いふつとめしつかはざる者や世にあらんともあろしめざるまじき也陽成院世におはしましてやうくの悪事せさせ給しかと物もいはで聞入ざりしかば寛平延喜の世めでたくてありき解官停任にも及ぶましたゞすてられぬにて誠にすてられたらん人にはなわひしらひぞとぬりとられたらん人にねほせふくめてさて有べき也

一問そのすてられ人あまりねほくてよりあひて謀反やれとして大事にやならんずらん

答武士をかくてもたせればしましたるは其料をかすこしもさる氣色いかでか聞えざらん聞えん時二三人さらん者を遠流せられなばつやくさる心おこす人もあるまじき也

一問此義なり侍りいみしうたゞしたれがその人をいえりとらんずるぞ

答これこそ大事なれたゞこれえりてまいらする人四五人は一定ありぬべしその四五人よ

りわひてえりととりてまいらせたらんを君たにもつよくとはたらかさでひしと用ゐさせ給はやすくとこの世は直らんするなり

一問解官せじといひかに

答えりいだされん人の八座辨官職事ばかりになる人候らん所こそ要なればそれは解官せられなんずこともおるかやその外のせめて無沙汰なれと也僧俗官の數の定はどこそ大事なれと鳥羽院最中の數末代よりよき程也



文明第八曆書寫之畢  
古本奉與奪唐橋殿也

愚管鈔七卷原本謬誤居多假名亂雜不可讀也亦嘗一二耳哉今以三本校正一過畢猶不可解亦不為尠且假名等以國史及萬葉和名抄等古樣式悉質正或難解及兩可者闕如姑畫以俟他日善本河(也歟)附言云爾

寶曆十年庚辰十一月廿二日

伴宿禰 俊判(明歟)

以三本校合畢

天明八年戊申九月

藤原忠寄

右の不忍文庫舊本今小杉氏杉園所藏に歸する所山岡妙阿彌校本を以て著録し旁淺草文庫眞假名本端氏温故堂藏本を以て明治十五年五月一校三十三年三月再版又再校了  
近藤瓶城  
明治三十五年三月伴 黒川兩 氏之校本を以て三校を加へたり行間に傍書せしもの即これなり  
近藤圭造

神明鏡上

第一神武天皇治七十六年御年百廿七葺不合尊第四御子神日本磐余彦ノ尊共申御母玉依姫海神ノ大女也飯龍宮之後御伯母玉依姫養育ス後ハ后ト成給フ此尊ハ筑紫日向國宮崎郡ニテ誕生依天照神勅平東夷大和國移橿原宮此時始奉崇萬神置祭主賜フ秋津島ト名付シ此時也釋迦御入滅二百九十歳當也天竺ハ波斯匿王也大唐ハ周ノ惠王十七年辛酉當也老子生給フ也

第二綏靖天皇治卅三年御年八十四神武第三御子御母皇太后宮事代主ノ神ノ女五十鈴姫神淳名川ノ耳ノ尊共申大和葛城高岡ニ御座ス神武崩御之後四年アツテ御即位有唐ノ周靈王ニ當也第三安寧天皇治卅八年御年五十七綏靖ノ太子皇太后五十鈴依媛事代主神ノ乙女磯城津玉手看帝共申同國片鹽浮穴宮此御帝廿二年孔子生卅年壬寅老子死給フ也

第四懿德天皇治卅四年御年七十七安寧第三御子母皇太后淳名底中姬大日本彦根友帝共申同國輕曲狹宮御之

第五孝照天皇治八十三年御年百廿懿德太子母皇太后天豐津姬觀松彦香殖稻共申同國掖上池心ノ宮御之

第六孝安天皇治百二年御年百二十七孝照第二子母皇太后世襲足津姫日本足彦國押人共申同國室秋津島宮御之

第七孝靈天皇治七十六年御年百三十四孝安太子母皇太后姊押姫天足彦國押人女也大日本根



子彥太瓊共申同國黑田蘆戶宮ニ御ス天竺祇園精舍佛滅後三百年ト申ニ又燒ケルヲ祇陀太子造又五百年ニテ燒ケルヲ旃育迦王ノ造シハ此帝二十六年丙子當也大唐ニハ周代畢テ秦ニ移シ此帝四十五年乙卯始皇即位也此帝ノ時始皇不死藥ヲ求也又三皇五帝書等日本渡セシ也其後廿五年儒ヲ埋ミ書ヲ燒也

第八孝元天皇治五十年御年百十七孝靈太子母皇太后細姬同國輕境原宮御之大日本根子彥事申此帝九年乙未唐秦代亡テ漢ニ移ル也漢ノ高祖楚ノ項羽八箇年間七十二度合戰也然共漢ノ高祖打勝テ伐取リ給セシ也此帝三十九年乙丑六月大雪降シ也

第九開化天皇治六十年御年百十五孝元第二御子母皇太后鬱思姬帝女稚日本根子彥太日々共申同國春日率川ノ宮御之此帝ノ御時世間人多ク病死シケレハ天照大神ヲ大和國笠縫ノ郷ニ奉崇又國々ニモ神ヲ奉祝又水ニ木ノ葉ノ浮ヲ見テ船ヲ造共云リ南天竺ニハ龍猛并出現シテ眞言法ヲ弘メ給フ又旃育迦王ノ祇園精舍ヲ造テ百年ト申ニ盜人燒シ也十三年有テ六師迦王又造シハ此帝ノ御時ニ當ル也又唐ニハ漢ノ武帝昆明池ヲ作テ此池ニ蛇有アマメヲト云旱シテ池干テアカリケル時蛇蛙ヲ吞蛙共請雨鳴時雨降リ河出ツ依之蛙ヲ河出ツト云リ彼武帝時蘇武李陵兩將トシテ胡國ヲ責胡軍強シテ李陵降胡蘇武ハ恩賜ノ羅ヲ身膚纏持十九年ノ春秋ヲ送ル通鷹書ヲ仍之漢王百萬騎ヲ遣シ胡國ヲ順カヘ蘇武飯漢鷹書武羅ノ起也

第十崇神天皇治六十八年御年百廿七開化第二御子母皇伊香色謎命女也御間城入彥五十瓊殖共申同國磯城瑞籬宮御之又國々ニ社ヲ定メ神ヲ奉祭其後世治リ民豐也故公ノ御調物奉備此

帝六年己丑神代ノ鏡ヲ石凝姥ノ神裔子ヲ召テ移鑄天ノ目一箇ノ裔子ヲ召劔ヲ造大和國宇陀郡ニテ作シ也此兩種ヲ移テ大内ノ守トシ給フ八坂瓊ノ玉ヲハ神ノ代ノ任ニ大内ニ崇之紀州熊野權現モ此時顯現給ヘル也此帝六十二年天竺ニ惡王出テ祇園精舍ヲ破テ人ヲ殺所定四天王沙羯羅王怒リヲ成テ破ケル人ヲ大石ヲ以テ令殺之也

第十一垂仁天皇治九十九年御年百三十崇神第三御子母皇太后御間城姬活自入彥五十狹茅共申同國卷向珠城宮御之此御時天照大神宮伊勢國五十鈴ノ河上ニ奉祝神勅ニ依テ神女ヲ奉也齋宮倭姬命是ヨリ始ル也又常世ノ國奉菓今橘是也又大唐ヘ始テ使遣ヌ又新羅ヨリ使奉ル此帝ノ太郎ノ御子卅マテ物モ不宣空ニ鳥ノ鳴ヲ聞テ物ヲ始テ云給ヒキ又七年ニ當麻ト云所ニ力強者アリ又出雲國ニノミト云者有リ當麻ノ角折ト召相セラル當麻負ケレハ其所領ヲ取テノミニ給ル也是相撲ノ節ノ始也十五年ニ星ノ降事雨ノ如シ又此時マテハ主人死レハ仕フル人ヲ生ナカラ陵ニツキ籠ケリ帝聞食テ人ノ歎哀給ヒテ土師氏ニ仰テ人形ヲ作テ死人ニ副テ埋可祭トテ止給フ今ノ大江氏ノ祖也八十二年祇園精舍荒終人無キ成キ九十年過テ切利天第二ノ御子ヲ下シテ人王ト成シテ造營如來在世ノ如目出キ大唐ニハ後漢明帝永平十年丁卯夢金人ヲ見給ヒテ王道等十八人大竺エ遣シテ佛教ヲ渡ス摩騰法師佛舍利并四十二章經ヲ白馬ニ負來ル明帝佛教ヲ崇敬導士等禁闕諍之術計叶ハス舍利神變ヲ現ス摩騰法師空中ニ立光ヲ放皇帝后臣下等奇異順禮ス道士等モ摩騰弟子ト成白馬寺ヲ始トシテ一千七百箇所建立漢土佛法始也



第十二景行天皇治六十年御年百十三垂仁第二御子母皇太后日葉酢姬命大足忍代別トモ申此時武内宿禰大臣トス此帝ノ御子太郎次郎雙子生給フ其次郎御子ハ日本武尊ト申東夷起テ駿州マテ上テ有シニ始テ物ヲ云給ヒテ我下テ對治可トテ發向シ給ヒシカ太神宮ニ參給シニ神託有テ天ノ村雲ノ劍ヲ給テ下給ヘシニ駿州ニテ夷狄野ニ火ヲ放尊ヲ奉燒殺シトセシニ劍拔テ野草ヲ薙伏テ火難ヲ遁レ剩ヘ夷狄等燒死畢此時草薙ト號夫ヨリ相州越上總渡給ヘケルニ伏戸ノ渡ニテ波荒シテ船已覆トセシヲ梶取申ケルハ船中ノ美人ヲ龍神ノ見タルト覺候ト申ケレハ數百人ノ軍士ヲ失ハンヨリハトテ最愛ノ橘姫ト申夫人ヲ一人流玉ヘリ誠忝サテ船荒事ナクシテ總州エ渡夫ヨリ常州筑波ナントヲモ叡覽有テ上野國白井ノ坂ヲ越東山道ヲ駈路シ給ヘシ美濃國伊吹腰ニテ大蛇ヲ見出シテ毒氣ニ中テ神去マシ白鳥ト成空ヘ飛上給ヒシ也天ノ村雲劍ハ飛飯尾張國松子ノ島御鎮座アリ今ノ熱田太神宮是也此尊仲哀天皇ノ御親也又武内宿禰孝元天皇御孫也此時ヨリ應神天皇マテハ後見也同國纏阿日代宮御之水鏡ニハ江州穴穗宮ニ移給ト云リ此御時熊野宮顯給フナリ此帝上總國ニ幸シ賜ル時磐鹿六摩ト云人白蛤ヲ膾ニシテ進ケルヲ帝讚給テ姓ヲ大膳ト給ケリ

第十三成務天皇治六十一年御年百七景行第四母皇太后八坂姬稚足彥共申近江志賀穴穗宮御之今志賀寺是也此御時國々ノ境ヲ定テ日ノ出入ヲ以テ東西ヲ定テ七道ヲ始定東山東海西海南海北陸山陽山陰等也此時成務姬宮五十野姬ヲ伊勢齋宮ニ立給フ齋宮ノ第二也

第十四仲哀天皇治九年御年五十二景行御孫日本武尊第二御子母皇太后兩道入姬今長門國穴

戶豐浦宮御之足仲彥共申此時豐浦宮ニテ如意寶珠海中出現

第十五神功皇后是女帝始也治六十九年御年百十一開化天皇五世御孫息長宿禰女也母葛木高額姬也仲哀后息長足姬申和州磐余稚櫻宮御之仲哀佛勅ニ依新羅ヲ討ト爲筑紫御坐シテ失給ヒヌ皇后自軍發渡ントシ給ニ生月當レリ后取裳腰差挿本朝飯ヲ生給ヘリ誓給忽男形ト成新羅ヲ始トシテ高麗百濟三國ヲ討隨テ返給テ筑紫ニテ應神天皇ヲ產進給譽田天皇共申或書云仲哀二月崩給其年十月三韓討隨還給筑前國益日座彥村ニテ一夜ニ五丈虛木生其下ニテ生給皇后箱崎宮御之應神香椎宮御之沙竭羅龍王ノ女ハ烟山御之今寶滿大并是也彼木ヲハ易彥木ト云リ又戒定惠ノ箱ヲ摩白濱ニ埋松枝ヲ折テ逆ニ其上立給テ注トス之ニ依テ箱崎ト云也皇

后謠曰 箱崎ノ千代ノ松原石疊久津禮牟世マテ君ハ座マセ

又云天照天神ノ御告ニ依テ三韓ヲ順ント思召ニ種々御祈請アリ其中安曇磯童ヲ御語アリ鹿島武内ヲ大臣ト成明星天子天降玉住吉又誓テ松浦河ニテ魚釣給フニ鮎ヲ釣得給ヘリサテ磯仰テ千珠滿珠ヲ龍王ニ借玉履陶公カ持來リ一卷ノ秘書ヲ智謀トシ雨顆明珠ヲ武備トシテ明星月天ヲ副將禪將トシテ大小神祇樓船三十餘艘漕並高麗ヘ寄給聞之異國ノ狄共船一萬餘艘海上ニ出向合戰時皇后先千珠ヲ取誓投給ヒシカハ潮俄ニ退テ海中陸地ト成テ戰ケリ此時又皇后滿珠ヲ取投シカハ潮十方ヨリ來數萬人ノ夷共一人モ不殘浪ニ溺テ失ニケリ見之新羅百濟不戰降參ヌサテ皇后高麗ノ王ハ我日本犬也ト弓ノ末栝ニテ石ニ書付給今ニ有ト云リサテコソ三韓ヨリノ朝貢ハ年々ニ備ヘケリト云々是偏鹿島諏方住吉ノ威驗也又王仁ト云ル才人



吳服ト云綾織モ此時渡ケル也或ハ皇后ヲ磯童思懸奉ケル由聞召テ皇后御歌ニ  
 モアラハ赤裸山ニ一ハ懸テマシ物ヲ御詠歌如此何有ケン彦ノ宮ニテ先卵ヲ一生給ケルトナ  
 ン此卵破テ驚ニテ御坐ケリ仍驚大明神申ナシ是ハイミシキ密事也可秘々々  
 第十六應神天皇治四十一年御年百十仲哀第四御子御母神功皇后和州輕島明宮御之后八人男  
 女御子十九人此御時百濟ヨリ衣ヌウ女色々ノ物師博士又經典能馬ナント渡セリ又吉野國栖  
 モ此時ヨリ參始也此天皇欽明ノ御宇ニ始テ神ト顯テ筑紫肥前國菱形池ニ立所ニ顯給我ハ日  
 本十六代譽田天皇廣博九正也宣キ其後豐前國宇佐宮ニ鎮座ス此神ヲ阿彌陀ト申事ハ天竺ニ  
 八萬八色ノ幡アリ是彌陀ノ三摩形八正ノ幡ヲ立八方ノ衆生ヲ化給フ也或云箱崎ノ松ノ上ニ  
 白幡四流赤幡四流降下長八丈也故八幡ト號赤白胎金也放生會摩白羅濱ノ波ニ打レタル虫ヲ  
 拾テ折桶一買海ニ放也此虫放生名也三韓征伐時殺給ヘリ其爲共云リ  
 第十七仁德天皇治八十七年御年百十應神第四ノ御子母皇太后仲姬命攝州難波高津宮御之大  
 鷦鷯御門共申父帝隱サセ給ヒシ時東宮宇治宮御位讓給キ然共宇治宮兄ヲ置進テ何カ去事有  
 ヘキトテ固辭給テ御兄即位スヘク之由申給兄先帝ノ御遺勅ノ上弟即位スヘク之由宣問答有  
 互ニ三ケ年カ間國ニ王御座マサテ政モナク民御調モ不取シカハ返テ天下ノ歎ト成リヌ去程  
 弟我有レハコソ兄モ即位シ給ハスト宣ヘテ供御モ聞召ス入崩御成此上ハトテ兄ノ命即位シ  
 賜フヘク之由王仁大臣詔云 難波津ニサクヤ此花冬籠今ハ春ヘト發ヤ此花仁德天皇即位  
 有テ民疲ヌル事ヲ聞召テ二年御調物ヲ止給ヒテ後民ノ煙ノ立ケルヲ高樓ニ上テ觀覽有

高キ屋ニ登テ見レハ煙立民ノ竈戸ハ饒ニケリ如此慈悲深御ケルトナン武内ハ此御時マテ六  
 代ノ後見トシテ二百八十餘歳也遷化シ給テ因幡國ニ荒海ノ明神ヲ祈給テ彼ノ國ノ一宮ニテ  
 御之宇倍宮是也此帝四十二年始鷹ノ鳥ヲ取事ヲ知食テ御狩ノ有シ也又氷室モ此時ヨリ也御  
 狩ノ時ニ野ノ中ニ庵有大山守ヲ召テ問給フニ氷ヲ收タル室也ト申ケレハ帝感給ヘリ此帝崩  
 御ノ後平野宮ト崇メ奉ル大山王子謀叛ヲ發シ誅サレ給ヒキ  
 第十八履中天皇治六年御年七十仁德第一ノ御子母皇太后磐之姬命和州磐余稚櫻ノ宮ニ御之去  
 來穗別共申此時ヨリ采女出タリ大臣ヲ四人置テ政ス國々ニ倉ヲ造事ヲ始又諸國ノ受領モ始也  
 第十九反正天皇治六年御年六十七仁德第三御子河内國丹比柴籬ノ宮御之此帝淡路ノ宮ニテ生  
 給シ時タテノ花井ノ中ニ生レテ御名ヲハタテノ花ト申セシナリ此草ヲ今ノ世ニハイタトリ  
 ト云ナリ 又云鞍馬寺毘沙門天ヨリ下給元興寺白山權現化現給フ  
 第廿允恭天皇治四十二年御年八十七仁德第四ノ御子和州遠明日香宮御之雄朝津間稚子宿禰共  
 申衣通姬ハ此帝ノ后也應神ノ御孫也紀州玉津島ノ明神ハ此后也  
 第廿一安康天皇治三年御年五十六允恭第二御子母皇太后忍坂大中姬和州穴穗宮御之  
 第廿二雄略天皇治廿三年御年百四允恭第四ノ皇子大泊瀬稚武共申同國泊瀬朝倉ノ宮ニ御之  
 此帝四年十一月葛城山ニテ狩シ給シニ長高人出來リ帝問賜ケルニ我ハ一言主ノ神也相トモ  
 ニ狩ヲシテ帝ヲ送禮有此時スヤハト云人アリ后蠶飼セサセ給ントテ蠶ノ種ヲ此スヤハニ仰  
 尋サセラルハニ赤子ヲ多ク尋テ參タリサテスヤハカ子孫ヲチイサ子ノ連ト云リ廿二年ト



申セシニ七月丹後國水ノ江ノ浦島カ子ト云ツル者大ナル龜ヲ釣ケルカ女ト成子ト夫婦ト成  
 テ彼男ヲ蓬萊へ連テ暫シ住ケルカ故郷ノ妻子ノ事モ窮テ飯ケルニ女箱ヲ一與テ構テ開キ給  
 ナト云ケリサテ飯タレハ妻子モナシ餘ニヤルカタモナクテ箱ヲ開テ見ケレハ一スチノ煙立  
 ヌ此男臆衰ヌ三百七十餘年ト云ヘリ

第廿三清寧天皇治五年御年卅九雄略第三御母大夫韓姬同國磐余甕栗宮ニ御之白髮武廣國稚  
 日本根子共申此帝白髮生テ出給サテシラカト名奉ル此帝ヲ位付給ヘリ御子御ハセテハ國々  
 ニ人遣テ若王孫ヤ座スト尋給ヒシカハ押羽皇子御子播磨國民ノ許座セシヲ求出進弟ヲ御位  
 ニ付進ケルトナシ此時三月三日上巳ノ日初テ曲水宴ヲ行セ給ケリ今ハ顯宗ノ御宇ト云ヘリ

第廿四(三字無)飯豐天皇ノ女帝也履中ノ御子押羽皇子黑姬ノ腹ノ御女也水鏡ニハ入奉ル也  
 第廿四顯宗天皇治三年御年四十八此帝ハ履中ノ孫市邊押羽皇子ノ第三ノ子母誠姬蟻臣ノ女  
 同國高市郡近明日香八釣ノ宮ニ御之

第廿五仁賢天皇治十一年御年五十同國山邊郡石山上廣高ノ宮御之此帝ハ顯宗兄也平群真鳥  
 ノ大臣五代ノ帝大臣也大伴ノ金村連ノ爲殺レヌ

第廿六武烈天皇治八年御年十七母皇太后春日大娘此帝仁賢太子也同國泊瀨列城宮御之小泊  
 瀨稚鷯鷯<sub>五</sub>申此帝惡事ヲ好玉人ヲ木ニ上セテ射ヲトシ或人ヲ水ニ流シテ銚ヲ以テ差殺シ或  
 ハ姓メル女ノ腹ヲ割男女ヲ見或ハ人ノ爪ヲ拔キ血ヲシホル又女裸ニシテ板シキノ上ニヲキ  
 馬放合態スルヲ見セテ板瀾ヲハ惡サナキヲハ召仕加樣シテ淺猿事多シ御子座サス絶給ヘリ

第廿七繼體天皇治二十五年御年八十二此帝ハ應神天皇五世御孫也應神第八子隼總別皇子  
 其子大迹王其子ニ私斐其子ニ彥主人ノ王御母振姬此帝ハ越前國ニ住給ヘケルヲ武烈失給ヒ  
 テ後位ニ即給ヘキ人無ニ依テ大臣各相計奉即位男大迹トモ申又ハ彥太尊共申此時百濟國ヨ  
 リ五經博士來レリ同國磐余玉穗宮御之山城國都遷有又和州飯給フ大唐ノ大曆四年ニ當レリ

第廿八安閑天皇治二年御年七十繼體第二ノ子母日子姬此帝ヲハ廣國排武金日共申同國高市  
 郡勾金橋(橋歟)宮御之大唐後魏大武帝太平七年二月沙門ヲ拂ヒ佛像ヲ破文成帝ヨリ興安元  
 年ニ至テ起浮圖後三寶僧尼ヲ度事三百此時當ル也

第廿九宣化天皇治四年御年七十三繼體第三ノ子同國檜隈廬入野ノ宮御之武小廣排立共申此  
 帝ノ三年ニ空數萬ノ聲シテ并來ト聞シカハ大臣已下恠テ天照大神ニ御祈請有キ其後佛生國  
 ノ東南金剛嶺ノ坤ノ山カケテ雲ニ乘飛來南山ニ留ル今大峰是也大日ノ嶽ニ持咒仍海摩尼高  
 名等ノ五人ノ佛アリ是五智如來<sub>五</sub>云ヘリ去レハ此山ヲ唐吉野ノ山<sub>五</sub>讀リ此故也大唐天台大  
 師生給又曇鸞法師卒ス

第三十欽明天皇治三十二年御年六十二繼體嫡子母皇太后手白香皇子仁賢女此帝天國排開廣  
 庭共申同國磯城島宮御之此時百濟國ヨリ始テ佛經ヲ渡シ奉ル帝崇給キ其後國中ニ惡病起レ  
 リ物部守屋ノ大臣奏申此國昔ヨリ神ヲ以宗トシテ今新ニ佛ヲ敬ニ依テ神ノ怒ヲナシ給ト申  
 テ彼佛像ヲ難波堀江ニ流捨テ其時空ヨリ火下テ内裏燒ヌ或云十三年十月十三日金銅釋迦像  
 一體聖明王献之云リ又善光寺緣起云百濟國ヨリ阿彌陀三尊ノ像流來シテ日本國攝津國難波



浦ニ着ク漢明帝ヨリ四百九十年也然ニ此國顯教傳事此天皇ノ御時也仍佛法ト云事モ是ヨリ始マリ三十二年ト申セシニ聖德太子胎レ玉キ御父用明天皇ハ此帝ノ第四ノ御子也太子御母御夢金色僧來テ宣我世ヲ救願ヨリ暫ク君ノ腹ニ宿ラント宣シカハ角宣フハ誰ニテ御之申宣玉僧ノ宣ク我ハ救世觀音也家ハ西方ニ有ト御母申給ク我身穢ハシ何トシテカ宿給ン僧ノ宣ク我穢タルヲ厭ス母ノ御口ニ入り給ト見驚給フ應御懷妊有八月ト申ニ腹中ニテ物ヲ宣キ此御時八幡大并神詔有テ豊前國宇佐宮ニ顯給キ又和泉國血奴ノ海中ニ響聲有リキ雷ノ如シ光ル事日輪ニ過タリ公ノ使ヲ遣テ見セ給ニ楠木海上ニ有テ耀キケリ公使持參レリ是靈木成トテ吉野ノ光像ヲ作ナリ美濃國男侍キ野中ヲ暮テ行美女ニ行合ヌ哀レ是ヲ妻ニ成ハヤト思テ言ヲ云カケタリケレハ夫ニ語寄テ夫婦ト成テ程ナク男子ヲ儲或時隣家ニアリケル犬來リ此女ヲ見強チニ吠ケル程此女キツト鳴テ窓ヨリ出奔見レハ狐也又子モキツト鳴テ出ケリ是レ小狐也鳴ツル聲ニ付テキツ子ト云初メシ也此時百濟國ヨリ曆博士并ニ醫師渡セリ人々習傳ケリ

第三十一敏達天皇治十四年御年四十八欽明第二子母皇太后石姬宣化御女同國磐余澤語田宮御之淳名倉太珠敷トモ申此時又百濟國ヨリ佛經法師尼ナント渡セリ守屋ノ大臣カ申ニ依リ佛像ヲ燒法師尼追捨ケリ此比空ニ雲ナクシテ雨降り又天皇大臣ヨリ初テ惡瘡起國中病死元年正月一日聖德太子生給父用明帝御弟御之御母宮中ヲ遊歩ヒ給シニ御廐ノ前ニテ聊覺サセ給モナクテ俄生サセ給ヒシ也十二月成ラセ賜ケル赤黃ナル光西方ヨリ御殿ノ内へ差テ照セ

リ帝聞召テ行幸成テ問セ給ニ有ツル様トモ宮中ニ光サシ耀ケル由ヲ奏ス帝聞召驚給ニ只人ニ非勅定有同年ノ五月高麗ヨリ鳥羽ニ物書テ奉ル何ト讀可トモ知サリケルニ船史相ト申セシ人コシキノ中ニヲキムシテ物移讀タリシト申帝嘆給ヒテ常ニ召レキ二年ト申セシ二月十五日聖德太子向東合掌シテ南无佛ト唱給キ御年二ツニ成セ給ケルニ三年三月三日ニ父王太子愛給テ懷進セ給ヒシニイミシク芳クマシノキ月日多過マテモ移香失給ハサリケレハ宮中ノ女房達我モノト爭テ懷奉ケリ六年ト申セシ十二月百濟ヨリ又經論數渡セリ太子是見侍ント帝ニ申給シカハ御故問給フニ太子申給フ昔唐ノ衛山ニ侍シニ佛教見侍キト申給シカハ帝淺猿思召汝六歲也イツノ程ニ唐ニ有シトハ宣ソト仰コト有シカハ太子先ノ世覺ユル事申也ト宣シカハ帝ヲ奉始人々奇思ヲナセリ法華經今年渡セリ七年ト申セシ二月太子經論開見給ヒテ六齋日梵天帝釋ノ下テ國ノ政ヲシ給日也物ノ命ヲ殺事止給ヘト申給シカハ宣旨ヲ下シテ止給キ八年ト申セシ十月新羅ヨリ釋迦佛渡シカハ帝悅給ヒテ供養シ奉今山階寺ノ東金堂ニ座此佛也十二年ト申セシ七月百濟ヨリ日羅ト云僧來太子逢奉リ物語シ給ヒシ程ニ日羅身ヨリ光リヲ放太子ヲ拜奉申敬禮救世觀世音傳燈東方粟散王ト申太子又眉ノ間ヨリ光ヲ放給ヒテ其後宣キ我昔唐ニ有シ時日羅ハ弟子ニテ有者也常ニ日ヲ拜シ奉ニ依身ヨリ光出也十三年ト申セシ九月石ニテ作タル彌勒渡シ奉蘇我馬子大臣崇メ奉元興寺ニ御之也十四年ト申セシ三月守屋大臣帝ニ申先帝御時ヨリ世中惡病起レリ是蘇我大臣カ佛法崇ル故也佛法ヲ可破由宣旨ヲ申給テ守屋佛像ヲ破リ寺ヲ燒僧尼ヲ縛打縛キ去程ニ空ニ雲ナク大雨降大風吹



テ物働ス帝モ守屋モ忽瘡病ニ惱天下ニ惡瘡發テ病人身ヲ燒カ如シ此時ニ尾州ニ田ヲ作者有  
 水ヲ引ケル雷鳴落タリ其形小兒ノ如シ男打殺サントシケルヲ雷我ヲ扶ヨ汝カ所望ヲ叶ヘン  
 ト云男之子持ヌ子ヲ與ヘヨト云テ扶ケリ廳テ空ヘ上リヌ其後妻女妊男子儲タリ十歳時方八  
 尺石ヲ持ケリ此童上テ元興寺僧仕程此寺鐘樓堂鬼有常鐘ツク者取喰フ此童大力成ハ鬼ヲシ  
 ヘタケンヤト人申合有時此童鐘樓ニ上ヌ如例鬼來童取喰ントス童大力ナレハ無手ト與鬼ノ  
 髮ヲ強ツカミ與合ヒケリ夜巳明ナントスルニ鬼逃去童鬼髮引拔留夜明テ血シルシニ尋行見  
 寺傍ナル墓所墳也其後鬼人取事無リキ鬼ノ髮ハ寶藏ニ納侍キ其後此ノ童男ニ成テ此寺ニ侍  
 キ此男五百人計シテ引ヘキ石ヲ引除テ寺田ヲ養ケルトナン後ニ此男法師ニ成リタリ代人道  
 場法師ト申セシ或大駄法師トモ云ヘリ

第三十二用明天皇治二年欽明第四子母堅鹽姬蘇我稻目大臣女同國高市郡池邊列槻宮ニ御之  
 帝失給ヒテ後蘇我ノ馬子ノ大臣ト麻戸ノ皇子ト謀ヲ合テ守屋大臣亂ヲシツム其故ハ太子父  
 帝ヲ拜シ奉リ御命事ノ外短ク見ヘサセ給ハ政ヲモ直ニセサセ給又佛法ヲモ崇給ヘクト申サ  
 セ給シカハ何有可トテ守屋ニ仰合サレケルニ勅答申ケルハ思モ寄ヘカラサル事也我國ハ神  
 ヲ崇ヘシトテ佛像ヲ破經論ヲ取捨ケリ太子宣ケルハ守屋ハ因果ヲ知ラス只今滅ナントソ守  
 屋之ヲ聞彌怒ヲナシ兵ヲ聚メ様々ノマシ態モヲシケリ此事ヲ聞召テ舍人遣テ守屋方ヨル人  
 々ヲ殺サセ給シ程ニ四月九日帝失給キ七月ニ太子蘇我大臣諸共ニ兵ヲ起守屋ト戰給フ守屋  
 方兵數ヲ知ラス太子御方軍士怖恐ニ度マテ退坂キ其後太子大誓願ヲ發テ白樫ノ木ニテ四天

王ノ像造リ奉頂上ニ置奉リ弓ヲ取矢ヲハケ給テ誓給フ今所取放箭四天王放勝也ト宣射サセ  
 給シカハ其箭守屋胸中テ立所失命給キ秦河勝首ヲ取レ守屋カ妹ハ蘇我大臣婦ニテ有シカハ  
 其計有ケルカ今年應天王寺造初給フ守屋田領資財等ヲ以造立ヌ或云太子蘇我大臣御仰合由  
 ヲ聞テ守屋河内國城ヲ構ケリヤカテ太子押寄給日來ヨリ構タル城ナレハ木戸開散々戰守屋  
 城乾角榎木植氏神祝ケル其木登戰下知弓取直矢差ハケテ申ケルハ是全我非放矢物部大明神  
 御矢也迎能引射ケレハ太子甲射削御舍人腰骨健中太子御涙クミ給テ閑々御馬下給テ四天王  
 像造給テ御胄上ニ居奉リ三度奉禮給テ御馬召弓矢取テ答御言コソ有難ケレ此矢我放矢ニ非  
 ス佛法ノ怨敵成ルヲ四天王ノ矢也トテ射サセ給ケレハ不誤守屋頸骨ニ射貫給ケレハ廳テ木  
 ヲリ落テ死ニケリ之ヲ見城中ノ勢散々落失其年ヤカテ四天王寺ヲ難波ノ岸ニ立賜フ守屋カ  
 庄園田島等永代ヲ限リ之ヲ寄進セラレ彼カ後家男ノ孝養トテ千人ノ男ニ合ケルコソ墓無ケレ  
 第三十三崇峻天皇治五十年御年七十二欽明第十五子母蘇我稻目大臣女同國倉橋宮御之伯瀨  
 部トモ申此帝元年百濟ヨリ佛舍利奉二年ト申スニ帝聖德太子奉呼給テ汝ヨク人ヲ相ヌ我ヲ  
 相シ給ヘト宣シカハ太子腦ク御之但橫御命危シト申給帝其故ヲ問給フ太子申給赤筋御目貫  
 ケリ是ハ傷害御相也ト帝御鏡以テ御覽スルニ申給カ如シ深御慎有ヘシト申給シニ御外戚蘇  
 我大臣ヲ失ントシ給シニ大臣其義成ラハ帝奉失トテ東ノ駒子ト云者語テ帝奉失其後駒子モ  
 被失三年ト申セシ十一月太子十九ニテ御元服アリキ

第三十四女推古天皇治三十六年御年七十三欽明中娘母堅鹽姬同國墾田宮御之敏達天皇后也



崇峻殺給テ後百官相計テ位ニ即奉ル麻戸ノ豐聰耳ノ皇子ヲ春宮トシテ世政預奉ル用明第一  
 御子聖德太子ニ申奉是也太子十七箇條ノ憲法ヲ定給法令ノ始也又冠ノ品々定給ケリ三年  
 乙卯四月栴檀香寄ル淡路島ノ南ニ觀音造奉ル水鏡云此香土佐ノ國南海ニ每夜光物有キ其聲  
 雷如シ卅日ヲヘテ四日淡路國岸寄來廿人シテ抱程長八尺餘也其香事譬方ナシ是ヲ帝ニタテ  
 マツル太子之ヲ見給テ流水香申物也此木栴檀香云南海岸生タリ此木依冷夏諸毒蛇共纏ヘリ  
 其時人彼木矢ヲ射立テ蛇ノ穴入冬成矢ヲ注ニ此木切也其花丁子其實鷄舌香其油薰陸ト云久  
 ク海ニ沈ミタルヲ沈水香ト云不久ヲハ淺香ト云リ帝此木觀音奉作比蘇寺ニ奉置給シカハ光  
 ヲ放異香薰誠奇異也六年ト申セシ四月太子能馬求給シニ甲斐國ヨリ黒馬四足白奉太子多馬  
 中ヨリ是撰出九月此馬召雲入東ヲ差テ御ス調使丸ト云舍人ヲ御馬ノ右方ニ取付テ雲入シカ  
 ハ見人驚合リ三ケ日有飯給テ我此馬ニ乘テ富士ノ嶽ニ至テ信濃國ヘ傳テ飯ト宣キ六年ノ秋  
 八月新羅ヨリ孔雀一雙奉ケリ十一月ト申セシ十一月ニ太子ノ崇奉可宣シ佛像ヲ秦ノ河勝カ  
 餘ニ訴訟ヲ致セシカハ彼ニ賜ケルヲ峰ノ岡ニ寺ヲ作テ奉居此今秦ノ河勝寺ト申也佛ハ彌勒  
 也常ニハ藥師ト申也十四年七月帝ノ御前ニテ勝鬘經講給シカハ太子師子ノ座ニ登三日講  
 給キ其有様僧如クナン腦御ケリ蓮花ノ長二三尺計ナルカ空ヨリ降シカハ難有事其所寺ヲ立  
 キ今橘寺申是也十五年五月ニ帝申給昔奉持經唐衡山ト申所アリ奉取寄此渡レル經辭事侍見  
 合ント申給テ小野妹子大臣七月唐ヘ遣明年四月妹子一卷シタル法華經持來同年九月斑鳩ノ  
 宮ノ夢殿ニ入給テ七日七夜出給ハス夢殿ニ入テ音龍車ニ乘數百人ヲ隨テ虚空ニ飛衡山ノ般

若臺ニ至リ年來持經ヲ取飛飯賜八日ト云朝御枕ノ上一卷ノ經アリ太子宣此經ハ我先生奉  
 持經御妹子取來經我弟子經也此經卅四字文字世間廣經此文字無ト宣キ太子四十二ト申二月  
 十五日級長山麓終御墓所造斑鳩宮飯給ケルニ片岡山通給ニ道傍飢タル人臥タリ其形世常ナ  
 ラス面長頭大也二耳長細クシテ眼ヲ閉テ内ヲ見ニ金光有其身芳太子紫上ノ衣ヲ脱打係給ト  
 テ御詠云 級照ヤ片岡山ニ飯ニ飢テ臥ル旅人哀ヲヤナシト飢人首持上太子拜奉テ詠ス  
 斑鳩ヤ富ノ小河ノタヘハコソ我大君ノ御名ヲ忘メト其後密談人云知飯給テ後人遣テ見セ  
 給ニ死侍キ其所ニ塚ヲ築テ體納後又人ヲ遣テ見ケルニ骸骨モ無シテ紫衣ハ殘芳カリキ聽テ  
 其所ニ寺ヲ建テ達摩寺ト號ス 二十九年二月二十二日太子崩シ給御年四十九也河内國西條  
 郡磯長郷納奉リ帝ヲ始メ奉リ一天下ノ人父母ヲ如失ル悲キ太子御事萬カ一ヲ申侍ナリ太子  
 世ニ出給ハサリセハ冥ニ從冥ニ入長ク佛法ノ名ヲタニモ聞ヌ身ト成マシ天竺ヨリ大唐傳テ  
 三百年ト申セシニ百濟傳百濟百年有吾朝渡レリ其時太子御守護アラスハ忽守屋ニ破レ更佛  
 法云事無或云十三年丙午小墾田宮時信濃國住人若麻續真人字本大善光難波京時公役ノ爲上  
 洛ス下向ノ時百濟ヨリ送奉ル三尊阿彌陀佛善光カ肩ニ立給伊奈ノ郡麻續ノ里ニ下テ住給其  
 後四十一年ヲヘテ同國水内ノ郡ニ移シ奉ル今善光寺是也同廿五年聖德太子令旨善光寺下サ  
 ル御書ノ表書本師阿彌陀如來ト被遊タリ寺僧拜見申評定シテ是凡夫ノ計ヘキ事ニ非ストテ  
 硯ト紙トヲ如來ノ御前ニ置キノケレハ自御報有太子御文ヲハ善光寺ノ寶藏ニ納ケルヲ度  
 ヲノ火災失ケルトナン如來ノ御報ハ天王寺第一寶トテ寶藏納テ今ニ有リ



太子一口口御消息御使稻目宿禰子甲斐黑義ト云リ其御詞云 名號稱揚七日已此斯爲報廣  
 大恩仰願本師彌陀尊助我濟度常ニ護念トシテ遊サレケル如來ノ御返報ノ文ニ云 一日稱揚  
 無思留何況七日大功德我持衆生心無間汝能濟度豈不護緣起ニハ此文ヲハ推古天皇廿年云々  
 若爾者定居二年壬申歟又太子御年四十九ハ京繩二年己卯二月廿二日薨玉留記文見日域化緣  
 亦已盡還飯西方我淨土ト云リ卅四年ト申セシ六月十日天下大雪降タル也 此時百濟ヨリ曆  
 本天文地理文トモ奉レリ又僧都僧正成僧尼事ヲ定ラル  
 第三十五舒明天皇治十三年御年四十九敏達ニハ孫忍坂大兄皇子也和州高市郡岡本宮御之息  
 長足日廣額也申此時大唐ヨリ一切經渡セリ此帝伊與ノ湯行幸アリ二年玄奘三藏唐ヨリ天竺  
 へ渡給シト承緣リシ此時役行者生給ヘリ大和國葛上郡ニ賀茂氏ノ女アリ夢見ラク化人來汝  
 腹ニ宿ト云此母獨古ノ杵ヲ吞ムト思テ忽懷孕シ身ヨリ光ヲ放七箇月ト云ニ誕生セリ五色ノ  
 雲聳諸天善神龍神八部等モ來現シ蘭湯忽ニ涌テ生兒ニ令浴奇特一ニ非ス願行上人ト云人有  
 テ童名ヲ役ト名付此所ニ寺立茅原寺ト云七歲ノ時不動明王ノ慈救呪ヲ受毎日誦事十萬返十  
 六歲ニシテ鬼神ヲ隨シメ遂十九歲ニシテ攝州箕面ノ瀧ニ登リ瀧ノ上龍穴有則入是龍樹并ノ  
 淨土也輒ク拜奉ル龍樹大聖密宗傳受ス拜指後堂宇草創シテ大聖安置シ奉ル廿一歲ニシテ紫  
 雲ヲ見熊野山參詣スルニ渡邊ヨリ始道中不思議凡秘變是多高峰葛城兩峰修行シ賜葛城ヲ一  
 乘ノ峰ト云法華像ヲ建立高峰ハ并峰トテ胎金兩部ヲ以建立シ賜或時行者悲母水拜酬トテ一  
 千基石塔建立シ震旦北斗和尚ヲ請シテ供養ヲ述給奇特也所ハ大日嶽也凡大峰ノ爲體南ハ熊

野權現御之普ク一切衆生ヲ利北ハ金峰藏王遙ニ此三會ノ曉ヲ涌出シテ山兩部ニ當時ハ南ノ  
 熊野ハ胎藏界因曼陀羅北ノ金峰ハ金剛界果曼陀羅地也出纏在纏マシタラ五部三部諸尊ハ峰  
 々ニ肩ヲ並嶽々ニ座ヲ列テ去ハ一タヒ見マンタラノ德俱呢ノ罪障忽ニ滅ヌ誠ニ貴シト申モ  
 疎也 其後金峰山ニ於行者末代ノ守護ノ爲祈請ヲ致賜ヒシニ地藏出現シ給ヘリ行者宣ク此  
 峰ハ山嶮シテ邪神多シ柔和ノ質ニテ叶フヘカラストテ取奉投給シカ伯耆國大山ト云所ニ落  
 着給大山地藏權現ト申是也山上於テ重テ祈請有シカハ磐石忽ニ破藏王出現シ給ヘリ是又事  
 越タリトテ正體石室ニ籠山上ニ置奉リ行者手自ラ光像ヲ造給今ノ藏王權現是也又武帝モ  
 一體建立給ヘル也又葛城ノ峰ト者諸佛出世ノ本懷衆生成佛ノ直因ナル法花ヲ以テ建立シ給  
 序品岩屋ヨリ六萬九千三百八十餘ノ秘密石木ニ顯シタリ就中金剛山法起并三世常恒ノ說法  
 ノ會場也深シテ蛇大王ノ教ニ依南都ノ鑿眞和尚會座ニ望賜テ說法聽聞シテ布薩ヲ行ケル籌  
 一ヲ返サスシテ取テ返招提寺置キ給ヘル眼前也去一度修行スル人モ頓罪障滅速致佛果ト云  
 ヘリ況數度修行ヲヤ  
 第三十六皇極天皇女帝也治三年敏達曾孫茅渟ノ王ノ女也此帝ハ舒明ノ后也帝失賜テ後即位  
 賜明日香ノ河原ノ宮ニ御之天豐財重日足姬共申又ハ寶皇女トモ云ヘリ此時蘇我入鹿ノ大臣  
 聖德太子ノ御子孫共ニ三人失奉ラントテ兵ヲ起シ斑鳩ノ宮ヲ圍奉シニ太子ノ御子大兄王ト  
 申セシ計ヲ廻シ逃給テ雲ニ乘天人ノ像ヲ顯シ光ヲ放西飛去賜キ異香紫雲聳リ此時入鹿大臣  
 國政我任ニシテ天下蕙セシカハ中大兄皇子鎌子計ヲ廻入鹿カ頸ヲ鎌ニテカキ切ケリ入鹿カ



屍ヲ父豐浦ノ大臣カ許ヘ遣ヌ大ニ怒テ火中ニ入テ死テ大惡鬼ト成ト云リ鎌子ヲハ鎌足ト申大職冠ト申ケリ此時新羅ヲ攻賜ケル時備中國ニ下リ道ノ郡ニ一ノ里アリ兵ヲ召ケルニ二萬人奉ケリ之ニ依二萬ノ鄉名其後吉備大臣眞吉在國之時數ケレハ一千七百人有ト云リ

第三十七孝德天皇治十年皇極弟也母同姊讓ニテ即位天萬豐日共申攝州難波長柄豐崎ノ宮ニ御之此時八省百官ヲ初定又國々堺御調物ヲモ定帝佛法ヲ崇給丈六ノ縫佛ヲ供養シ二千人ノ僧尼ヲ以一切經ヲ讀シム其夜萬燈會ヲ宮中ニトモス六年庚戌二月長門國ヨリ白雉ヲ進仍年號白雉云リ 同年新羅ヨリ大ナル馬ヲ奉其形馳也能食銅鐵云リ白雉五年正月鼠多羣集ヘ難波ヨリ大和ヘ行キ都遷ノ其驗有ヘキ也云リ年號大化ト改此時田島下段絹布疋端ヲモ定ラル大化二年道澄法師初宇治河橋ヲ渡

第三十八齊明天皇女帝也皇極重祚也治七年御之此時鎌足御病重ラセ給ケルニ帝大歎セ給ケリ御所事有シカハ維摩經讀セケルナント申サセ給ニ帝悅思食折節百濟ヨリ法明云人來朝セリ彼ニ讀セケルニ即時得減給ヘリ依之明年山階寺立維摩會行ラル也于今絶ヘスト云ヘリ

第三十九天智天皇諱葛城治十年舒明第一ノ子母皇極天皇也近江大津宮ニ御之天命開別共申大支ノ白子ヲ太政大臣トス此時諸國百姓ヲ定又漏剋ヲ作レリ鎌足内大臣ニ成初藤原氏給ヘリ此大臣病重成時御幸成問セ給シ也忝御事也又江州志賀寺造セ給テ御手指一ツ切セ給テ御請約有テ二會彌勒裏書云鎌足御事天津兒屋根命廿一代孫中臣御饗子大連公御子母大伴之比

子御<sup>女</sup>子智仙娘母公或夜ノ夢ニ玉門ヨリ藤生出日本國ニ蔓リ花發クヲ見テ醒メ懷妊男子ヲ産メリ當リモ耀計也七日ト云ニ白狐鎌ヲクワヘテ來テ枕本ニラクサテ童鎌子ト名ヲ云容顏勝人心操勇銳也壯年ノ比上洛ス平城京也奈良天智天皇末春宮ニテ渡セ給ケル時法興院ニ於テ鞠ヲ被遊ケルニ御沓拔ケリ御足ヲ中ニ提サセ給テ桂ノ木ニ取付給は見奉ケル人モ入鹿ニ憚テ知ラヌ體ニテ有ケルニ鎌子見物申ケルカ通參御沓ヲ取テ召セ奉ケリ春宮御覽セラル、不思議者思食御尋有ケルニ出所名字有任申上ケレハ召仕ヘシト仰出サレ臣下等何思ケル處ニ人體人勝タリ然皇極天皇御宇蘇我ノ大臣入鹿父子ヲ誅シ國家助ケ奉恩賞之多孝德天皇御宇大化元年六月内臣ニ任シ天智天皇七年十月ニ内大臣ニアカルヤカテ大職冠藤原姓ヲ授ケ給ヘリ或記云姬宮鏡ヲ女王ニ賜リ給ケルトナン 玉匣ヲ、フキヤスミアケテ行カハ君カ名ハアレト吾名シ惜モ内大臣贈答御歌 玉匣御室ノ山ノサ子カツラサチヌハツキニ有ヤテナマシ(カテマシモイ)此一首萬葉集之第二卷ニアリ

稱德天皇御宇神護景雲元年丁未六月鹿島神ヲ帝都ニ移奉リ給シニ白鹿ヲ御乘物トシテ唐鞍ヲオキ其ニ柵ヲ立枝ノ上ニ輪ヲ現ス是御體也此内ニ五尊坐給ヘリ釋藥觀地文秘決柿枝御鞍也東海道御上有ケルニ伊賀國名張郡夏見河一瀬至給テ鞭ヲ以テ注ント河邊ニ立給則生付ヌ同國薦生ノ中ノ山ニヤスラヒ給テ付奉ル宮司中臣ノ連時風秀行二人ニ燒栗ヲ給テ己等カ子孫タユミナク我仕ヘシ此栗生付ヘシ被仰是生ル就キヌ同年十一月大和國城上郡安倍山ニ付同三年同國添上郡三笠山麓ニ崇奉ルヘキ由御神託有シカハ勅使ヲ立ラル同十月宮造有テ遷



セ給ヘリ乗給シ白鹿ヲ此野ニ放給フ春日大明神是也サテ時風秀行我等ハ何クニカ侍ヘキト申御神神枝ヲ西南ニ投ケ是カ落チ着タラン所ニ住ヘシト仰ラレ尋行テ見ニ同郡左京八條二ノ坊ノ五ノ坪有ル處ニ居ス今ノ辰ノ市也春日四所云一ノ御殿ハ釋迦天照二御殿藥師香取三御殿十一面鹿島四御殿地藏於當社爲正殿若官殿文珠諸神末社御ス是内州平岡攝州壽久山雍州大原吉田社等多又閑院大臣冬嗣忠仁公弘法大師ニ申談ラレテ興福寺中一字合建立給フ本尊ノ事ハ大師ノ御計トシテ寺中ノ西南壇築ケルニ度々崩不思議ノ由申合ケル所ニ老翁出現シテ云何築ル可崩也此歌ヲ唱ヘテ築ヘシトテ詠此歌ハ大明神ノ御詠也秘ヘシ云々 補陀落ノ南ノ岸ニ堂立テ今ニ(ノ歎)築ン北ノ藤浪ト唱テ築ニ崩レス廳テ堂ヲ立南圓堂ト號本尊ハ不空罽索ニテ御之丈六ニテ左肩鹿ノ皮袈裟ヲ掛ケ藤ノ花ヲ持地藏ヲ頂給ヘリ當社ニ於テ地藏ヲ正體ト申也大師當社秘呪給フニ地藏觀音一體ニ顯シ給ヘリ深秘也笠置解脫上人參詣時明神直幽ナル御聲ニテ示給ハ悲花經ノ文我滅後於生法中現大明神廣度衆生云々并御詠云我ヲシレ釋迦牟尼佛ノ世ニ出テサヤケキ月ノ世ヲ照ストハ又今樣詔給ケルハ鹿島宮ヨリカセキニテ三笠ノ山ニ移シ昔ノ心モ今コソ人ニ知レヌレ深意有是云ヘリ勒奉契燈爐ノ堂ノ下ニ埋給ヘリ此寺爲建立ノ勅使ヲ立ラレタルニ老翁出來テ其所ヲハ古仙靈顯伏藏之地サハナミ柄ノ山ト云々此時常州ヨリ白雉并角ノ生タル馬ヲ奉ケリ

第四十天武天皇大海治十五年舒明ノ子母皇極天皇也天淳中原瀛真人ト申又ハ淨見原ノ天皇共申和州飛鳥ノ淨御原ノ宮ニ御之此帝位ヲ御辭退有テ大友皇子ヲ即給ヘトテ吉野山ニ入セ

給テ御出家有ケリ天智崩御ノ後大友ノ皇子起兵ヲ吉野山ニ攻入給然間此君ハ山ヲ傳ハリ伊勢國至太神宮ヲ拜ミ奉リ爰美濃ト尾張軍士等起テ大友官軍合戰仍官軍等戰負ケヌ大友ノ皇子ノ首ヲ取り奉ケリサテ天武即位シ給又此時對馬國ヨリ初銀ヲ奉ル又年號アリ朱雀一年又白鳳十三年又朱雀一年也大津ノ皇子政ヲシ給シカ謀叛ヲ起テ持統天皇殺ラレ給キ朱雀元年ニ大宰府ヨリ三足ノ朱雀ヲ奉ルサテ朱雀改因幡國ヨリハ稻一莖八千粒有ケルヲ奉又十五年ニ和州ヨリ赤雉ヲ奉ルサテ朱雀ト云カ或ニハ白鳳ト云

第四十一持統天皇女帝名菟野治十年天智第二女母越智姬高天原廣野姬共又鷗野讚良共申同國藤原宮御之天武后也叩杖踏歌此御時初レリ七年相模國ヨリ赤鳥奉ケリ

第四十二文武天皇治十一年大寶三慶雲四御年廿五天武ノ孫草壁皇子第二ノ子母元明天皇也天津足根大火共申和州藤原ノ宮ニ御之二年五月ニ役行者ヲ伊豆ノ大島ヘ流遣ス其故ヘハ葛城ト大峰トノ間ニ岩橋ヲ渡テ行廻ラント思フ葛城ノ一言主神ヲ語テ爾々橋ヲ渡ランヤト宣ケレハ安々ト渡可キ由有キ但萬ノ神達ヲ語テ夜々渡レト云ヘリ此神我形餘ニ見惡シトテ角宣ケルヲ行者只畫渡セト責給ケレハ此神安カラス思ヒテ都ニ上リ帝ニ訴ヘ申ケレハ此程葛木山不思議者籠居候テ公咒咀奉リ候也是モ彼山ニ年來住ル老翁ニテ候ト申給ケレハ帝驚思召テ人遣テ召取ントスルニ行者飛行自在ニシテ鳥ノ如ク虚空ヲ翔リ給ヘリサテ村里老ノ者ニ相尋テ行者ノ母堂ニ有ケルヲ召取テ禁置ケル間行者力ナク召取ラレ給テ都ニ上セ奉懸伊豆ノ大島ヘ流遣ス行者畫ハ大島ニ有ナカラ夜々ハ富士嶽ニ上テ行給ケリ仍淺間大并納受



シ給テ帝ノ御夢ニ無罪ニシテ流サセ給公ノ御爲然ルヘカラス急キ召返サル可シト度々御夢  
 想有ケレハ驚思召返サレケリサテ葛木山ニ飯入テ讒訴ヲ申セシ山神一言主明神ヲ取大神咒  
 ヲ以テ祈伏柳子ウソヲ以三匝半ニ縛テ彼山東ノ谷底ニ投入給ケリ今ニ至マテ雨風時ハ彼山  
 ノ草木モ風吹テ共ウメキ泣聲スト云リ其後六月七日虚空ニ上リ給キ豆州ニ御坐セシ時伊豆  
 國ノ三島ノ大明神行者ヲ訪奉ントテ來給シヲ行者留進セ給テ東土衆生ヲ濟度シ給ヘトテ留  
 奉給キ誠忝御事也行者金峰山ヘハ六月七日必影向有ト云リ行宗大師過マテハ大唐國第三ノ  
 仙ニ羅列云菊南上人ニ謁テハ箕面寺ノ辨才天ト稱給ヘリ所々ノ靈場修行シ給中ニモ大峰葛  
 城富士月山ノ四峰ヲハ殊顯密ニ教曼茶秘羅思召ケレ共又道照和尚渡唐ノ時モ行者ニ逢ル由  
 語給ケルト云リ大寶元年道慈律師入唐シテ西明寺ヲ見テ奈良ニ大安寺ヲ造ル唐ノ西明寺ハ  
 天竺ノ祇園精舍ヲ移彼精舍ハ都率天移ト云ヘリ五年正月不比等大納言成給キ又二月丁未釋  
 奠始ル大學寮孔子ヲ祭ル同年三月對馬ヨリ銀奉ル仍年號ヲ大寶ト爲四年五月ニ大極殿上慶  
 雲見ヘシカハ年號慶雲ト號セシ也六年ト申セシニ世間心地起テ煩シカハ追儼ト云事ヲ初シ  
 也

第四十三元明天皇女帝名阿閉治七年和銅七年御年六十一天智女日本根子天津御代豐國成姬  
 共申和州平城宮御之文武母也文武失給テ聖武未幼御之依即位給也御年四十八靈龜元年九月  
 ニ位ヲ元正天皇氷高内親王ニ讓奉リ給ヌ大職冠天地ヨリ御懷妊ノ女御ヲ給共云ヘリ淡海公  
 此御腹ト申人モ侍天智ヨリ王氏一ニ成給テ公字ヲ被下正一位ヲ送給シ事也淡海公ノ御子

四人御之キ一ハ贈太政大臣武智丸南家ト申二ハ贈太政大臣房前北家ト申三ハ太宰帥式門宇  
 合式家ト申四左京大夫相九京家ト申此中北家ノ一流榮今攝政關白北家ニ限御之腦御樣也和  
 銅三年不比等山階寺奈良移シテ興福寺號維摩會ヲ行給シ也

第四十四元正天皇女帝名氷高治九年靈龜二養老七御年六十九文武姊日本稻子高瑞淨足姬正  
申(草壁王之嫡后也、御宇官備大臣遣唐使)平城宮御之此時百官笏持事定又女衣定不比等此時大臣法  
 令給四年九月大隅日向賊徒宇佐宮禰宜承勅ヲ對治令ムルノ間神詔有放生會行ル是ヨリ諸國  
 モ行侍

第四十五聖武天皇治廿五年御年六十五神龜五天平廿文武太子母藤原宮子不比等娘天瑞國押  
 開豐櫻彥命共申平城宮ニ御之神龜四年三月廿日江州高島郡水尾崎ニ洪水出テ大木寄レリ村  
 里人破燒ケルニ俄ニ病起人死亡ケレハ此木故也トテ木ノアタリヘ人寄サリケリ大和國葛上  
 郡出雲介大水ト云ケル者此木ノ事ヲ傳聞テ十一面ノ像ヲ造奉ント云大願ヲ發テ人々勸テ葛  
 下ノ郡當麻ノ里ニ引付ケルカ願遂スシテ大水死ス其後八十余年ヲ經ニ村里ニ病起人民多ク  
 死亡セリ此木故云大水カ孫宮丸ト云者此木引除ヨト責ケレハ里ノ人ヲ語テ磯城上ノ郡長谷  
 河ハタニ引捨ケリ三十三年經テ道明德道ノ二人ノ上人此木ニテ十一面ノ像ヲ造ラレ候ト云  
 願ヲ發ス于時解聞惠解修薰云二人佛師出來上人奇異ノ思ヲ成テ佛ヲ造ルニ丈六尺也佛師ヲ  
 外ニテ見六臂ノ十一面六臂地藏也養老四年ヨリ八年也神龜四年ニ造修ス上人夢告有ケレハ  
 長谷山ノ馬腦ノ石上ニ居奉ル行基并供養有飯高天皇仰房前ノ臣ニ供養遂云々



天平二年吉備大臣玄昉法師唐へ渡テ一切經論五千余卷并文籍様々物ヲ渡セリ大臣ヲハ禁籠セラルノ間日月ヲ封唐土開曠成間(本マ)是大臣ノ所爲也大臣ヲ免許テ皈朝セシ也天平十年戊寅六月如雪飯降カケレハ始怖ケレトモ後人々皆取食ケリ不思議也 同八年十一月九日左大弁葛城王橘姓ヲ賜天皇御製也 天平六年光明皇后御母橘氏ノ爲ニ興福寺中金堂ヲ立給ヘリ橘ハ實サヘ花サヘ葉サヘ枝ニ霜ヲキマシテ常葉木トシ此時橘諸兄卿并中納言家持卿ニ仰萬葉ト號哥一萬首可進撰之由勅ヲ承又唐ヨリ柑子ヲ渡セリ又孟蘭盆モ初レリ 同十二年九月二日肥前國松浦郡ニテ朝敵ト成テ誅セラル廣繼ノ靈鏡ノ宮ト祝是也大將大野東八也十五年冬十一月十五日江州志賀京ニテ東大寺ノ大佛奉鑄初メ同十九年九月廿九日奉鑄終廿年正月奥州ヨリ金九百兩奉也仍年號ヲ天平勝寶ト改ラレケリ元年丁亥(己丑)十二月七日供養有金銀銅十六丈盧遮那佛南焰浮提第一佛像云ヘリ行基并ヲ導師ニ請奉給シニ勅使ニ向テ申給ケル金輪御敬誠深依之梵僧來朝シテ供養シ可被申也唯冥顯ニ任セラルヘキ也奏給太子ヨリ諸卿ニ至ルマテ申サク代已澆季也何誠ヲ致御坐共天竺ヨリ導師來朝ノ事思モ寄スト各申合リ然共行基ノ計申上ラレ異儀ニ及フ可キ非ス已ニ供養ノ日時ヲ定レキ并聽攝州難波津ニ出西ニ向香花ヲ供三拜有ケレハ紫雲虛ニ聳一葉ノ舟海ニ浮天童蓋ヲ捧婆羅門僧正來給ヘリ奇特云不足萬人奇異ノ思ヲ成リ并僧正ノ御手ヲ取テ申給ク 靈山ノ釋迦ノ御前ニ契テシ眞如朽セス相見テシカナ僧正取モ不敢返答有リ 伽毘羅會ニ共ニ契リシ甲斐有テ文珠ノ顔ヲ相見ツル哉明日ト兼テ定ラレタリシニ參洛有ニ其日御供養セリ天花風續紛トシ

テ梵音ノ雲幽揚ス天衆モ影向シ佛神モ顯化シ給フ去レハ宇佐八幡モ御託宣有影向有リ應梨原ノ宮ニ祝奉上古未聞又末代有難カリケル御事也其儀式言語ニ及ヒ難ク筆墨ニモ註キ難キ次第也此時諸國々分寺御夢想ニ立ラル也六十六丈ト御夢ニ有シヲ一丈ノハ藥師ニ造給ヘリ第四十六孝謙天皇阿閉又法基ト申ハ出家ノ御名也治十年天平勝寶八口平城宮ニ御之五十三聖武ノ御女母光明皇后淡海公女也高野姫ト申平城宮ニ御之此御時内裏ニ天下太平ト云文字心靜出キニケリ

第四十七淡路廢帝 大炊治六年天平寶字八年至六年也御年卅三天武孫舍人親王ノ第七ノ子此帝御即位様々事共有大納言藤原仲丸ト計ヒテ帝ヲハ即位シ也依之帝ノ叡慮ニ相叶ヘリ天平寶字二年八月廿五日仲丸大保ニ成給キ是右大臣ヲ申也本藤原ノ姓ニ惠美ト云二字ヲ加給キ一々ニト云姓モ御覽スル毎度ニ咲ハシク覺也トテ給ケルトソ又仲丸ヲモ替押勝トモ召ケリ高野天皇軍起位ヲ押取テ淡路國ニ移奉惠美ノ大臣ト同心ニテ流シ奉シニ三年八月三日鑿眞和尚聖武御口トシテ招提寺立給キ六年六月太上天皇 尼成給キ七年九月道鏡僧都ニ成テ常ニ天皇ノ御傍候御覺第一成シカハ押勝帝奉恨八年九月押勝私印指事行云事ヲ大外記比良丸忍ヤカニ奏セシカハ是ヨリ代ノ亂出來大臣モ兵ヲ起官軍ト戰ケルカ近江國引退高島ノ郡方落ケルカ壘ニ少領ト云者家ニ宿セシニ星ノ大ナル甕程成シカ屋ノ上落タリシ也舟ニ乗テ落ントセシニ惡風吹來リシカハ舟ヨリ上戰テ命ヲ捨ケリ其首京ニ持參レリ皆人申此大臣指モ御覺成ト哀ナル由申セシトソ道鏡僧都彌朝夕ニ仕マツル有様ニナシ大臣被成大臣道鏡召也



第四十八稱德天皇孝謙重祚也治五年天平神護二神護慶雲三寶字八年十月九日即位閏十月二日大臣禪師ヲ太政大臣ニ成キ同年西大寺ヲ造ル金剛ノ四天王ヲ鑄シ奉給シニ三體ハ成テ一體七度不成玉帝誓宣女身ヲ捨願成就ス可シ我手疵モ無シトテ銅涌返入給シニ疵モ無テ天王ノ像顯レ給ヘリ天平神護一神護景雲二神護景雲二年十月廿日道鏡ニ法皇ノ位ヲ授給ヒシ也同年七月ニ和氣ノ清丸カ妹尼ニ偽八幡大井ノ御詔宣ニ云禪師ヲ位ニ即ケ給タラハ世中ヲ穩ニ臚可ク由申ケレハ御長三尺計ニテ十五夜ノ月ノ如光輝給ヘハ清丸肝魂ヲ失テ直ニ見奉ラヌ此時御詔宣有ケレハ道鏡法師邪幣ヲ捧祈ト雖叶ヘカラス我國天祖ヨリ以來天祚異叶可ラス禪師モ怒テ清丸ヲハ筑紫ヘ流サレケリサテ宇佐參ケルニ道ニテ猪二三萬頭出見之山ニ入神詔有テ神封ノ綿八萬餘長給リキ片股切流サルト云リ四年三月廿五日帝由義ノ宮ニ行幸有キ禪師御副御覽有依テ世中失ントシケルヲ宰相百川愁歎力及ハス禪師ニ帝ノ御心ヲ誑カサシト思懸事ヲシタリ淺猿事アリサテ帝聽失給ヌ細ニハ百川カ傳ニアリ

第四十九光仁天皇治十二年自鑿寶龜十一天應一御年七十三天智御孫施基皇子第六子女旅姫日本根子天宗治ト申平城宮ニ御之百川カ計トシテ禪師ヲ下野國藥師寺ノ別當ト號シテ流サル弟ノ大納言淨人ヲ土佐國畑ト云所ヘ流ル紀州ノ霧河寺モ此時建立也寶龜五年ニ弘法大師誕生シ給フ讚岐國多度ノ郡屏風ノ浦住人父ヲハ佐伯ニ眞氏ト云母ヲハ阿刀氏ト云十二月生給ヘリ又父母夢ニ天竺ヨリ聖人飛來懷中ニ入ト御覽有懸懷妊給也大師五六歳ノ間夢ニ常ニ八葉ノ蓮華中ニノ諸佛共ニ物語スト見給フニ然ル父母ニ語り給ハス然ル父母イタハリ奉リ

我子ハタ、物ニアラス昔ノ佛ノ弟子ナルヘシ夢ニ天竺ヨリ聖來テ懷中ニ入ト見ハラミタリ誠ニ不思議也同八年ニ大旱魃宇治川ノ水已ニ絶ナントス前代未聞不思議也此時近江國志賀郡ヨリ傳教最澄十二歳ニテ大安寺ノ行教和尚ノ弟子ト成給キ也

第五十桓武天皇山部治廿四年御年七十延曆廿四光仁ノ太子母高野氏日本根子皇統彌照共申山城國長岡其後ハ今ノ平安城ニ移給柏原御門共申延曆三年甲子十月ニ都ヲ山城國長岡京ニ移テ十年同十三年癸酉甲戌正月大納言小黒參議左大辨小左美等ヲ遣シテ葛野ノ郡愛宕郡令見給ヘ兩人共ニ申ク左青龍右白虎前朱雀後玄武四神相應ノ地也愛宕郡ニ御座賀茂明神申請テ平安城ヲ立給フ末代マテ此都ヲ他所ヘ移可ラストテ諸道博士沙汰有テ長久成可ク様トテ土ニテ八尺ニ人形ヲ作着甲冑弓箭ヲ持守給フ城トテ東山ノ峰ニ向西立テ堀被埋タリ今至マテ天下兵亂ノ起時ハ此塚鳴動スト云リ延曆元年五月四日宇佐宮御詔宣アリ我無量劫中ニ三界ニ化生シ方便ヲ廻シテ衆生ヲ導ク名ヲハ護國靈驗威德大自在并ト宣シ最貴御事也十四年乙丑七月傳教廿二歳桓武ノ祈禱召ル感應有シカハ壇度成給テ延曆寺ヲ建立アリシニ奇瑞種々也釋迦彌陀藥師ノ三尊日輪ノ如虚空ニ翔テ示シ給テ豎ニ三點ニ横ノ一點ヲ加ヘ横ニ三點ニ豎ノ一點ヲ加ヨト有ケレハ傳教悟テサテハ山王ソトテ奉崇給志賀ノ浦五色ノ雲浪立テ影向有七社ト是ヲ號シ根本中堂藥師ヲハ最澄手自斧ヲ取リ像法轉時利益有情故號藥師琉璃光佛唱テ斧ヲ下給木像御頭ヲ垂テ打ツカセ給シ希代ノ靈佛也桓武ノ叡慮ニ并ヘテ比叡山ト號シ天台ノ教法ヲ弘通シ給ハントテ廿二年ニ渡唐シテ道遂和尚ニ天台教ヲ傳龍興寺順曉和尚ニ密



宗ヲハ傳テ飯朝有テ我山ニ天台ノ教法興隆アリサテ最澄歌云 阿耨多羅三藐三菩提ノ佛  
 タチ我立杣ニ冥加有セ給ヘ 渡唐ノ祈ノ爲ニ宇佐宮ニテ法華ヲ講シ給ケレハ神殿ニ聲有  
 テ我久法不聞ツルニ誠今法施隨喜感嘆<sup>ストテ</sup>宣有寶藏<sup>テ</sup>ヨリ紫ノ衣袈娑訖ヘリ今モ天台ノ寶藏  
 ニ有重寶ト號

此御宇ニ大内裏ヲ造ラル唐ノ秦ノ始皇帝都咸陽宮ヲ移造シカハ南北卅六町東西廿町ノ外ニ  
 龍尾ノ置石ヲスヘ四方ニ十二門ヲ立東ニ陽明待賢郁芳門南美福朱雀皇嘉門西淡天藻壁般富  
 門北ニハ安嘉伊鹽達智門此内紫宸殿ノ東西ニ清涼殿温明殿北ニ當テ常寧殿貞觀殿申ハ后町  
 ノ北ナル御匣殿校書殿ト號セシハ清涼殿南弓場殿昭陽舍ハ梨壺淑景舍ハ桐壺飛香舍ハ藤壺  
 凝花舍ハ梅壺襲芳舍申ハ雷鳴壺三十六後宮三千ノ美女粧ヲ莊リ七十二ノ前殿ニハ文武ノ百  
 官詔待此外萩ノ戸陣ノ座瀧口ノ戸縫殿兵衛ノ陣左ハ宣陽門右ハ陰明門日花月花兩門ハ陣ノ  
 座ノ左右ニ向ヘリ大極殿小安殿蒼龍樓白虎樓豐樂院清暑堂御修法眞言院神今食神嘉殿眞弓  
 競馬武德院ニ御覽朝堂院ト申ハ八省諸寮也弘法大師此大内裏ヲ鑿給ニ我朝ハ小國也相應ス  
 可ラス國ノ財力依之盡可シトテ未來兼大極殿ノ額ヲ書シニ火極殿ト書朱雀門朱之字米雀門  
 ト遊シケル小野道風難シ申罰ニテ道風ノ筆ヲ取ニ手櫛テ文字正カラス去共草書ニ妙ヲ得シ  
 カハ櫛トテ人尙是ヲ翫其後遂ニ大極殿ヨリ火出内裏悉燒亡ス神泉苑ヲ堀又内裏モ造ラレ朱  
 雀門東ニハ東寺トテ弘法和尙建立教王護國寺ト號キ西ニハ西寺トテ南都ノ守敏和尙建立有  
 金輪ノ寶祚奉祈又延喜御宇ニ北野天神眷屬火雷氣毒神清涼殿ノ坤ノ上落テ燒ケリ又造營有

シヲ高倉院御宇安元二年ニ日吉山王御答ニ依大内ノ諸寮悉燒亡ス七年弘法上洛有十五年ニ  
 東寺ヲ建立シ廿三年ニ渡唐ヨリ御年三十一上古善無畏三藏大日三部ノ秘經ヲ持來朝シ給  
 シニ密機未無シカハ和州久米ノ塔ノ心柱ノ中ニ納將來第三地并有可披云々然ヲ空海和尙彼  
 經ヲ取出テ見給フニ甚深秘密也同大唐青龍寺ノ惠果和尙東國ヨリ第三地并來可シ待給ヘル  
 處ニ渡唐有シカハ斜ナラス悅給ヒテ相看ニ和尙ノ宣ク日本ハ神國也神道也傳受シ給ト問給  
 未傳ラサル之由ヲ答和尙重テ宣ク先我國風儀極テ他州ノ教ヲハ傳學ヒ候トソサテ密宗奧旨  
 ヲ傳受畢テ飯朝シ給テ伯父ノ大夫逢テ傳受有キ弘法渡唐ノ間ハ西寺ノ守敏金輪ノ護持トシ  
 テ常參内アリ寒水ヲ加持有ハ湯ト成シ爐火ヲ加持有シカハ水ヲ洒如シ主上ノ御信敬甚シ爰  
 ニ空海飯朝ノ時守敏内供ノ奇特ヲ様々ニ語り給弘法晒テ申給ク空海候ハソニテハヨモ左  
 様ノ奇特候ハシト申シカハ去ハトテ弘法ヲ傍ニ隱シ置キ進セテ守敏ヲ召ル勅應シテ參内有  
 主上藥開召ケルカ建蓋ヲ閣給テ餘ニ熱候如例ノ加持候エト有ケレハ水印ヲ結テ加持シ給ヘ  
 ハ彌熱ク成建蓋内ニテ添アカル主上始奉リ臣下卿上ミナ胸ノ喉ケリ其時弘法宣ク空海是ニ  
 有リ譬ハ星ノ光ハ朝日ニ消螢火ハ夜月ニ隱サルトソ笑レケル守敏大ニ是耻鬱陶心中ニ插  
 ム瞋恚氣上ニ隱シテ臆退出シ君ヲ恨ミ奉心深カリケレハ國土ニ飢饉ヲヤラントテ大小神龍  
 トモヲ水瓶中ニ符入雨ヲ不降大旱魃以外也農民徒ニ孟夏三月ヲ過四海ノ民愁ル所ヲ思召テ  
 弘法ヘ此由申シ請雨ノ祈ヲ仰出サレケレハ勅ニ應テ空海先ツ定ニ入見給フニ所有龍神共守  
 敏ニ符セラレヌ天竺無熱池ノ善女龍王計候ケルヲ定ヨリ出テ此由ヲ奏聞有リ去間俄ニ神泉



苑ノ池ヲ掘リ清涼ノ水ヲ湛テ善女龍王ヲ請給フニ應テ龍王小身ヲ現一尺計ナル小蛇ト成テ此池ニ來温雲油然トシテ大雨降リ國土ヲ潤ラス之ニ依守敏西寺ニ引籠三角壇ヲ構軍茶利夜又明王ヲ向テ北ニ奉懸弘法ヲ咒咀シ給フ空海此由ヲ聞給フテ東寺ニ座給テ爐壇ヲ立大威德明王ノ法ヲソ行ル兩人何德行薰修尊肅成シカハ二尊射給ヘル鏑矢空中ニシテ行合テ落々鳴休隙モ無リケリ爰空海守敏ニ油斷ヲセサセン迎入滅ノ由ヲ披露令メタリケレハ守敏此事ヲ聞テサテハ祈請成就シヌト悅破壇ケレハ禮盤ヨリ下ルトテ血ヲ吐テ死ケリ還着於本人トハ是也トソ申合ケル善女龍王ヲハ神泉苑ニ留奉給ケリ空海自茅ト草ヲ結テ虚空ニ投給シカハ大龍ト成テ天竺ノ無熱池ニハ飛歸リヌ誠ニ以奇特不思議也其後モ守敏怨念失サリケレハ多魔軍ヲ引率シテ高野ニ上ヌ空海其難ヲ防キ一ノ山ニ押籠テ置給ヘリ其山ヨリ流ル小河ヲ多魔河ト云リ尙以怨念止サレハ常嶋ト云鳥ニ變災ヲ成ト云リ

又十五年ニ藤原伊勢ト云人十七年七月二日田村丸將軍清水寺ヲ建立有貴布禰ノ明神教ニテ鞍馬寺造奉ル也此御時又萬葉集歌撰セラル内舍人濱成承三千餘首撰加奉リ給フ也

第五十一平城天皇安殿又ハ小殿共治四年大同十四御歲五十一桓武太郎母皇太后乙牟漏日本根子天排國高彥命共申大同元年十一月八日天台ノ受戒始ル同三年慈覺登山ノ傳教ノ弟子ト成給此和尙ハ下野國小野寺ノ所生也傳教大師ヲ御弟子義真和尙ヲ座主ノ始ト云第二圓澄和尚座主タリ第三座主慈覺也 辭職ノ後東國ニ下所々ヲ建立ス中ニモ武州慈輪寺建立シテ時明星天子南方ニ下ヲ見尋行テ安房國ニ清澄寺ノ虚空藏ヲ安置シ供養シテ其後常州村松ニ至

リ給ニ未日高シトテ寺號ヲ日高寺ト號給フ又奥州會津ノ郡ニモ梁井戸ニ虚空藏ヲ建立シ羽州ニ立石寺ヲ建立シテ此所ニ入定有シラ天台山ヨリ我山ノ大師遠國ノ入定有可ラストテ取上セ奉ラントシケルカ何カ有ン御首計ヲ取上テ叡山ニ納奉ト云此也德溢大師内麻呂惠美押勝申セシ其子也法相宗南都御座春日鹿島法相擁護神御坐ヌレハトテ常州鹿島下筑波山四十八ヶ所靈場建立加之國中數十ヶ所建立多觀音藥師像也中長谷寺平城御願ト號シ大同二年丁亥造建有也又奥州會津ニモ清水寺トテ觀音ノ像ヲ立磐梯大明神ヲ鎮守トシテ御歌云

緣有レハ我又金ト磐梯ノ山ノ麓ト清水ノ寺

イハ、ントハ磐梯大明神也其寺號改テ惠日寺ト號ト云リ又同國岩崎ノ郡湯嶽ニ觀音像ヲ建立供養ノ儀式ヲ刷給フ又戒定惠ノ三箱ヲ此嶽ニ納給シニ依此嶽ヲ三箱ノ山ト云麓トノ湯ヲモ三箱ノ湯ト云習學セル也大進西明寺云所御入定有今閑ナル夜鈴ノ音スト云ヘリ

第五十二嵯峨天皇神野又賀美能治十四年弘仁十四御年五十七桓武第二子母平城同弘仁元年正月平城天皇奈良都ニ移給中納言種繼女内侍督申名藥師也君下居後何事モ心ニ叶ハス口惜事也ト申セシカハ内侍兄右兵衛督仲成ヲ大將トシテ起兵ヲ給シカハ當帝又大納言田村子宰相錦丸或綿丸ナントヲ遣テ責戰シニ平城官軍戰負仲丸モ打レ内侍モ死君御出家有ケルトソ御子高丘親王モ春宮ヲ取ラレサセ給テ弘法ノ御弟子ト成眞如親王ト申御歌云 云ナラク奈落ノ底ニ落ヌレハ刹那モ戎駄モカハラサリケリ大師嘆給テ返歌ニ云ク カクハカリ達磨ヲシレル人ナレハ多駄迦多マテモ成ノホリケリ、サテカノ親王ハ渡唐有又渡天トカヤ又



流沙ニテ失給共云リ七年大師高野山御入定ノ所ヲ定給御年四十三承和二年三月廿一日御入定六十二年六月四日傳教大師御入滅御年六十六也

第五十三淳和天皇大伴治十年天長十年御年五十六桓武第三子母皇太后旅子百川女日本根子高天讓彌遠共申二年浦島カ子歸三百四十七四年智證讚州ヨリ上給傳教弟子成給シ母弘法伯母也弘法御計成給九年弘法南都興福寺賜給此時内裏ニテ佛名アリ

第五十四仁明天皇正良治十七年承和十四嘉祥一道康二御年四十一嵯峨二ノ子母橘嘉智女日本天璽豐聰惠共申深草ノ帝承和元年慈覺大師如法經書總橫河根本板ノ洞也同年内裏御修法始弘法御勤仕二年三月廿一日御入定有御年六十二トシテ四年ニ慈覺入唐有此比小野篁ヲ唐ヘ遣可クニテ有ケルヲ所勞ノ由ヲ申テ辭ス僞トシテ書セケルニ文章違サテ嵯峨ノ帝逆鱗有六年ニ隱岐國ヘ流サレケリ道ニテ讀ル歌 和田ノ原八十島カケテ漕出ヌト人ニハ語レ海士ノ釣舟同七年沙汰有一伏三仰不來待晝暗雨降懸乍寢ト云遣シケリ 月夜ニハ來ヌ人マタルカキ曇雨タニ降ハワヒツ、モチント讀タリケレハ難有讀タリトテ御赦免アリ或ハ無惡善ト云落書讀テ流ル共嘉祥三年三月慈覺歸朝アリ

第五十五文德天皇道康八年仁壽三齊衡三天安二御年三十二仁明長子母皇太后順子五條冬嗣女田村帝共申齊衡元年三月大地震動天安二年三月二日御子惟高親王與惟仁親王御位諍アリ相撲又競馬也惟高紀那都羅女三國町惟仁ハ染殿御腹也惟高ノ御持僧ハ柿本紀僧正眞濟トテ弘法ノ御弟子也惟仁御持僧ハ天台山ノ平等坊惠亮和尚トテ慈覺大師ノ御弟子也何レモ德行

薰修和尚也十番ノ競馬ニ惟仁先四番負給タル由櫛ノ齒ヲ引カ如ク申サレケレハ惠亮心憂思自獨古ヲ以腦ヲ碎腦ヲ取芥子ニ交ヘ爐壇燒テ一揉モミケレハ土牛聲ヲ揚テ吠繪像ノ大威徳ハ劔ヲ捧テ振給シカハ惟仁連ケテ六番勝給シカハ即位シ給ケリ眞濟ハ思死ニシテ失ニケリ聽惟高ハ還御無シテ小野ト云所ニ御閑居アリ正月比雪ヲ參本マケル也業平參奉見一首送進 忘テハ夢カトソ思フ思ヒキヤ雪フミ分テ君ヲミントハ御子御返事 夢カトモ何カ思ハン世ノ中ヲ背カサリケン事ソクヤシキ此比ニヤ東大寺大佛ノ御クシ地ニ落タリト云リ

第五十六清和天皇惟仁治十八年貞觀十八御年卅一文德御子惟仁也母明子忠仁公女染殿后申水尾帝共申水尾丹波國御閑居所也祖忠仁公良房攝政始也此御宇南都大安寺僧行教上人入幡御詔宣有字佐宮ヨリ山城國男山ノ石清水宮被崇給御本地彌陀三尊也此御子六貞純親王源ノ姓ヲ賜給貞純親王御子經基六孫王ト申其子多田滿中其子河内守賴信其子伊豫守賴義義家等也此時在原業平モ東ヘ流サレ給ケリ付之種々ノ密事共アリ

第五十七陽成院貞明 治八年元慶八御年八十二清和太子母皇太后高子中納言長良女二條后也關白基經大臣也元慶四年五月廿日業平薨給

第五十八光孝天皇時康 治三年仁和四年御年五十八仁明第三子也陽成院御物狂御之間此御子ヲ即位キ給小松帝共申御子四十一人此源姓賜給モ多シ

第五十九宇多院法名金剛 治十年仁口和尚一寬平九御年六十九御口六十五光孝三子昌泰三年ニ御出家寬平法皇共又亭子院共申此時賀茂臨時祭初メ給ヘリ



第六十醍醐天皇法名寶金剛治世三十三年昌泰三延喜廿二延長八御年四十六宇多第一御子母胤子  
 内大臣高藤女又延喜帝共申此帝慈悲深ク座シテ人ヲ哀給フ冬天霜凍寒夜ニハ民何ニカ寒カ  
 ル覽トテ御衣ヲ脱セ給テ民ノ苦ニ代ン思召片野ノ行幸嵯峨大井河ナントノ行幸ニモ執法ナ  
 ル者物云カク惡カンナル物ヲトテ常ニ令笑給ケリ或時神泉苑行幸成シニ鷹居タリシヲ覧  
 アリ六位藏人文屋村里召給鷹取參レト仰セラレケレハ村里行向ケルニ鷹立ント羽粧ケルヲ  
 宣旨ント申ケレハ立ス村里懷テ參ヌ君能々獻覽有テ汝應勅神妙也驚ノ王爲可シトテ五位成  
 レケル也係ル聖王ニテ御之シカ共左大臣時平日讒奏依延喜元年二月廿五日菅原右大臣ヲ太  
 宰帥補九州へ流ケリ淺猿共云計モ無御事也緣起別有此時粟田關白大神宮へ勅使ニ立タリケ  
 ルニ御神託有給傳ト云政道ノ書ヲ御賜有ケリ其報謝ノ御爲トテ紀貫之友則躬恒忠峰等勅下  
 サレ古今集ヲ撰レケリ

第六十一朱雀院寬明治十六年承平七天慶九御年三十醍醐第十一子母穩子照宣公四女承平四  
 年雷落奈良東西金堂燒五年比叡山中堂燒七年和州長谷寺燒ケルニ本尊火中ヨリ飛出テ前ナ  
 ル大木ノ上座シ給奇特也七年平將門下總國相馬ノ郡ニ於テ謀叛ヲ起藤原秀郷鎮守府將軍ト  
 號平貞盛勅ヲ奉兩將將門ヲ對治セシメ首ヲハ秀郷取テ兩將上洛ス又天慶二年純友謀叛ヲ起  
 橘ノ遠保勅ヲ奉對治同年四月ヨリ八月ニ至テ大地震動毎日也此時賀茂行幸初有又石清水臨時  
 祭初レリ

第六十二村上天皇成明治廿一年天曆十天德四應和三康保四御年四十一醍醐第十四子天曆帝

共申母朱雀同天德四年内裏燒都移後初燒ケル也此時後撰集撰給梨壺ノ五人ト申也元輔順能  
 宣淑望時文也此帝ノ第七ノ御子具平親王ト申シ小倉山ニ閑居アリ後中書王ト申今ノ久我殿  
 ノ先祖也前中書王ト申セシハ延喜第六御子兼明親王トテ無雙ノ才人ニテ御之ケリ是小倉山  
 閑居アリ

第六十三冷泉院憲平治二年安和二御年六十二村上第二子母安子口條女殿此時西宮大臣延喜御子高明鎮

西へ流サレ給或云紫式部彼大臣婦女也  
 第六十四圓融院守平治十五年天祿三年天延三貞元三天元五永觀二村上第五子法名金剛法此  
 時八幡行幸初テ有シ也

第六十五花山院師貞治二年寬和二御年四十一冷泉第一子母一條攝政伊尹女也寬和二年六月俄ニ位ヲ下  
 給テ華山寺御十九ニテ御出家法名入覺其拾遺集惟重弁奉也後熊野那智山ニ籠給魔群多出現  
 セシカハ晴明博士ヲ召テ靜ラレケリ

第六十六一條院懷仁治廿五年永延二永祚一正曆五長德四長保五寬弘八御年卅二圓融第一子  
 母詮子大入道第二女永祚大風ハ此時也天下無雙才人等此時有也四納言濟信公任行成俊賢等  
 也又和泉式部小式部紫式部赤染ノ衛門トテ美人好色四人有晴明博士飛驒ノ工金岡ナントモ  
 此御時トソ去ハコソ帝ノ御自讚我得人ヲ事延喜天曆ニモ過タリト宣フ嵯峨ハ法ヲ得給ヘリ  
 延喜國ヲ得給ヘリ一條人ヲ得給ヘリト上古末代モ申ケリ 參河守大江定基出家セントテ清  
 水寺清範僧都ノ許ニ至髮ヲ剃寂照ト號永延年中ニ南都齋然上人渡唐ノ時嵯峨ノ釋迦ヲ渡セ



リ此佛釋尊ノ御母ニ迦毘羅國ノ善覺長者ノ御女摩耶婦人ト申セシカ太子誕生有七日ト云死給成道ノ後其爲ニ報恩經ヲ説給ントテ忉利天へ上給ヘシヲ干填大王暫モ離奉事ヲ悲毘首竭摩ニ仰赤梅檀ヲ以釋迦ノ像ヲ移シ奉朝夕御上ノ後ハ奉拜一夏九旬スキテ佛忉利天祇園精舎ニ下給シ時以持地并ヲ金銀水精等三橋渡給タリシニ梅檀佛モ橋ノ本迎參シカハ佛宣我ハ他縁盡八十ニシテ涅槃ニ入可キ也御身未代衆生ヲ可利益先立給ヘト有ケレハ打低付給テ先立給ケリ天竺利益成シニ滅度五百年ノ後佛舍密ト云惡王出佛法ヲ亡セシ時鳩摩羅什ト云シ人彼佛ヲ奉取東天竺龜茲國ト云フ國渡シテ晝ハ佛ヲ奉負夜ハ佛ニ負レ進テ鳩茲國ニ到又蒙佞遊王強ニ恭敬尊崇シ奉事甚シテ數ケ年ヲ經ケルニ大唐ノ白張佞王此事傳承リ普峽云將軍ヲ遣テ奪取奉リ恭敬供養シテ多年漢朝ニ御之ケリ爰ニ東大寺ノ齋然上人渡唐ノ時此佛ヲ拜奉リ感涙身ニアマル計也齋然漢王申此像ヲ移奉テ日本ノ王ニ拜マセ奉レト申漢王許シ給ケレハ悅テ移奉リ此時佛齋然告テ宣ク我東土ノ衆生ヲ利益ス可願有リ汝我ヲ渡ス可ク有ケレハ齋然奇異ノ思ヲ成感涙ヲ押ヘ新佛ヲ古佛ノ様奉薰梅檀佛ニ取替奉リ怪事無シテ梅檀佛ヲ渡奉或云大唐ノ白俊王又普岐ト云モ分明ナラス或張騫ト云將軍ヲ遣ト云リサテ齋然カ歸佛ノ解文ニハ干填大王ノ赤梅檀ヲ以テ移進シタル釋迦ノ像一體ト書リ

第六十七三條院居貞治五年長和五年御年四十二母兼家女冷泉院二子此時後拾遺集被撰又大風吹堂舍佛閣大木等倒ニケリ

第六十八後一條院敦成治廿年寛仁四治安三萬壽四長元九年御年廿九此帝一條院二子母上東

門院彰子御堂關白道長一女

第六十九後朱雀院敦實 治九年長曆三長久四寛徳二年卅七一一條院三子此時道長公京極御堂立給ニ依御堂ノ關白ト申也又宇治川上ニ寺ヲ立平等院ト號攝政始ニハ宇治入□□□□

第七十後冷泉院親仁 治廿三年永承七天喜五康平七治曆四御年四十四後朱雀第一子母嬉子御堂ノ乙女 永承六年安倍貞任宗任追伐ノ爲伊豫守源賴義武將ノ勅ヲ蒙罷下リ其日ヨリ家ヲ忘レ妻子ヲ忘レ命ヲ忘レ骸ヲ奥州ノ土ニ埋ン事思此故ニ戰士ノ民ヲ撫ナツケ東八ヶ國ノ兵二萬餘騎ヲ引率シテ漸ク奥州責入間合戰數度ニ及去レハ陣中栖トシ甲冑ヲ解ス馬上ヲ座トシ魚鱗鶴翼何チ陣シカ宿セサリシ去レハ春曙ニハ遠山ニ殘レル白雪ヲ霞メル花カト疑夏ハ綠樹ノ下ニ茂ル草葉ノ露ヲ分秋ハ皎月ノ前ニ草ノ枕ヲ峙身ニ入風ヲ聞明シ 鷹行亂ル、時ハ兵ノ野ニ臥事ヲ悟リ冬ハ深雪ノ中ニ迷テ道ヲ老馬ニ任管仲カ賢跡ヲ知ル只憑所ハ祖神八幡大井也鎮守府ヲ立テ羽州秋田城發向セシニ雪降風烈キニ曙征馬北風ニ嘶戰士先登ヲ爭ヒ甲冑ノ雪ヲ拂ヒ亂タレ矢列粧勢面白クモ哀也將軍間白ノ鷹居給トハウ羽風ニ吹結タル雪都ニテ御覽シ馴シ華宴ノ舞人清凉殿ノ青海波ノ袂思召出サレ賴義カクナン 都ニハ花ノ名殘ヲ留ヲキテ今日下芝ニツタウ白雪此下芝ノ事極秘説也勅撰人玉上是非スヘカラス武略ニ長シ給ノミニ非歌道サヘ得給ケルコソ不思議ナレ又義家モ永承ニ當國ニ入給シニ始テ奈古會關ヲ越給ケル時花ノ散ヲ見給ヒ櫻ヲ 吹風ヲナコソノ關ト思ヘモ道モセニチル山サクヲ哉此歌モ勅撰ニ入給ケリ角テ數ケ度ノ合戰死亡ノ輩數ヲ知ラス去テ天喜五年ノ冬貞任ハ



爲行カ河堰ノ城ニ立籠リ四千餘騎ニテ出向テ將軍ヲ圍ミ奉リ責戰ケル將軍勇士等四角八方懸散然共敵大勢成シカハ御方十方打散纔七騎也其七云將軍賴義々家腰瀧口秀方後藤内範明大生三大夫光房豊島平檢仗恒家也將軍忠切給タリケレハ懸給御武羅ヲ解テ旗ニ付テ自差給此條大ナル秘説也義家ヲ始トシテ六騎モ武羅ヲ懸攻是又故有定レル禮也則以七騎大敵ヲ靡ス義家大ナル弓太箭ニテ百發百中藝ヲ施貞任見之誠人翔非ス神ノ如シ八幡太郎ト號理也ト感シケリ光任馬ヲ切セテ歩立也將ノ宣ク兩馬ス可由ヲ仰ス光任禮致シナカラ後ヲ合テ鞞芝打ノ總ヲ踏カラミテ弓ヲ射太刀ヲ取主從ノ翔只雙身四臂ノ毘沙門天ノ如シ時ニ光房敵ヲ切テ落シ其馬取父光任ニ乘ス又義家馬ヲ切セテ歩ニ成シカハ範明敵ヲ打馬ヲ取乘セ奉此黃石公子房公カ術ヲ盡シ敵ノ圍ヲ内ヨリ外ヨリ内ヘ切テ入事數ケ度成シカハ貞任打負テ引退武將勝チ時作り軍神送り奉去程ニ御方馳集リ多勢ニ成リ又爰羽州山北ノ住人清原ノ武則ト云猛勢ノ勇士有是ヲ語ヒ給ニ其勢三千餘騎ニテ馳參對談有朝家ノ重事也忠賞申行可シ云々武則カ申ク暗夜ニ雪中敵御方亂合時必誤可有トテ將軍ニ七ノ驗奉付也七ノ印是秘説也兩軍同心ニ千福金澤厨河々堰ノ館等ヲ責落テ數千凶徒等ヲ誅戮シテ遂ニ貞任宗任衣河ノ館ニ追籠テ圍戰ト云ヘ此城輒ク落カタシ武則ヲ招テ宣ク貴殿ノ合力ニ依度々ノ軍ハ打勝ヌ當城衣河ヲ取圍云共館籠所ノ輩ハ皆以勇士也即時責落シカタシ其上一千ノ難儀有故如何ト成ハ勅ヲ蒙永承六年辛卯ヨリ今年壬寅十二年極レリ明年癸卯又巡十二年ノ始ル卯ノ年ニ向フ可間今年折角也賴義命ヲ捨可キ也運命ヲ佛神ニ任奉リ明日當城ヲ責可キ也武則暫打案シテ

系譜錯雜  
無紀之  
今改作之  
則失原本  
之體讀者  
諒焉

申ケルハ智謀武略ヲ以テ軍ニ勝事和漢其例多シ凶徒追罰ノ遲速ハ敵ノ強弱ニ依可シ今更賢慮ヲ勞ス可キニ非ス王事隘キ事ナシ朝敵滅フ可也然共戰ヲハ緩フス可ラス其證ハ君七騎ニ打殘サレ給シ時敵稠責奉ル事終ニハ武將令敵ヲ圍給可キ哉明年又慎無ニ非ス武將明日ヲ以合戰ト定ラル尤一日當千日也城又相尅方也明日責可シ云々隱密爲可シ敵聞テハ用意ス可ク云テ將軍モ武則モ夜中ヨリ打立ケリ彼城ハ前ニ衣河ヲ當水上遙ニシテ岸高流早シ城ハ三重堀ヲ堀テ水ヲ湛ヘ屏塗リ矢倉ノ高下數ヲ知ラス籠所ノ兵ハ強弓精兵也武則搦手河上狹所ヨリ向ヘシ武將ハ大手ノ河緒ニ打臨相從東八ヶ國ノ勇士一萬餘騎也將軍ノ其日行粧ハ赤地錦直垂ニ小具足如常熊ノ皮ノ行膝ノ短キ御鎧ハ黑糸太刀ハ二ツ帶頻藤弓石打ノ征矢上矢四武羅ヲ懸賜黑馬ニ乘給ヘリ義家行裝太略ハ同シ大將宣ク合戰今日限成可ク十二年ノ先途只今也清和第六

- 貞純親王
- 賴政息也
- 伊豆守
- 仲綱
- 伊豫守賴義
- 義家
- 同伊豆守
- 義成
- 義俊息也
- 六孫王
- 經基
- 源大夫判官
- 兼綱
- 一對馬守
- 義親
- 林太郎
- 義基
- 義俊息也
- 多田新發
- 土岐先祖
- 攝津守賴光
- 美濃守
- 賴國
- 三河守
- 兵庫頭
- 從三位入道
- 賴政
- 大和守賴親
- 陸奥守義家
- 八幡太郎嫡男
- 賴遠
- 法眼
- 源賢
- 河内守賴信
- 三男
- 四多田
- 美濃守義綱
- 新田大炊助
- 義重
- 同判官代
- 刑部丞義光
- 同高井次郎
- 義國
- 上總介
- 義兼
- 左馬頭
- 治部大輔
- 泰氏
- 義家四男
- 義康
- 義兼
- 義氏
- 新波
- 家氏



讚岐守 源大納言正二位 宰相中將 太政大臣兼也 内大臣大將 上總介  
 貞氏 尊氏 義詮 義滿 義持 長氏  
 貞宗 左兵衛督 左兵衛督 同 同從三位 桃井  
 石堂 直義 基氏 氏滿 滿兼 持氏 義純  
 左兵衛佐 直冬 成氏 政氏 甘棠院殿 晴氏 高氏 高基 三河守  
 下野守 義朝 惡源太 義平 義親 尊信 賴氏 家繼  
 帶刀先生 賢義 三郎先生 義憲 四郎左衛門 賴賀 九郎判官 義經 右大臣 實朝  
 為義 義家四男 下宮大進 朝長 右兵衛大將 賴朝 右大臣 實朝  
 為義 為成 六條藏人 藏人太耶 仲光  
 為朝 為宗 七郎 八郎 義仲 號木曾冠者  
 行家 為長

トテ合掌シテ軍神勸請ノ祭文ヲ誦シ軍拜過シカハ時聲三度軍神影向ノ奇瑞ヲ見給テ勇士ヲ  
 進或楯ヲ雙筏ヲ組或ハ車也ヲ並河ヲ渡シ責戰ト云ヘ凡堀ハ水深ク高檣數ヶ所ナレハ矢雨降  
 カ如シ將軍之ヲ見命ヲ可捨トテ武口ヲ解テ旗付自差給フ右ノ手ニ松明ヲ持テ馬ヲ河中ニ打  
 入遙ニ王城ノ方ヲ拜シテ祈念セラルハ飯命頂禮日本國中小靈神殊八幡大并擁護ヲ垂給テ  
 賴義カ身ニ替給ヘ佛法ノ怨ケル朝敵ヲ征伐スル賴義天ノ使也神火也全ク私ニ非トテ松明ヲ  
 投ケ入レ給シカハ忽ニ大風吹キ來テ家ヤ櫓ニ吹付シカハ城内燒キ崩シ大手搦手同時ニ責入  
 テ戰ケレハ城責落シ貞任計ハ馬落ケルヲ義家追係良キ傳モ逃君カナ暫ク扣ヘ物云ヘシトテ  
 衣ノタテハホコロヒニケリト云懸給タリケレハ馬鼻ヲ返轡ヲヤスラヘ年ヲヘテ糸ノ亂ノ苦  
 シキニト付タリケレハ義家ハケ給タル矢ヲ弛メ汝ハ違勅者ナレハ終ニハ遁ル可ラス今ノ情  
 ニ矢一ヲハ免也トソ宣ケル時ニ貞任涙ヲ流シ只今芳命コソ忝候ヘトテ帶タル太刀ヲ解義家



ニ奉其後御方大勢ニテ押係ケレハ貞任ハ打レ宗任ハ虜都ニ上リケリ義家其太刀ヲ醍醐顯實上人進貞任菩提吊ハレケルコソ有難延喜御宇歟其上奥州外濱ノ達谷窟ノ惡事ノ高丸爲責勅定ニテ利仁將軍下シ時鞍馬寺ニ納ル神通ノ弓方便ノ矢ヲ申出持下ケ利仁諏方稻荷兩神ニ深祈請ヲ係奉リ毘沙門天ヲ念シ奉達谷カ窟ニ發向セシカ共高丸岩戸ヲ開カサル間戰ニ及ハス然處海上ニ奇瑞出來黑雲陣ニ覆シカハ暫有テ晴嚴シキ狩裝束人馬上テ海上ニシテ初ニハ流鱗馬シケルカ後ニハ三々九ヲ遊ハサレケルニ餘ニ面白カリシカハ之ヲ見ン爲岩戸ヲ開シ時其間白狐窟ニ入水火ヲ出戰軍又攻入高丸ヲ誅ス彼ノ馬上ノ神ハ諏訪明神ニテ渡給シナリ白狐ハ稻荷明神奇特ト申モ疎也多門天ヨリ神通弓矢給テ高丸ヲ令對治飯洛仕テ對馬ニ奉納キ彼窟ニハ利仁カ等身ノ毘沙門安置奉リ彼利仁將軍大職冠ヨリハ九代魚名大臣ヨリハ六代ノ後胤也此時末法ニ入惠心僧都ハ泣給ケルトナン

第七十一後三條院尊仁治四年延久四御年四十後朱雀第二子母陽明門院禎子三條院三女此時八幡放生會初テ行ハル又日吉稻荷ノ行幸有

第七十二白河院貞仁治十四年延久一承保三承曆四永保三應德三御年七十七後三條院子此時治部卿通俊勅ヲ承後拾遺集撰之又俊賴朝臣奉勅金葉集ヲ撰給通俊々賴一生ノ間權ヲ爭ヒ死給キ永保二年ニ又義家將軍奥州發向アリ故ハ貞任追伐ノ時陸奥守兼鎮守府將軍ノ官職共義家朝臣宛行ラレケル然ヲ清原ノ武則カ忠功無二成シカハ鎮守府ノ號ヲハ武則ニ申與テ羽州ノ御代官トシテ指置ル去二子アリ將軍三郎武衡同四郎家衡トテ侍リシカ武則死去後朝敵ト

成テ國郡ヲ掠領ス依之義家永承例ニ任セ東國ノ大勢ヲ率シテ發向アリ廳羽州着陣有テ戰數ケ度輒對治難同義家ノ舍弟義光左兵衛督暇ヲ申馳下テ合力セシム可キ之由青鳥ヲ飛之間義光子細ヲ奏聞スル處ニ勅答云遠遠逆徒義家武略ヲ以誅伐幾有ル可ラス義光ハ朝家警衛ノ當官ニ居輒遠行ノ事叶フ可カラサル由仰下サル之間迷惑千萬然ト雖モ連枝志默止難キニ依弦袋ヲ解右近櫛ノ枝ニ結付當官ヲ辭シテ夜中ニ出京シ揚鞭馳下リ着陣シ給シカハ

系譜同上

- 義家三番舍弟
- 刊部丞 義光
- 進士判官 義業
- 佐竹冠者 昌義
- 同太郎 忠義
- 六郎酒出 義持
- 額田 義直
- 次郎 長義
- 孫次郎 親義
- 孫胤 義胤

- 彦次郎 上總介 右馬權頭 伊豫守 隆義 佐竹別當 常陸介 額田 義直 親義
- 行義 貞義 義篤 義直 左馬頭 義盛 秀義 義重 次郎 長義 孫次郎 親義
- 長倉 刑部大輔 上總介 刑部大輔 義和 行道 上總介 源氏女甚山此女性義之加入是上杉大膳次男 義俊 義治 義舜 稻木
- 手綱 大山 高久 和泉守 宗義 義真 義藤 氏義
- 尾張守 駿河守 義敦



義家悦ノ餘ニ手ニ手ヲ取與テ感涙數行其後兩將武略ヲ廻シ度々合戰打勝テ武衛家衛城追籠  
取圍テ腰瀧口季方ヲ以使トシテ宣ケルハ武功莫大也手ヲ束頸延テ參ラハ寬宥有ル可シト云  
々武衛家衛等謹テ申ケルハ兩國御代官我等カ本意ニ非ス向後ニハ恩顧ノ號停止セラル武衛  
ハ陸奥守兼鎮守府將軍家衛出羽守ニ任テ受領ヲ專ニ可シ不然固防戰シ奉ル可シ申テ後十三  
束アル矢一筋取出テ是大將ノ御調度歟中レハ人馬死セスト云事ナシト問季方云大矢十五束  
也御弓五人張也康平ノ戰ノ時大將若年ノ事成シテ故ニ武則弓ノ力ヲ試爲ニ札吉甲ヲ五領掛  
連レ射セ奉シニ多カリシ弓ノ中ニ淀橋稻澤トテ二張ノ御弓アリ淀橋ハ石打ニテ作タル十五  
束ノ中差ニテ五領ノ甲ノ表裏十重ヲ射透給フ事奉見萬人目ヲ驚侍キ世ノ知所也十三束ノ矢  
ハ今度御邊達ヲ射爲メノ季方カ矢也ト云去三献ヲ勸種々重寶ヲ出ス武衛カ申ス以前兩條御  
免無參テモ其用ナシト申ケレハ季方座席ヲ蹴立テ歸參シテ武衛カ申狀有ノ任申ケレハ更ハ  
對治ヲ加ヘトテ翌朝ヨリ四方八方ヲ圍テ人馬ヲ以堀埋責戰間遂攻落シテ武衛家衛自害ス則  
梟首ヲ取是併義光計略也トテ上洛有

第七十三堀河院善仁治廿一年寬治七嘉保二永長一承德二康和五長治二嘉承二御年廿九白河  
第二ノ子母賢子京極大臣ノ女也此時義家ノ嫡子對馬守義親隱州ニ流サレ天仁ニ誅セラレシ  
カ其首洛中ヲ飛殞事廿餘年諸人ヲ惱シケリ或云彼首飛歸本死骸歸付蘇生シテ崇徳院御宇大  
治四年又誅セラル大路ヲ渡サレケリ希代不思議義也

第七十四鳥羽院宗仁治十六年天仁二天永三永久五元永二保安四堀河院ノ一子母茨子近衛院

御時也久壽元年仙洞一人化女出來レリ後ニハ玉藻ノ御方ト號ス天下無雙ノ美人也天人ノ化  
現カ又聖象ノ影向カト疑計也去程叡慮不斜思食シケリ仍又内外典佛法世法マテモ不暗也才  
人也諸事問ニ一々ニ答誠權者也去程ニ玉體不豫ノ御事坐ス日ニ隨重セ給ケリ典藥頭ヲ召テ  
御尋有ケルニ御惱ハ御邪氣ニテ渡セ給ト申去ハ陰陽頭ヲ召トテ安部泰成ヲ召被占ケルニ  
急御祈禱有ル可シト申其故ヲハ公卿大臣等御尋有ケル禱所ナク申ケルハ是ハ下野國那須  
野有狐也彼狐云ハ仁王經昔天羅國班足王千人王ノ頸ヲ取祭シト云シ塚ノ神是也大唐ニテ褒  
似ト成周ノ幽王后トシテ終幽王ヲ亡シ已下今此國ニ來君惱候也ト具申上ケレハサテ何カ有  
ヘシト勅旨泰成太山府君奉祭御幣ノ役叶フ可ラサル由固申セシカトモ勅命ナレハ出給ケリ  
泰成祭文讀係ケレハ御幣ヲ捨狐ト成テ逃矢御惱即時ニ平愈御感有泰成名望前代未聞也其後  
三浦介上總介兩人東國名將トテ彼狐ヲ那須野へ行向テ可狩由院宣有シカハ勅命背キ難依兩  
介那須野ニ行向テ狩之天ニ翔地走事宛神變也雖然弓箭ノ運ヲ開ヘキ故ヤ彼狐ヲ狩取テ上洛  
ス是則王位也弓箭德兩介名望誠比類ナシ御感餘ニ勅定成ケルハ那須野ニテ狩シ時ノ裝束ニ  
テ翔可シトテ赤犬ヲ一疋出サレケリ勅ニ隨之ヲ射御感不斜是ヲハ一騎犬追物ト名付タリ此  
狐ノ腹内ニ金ノ壺有其中ニ佛舍利アリ是ヲハ院へ進上額ニ白玉アリ三浦介ニ給尾ノ先ニ針  
ニアリ一ハ赤シ上總介ニ給狐ヲハ宇治寶藏ニ納メラレケリ那須ノ殺生石ハ此靈也此御時佐  
藤兵衛憲清遁世西行號修行ノ廻密事有ントナシ



第七十五崇德院顯仁治十八年天治二大治五天承一長承三保延六永保一御年四十六鳥羽第一子母待賢門院障子白河院御女御時左京大夫顯輔奉勅詞花集撰

第七十六近衛院體仁治十四年康治二天養一久安六仁平三久壽二鳥羽第六子母美福門院得子久壽二年七月崩御年十七

第七十七後白河院雅仁治三年保元三御年六十六鳥羽第四子母崇德院同保元三年帝與崇德院御諍有シニ安藝守タリシ太政大臣清盛ト下野守源義朝トハ當帝ノ御方惡衛門督信賴六條ノ判官崇德白河殿へ入セ給ケリ左府爲朝ヲ召シテ軍次第ヲ御尋アリ爲朝カ體誠ニ比類ナシ弓延金八尺五寸也是ハ唐船ノ檣副木ニテ作矢十五束也爲朝ニテ藤作シ矢尻ハ楯破鳥ノ舌鏑ノ眞ハ手六寸ノ口六寸大狩侯等廿四指タル矢ノ上ニ指副タリ白唐綾威ノ大荒目ノ甲銀ヲ返黃師子ノ丸ノ金物ヲ打タルヲ着熊皮ノ尻鞘係タル六尺五寸ノ太刀ヲ帶鍬形打タル甲ヲハ離色ニ持セテ參タリ其質只魔醜首羅天又毘沙門モ是ニハ過スト見タリ院モ叡覽有御感有左府軍ノ事何ント有ケレハ天未明内裏高松殿ニ押寄テ三方ニ火ヲ係テ一方ヨリ攻入戰候ハ、何ノ子細カ候ヘシ清盛已下ハ輒討取候ナント申タリケレハ左府仰ケルハ主上々皇ノ御諍也夜討ハ然ル可カラス明日南都ノ大衆參可キ也相待ヘシト有爲朝此上ハトテ罷出高松殿ニハ信西清盛ナント申合テ分内狹トテ主上ハ腰輿召シ東三條殿へ行幸成義朝ヲ召軍次第ヲ尋給也義朝聽參給赤地錦ノ直垂ニ折烏帽子引立テ脇楯計リ金作太刀ニ切尾矢ヲ負弓脇ニ挾テ參タリ誠ニ勇キ大將也少納言入道信西御使ニテ合戰次第何カ申ト有ケレハ先スル時ハ人ヲ制スト

云ヘリ今日白河殿へ押奇テ合戰可致申ケレハ信西申ケルハ今日ハ凶會日也又大將軍在東日塞也旁何有ケレハ義朝申ケルハ敵有方ヲ日塞月塞甲事有ヘカラス尙シ憚思召レハ南ノ門へ打廻テ一二矢ヲ向北ニ射放テ其後軍ハ仕候ヘシト此儀誠ニ然ヘシト仰ケル戰場勸賞後日ヲ期ス可ラストテ義朝昇殿由シ推テ級階へ上ル信西狼藉也ト申セシカト主上御入輿ノ上ハ是非ナシ臙ヒテ白河へ押寄及合戰ニ清盛義朝ヲ始トシテ數萬騎ノ兵共我先ト勇戰院中ヨリハ爲義爲朝ヲ始トシテ出合々々攻戰フ爲朝カ弓精義朝怖ル清盛ノ嫡子ニ中務少輔重盛赤地錦ノ直垂ニ紫裙濃ノ甲ニ蝶ノ丸ノ下金物ニ鍬形打切羽ノ矢ニ白藤ノ弓黃河原毛ナル馬ニ鑄係地ノ鞍ヲ置テ乘門前ニ打寄テ是ハ桓武天皇ヨリ十代苗裔安藝守清盛カ嫡子ニ中務少輔重盛生年十九歲軍ハ是カ始也命ヲ天子ニ奉トシ名乘八郎聞モ敢エス清和天皇ノ末葉義家ニハ孫爲朝爰ニ有トテ係出タリ是ヲ始トシテ攻戰シニ新院ノ御所兵共四方へ落行ケリ爲義爲朝思切馳廻テ數千ノ敵ヲ打散シカトモ多勢門々ヨリ攻入シカハ叶ハス院モ東ヲサシテ失給左府モ前後ヲ迷落サセ給ケリ剩左府流矢ニ中給ヘリ爲朝ハ廿四指タル矢一腰十六指箭一腰九指野矢一腰射タリケルカ義朝臂ニ射係タリシ矢大庭平太力膝節射タル矢白河殿惣門ニ射留タル矢三筋計ソ空矢ナルヲサテハ多人ヲ射殺ケル也院車ヨリ下サセ給テ步行ニ成セ給淺猿申ル疎也遽輿ヲ尋出乘奉リ何方へ可仕候ト申ケレハ仁和寺へト有ケレハ入進ケリ臙内裏ヨリ佐渡式部大輔重成ヲ以守護奉ル院ノ方ノ兵共爲義ヲ始トシテ爰彼落行ケリ爲義ハ親子ナレハ申ヤ助ナント思ルニヤ義朝方出サレケルヲ勅命ニ依誅セラレケリ爲朝召取天子ニ曰將進セ



シ罪トテ肩拔レタリケルヲ尙矢東ハ十七東ニ成ケルトヤ伊豆大島ニ流サレケリ同保元三年七月七日讃岐國へ流サレ給テ鼓岳ト云所ニ御座アリ院ハ今生ノ望ヲ捨テ、後生菩提ノ爲五部大乘經ヲ御自筆ニ書セ給ヒテ仁和寺ノ宮へ進八幡宮へ奉納ハヤト思テ、濱千鳥跡ハ都ニ通ヘトモ身ハ松山ニ音ヲノミノナク宮此由ヲ法成寺殿へ申サレケレトモ信西流人ノ御經都近被納ン事何ト申ケレハ納ラレス院聞食サレ口惜事哉我此經ノ功力ニ依大魔王ト成テ怨ヲ報セント思シケリ長寛二年八月廿日御年四十六ニシテ志度ト云山寺ニテ崩御成シヲ白峰ト云所ニ納奉リキ圓位上人西行 修行ノ時參テ御廟ヲ見奉ルニ草滋苔埋ケルヲ見テ 吉哉君昔ノ玉ノ床トテモカ、ラン後ハナニ、カハセント二三日ハ此所ニ侍テ御菩提ヲ吊奉ケリ此國ニ御之故ニ讃岐院トモ後白河院ハ保元三年ニ位下サセ給嘉應元年六月御出家法名行眞ト申ケル千載集俊成卿奉之

第七十八二條院守仁治七年平治一永曆一應保二長寛二永萬一御年廿三後白河太郎御母懿子平治元年大貳清盛熊野參詣有ケリ其間右兵衛督信賴語ラレ下野守義朝同心シテ清盛ヲ滅シテ天下我任管領セントス依之大軍ヲ起ス清盛下向仍源平ノ鬪トナル義朝ハ嫡子惡源太義平已下子共一家悉同心ス清盛モ一家外是モ數千騎ニテ都ニ於合戰ニ及義朝打負シカハ義平謀テ虜ト成リヌ清盛重盛カ一人ニモ近付ハ取押テ首ヲチキツテ捨ンスル物ヲト心中ニ插ミケルヲヤ見タリケン刑人ヲ不近トテ妹尾ノ兼康申付誅セラレケリ義朝義長モ都ヲ落テ美濃國青墓ノ宿ノ長者ノ許ニ御座アツテ御自害有三男頼朝ハ虜テ己誅セラル可キ也シヲ池ノ大

納言母公申請テ伊豆國北條蛭カ小島へ流サレケリ其後清盛天下ヲ司テ一家ノ繁昌耳目ヲ驚セリ此時先帝近衛院后皇太后宮ト申御之ケリ大宮右大臣公能公ノ御女也天下無雙ノ美人ノ聞へ御之ケレハ主上入内可有キ由仰下サレケリ諸卿申サレケルハ唐ノ則天后太宗崩シテ後繼子高宗ト扶政ヲ給シヲ二聖ノ御宇トハ申セシ也吾朝ニハ神武天皇ヨリ人王七十餘代未其例無カラスト申サレシカトモ已入内ノ時日ヲ定ラル上ハ力無皇后ハ心憂事也トテ泣沈セ給ヒケリ公能被申加様ノ事ハ此世一ノ事ニ非ス天照太神ノ御計ニテモヤ候ラン若又王子御生モ候ハ、愚老帝祖云レ家門榮花開候ハンスル爲ニテ候ラント誘申サセ給ケル御手間捜ニカウソ 憂フシニ沈モハテス河竹ノ世ニ爲師ナキ名ヲヤナカサン世ニ何カ漏ケン人口吟シケリサテ入内有シカハ御覺誠類モ無リケリ難恩ヲ承麗景殿ニ渡セ給或時清涼殿ノ畫圖ノ御障子書月ヲ處有リ先帝ノ御時御覽シ馴サセ給シ事思食出サレテ 思キヤ憂身ナカラニ廻キテ同シ雲井ノ月ヲミントハ誠ニ哀ナル様ニシテ申合ナル此時藤原清輔勅奉リ續詞花集ヲ撰ケリ永萬元年六月廿八日崩御香隆寺ノ良連臺野ニ於御葬送其夜興福寺ト延曆寺ノ僧徒等額立論有テ狼藉ニ及フ

第七十九六條院順仁治三年仁安三御年十二三條院子母中宮育子  
第八十高倉院憲仁治十二年嘉應二承安四安元二治承四御年廿四後白河第五子母建春門院滋子平時信女 治承三年六月一日太政入道淨海今ノ平安城ヲ攝州兵庫ノ浦ニ移テ福原京ト號桓武天皇平安城ヲ立ラレ我王法有ン限ハ他所移サストノ誓約有テ帝王三十二代星曆已四百



餘歲也都平安城、我又平家也然、我妄念ノ餘冥ノ知見ヲモ願ミス人民ノ費煩ヲモ哀ス移シタ  
 リシカハ諸人ノ歎譬ン方ナシ此比何ナル者ヤ仕ケン、發出ル花ノ都ヲ振捨テ風福原ノ末  
 ハタノマシ然、山門兩三度欸狀ヲ捧申セシカハ同十一月一日ニ都ニ還幸成諸卿、一院第二  
 御子以仁王ト申ハ御母加賀ノ大納言秀成卿御女ニテ三條高倉ニ御之ケレハ高倉ノ宮トハ申  
 ケル治承四年四月九日夜源三位入道子息伊豆守仲綱相具テ宮御參君天照太神四十八代御苗  
 裔法皇第二御子渡御之太子ニモ立帝位ニモ付セ給可ニ親王ノ宣旨ヲタニモ御セスシテ己卅  
 ニ成セ給ヲハ心憂思召レス哉淨海惡行前代未聞也急テ思召立可クト勸申ケル依之宮モ思召  
 立聽令旨ヲ遊サル仲綱ニ給リ頼政ニモ給ケリ此事平家へ聞ケレハ三位入道許ヨリ今夜ニ紛  
 テ三井寺へ入御候ヘシト告申タリケレハ三井寺へソ入セ給ケル入道ニモ仲綱モ聽參ケリ衆  
 徒同心申テ山門南都へ牒狀ヲ送宮ヲ守護シ奉ケリ同廿二日ノ夜平家夜討ニセント企ケルヲ  
 一如坊カ長僉議ニ夜明大衆渡部黨一人當千ノ勇士二千餘騎也爰ハ分内狹シトテ南都移給去  
 程ニ平家軍兵ヲ指遣大將軍ニハ左兵衛督知盛藏人頭重衡已上三千餘騎聞タリケリ宮平等院  
 御之宇治橋中三間引セテ待係タリ大勢押寄河ヲ隔テ戰橋桁ヲ渡テ戰モアリ爰ニ上野國住人  
 足利又太郎忠綱トテ十七歳ニ成ケルカ馬ヲ河ニ打入渡ケレハ三百餘騎打入テ渡是ヲ始トシ  
 テ大勢渡責戰寺法師ニモ名譽人々有渡邊黨攻戰打死シケレハ三位入道モ是マテトヤ思ケン  
 心閑ニ自害シテ籙ヨリ小硯取出シテ釣殿ノ柱ニ斯ソ書付ケル、埋木ノ花サク事モ無リシ  
 ニ身ノ成絶ソ悲シカリケルト年來斷シ道ナレハ誠艶ソ覺シ伊豆守仲綱大夫判官兼綱同自害

宮南都へトテ落サセ給シカ流矢ニ中ラセ給ヌ御落馬有テ云ニ甲斐無消入セ給南都ノ大衆モ  
 今四五町ニテ參モ付ス淺猿カヲシ事共也宮ノ御首ヲハ飛驒判官景高給ケリ依之園城寺ノ圓  
 惠法親王天王寺ノ別當ヲモ止ラレ檢非違使ヲ付被迺惡僧等召禁藏人頭行向テ大覺院ヨリ始  
 テ火ヲ放ケリ難足坊常壽院眞如院桂苑院尊星王院普賢堂青龍院大寶院阿彌陀院堂唐院同寶  
 藏鐘樓七宇二階ノ大門八間四面ノ大講堂三重ノ塔四足門四面ノ廻廊五輪院ノ十二間大坊三  
 院名別汀堂教待和尚本坊神社ニハ新羅大明神社新熊野ノ御社護法善神ノ社山王ノ御社僧坊  
 六百餘宇顯密兩宗章疏唐本ノ一切經五千餘卷也此寺ハ天智天皇ノ御願智證大師再興也本尊  
 ト申ハ生身ノ彌勒教待和尚百六十餘年行ハレケリ都史多天ヨリ摩尼寶殿ニ天降在テ遙ニ龍  
 花ノ曉ヲコソ待給ニ燒亡シヌコソ淺猿ケレ智證大師圓珍天台山第四ノ座主ニテ御座ケルカ  
 叡山ノ爲體見山東西分タリ將來慈覺門跡ト我門徒爭有ヘシトテ修禪五百坊ヲ引テ三井寺ニ  
 移シ此寺ヲ建立有圓珍渡唐歸朝ノ時海上ニ於難風ニ逢シニ金色ノ不動王ト新羅大明神舟ノ  
 口崎ニ來現シ給テ恙無ク歸朝シ新羅大明神ヲ鎮守トシ眞言ノ三摩耶壇ヲ立給三井寺ハ天台  
 ノ末寺也菩提大守ノ戒壇我山ニ有眞言三摩耶戒壇心得ストテ山門ヨリ押寄セテ三井寺ヲ燒  
 白河院ノ御時ノ江帥匡房卿兄三井ノ賴豪僧都トテ貴キ上人御座ケリ仍王ト誕生有ケリ勸賞  
 望ミ隨フ可シト有ケレハ眞言ノ戒壇ノ事ヲ奏聞申ス聽勅許有シカハ戒壇ヲ立ント欲山門カ  
 可不齋雷同依之院モ思召煩給テ勅許ヲ召返サル賴豪君ヲ恨ミ奉リ壇場ニ引籠テ行居タル由  
 聞シカハ匡房ヲ召テ遣サレ様々宥仰ラレシカレ叶ハス祈出申セシ王子モ御隱有賴豪モ壇場



ニ於テ死シテ懸鐵百萬牙ノ有鼠ト成山門ニ至九院充滿ノ經論聖教ヲ食破シカハ治術モ及  
 ハス一社ノ神ト崇祈請セシカハ靜リヌ鼠ノ禿倉是也其後又建保二年四月五日山門ヨリ寄テ  
 燒<sup>ハ</sup>シ時撞鐘ヲ山門ヘ取上セ撞ケレ<sup>レ</sup>ト鳴ス惡シトテ大木ニテ撞ケレハ三井寺ヘユカフトソ  
 鳴ケル程ニサラハ打破トテ八部山ヨリ深谷ヘ投込ヌ其時鐘破タリケリ程經テ三井寺ヘ取寄  
 テ鐘樓ニ置タルニ湖ヨリ白蛇揚ケ卷尾ニテ叩ケレハ本ノ如成リケリ抑此鐘ト申ハ武藏守秀  
 郷若冠ノ時江州田原ノ莊ハ遺領成ケレハ田原藤太ト云ケリ或時江州下ケルニ勢田橋渡シニ  
 大蛇橋ノ上ニ横臥ケリ秀郷怖氣モナク背ヲ踏テ通ケリ橋通過テ四五町行タリケルニ跡ヨリ  
 清氣ナル若冠追來テ物申サント云秀郷立留ケルヲ誘テ又橋ノ方ヘ列テ行平沙渺々トノ十餘  
 町行ク爰一ノ樓門有テ宮殿樓閣魏々タリ虹梁ノ雲ニ聳<sup>ル</sup>ハ日ニ映シ金ヲ鏤メ銀ヲ鐫カ  
 ニスはナメリ龍宮城カト覺テ玉沙ヲ敷ル庭ヲ步テ堂上至ヌ有ツル若俗衣冠ヲ刷主位坐シ秀  
 郷客位ニ賞シ引粧テ三獻勸其後主俗云多年<sup>ニ</sup>地ヲ爭フ大敵有定テ今夜來ヘシ矢一ツ遊ノ  
 給ランヤト云秀郷尤ト領掌ス扱尅限ヲ待ニ夜半過時分程比ニ良獄ヨリ數千ノ松明一行ニ燈  
 シテ下リタル秀郷急ト見テ思ク迦奴ハ蜈コサンメリサランニ於テハ案ノ中也縱天ノ帝尺第  
 六天魔王<sup>摩</sup><sup>禪天</sup><sup>御座也</sup>鹽首羅也共矢一射ニスル事何ノ子細カ有ヘシ畜類變化ノ類ハ物カハトテ  
 待居タルニ早矢比ニモ成ヌ見ハ髮ハ夜叉ノ如ク眼ハ日月ノ耀クニ似リ口廣ク裂ケ紅ノ舌ハ  
 炎ヲ吐カ如シ其時ニ秀郷五人張ニ十四束三ツ伏ノ矢ヲ打チ番イテ引萎テ眉間ノ只中ヲ兵  
 ト射其矢磐石ニ中ル<sup>カ</sup>如シテ勿返秀郷心地惡ク思テ二ノ矢ヲ番テ先ヨリモ尙引萎テ本ノ矢坪

ヲ兵ト射此矢モ如前勿返ス今ハ矢一計持リ何カセント思テ氏神ヲ祈念奉リ彼矢尻ニ玉沫ヲ  
 吐カケテ引萎テ兵ト射此矢眉間ノ只中ニ中リ腦ヲ射碎羽責テ立ト見ケレハ數千ノ松明モ一  
 同ニ颯ト消其質モ見ヘス失ニケリ主俗悅事限ナク多年ノ本望ヲ遂<sup>テ</sup>種々重寶共ヲ秀郷ニ  
 獻ス甲一縮卷絹一疋切裁共又本如ナル米一俵取共不盡ト云童令<sup>ホマ</sup>鐘トヲ與テ其上ニ申  
 ケルハ五代將軍ノ號有ヘシト云ヘリ去ハニヤ朱雀院御宇承平年中ニ平ノ將門追討時鎮守府  
 將軍ニ任ス平ノ貞盛ト兩將トシテ對治セシメ將門カ首ヲ取テ上洛ス弓箭ノ名譽ヲ天下ニ施  
 セリ其子千常文修兼光等將軍ノ號有此秀郷ト申ハ大職冠ノ御子淡海公<sup>不比</sup>御子房前御子魚  
 名大臣其子伊勢守藤成其子下野權大掾豐澤其子下野權少掾村雄カ子也鎌足ニハ八代ノ孫也  
 貴種ノ尊胤武略拔群天下無雙也撞鐘ハ梵砌ノ物ナレハトテ三井寺ニ寄進ス朝暮ニ萬人眠覺  
 テ佛道ヲ願ハセント也同十二月廿六日南都ヲ責ヘシトテ藏人頭重衡卿ヲ大將トシテ數萬騎  
 ノ官兵指シ遣大衆聞之奈良槃若地ヲ堀リ塞キ甲冑ヲ帶待係タリ同廿八日官兵押寄テ作時  
 聲大衆モ防戰スト雖大勢其所々ヲ打破テ責入火ヲ懸タレハ折シモ風劇シク吹テ燄十方ニ覆  
 ケレハ大衆モ不叶シテ落失ヌ去程ニ法華寺東大寺興福寺願弘寺始トシテ佛法最初ノ靈像ノ  
 御之東金堂自然涌出ノ觀音ノ御之西金堂大職冠ノ建立給シ南圓堂七重ノ塔二階ノ樓門三面  
 ノ僧坊四面ノ廻廊一宇モ殘ラス瑜伽唯識法門聖教之煙ト成テ蒼天ニ登大佛殿ノ上山階寺ノ  
 内若ヤ助ルト隱居タリケル兒共童部修學者比丘比丘尼ナントハ火燃來ニ隨叫喚聲空ニ聞雲  
 ニ響ケリ一人モ何カハ可遁皆燒死ニケリ常住不滅舜光生身ト思召準ヘテ聖武天皇ノ鑄奉リ



給シ十六丈ノ金銅ノ盧遮那佛御首燒落テ土ニ有御身ハ涌上テ塚ノ如シ凡燒所堂社東大寺ニハ金堂講堂四面ノ廻廊三面僧坊戒壇院尊勝院安樂院眞言院藥師堂東南院神社ニ八幡宮氣井社興福寺ニハ講堂金堂南圓堂東圓堂北圓堂四面ノ廻廊三面ノ僧坊觀自在院東相院觀禪院五大院小戒壇唐院相院傳法院眞言院圓城院皇嘉門院御堂惣言主社一護持主社龍藏社住吉社鐘樓經藏十字率川ノ社佐法殿皆悉燒ケリ

桓武天皇 一品式部卿 萬原親王 高明無官無位 從五位上總守 高望 常陸大掾 國香 從四位下陸奥守 眞盛 鎮守府將軍

相馬小次郎 將門 號平親王 上野介 維衡

正五位下 正五位下出羽守 從四位下讚岐守 將盛

將度越前守 將衡 內大臣 重盛 三位中將 資盛

正四位下 太政大臣 清盛 內大臣 宗盛 三位中將 知盛 藏人頭 重衡

忠盛刑部卿 清盛 內大臣 宗盛 三位中將 知盛 藏人頭 重衡

天竺大唐モ佛法破滅スト云異朝事ナレハ聞及計也是ハ眼前ノ事ナレハ萬人不悲云事ナシ太

政入道計リ三井寺ト南都ヲ亡シテ心地直シテ御ケル哀此小松内大臣重盛メニ御之ハ是程ノ事ハ餘モ候ハシト人々申合ケリ新大納言成親カ謀叛ノ時モ淨海ハ君ヲ恨奉ル可シ兵ヲ集シヲモ入道殿ヲ教訓申テ成親成親康賴俊寛等ヲ流セシカ共天下穩成事只内府在計也抑此小松大臣治承二年ニ熊野參詣有本宮證誠殿通夜祈念申サレケルハ入道ノ惡行ヲ見ルニ子孫繁昌スヘカラス仰願ハ入道ノ惡行止サセ給ヘ若罪業ニ引レテ不止重盛カ命ヲ召サレ後生ヲ助ケ給ヘト多念モ無ク申サレケルコソ哀ナレ曉少眠給タルニ頂ヨリ燒爐ノ様ナル物燃ヘ上ルト人々見タリケリ三山巡禮有テ下向シテ幾程モ無頂惡瘡出ヌ深ク權現ノ納受思ハレケレハ療治モ無シ入道此事ヲ聞テ盛次ヲ以テ大事ノ所勞ノ由承早々祈療用可シ就中大國ノ醫師筑紫ノ今津ニ着急キ召テ療治有可シト仰ラレケリ盛次ヲ御前ニ召テ所勞ノ事長テ候ヌ祈療ハ其旨ヲ存可ク候也但保元平治ノ兩度ノ合戰ニ爲君ノ身命ヲ忘レ戰候シニモ終疵ヲ被ラス若一期ノ運命今年ニ極リ候ハ、耆婆モ入可ラス候歟トテ返サレケリ博方ヨリ妙典ト云船頭ヲ召シテ一千三百兩ノ金ヲ預ラレ宣ク千兩唐帝ニ奉リ二百兩ヲハ醫王山僧徒ニ省(本マ)進ヘシ百兩ハ汝ニ給也薨逝アリ萬人哀慟ス妙典渡唐シテ國王ニ奏聞不日ニ五百町田代ヲ醫王山ニ寄進セラル大日本武州大守平ノ朝臣重盛神座ト立位牌于今絶スト承ル凡院ノ御計ニハ物騒キ事ノミ多カクケリ西光法師ノ讒言ヲ以治承ニハ明雲僧正公請止ラル如意輪ノ御本尊ヲ召返シ天台座主ヲ被改大納言ノ大夫藤井ノ松枝ト俗名ヲ付ラレ流サレケリ此僧正ハ村上天皇第七御子中務ノ卿宮具平親王ノ五代ノ孫權大納言顯通卿次男也追立檢非違使白河御坊參賣



申シカハ其夜ハ粟田口ノ一切經ノ別所ヘソ入セ給ケル翌日粟津國分寺堂ニソ御シケル三千衆徒此由ヲ聞テ西光父子カ名字ヲ書テ根本中堂御之十二神將長給給ヘル金毗羅大將ノ御足ノ下ニ踏奉リ七千夜又時日ヲ廻サス彼等父子ヲ罰給ヘト呪咀シケリ廳大講堂ノ庭ニ會合シテ僉議シケルハ傳教慈覺御事申ニ及ハス義真和尚ヨリ以來五十五代未々天台座主流罪例ヲ聞ス未代也ト雖爭我山疵ヲハ付可シ心憂トテ喚叫又十禪師御前ニテモ神力ヲ合給ヘ粟津ニ罷向テ貫首ヲ留奉ント祈請ス爰ニ物付一人出來五體ヨリ汗ヲ流シ我十禪師乘居給ヘリ急奪返奉ル可シト狂ケリ去レハ瑞相ヲ見セ給ヘト若干ノ大衆皆珠數ヲ投與物付ヲ取本ノ主々ニ返シケリ三千ノ衆徒志賀唐崎濱路ニ駒ニ鞭打人モ有リ山田矢走ノ湖上ニ船ニ棹差大衆モ有廳國分寺ニ押寄タリ追立ノ官人領送使モ何路ニカ行ケン逃去リ又僧正大衆ニ向テ宣ケルハ我三台槐門ノ家ヲ出四明幽溪窓ニ入ヨリ以來廣ク圓宗教法ヲ學只我山興隆ヲノミ思國家ヲ祈奉ル事モ不疎衆徒ヲ育志モ深ク身ニ誤事無ク兩所三聖モ山王七社モ定テ照覽シ給ラシ無實ニ依遠流ノ重科ヲ蒙先世ノ宿業ニテコソ侍ルヲメ神ヲモ佛ヲモ人ヲモ恨ル心ナシ勅勘ノ者ハ日月光タニモ當ラスト申早々大衆御飯候トテ香染ノ衣袖捶計也海淨坊ノ阿闍梨祐慶ト云惡僧有長七尺計ナルカ黑革威冑着三枚甲ノ緒ヲシメ大衆ノ中ヲ押分々々行座主ヲ畑ト奉毗陵程ノ不覺人ニテ斯ノ目ニモ合給ヘ急興ニ乘給ヘト申ケレハ怖ノ餘ニ蚊々乘給ヘハ下主法師ニモ不昇祐慶先陣仕テ東塔南谷妙光坊ヘソ奉入ケル治承四年九月二日東國ヨリ早馬新都ニ上右兵衛佐賴朝一院々宣ト高倉宮ノ合旨有トテ謀叛ヲ企舅北條四郎時政先トシテ

八月十七日夜和泉判官兼隆カ山木ノ館ニ押寄テ兼隆ヲ討伊豆駿河兩國軍與力同廿日相摸國ヘ馳越テ土肥土屋岡崎ヲ引具三百餘騎石橋山ト云所ニ楯籠同國ノ住人大庭ノ三郎景親武藏相摸兵三千餘騎ニテ同廿三日馳向合戦ス兵衛佐軍兵共散々ニ打成サレテ僅ニ五六騎也賴朝ハ引退テ山ニ籠同廿四日畠山莊司次郎重忠五百餘騎ニテ御方ヲ仕相摸ノ國ヘ馳越テ三浦助義村子共源氏方成ケレハ重忠ヲ招由井子坪ト云所ニテ合戦重忠打負テ引退ト申ケル爰ニ太政入道大ニ怒言ケルハ義朝ハ信賴ニ語ラレ朝敵ト成其子成シヲ賴朝ヲハ入道死罪申助流罪シケル芳恩ヲ忘レ佛神忽ニ罰給可キ也朝敵ト成者共昔ヨリ今ニ至マテ一人モ素懷ヲ遂タル者ナシ又兵衛佐ハ石橋ノ軍ニ負山ニ込タリケルヲ景親尋求ケル間暫シハ山ニ籠同廿九日ノ曉伊豆ノ土肥ヨリ船ニ乘時政北條義時子息實平遠平義實義清等也便風吉安房國モ近成ヌ三浦人々仰天シテ居ケルカ髣ニ船ヲ見此浦ヲ差テ來コソ惟(怪歎)シケレト見ハ船ハ安房國北郡ニ着三浦人々見タテマツリ佐殿ハ御目害ト承ツルニ臆ヤトテ賴朝ハ石橋由井衣笠合戦事語相互涙ヲ流シケリ千葉助豊島太郎最前ニ參ヌ佐殿其夜ハ洲崎明神ニ參御神樂有ケル御神若子ニ付給テ御歌アリ

源ハ清キ流レソ岩清水只セキアケヨ雲ノ上マテト有ケレハ佐殿憑敷思食レケルニ東國人々御方ニ參上總助常廣一萬餘騎ニテ參同廿二日權亮少將維盛朝臣大將軍トシテ東國ニ下向小松ノ少將ヲ始ト三河守知度薩摩守忠度副將軍トシテ上下ノ追罰使都ヲ立東國ヘソ下ケル此勢駿河ノ國富士川ノ西ノ岸ニ付東國ノ武者ハ皆



兵衛佐ニ被語何カハト危ム程ニ其夜富士ノ大沼ニ羣カリ居タル水鳥共立騒ケリ鳩多カリケ  
 リ羽音誠ニ震カリケルニ案内者敵大勢寄來リトテ取物モ取敢ヘス散々ニ逃上リケリカ、リ  
 ケル所ニ九郎義經此時奥州ヨリ上リ給佐殿對面有テ悅給事斜ナラス義朝ノ再來トソ思召レ  
 ケルニ爰東國ヘ下シ維盛已下ノ人々都ニ上リシカハ淨海大ニ怒テ少將ヲハ鬼海カ島ヘ流ト  
 ソ怒ラル、也又信濃國安東(蘇歟)ノ郡木曾ト云所爲義孫帶刀先生義賢次男木曾冠者義仲ト  
 云者千餘騎ニテ打出今井四郎兼平ヲ以佐殿方ヘ申サレケルハ東國ヨリ兵ヲ差上セラルト承  
 レハ北國ヨリモ責上リ一日モ疾平家ヲ亡シ度ク存候ト申ケレハ佐殿ノ返事ハ頼朝可敵由承  
 ハ加様ニ仰ラルモ思モ寄可ラス上野板橋(鼻歟)ノ宿マテ討手差遣ケリ木曾意趣無キ由ヲ申  
 サシカ爲ニ清水冠者トテ十一歳ニ成ケルヲ佐殿ヘ進ラル此上トテ同心ニ平家ヲ責ントス

神明鏡上終

神明鏡下

第八十一代安徳言仁 治三年養和一壽永二御年八歳高倉院御子母建禮門院壽永元年四月十七  
 日義仲頼朝ヲ追討ノ爲大將軍ニハ權ノ亮三位維盛卿越前ノ三位通盛ト已下十萬餘騎北國向  
 レケリ近江路ヲ下越前ヲ靡シ砥並山ヲ越越中國ニ入ラントスル所ニ木曾カ乳母子今井四郎  
 兼平六千餘騎ニテ待受テ合戰越中前司盛俊戰負テ討ル、者三千餘人也又木曾手ニテ俱利伽  
 羅カ谷ヘ落テ平家七萬餘騎ノ兵被討大旨ハ谷エ落失ニケリ武州住人長井齋藤別當實盛モ手  
 塚太郎光盛ト與テ討レケリ木曾度々ノ軍打勝テ七月上旬押テ上ル廿一日木曾天臺山ニ打上  
 ト聞ヘケレハ方々ヘ打手ヲ差向ラルト云共源氏方々ヨリ攻入ト聞ケレハ法皇ヘ御幸ノ由申  
 ケレ共御坐モ無リケレハ行幸ヲ成進ル可トテ神璽寶劔内侍所印鑑時ノ簡玄上鈴鹿ヲ取具シ  
 進テ福原マテ行幸成法皇鞍馬ヘ御幸夫ヨリ横川登山有テ義仲ハ大津ヲ廻テ入京十郎藏人行  
 家ハ宇治木幡ヨリ入京廿七日法皇ハ天臺山ヨリ還御錦織冠者義弘白幡ヲ差先陣ニ候ヌ廿八  
 日義仲行義(家歟)ヲ召シ平家黨類追伐ノ由ヲ被仰含主上ハ外家ニ引カレ花洛ヲ御出成テ西  
 國ニ赴給ヒ福原ノ舊跡ニ一夜ヲ明主上ヲ始マ進マツリテ人々御船ニ召レ漸ク筑紫ニ着ケリ  
 九州ニモ帝都ヲ立御坐ト思召ケルニ緒方三郎惟義心替リセシカハ九州モ一同シケレハ中國  
 ニ至リヌ又四國讃岐ノ八島ニ移シ元暦元年正月十日木曾左馬頭義仲院ノ御所ニ參平家追伐  
 ノ爲西國ヘ下向ス可ク由申入ケリ同廿六日東國ノ軍兵兩方ヨリ打入大手勢田大將軍ハ蒲冠  
 者範頼三萬五千餘騎搦手宇治大將軍ハ九郎冠者義經二萬五千餘騎ニテ宇治川ヲ渡シ都ヘ打



入義仲百餘騎ニテ六條河原ニ出向一合戦ス夫ヨリ三條河原マテ七八度返合々々散々ニ戦テ河原ヲ馳越落ラレケリ義經ハ郎等ヲ以追セ我身ハ院御所ニ參内シ頼朝舍弟九郎冠者義經參上ノ由申サレケリ法皇始メ進リ諸人安堵ノ思ヲ成シケリ義經大床ノ前ニ跪赤地ノ錦ノ直垂ニ白キ唐綾ニテ威タル裾纏目ノ甲ニ金作ノ太刀ヲ帶切尾ノ矢ヲ負塗籠籐ノ弓ヲ持ツ法皇御覽有歡感斜ナラス去ル程ニ木曾ハ今井ト一所ニナラント思テ勢田ヘソ落行ケル打出ノ濱ニテ今井ニハ行合ヌ義仲宣ケルハ都テコソ命ヲ捨可シト思ツレト汝ト同所テト存テ是マテ來ヌト云所ニ甲斐一條武田小笠原カ勢追係タリ木曾吉敵ト思ハレケレハ懸出名乗ケルハ左馬頭兼伊豫守朝日ノ將軍源義仲ト云ヒ七千餘騎カ真中ニ係入散々ニ戦打破テ粟津ノ松原ヘ打入テ自害シ給ヒケリ去程ニ平家讚岐八島ヲ出テ攝州ニ押渡福原舊都ノ一ノ谷ニ歸リ東ハ生田森ヲ木戸口トシテ其内ニ福原須磨板屋駒林ニ楯籠ル其勢十萬餘騎トソ聞ヘシ元曆二月四日ニ福原ヲ落ントシケルカ太政ノ入道相國ノ佛事ト聞爭テカ妨可トテ留リヌ五日四塞六日ハ惡日也七日ノ卯時ニ東西ノ木戸口ノ矢合ト定ラル大手ハ蒲冠者範頼副將軍ニ武田太郎信義ヲ始トシテ五萬餘騎攝州兒屋野ニ陣ヲ取搦手ノ大將軍ハ九郎御曹司義經副將軍ニハ安田ノ三郎義真一萬餘騎丹波路ヲ係テ二日路ヲ一日ニ打丹波與播磨ノ境ナル三草山ノ東ノ山口ニ戌ノ時ニ馳付ケル平家之ヲ聞小松ノ新三位ノ中將資盛ヲ大將トシテ七千餘騎ニテ三草山ノ口ニ陣ヲ取軍ハ明日トテ甲ヲ脱籠ヲ解テ枕トシテ寄伏タリ義經丑刻計ニ押寄テ時作タルニ弓矢ヲ取リ捨テ散々ニ落ニケリ八日ノ夜氷尾山ト云所ニ打入氷尾取リ越ト云所ヨリ

寄トシ給ケリ西ノ大手ヨリ熊谷父子平山ノ武者先懸ヲシテ合戦ス東ノ大手ヨリ梶原平三景時父子先係シテ打破ル義經ハ氷尾取越ヨリ一萬餘騎ニテ押寄ル平家見之取ル物モ取敢ヘス我前ニ々々々海ヘ入ケリ能登守數度ノ高名シタリシカ今度ハ須磨ノ關屋ヘ落テ小船ニ乗淡路ヘ渡リケリ一谷ノ在家ニ火ヲ係タリ西風劇シク吹黑煙ヲ吹係タリ新中納言西方ヲ見給ヘハ黑煙押係タリスハヤ西ハ破ヌト云程コソ有レ我先ニト落逃ケリ船共多カリケレハ思々ニ取乗テ落モ多シ又被討者モ其數ヲ知ラス本三位ノ中將重衡ヲハ梶原虜奉薩摩守忠度ハ岡部六彌太忠澄ニ打レ給フ無官ノ大夫敦盛ハ熊谷ニ討ル、也サテ一ノ谷ヲ落テ又讚岐八島ヘソ移ケル宗トノ人々十餘人其外ニ討ル、者數ヲ知ラス本三位中將ヲハ梶原奉具鎌倉ヘ下給頼朝對面有テ狩野介ニ被預其後南都ヨリ東大寺燒失ノ逆臣ノ由ヲ申請シカハ渡サレシヲ木津川緒ニテ誅奉ル元曆二年乙巳正月廿九日義經又西國ヘ發向ス二月三日淀ヲ立テ渡邊ニ向其日惡風ニ船ヲ出シ阿波國勝浦ニ付ヌ懸八島ヘ寄ケレハ群高松ノ在家ニ火ヲ係見之主上ヲ始奉リ大臣以下惣門ノ前ヨリ御船召サレテ逢沖ヘソ出サセ給ケル一院ノ御使ニ義經參リタリトテ馳廻リ火ヲ係タリ平家ノ船共長門國壇浦ニ至リヌ三月廿四日義經三千餘艘ニ込乗テ壇浦ヘソ押寄テ鬪ケル源平兩家共ニ十萬餘人ニ及相互ニ時ノ聲ヲ作ルヲハ非々相天ヘモ聞ヌラント夥シ新中納言知盛艦ニ立出テ被申ルハ軍今日カ限也無雙名將勇士也ト云共連盡ヌル時ハ見苦九郎冠者ヲ取テ海ニ入ヨトソ下知セラレケル景清盛次申ケルハ心コソ武ク共何カ計ノ事カ候可シ少冠者片脇ニ挿ミ海ヘ投入トソ申ケル爰ニ逢攻戦ケルニ源氏船ニハ白鳩飛



翔八幡大菩薩ノ現給ルカト特シクソ思レケル知盛軍ノ體ヲ見給テ二位殿ニ申給ケルハ今ハ  
 思召定給ヘト申給ケルサテハトテ二位殿練袴ノ側ヲ高取主上ヲ懷奉リ寶劔ヲハ腰ニ差神璽  
 ヲハ脇挾鈍色ノ二衣打被キ船ニ臨給ケルカ流石ニ角思連給ケル 今ソシル御裳濯川ノ流  
 ニハ波ノ底ニモ都有リトハ主上今年ハ八歳ニ成給フ御年ノ程ヨリ尙長ナシク見サセ給淺猿  
 ト申モ疎也女院御乳母ノ大納言佐局己下ノ女房達モ之ヲ見奉リ泣叫フ事限無シ同身ヲ投給  
 ケルヲ取揚進リ大臣殿モ入海シ給フ右衛門督清宗モ入海シカ共父子ハ上ラレ給ケリ資盛己  
 下ノ人々皆海ニ入新中納言宣ケルハ能登殿哀九郎ヲ取海ニ入ハヤト有ケレハ教經モ角コソ  
 存候ヘトテ小船ニ乗替弓矢ヲ投捨見合與ンテ海ニ入ント數千ノ兵船ノ中ヲ漕廻テ九郎ヤ有  
 ト見ケルヲ義經心得テ彼ニ逢カト漕通リ近付ハ此透リ抜漕通シケルカ無端又通寄合タリ教  
 經年來ノ望是也トテ大手ヲ放テ飛係ル義經見之被與テハ叶ハスト思ハレケレハ傍ナル船交  
 ヒ二丈餘有ケルヲ艇リト飛移給ケリ教經モ飛移計ニ思ハレケレハ大力モ輕態ハ叶ハサルコ  
 トナレハ船中ニテ跳上々々髪ヲ搔テソ立タリケル係處ニ小船ニ乗タル兵三人鞆ヲ傾ケ打テ  
 係ル教經一人ヲハ海へ蹴落シ二人ヲハ左右ノ脇ニ挾ミ海ニ飛入給ケリ知盛軍ハ成敗是マテ  
 トテ伊賀左衛門家仲ト手々取與海ニ入給ケリ元暦二年二月廿四日何ナル月日ナレハ主上海  
 底ニ沈セ給フ三種神器モ失ヌラント諸人悲合ヘリ去共内侍所ノ御唐櫃ハ取上ラレ給ケリ四  
 月三日義經使者ヲ以院へ申サレケレハ虜共相具歸洛有ル可シト御感様々也義經法皇ノ御氣  
 色並ヒナク御セシカハ賴朝傳承テ朝敵追伐事ハ東國ノ大勢上セ強ニ九郎カ高名ニ非奢誇テ

按美濃江源氏隨  
 經賴命義  
 經行家爲  
 追伐西國  
 下ナラ

定テ我ニ敵タウヘシトソ宣ケルニ是徧梶原カ讒言ノ故也五月十六日宗盛父子ヲ具足シテ義  
 經關東下向ス鎌倉へ入サル間腰越ヨリ六月九日歸洛サテ土佐坊昌俊ヲ上セ義經ノ六條堀  
 川ノ宿所ヲ夜討セシカ共不叶義經都ノ煩ニ不成トテ法皇へ其趣ヲ奏シ申九州へ下給シニ曰  
 杵緒方モ心變テ憑マレヌ美濃近江源氏賴義行家(本マ)ノ命ニ隨爲追伐西國ニ下去ル十六日  
 ニハ義經カ申ニ依院宣被下賴朝追伐ス可シト有今月六日ハ亦賴朝カ申ニ依義經ヲ可追伐院  
 宣ヲ被下我國ヲ大唐ニハ變夕州ト咲モ加様ノ事也朝ニ云ル詞ハ夕ニ變スルト云詞也サテ義  
 經北國ヲ經テ奥州ニ下又秀衡ヲ憑テ御シケリ賴朝惣追補使モ此時玉シナリ  
 第八十二後鳥羽院尊成治十五年元曆一文治五建久九御年六十三高倉第四ノ御子母七條修明  
 門院文治元年七月九日大地震堂舍山峰モ崩前代未聞也二年卯月小原御幸文治五年四月晦日  
 賴朝仰付ラレ泰衡ニ義經ヲ誅伐シ同九月御下向有テ泰衡ヲ被誅家人由利八郎ト云者腹切可  
 キ隙ナクテ虜セラル梶原彼ニ向云昔賴義義家ハ十二年ニ貞任宗任ヲハ對治アリ泰衡武略至  
 極足サル也卅日ノ中ニ滅亡ス汝等同前也ト云ケレハ八郎申ケルハ軍ハ運ニヨル者也角宣君  
 ノ御祖父爲義討レ給ヌ又義朝モ家人宇津美ノ庄司ニ討レ給ヌ運ニヨル事ナレハ泰衡カ武略  
 ノ不足早々暇ヲ給ント申ケル君聞召サレ畠山ヲ以彼ヲ宥メラレ召仕ヘシト仰有ケリ畠山行  
 向再三君御諛ノ由申合ケレ共敗軍ノ士也爭カ君ニ仕ヘ奉ル可ケン只誅セラル可キ由ヲ強ニ  
 申ケレハ畠山此由ヲ言上仕賴朝感給テ由利郡ヲ免給テ御上アル前代未聞也六年十月十三日  
 京上十一月七日入京十一月九日ニ院參任大納言ニ給フ十二月十四日ニ出京又建久六年二月



一本以景時後見

源通具ノ上新古今集勅撰云

十四日ノ上洛ハ東大寺大佛供養ノ爲也治承四年ニ回祿セシ賴朝俊乘上人仰付テ再興有之也今度ハ室家若公御同道也三月十二日丁酉供養也七月八日鎌倉ニ下給フ建久四年五月廿八日曾我十郎助成五郎時宗敵工藤祐經討正治元年正月十三日薨逝御息左衛門督賴家十九ニテ讓與以時政御乳母トシ(本マ)景時ヲ以(脫歟)然間諸大名上洛令ムル處ニ正治二年二月廿日駿河高橋ニテ討舍弟右大臣實朝公ニ迄テ是ヲ三代將軍ト申也同三年賴家富士野御狩アリ同五年八月病依御子一萬御前ニ跡ヲ讓給而時政カ計トシテ千滿殿ヲ元服令メ奉リ實朝將軍ト(脫歟)賴朝日本國ノ總追捕使征夷大將軍御内警固ノ爲ニハ兩六波羅ヲ差置ル源通具卿藤原有家同定家同家隆同雅經等奉之此帝白拍子龜菊御前ヲ最愛有テ和州棕橋ノ庄ヲ給ケルヲ北條權大夫義時申ケルハ平家追伐時勳功賞ニ依領主拜領由ヲ支甲依之叡慮ニ背御對治有ヘキ由内々御評定有畿内ノ勢ヲ召ル此時六波羅ハ伊賀光季ト少輔入道親廣也六波羅ヲ召ケルニ親廣院參ス光季ハ度々召ケレ共參ラス承久三年五月十五日ニ畿内ノ勢ヲ以六波羅ヲ責ラルヘキ也光季嫡子ニ壽王丸トテ十三ニ成ケルヲ父汝ハ落テ鎌倉ヘ可下我打死スヘシト申ケレハ武士ノ家ニ生レテ餘リ親打死ヲ見捨テ落ト云事ヤ可候家ノ恥辱也御自害候ハ、死出山三途ノ川ノ御供ヲモ可仕候ト申ケレハ光季泪ニ咽ンテ兎角物不申去ル程ニ大勢押寄テ時ヲ作ル壽王ハ紫裙濃ノ甲ニ二尺三寸ノ太刀ヲハキ十二差タル染羽ノ矢負重籐小弓ヲ持テ面ノ矢倉ニ走り上リ打手大將ヲハ誰人承ハヤ矢一ツ進ント高聲ニ呼リケル爰ニ佐々木ノ山城守ト云兼テ舅輩ノ約束有シカ勅命ニ依一方ノ大將タリ壽王體冷見ケレハ山城守是ニ有リ矢一

ト云ケレハ恐ニハ候ト云ナカラ中指取テ打番ヒ能引テ放ツ山城守カ射向ノ袖ニ射留タリ勅命ニ非ハ係憂目ヲハ心詰本マ)泪ニ咽ケリ是ヲ始トシテ

常陸大掾	鎮守府將軍	從四位下陸奥守	從五位下陸奥守	從四位下肥前守	從五位下上野介	勢海律師
國香	貞盛	維將	繁盛	維時	直方	聖範
北條四郎大夫	同四郎	從五位下遠江守	從四位下右京	武藏守	修理亮	相模守
時家	時方	時政	義時	泰時	時氏	時賴
同	同	同	同	同	同	同
時宗	貞時	高時	經時	武州兄也		

大勢亂入テ責戰内ヨリハ政所太郎贊田右近左近切出テ火出テ戰ケルサテ壽王矢倉ヨリ飛下父ノ前ニ參畏テ申ケルハ早軍ハ是マテニテ候御腹ヲ召ル可シト申ケレハ光季ハ自元思ヒ定タルナレハ腹十文字ニ搔破壽王モ御供申ントテ父ノ死骸ニ打係テ腹ヲ切ル去間城内ニ有ツル者共大略討死シケリ此由鎌倉ヘ聞ヘケレハ義時カ嫡子武藏守泰時ヲ大將ニテ三十萬騎ノ勢ヲ差上ス宇治勢田ニ於テ官軍支シカトモ大勢ナレハ都ニ打入テ所々ノ合戰打勝テ院ヲ奉取關東ヘ注進申義時以下評定有テ隱岐國ヘ流シ奉可シト申上ケレハ隱岐國ヘソ奉流ケル攝津兒屋野宿ニテ壹屋ナルヲ見給テ限アレハカヤカ軒ハノ月モミツシラヌハ人ノ行末ノ空又出雲國三穗崎ト云所ニ付給テ渡海順風待ケル時都ノ事思召出見セハヤナウキミヲサキノ濱千鳥泣々シホル袖ノケシキヲ隱岐島ニ御坐有都ノ事ノミ思召出誠ニ爲方ナクコソ我ソ此新島守ヨヲキノ海ノ荒キ浪風心シテフケ母七條修明門院カノ島ノ御有様常ニ思



召及サレテ悲ノ餘ニ 萩ノ葉ニ中々風ノタエ子タ、カヨヘハコソハ露モコホルレ其後四十餘年御坐テ四條院御宇延應元年二月廿二日崩顯德院共申ケル四條院御宇也此御宇ニ左衛門督通具卿定家家隆有家雅經等仰テ新古今集撰崩御後鎌倉中ニ喧嘩鬪諍シケク就中五月廿二日大騷動モ有ケンハ彼御怨念ニヤトテ雪ノ下ニ今宮ト號祝奉ル法皇順德院御持僧長玄法師御身體也上野行山庄神領也

第八十三土御門院爲仁治十二年正治二建治三元久二建久一承元四元久二年乙丑六月十九日畠山六郎ヲ鎌倉へ上セケルニ由伊浦ニテ三浦平六兵衛ニ討ヌ父重忠鎌倉へ上ケルヲ二俣川ニ於テ三浦ノ人々出合重忠ヲ討ケリ 承元四後鳥羽院太子此帝承久ノ亂ニ依阿波國へ移ラレ給キ也御年卅七

權大納言	同	從三位	權大納言	同
長家	忠家	俊成	定家	爲家
左兵衛長五男	權中納言	爲氏	爲世	爲定
爲教	爲子	侍從	爲親	爲房
權大	爲陰	爲顯	爲助	爲雄
爲兼	爲大	爲尹	爲明	爲遠
爲相	爲秀			

藤大納言局 永福門院內侍

爲重	爲衡
----	----

圓瑜

爲郡 爲有  
左兵衛少將 左近衛少將

建久年中用淨僧正明惠上人遣唐使トシテ道宣律師ノ在世ノ時感得有シ佛牙ノ御舍利所望ノ爲ニ渡シケリ唐帝ヨリ申給テ歸朝有實朝ノ大臣ハ道宣ノ再誕也サテ鎌倉ノ乾正續院被置用淨建仁寺ノ本別當タリシカハ此寺ニ於禪法ヲ初修ス我朝禪法ノ初也明惠ハ梅尾ヲ建立有茶ハ此時實ヲ以テ歸此所ニ初テ被殖長ケリ

第八十四順德院守成治十一年建曆二建保六承久三御年四十六後鳥羽第二ノ子母修明門院重子承久三年ニ佐渡國へ移ラセ給隱岐ノ御事何ト思遣 マテシハシ岸ウツ波ニ事トハンヲキノ事コソマカマホシケレ

第八十四廢帝懷成治四ヶ月順德子母東一條院後京極攝政良經ノ女承久元年正月廿八日大臣實朝拜賀ノ爲入幡宮へ參賜ヘトテ下向石橋ニテ禪師公曉ニ失ハレ給キ公曉ハ賴家ノ御子也賴朝賴家實朝ヲ三代將軍ト申也此時定家卿奉勅新勅撰集撰之又嘉祿元光明峰寺ノ御子賴經將軍ニ下リ給承久三年四月廿日即位四歲同七月九日下サセ給天福二年ニ崩承久元年ヨリ嘉祿元年マテ七年二位家將軍賴朝ノ室賴朝ヨリ四十五年ノ職也  
第八十五後堀川院貞教治十二年承久三貞應二元仁一嘉祿二安貞二寬喜三貞永一御年廿四後高倉法皇ノ第三ノ子守貞親王子也高倉院孫也



第八十六四條院秀仁治十年天福一文曆一嘉禎三曆仁一延應一仁治三御年十五後堀河第一子  
母藻壁門院關白道家女後京極殿ノ御子後法性寺殿關白トシテ政直シ此時北山ニ西園寺ヲ立  
給嘉禎四年ニ賴經ノ將軍上洛是藤家也又法性寺ニ新大佛ヲ建立有テ東伏寺ト名ク此伏ノ字  
關東答メ申ケルニ依福ノ字ニ改ケリ

第八十七後嵯峨院邦仁治四年寬元四御年五十二土御門院子父御門配所ニテ隱サセ給後三條  
坊門ニ渡給御位ノ事ハ思召モ寄ラス仁治元年十月十五日八幡ニ御參籠有出家ノ事祈申給シ  
ニ曉方ニ御寶殿中ヨリ鈴聲ノ如ニテ德ハ是北辰椿葉ノ景再改ト正ク聞ケレハ憑シク思召下  
向有テ同二年ニ四條院失給ケレハ御年廿二御即位續後撰集爲家卿奉之續古今衣笠爲家行家  
光俊奉之

第八十八後深草院久仁治十三年寬元四寶治二建長七康元一正嘉二後嵯峨一ノ子寶治元年六  
月六日三浦若狹前司泰村舍弟能登守光村毛利ノ入道西阿以下ノ輩二百八十餘人大將法花堂  
自害ス同八日上總介季顛(胤)モ同ク父子自害建長二年永福寺供養建長四年後嵯峨第四ノ子  
中務卿ノ親王宗尊鎌倉ノ將軍ニテ御下有是ヲ宮ノ御所ト申セシ也此時相摸守時賴朝臣明將  
賢人政道私ナク賞罰ヲ行ハレシカハ一天風和ニ四海浪靜也王氏ヲ出十五代時政カ五代ノ孫  
也唐ノ道隆禪師ノ夢ニ聖德太子ノ再來ト云々又ハ地藏ノ化身共申サレハニヤ日本國ヲモ回  
民間ノ愁ヲ哀給ケン建長寺ヲ造リ立テ大覺禪師ヲ奉請偏ニ禪法ヲ興シ給フ出家シテ道宗ト  
號同三年七月廿二日繩床ニ端坐シテ卅七歳寂見性ノ文ニ云

業鏡高懸三十七年 一槌打破大道坦然

正嘉二年八月一日大風二日大洪水天下大飢饉人民死亡畢

第八十九龜山院恒仁治十五年正元一文應一弘長三文永十一後嵯峨二ノ子此時東山ニ寺ヲ立  
給テ禪法ヲ興シ給禪林寺是也此時蒙古吾朝襲來九州ノ騷動天下大變成シカ續拾遺爲氏奉之  
蒙古吾朝へ寄事開化ヨリ始仲哀ニハ新羅百濟高麗也仍神功皇后御退治其後欽明敏達推古天  
智宇多一條御宇也每度神力ヲ以對治中ニモ文永并弘安ニハ當以奇特神變共也

第九十大覺寺院世仁治十三年建治三弘安十龜山子號後宇多院文永十一年ヨリ弘安四年マテハ五  
年也又弘安四年六月十三日蒙古ヨリ襲へ來ヌ異國ヨリ吾朝へ寄スル事七ケ度也今度新後撰  
爲世奉之大元國老皇帝支那四百州ヲ討取テ勢天地ヲ凌時ソカシ其征伐法聞大將萬將軍王畿  
五ヶ國三千七百里ニ勘テ兵三百七十萬騎大船七萬餘艘込乘テ津々浦々ヨリ漕出ス文永十一  
年ヨリノ事ナレハ九州ノ兵ハ博多ニ馳集ル山陽山陰ノ勢ハ文字赤間ヲ堅東山東海ノ兵ハ帝  
都へ馳上北陸道ノ兵モ玉城ヲ守ル時ニ大元七萬餘ノ兵船同時ニ博多ノ津ニ押寄タリ大船船  
ヲ雙モヤイヲ入歩板ヲ敷渡シ陣々ニ油幕ヲ引テ干戈ヲ立雙タレハ五島ヨリ東博多浦ニ至マ  
テ海上ノ四圍三百餘里俄ニ陸地ニ成テ履氣爰乾闥婆城ヲ吐出セルカト恠タル日本ノ陣ノ搆  
博多ノ濱十三里ニ石堤ヲ高築テ前敵爲ニ切立タルカ如ク後ハ御方爲ニ平々トシテ懸引自在  
也其陰ニ屏ヲ塗陣室作テ數萬ノ兵並居タレハ敵ニ勢多少ヲハ見透サレシト思ヘル處ニ敵舟  
ノ艣崎ニ枯槁如ナル柱ヲ數十丈高立テ横ナル木ノ端ニ坐ヲ搆ヘテ人ヲ上セ日本ノ陣内ヲ目



ノ下ニ見クタサレテ秋毫ノ先ヲモ數ヘラルヘク又面ノ四五丈ノ廣板共ヲ筏ノ如ニ組テ水上ニ敷雙タレハ恰モ三條ノ廣路十二街衢ノ如ク也數萬ノ兵馬是ヨリ係出テ戰御方ノ軍兵勢力盡退屈ス鐵ヲ打テ巳時兵刃旋ル先鐵炮トテ鞠ノ勢ナル鐵玉ノ送ホトシル事下坂輪ノ如露塵スル事旋電ノ光ノ如ナルヲ一度ニ二三千挺出タルニ日本ノ兵多燒殺サレ城戸櫓ニモ火燃付テ燒崩爰ニ上松浦下松浦ノ者共軍ノ體ヲ見テ尋常ノ如ニノ叶ハスト思ケレハ外ノ浦ヨリ廻テ纒ニ千餘人ノ勢ニテ夜討ニシタリケレ志ノ程武カリケレモ九牛ノ一毛大倉ノ一粒ニモ不當程ノ小勢ナレハ二三萬人ノ敵ヲハ打シカ共終ニハ皆虜レテ身累ヒ繼ノ下ニ苦メ掌ヲ連索ノ舩ニ貫レタリ然九州者共一人モ不殘四國中國ヘソ落タリタル日本一州ノ周章斜ナラス依之諸社御幸可有ト先勅使ヲ立ラレ奉幣ヲ捧諸山諸寺四ヶ大寺ニ被仰レテ大法秘法ヲ行セラル宸襟ヲ傾テ肝膽ヲ碎タル如此御祈禱感應ト覺テ信州諏訪ノ湖上ヨリ五色ノ雲西ニ聳大蛇ノ形空ニ見ヘ八幡ノ御寶殿モ扉開馳轡ノ鳴音空ニ聞日吉ノ社モ錦帳鏡動神寶又又彌住吉四所御戸開神光西ニ耀キ子守勝手鐵楯オノレト立西ニ突向ヘリ鹿島明神モ弓矢ヲヨタヘ悉虛空ヲ西ヘ飛渡給ト人ノ夢ニモ見ヘケリ懸ケル處ニ弘安四年七月七日皇太神宮ハ禰宜荒木田尙良豐受太神宮ノ禰宜渡會ノ貞員等十二人起請シテ連署ヲ捧テ上奏シケルハ二ノ宮末社風ノ社寶前鳴動シテ六日ノ曉天ニ神殿赤雲一村立出天ヲ耀其光中ヨリ夜叉羅刹ノ如ナル鬼神顯出風囊ノ結緒解キ大風口ヨリ出テ沙漠ヲ揚大木ヲ吹拔ク測知シテ異敵等此ノ日即滅亡無疑奇瑞變應セハ年來申請所ノ宮號敬感ノ義ヲ以宣下サル可シト奏申ケル異敵九州ヲハ我住ニシテ此日七

萬餘艘ノ艦艦己ニ中國押渡ケルニ天氣俄ニ替テ黑雲一村東ノ空ニ立覆ト見ヘシカ惡風浪ヲ卷雷電地ニ鳴炮シテ七萬餘艘ノ兵船木葉ノ嵐ニ散カ如天揚地覆岸ニ當リ浪ニ溺三百七十萬騎ノ兵共一時ニ海底藻屑ト成ニケリ懸リケレ共萬將軍一人計ハ風ニモ放レス浪ニモ沈スシテ窈冥タル空中ニ飛揚リ一ツノ船ニ乘本國ニ歸ケルトナン于今不始事ナレ共神國ノ奇特殊ニ此時顯タリト申モ疎也

第九十一持明院照仁號伏見院治十一年正應五永仁六後深草院ノ子正應六年四月十三日大地震鎌倉中ノ山々崩打殺サル者二千五百餘人ト云リ玉葉集爲兼卿奉之同月廿二日平左衛門尉賴總法師子息助宗誅ラレ畢同年權中納言爲兼卿佐渡ヘ流サレ畢此御手跡イツクシク遊サレケリ

第九十二常盤井院胤仁號後伏見院治三年正安三伏見子正安三年六月廿日鶴岡ノ八幡宮ニ大竹二本降德治二年春天下一同ハシカヲ病

第九十三後二條院治邦治六年乾元一嘉元三德治二大覺寺子同十二月廿日春日御神木入洛同三年ニ御歸坐御向ノ大衆三萬人黃衣神人二萬人白衣神人一萬八千人參向ス攝家ヲ始奉リ公卿大臣供奉シ奉ル

第九十四華園院仁富治十一年延慶三應長一正和五文保二伏見院ノ二ノ子延慶二年二月廿九日東大寺若宮神輿入洛又熊野ヨリ凶徒起テ權現ノ神輿ヲ船ニ乘奉リ伊勢島ヲ回リ安濃津ニ付タリシヲ鎮ラレケリ同九月若宮歸坐應長元年天下一統咳病正和元年八月廿五日春日神木入洛二年八日ニ歸坐同三年三月八日八幡ノ神輿入洛同六年正月一日大地震正月ヨリ五月マテ



數十度重白河堂舎民屋悉崩倒ス正和二年三月廿二日善光寺回祿  
 第九十五後醍醐院治後字多ノ二ノ子治十四年文保二元應二元亨三正中二嘉曆三元德二元弘  
 一元亨四年九月十八日此帝相摸守平ノ高時入道宗鑑ヲ伐セント思召立武勇ノ輩ヲ召可シト  
 テ智光(本マ)共ヲ召ル中ニモ日野ノ中納言資朝卿藏人ノ大内記俊基等ニ密談有テ人々ヲ召  
 レケリ土岐ノ左近藏人頼員舅齋藤太郎左衛門ニ此事語ケルニ依同心ノ輩土岐ノ伯耆ノ十郎  
 田染四郎次郎カ宿所ヘ六波羅ヨリ押寄テ打レヌ日野中納言資朝卿ト藏人大内記俊基ヲ給ヘ  
 キ由内裡ヘ奏聞關東ヘ召下ス主上ヨリ誤無キ由ノ綸旨ヲ被下シカハ俊基ヲ都ヘ上セ資朝卿  
 ヲハ事ヲ左右ニ寄テ佐渡ヘソ流サレケル又同年ニ奥州ノ俘囚又起テ嘉曆二年マテ不鎮シカ  
 ハ宇都宮ニ仰テ追伐ス續千載集爲世卿奉之正中二年六月二十五日ノ亥時雷電シテ俄ニ山門  
 ノ無動寺山崩坊舎卅餘宇打埋人民多打殺白河京中ノ民屋悉流希代珍事也嘉曆二年ニ南都七  
 大寺ノ衆徒等確執ノ事共有テ合戦ニ及興福寺ヘ押寄テ燒拂ケルニ淡海公ノ御時本尊ノ御首  
 入ンカ爲ニ龍宮ヨリ求得給タリシ面光普變玉モ此時失ヌ此寺ヲ燒ケル攝州ノ水田ノ新莊司左  
 衛門則狂成圓明院ノ前ノ河ニ入テアラ熱ヤ悲ヤト呼テ狂死ニ死ニケリ昔ヨリ度々回祿ニ燒  
 サリシ此玉今度燒ケルコソ不思議ナレ悲哉今度燒處金堂講堂西金堂南圓堂鐘樓經藏三面ノ  
 僧房四面廻廊法華堂南大門東金堂等也同年大神宮并熊野山ヘ勅使萬里ノ小路大納言宣房卿  
 四年ノ秋天下一統ニ咳病元徳元年二月四日春日行幸同三月十七日日吉ノ行幸是併東夷征伐  
 ノ爲ト關東ニ聞ケレハ相摸入道高時大ニ怒テ二階堂ノ下野判官長井ノ遠江守ヲ指上ス先法

勝寺ノ圓觀上人小野ノ文觀僧正淨土寺ノ中圓僧正ヲ六波羅ヘ召出サレ又二條三位爲明卿モ  
 同召取給已ニ嗷問ノ沙汰ニ及ントシケルニ爲明カウソ 思キヤ我シキ島ノ道ナラテ浮世  
 ノ事ヲトハルヘシトハト讀給ケレハ駿河守此歌ニ感嗷問ノ沙汰ヲ止ケレハ六波羅ヲ感セヌ  
 人ハ無リケリ三僧ヲハ國々ヘ流サレケリ佐渡被流資朝卿ハ誅セラル右大弁俊基モ又關東ヘ  
 召下サレ萬原ニテ五月廿日誅ラレケルニ角ナシ 秋ヲマタテ萬原ハラニキユル身ノ露ノ  
 恨ヤ世ニ殘ルラン同二年山門東塔ノ北谷ヨリ火出テ四王院ヲ始トシテ延命院大講堂已下ノ  
 堂社燒同年十月三日大地震ニ紀州ノ千里ノ濱ノ邊俄ニ陸地ト成事廿餘町同七日地震富士ノ  
 絶頂崩事數千丈也ト云リ 元弘元年八月廿一日東使三千餘騎ニテ二階堂下野判官長井遠江  
 守上洛ス其故ハ主上ヲハ遠國ヘ移シ奉大塔ノ宮ヲハ死罪ニ行ヒ奉ル可ト聞ヘシカハ同廿四  
 日夜主上ハ俄ニ笠置寺ヘ遷幸成由聞ヘシ山門ヘハ佐々木大夫大將ニテ五千餘騎ヲ差向ラル  
 戶津ニテ散々ノ合戦ニ及爰山門大衆等少々心替有ト聞シカハ大塔ノ宮ハ南都ヘ忍給フ同九  
 月一日ニ六波羅ヨリ陶田高橋ヲ大將トシテ畿内ノ勢三千餘騎ヲ笠置城ヘソ向ラレケル城ヨ  
 リモ木津邊ニ下々テ度々ノ合戦此笠置ノ城ト申ハ山高聳ヘテ一片ノ白雲空ニ横ハリ山路ヲ  
 埋岩嶮峙テ千尋布ヲ曝ス瀧漲落テ碧苔ヲ洗谷深シテ淵底ニ臨ヨリモ危岸缺テ屏風ヲ立タル  
 ヲリ嶮シト下幽谷ノ底ニ行キ向フ上ラントスレハ岩頭ノ莓苔青々トノ歸路ヲ埋上リ上テ孤  
 峰頂ニ至直下タレハ四山雲霧重々トノ眼睛ヲ迷屏ヲ塗ラサレトモ岸自高ク關ヲ構サレトモ  
 道自道狹シ盤折ナル岩ノ棧道ヲ登事三十餘町也一夫忿テ道ヲ遮萬變モ敢テカタシ嶮崖内仍



ノ山頂自然無雙也要害トハ此處ヲヤ可申遷幸ナルハ忝モ一天ノ君寄來ルハ卑キ東夷輩也下  
 下シテ上ヲ犯スハ自滅相トシテ上下ヲ罰スルハ次第ノ義ナレハ也逆臣ノ誅伐時日ヲ廻サス  
 シテ四海ノ安靜此時ニコソト人皆勇思ヘル處ニ案ノ如數萬ノ軍士東西ニ圍ヲ成ト云ヘ共山  
 谷遙隔リ勇猛強卒南北ニ責來ト云ヘ凡城郭ニモ近カス溪邊山下ニ於テ數日ノ粉骨ノ戰ニ動  
 レハ寄手每度打負テ退散ス爰官軍等彌勇氣ヲ吞形勢戰ハ樊噲ヲ嘲謀ハ子房ニモ等シカラム  
 ト思ヘリ大手ノ二王堂ヲハ三河國ノ住人足助次郎重範固タリ寄手ニ荒尾ノ次郎進出テ申ケ  
 ルハ足助殿ノ御事承及テ候矢一給テ物具ノ札程見候ハント申ケレハ重範申ケルハ御所望ノ  
 止トテ中差ヲ取テ番ヒ三人張十四束ノ矢引萎テ兵ト放荒尾カ射向旋檀ノ板ヨリ右脇ヘ矢先  
 白射出タリケレハ咬ト計ニテ動ト倒レテ死ニケリ弟ノ三郎兄ノ死骸ヲ立隱テ足助殿ノ御多  
 羅枝承及シ程ハ候ハス爰ヲ遊サレ候ヘトテ射向ノ袖ヲ差揮シ小跳シテソ立タリケル足助思  
 フ様此者ハ鎖ニ甲ヲ重テ着タルニ角ハ申ラント金磁同ニテ眞向ヲ射タランニ何ノ子細カ有  
 ヘント思同ク取番テ能引テ兵ト放矢壺ヲ不逆(違歟)眞向ニ中腦ヲ射碎レテ是又立所ニ死ス  
 爰ヘハ敵恐怖シケルニヤ責モ不上隔リタル谷ヨリ數千ノ兵共責上ケルヲ南都ヨリ卷數ノ使  
 ニ參リケル本性房ト申律僧ノ大力二卅人シテモ難動大石ヲ片脇ニ引挾テ鞠ノ勢ニ引缺々々  
 ニ三十投打ニ打ケレハ數百人雪額ツキテ頽落石ニ打レ自レ等カ太刀長刀ニ貫ヌカレテ死亡  
 ノ者數ヲ不知深谷ヲ埋ケリ其後ハ軍止テ遠攻ニセヨトテ峰々ニ陣ヲ取テ守ケル其頃御夢  
 ニ鬘結タル天童來テ主上ニ奏シ申ケル一天下ノ下暫御身ヲ隱サルヘキ所ナシ但アノ楠木ノ

下ニ構タル御坐ハ君ノ南面ノ德ヲ行給可ク所ニテ候也是日天子ノ御使也ト云ト御覽セラレ  
 ケリ夙ニ成就坊ノ律師ヲ召此邊ニ楠ト云ル、者ヤ有ト御尋有ケルニ律師坊勅答ニ申ケルハ  
 左様ノ名字者近ニハ承及ハス候河内ノ國ニコソ楠木ト申ハ候母志貴ノ毘沙門ヘ百日參詣ヲ  
 シテ儲タル子ニテ候トテ童ベ名ヲ多門ト付候ケルトテ多門兵衛正成ト申候テ勇士ノ覺候ト  
 申ケレハ藤房卿承テ繪旨ヲ成楠木勅ヲ蒙申ケルハ武士ノ身トシテ忝モ天勅ヲ承ル生涯ノ面  
 目成トテ馳驅參ス君叡威有テ御前召ス叡覽有テ後藤房ヲ以夷狄對治ノ趣ヲ御尋有正成謹テ  
 申ケルハ朝敵ト成者天之ヲ罰ス就中東夷ノ行事ヲ見ニ可滅時ニ當レリ但日本國ノ勢ヲ以テ  
 坂東八ヶ國ヲハ對治シ難シ智謀ヲ以テ取ル可ク候也坂東ノ大勢上候ハ、金剛山深谷ニ引籠  
 下候ハ、又打出テ大和河内ノ間ノ處々ノ城ニ可籠二三度タニモ上下候ハナトカ退屈セサル  
 可シ夫朝敵ト成ル者數ルニ神武天皇ハ東夷長髓彦己下ヲ平テ和州柏原ノ宮移給フ同御宇紀  
 州名草ノ郡ノ土蜘蛛ヲモ罰シ天智ノ御宇ニハ藤原千方ト云者四鬼ヲ仕テ防キシカ共紀友尾  
 カ草モ木モ我大君ノ國ナレハイツクカ鬼ノ栖成ヘキト讀シカハ鬼去テ千方亡ヌ朱雀院御  
 宇ニハ平將門藤純友聖武ノ御宇ニハ藤原ノ廣嗣仁德ノ御宇ニハ大岩ノ丸(本マ)大山王子大  
 伴ノ眞鳥用明御宇ニハ守屋蘇我ノ入鹿山田ノ石河丸蝦夷大臣長屋右大臣豐成桓武御宇ニハ  
 伊豫ノ親王氷上ノ川繼淳和ノ御宇ニハ橘ノ逸勢文屋ノ宮田孝謙ノ御宇ニハ惠美押勝光仁御  
 宇ニハ井上ノ皇后早良ノ太子天武ニハ大友ノ皇子嵯峨ニハ仲成堀河ニハ對馬守義親後白河  
 ニハ宇治ノ惡左府六條判官爲義二條院ニハ惡右衛門督信賴後冷泉ニハ貞任宗任白河ニハ武



衡家衡平相國清盛木曾ノ義仲阿佐原八郎爲頼今高時法師也何モ素懷ヲ遂ケス早々征伐セラ  
 ル可シト申此趣ヲ藤房卿被申ケレハ君斜ナラス御威有被歸ケリ君又成就坊ノ律師ヲ召テ當  
 寺ノ事勅問有律師申ケルハ此寺ノ事人王三十九代帝天智天皇ノ御子大夫(本マ)皇子此山ニテ  
 狩ヲシ給シニ大鹿ノ走ニ相付テ嶮岨ヲ被落ケルカ龍蹄壁巖ニ馳迴死(本マ)ヌヲ去シ事寸分  
 ニ縮ケリ王子此時ニ當思ハレケルハ偏佛神助ニ非ハ支死免難キトテ心中ニ一ノ大願ヲ立給  
 此死免ハ彌勒ノ像ヲ此處ニ安置ス可シト不圖思合念シケレハ馬陸地ニ至嶮巖ノ急難免レ給  
 ケリ後日ノ注トテ竹笠ヲ脱テ置レケリ聽所願ニ任此寺ヲ造建有テ手自五丈石像彌勒ヲ安置  
 シ給ヘリ注ニ笠ヲ置シカハトテ笠置寺トシ號シケル清淨結界ノ地ナレハ女人影ヲモ措ズ靈  
 驗殊勝ノ砌ナレハ萬人首ヲ傾此菩薩ハ釋尊ノ出世ニ次テ當來ノ導師タリ都率ノ内院ニ處ノ  
 ハ補所大士也殊更慈悲ヲ以物ヲ益シ給フ事諸餘ノ菩薩勝給ルカ故ニ其名ヲ慈氏トハ申治承  
 ノ比解脫上人ト聞シ和尚此山ニ住ス上人一度風塵ノ境ヲ辭シテ永寂寞室ニ坐ント誓テ此山  
 ヲ出給ハス慈悲深重ニシテ濟度方便怠事ナク行業不退ニシテ自得三昧也中ニモ法相宗ヲ以  
 被興抑此法相大乘宗ト申ハ如來滅後九百年ニ至テ阿僧祇菩薩無着號ス健陀羅國ニ誕應ノ大乘  
 ノ法要ヲ受學シ都率天上リ彌勒菩薩ヲ瞻沒羅林中ニ請下シ奉畫ハ五位ノ法要ヲ專ニ講  
 宣シ夜ハ二六ノ妙儀ニ對シテ受學セシ喻伽論是也吾朝ニハ孝德天皇御宇ニ道昭僧都渡唐  
 シテ玄奘ニ逢テ相承ス歸朝ノ後南都專ラ此宗ヲ學セリ去レハ春日御神託ニモ此宗ヲ學ハサ  
 ル輩ハ神敵タルヘシト示給フ爰以五重唯識ノ春ノ華ハ句ヲ三笠ノ山ノ風ヨリ傳ヘ四分三姓

ノ秋ノ月ハ光ヲ和泉河ノ流ニ浮依之テ本尊ノ靈感モ新ニ聞ヘ佛法修學モ太々盛ニシテ已ニ  
 六百餘回ニ及候トソ勅答申君殊ナル御信仰ノ粧也爰備中ノ國ノ住人陶山藤三ト云者有一家  
 五十餘人談合シケル古ヲ聞ニ平家ノ時佐々木三郎カ備前ノ藤戸ヲ渡セシハ案内者ノ徳同四  
 郎カ宇治川ヲ渡セシハ名馬ニ乗テ也梶原カ生田ノ森ノ二度ノ懸ハ源太ヲ助シカ爲熊谷平山  
 カ一谷ノ先係ハ後陣ノ大勢ヲ憑テ也夫ヲタニモ古今无雙ノ高名ト云ソカシ此城體爲ハ日本  
 國ノ武士カ集テモ以戰破カタシ智謀ヲ廻シ一カヲ以テ落ス可シ卒給ヤ人々トテ五十餘人同  
 心シテ九月晦日夜雨降風烈シテ面ヲ向可キ様モ無ク兼テ見置シ難所ノ岩ヲ傳リソハカケ  
 千ノ屏風ヲ立タルヨリモ尙サカシキヲハハウノニ傳テ彼城ノ際忍入ヌ城内ヲ聞ニ差タル  
 用心モナキカト要害ヲ憑ケルニヤ本堂邊ニ登タレハ爰カ皇居ニテ有ト覺ヘテ蠟燭所々ニ見  
 ヘ公卿已下少々侍リ吉所ヘ至ヌト思テ傍見ハアキタル坊有是ニ火ヲ打付ヌ風烈懸皇居ニ吹  
 係夫ヨリ走散テ所々陣屋ニ火付タルニ一同ニ燒上ル主上步既御出源中納言具行平宰相成輔  
 中納言藤房同大進季房卿御手ヲ引奉リ幽谷ニ入忝モ玉趾ヲ山路ノ危ニ苦シメ御衣ヲ蘿洞ノ  
 露ニ霑シ君臣忙然ト歸終テ兎角申遣方モナシ其有様只楊國忠安祿山カ戰ニ負テ玄宗皇帝蜀  
 ノ劔閣山ニ分迷高官萬卒行步遙ナルニ漂テ前途程遠事ヲ歎公子内官モ戰場ノ中ニ吟テ後會  
 其期無事ヲ悲シモ角コソ有ケメト只知ルノ計也彼城陶山カ計ニテ破シカハ官軍數日ノ戰功  
 徒ニ成リヌ天運未タ到ラスト思ヘ共無念ノ次第ニ非ヤ陶山カ族一旦武功有ニ似タリト云共  
 即時ニ滅亡ス可キ始也爰山城國ノ住人深須入道山ノ案内者ニテ山中ヲ尋ケルニ主上ヲ見付



奉リ軍兵共御迎ニ參先宇治院奉入夫ヨリ行粧ヲ引粧テ六波羅へ奉入召取進侍臣モ皆京へ入  
ヌ遠流死罪ノ二途何ノ間ニヤト哀也此等ノ炎上ノ事叡慮ニモ思召ケリ聖運開再興可有ヤサ  
テモ此城ノ事大儀成シカハ關東ニモ評定有大勢ヲ立ラレケレハ每度ノ合戦ニ寄手數百騎打ル  
ト聞テ重テ大軍ヲ指遣ヌ又關東ヨリ大佛陸奥右馬ノ助貞宗金澤左馬助貞冬足利治部大輔高  
氏ヲ大將トシテ三十萬七千六百餘騎發ス此勢着陣己前彼城ヲハ攻落シ主上ヲモ奉取十月一  
日入洛六波羅北方ヲ皇居ト定先奉入ケルニ折角時雨降ケレハ

住ナレヌ板屋ノ軒ノ村時雨ヲトヲ聞ニモ袖ハヌレケリ

同十月六日三種神器ヲ持明院ノ新帝ノ御方へ渡進光嚴院御事也同十三日新帝登極ノ由ニテ長講堂  
ヨリ内裏へ入ラセ給リ先帝ノ御方ノ人々ヲハ皆召取奉リ大名共ニ預ラル一宮中務卿ノ親王  
ヲハ佐々本ノ判官時信妙法院二品親王ヲハ長井左近大夫將監高廣預リ申萬里小路中納言藤  
房六條少將忠顯二人ヲハ主上近侍奉ル可シトテ六波羅ニ置ル元弘二年三月八日一宮中務卿  
親王ヲハ土佐畑奉流妙法院二品親王ヲハ讚岐國へ奉流其外ノ人々方々へ流サル萬里小路大  
納言宣房卿子息藤房季房笠置へ供奉ノ故ニ齡己八旬及人召取ラレ先帝ハ遠島へ遷サレ給シ  
二人ノ子息ハ死罪ニ定ヌト聞ヘケレハ長カレトナニ祈ケン世中ノウキヲ見スルハ命ナ  
リケリ先帝ヲハ承久ノ例ニ任セ隱岐國へ移シ奉可シト申定リケリ同三月七日己隱岐國へ遷  
奉ルヘシト聞ヘケレハ中宮夜ニ紛レテ六波羅御所へ行啓成セ給中門御車ヲ差寄タレハ主上  
モ中門へ出御成テ御車ノ簾ヲ撥ラル君ハ中宮ヲ都ニ留置奉テ旅泊ノ波長程ノ月ニ潺セ給シ

スルコノミ思召連給イ又中宮ハ君遙々ト遠國ノ外マテソ想像奉リ何ヲ憑トモ無ラン事ヲ歎  
カセ給ヘハ互ノ御心中押計奉ル可シ夜己明ナントシケレハ中宮還御成トテ此上ノ思ハ  
アラシツレナサノ命ヨサレハイツヲカキリソト計聞ヘテ伏沈セ給ツ、還車ノ路別廻リ逢世  
ノ憑モナキ御心ノ中コソ悲ケレ明レハ千葉五郎左衛門尉佐々木備中判官ノ五百餘騎ニテ  
警固仕先帝ヲ隱岐國へ移奉ル供奉人ニハ六條少將忠顯御介錯ニハ中納言三位殿御局計  
也

第九十六代光嚴院後伏見院ノ一御子諱量仁元弘三元弘元年十月六日御年十九ニテ御即位此  
時相摸入道宗鑑高時也田樂ヲ好新坐本坐呼下之ヲ愛スル事骨髓ニ染此時天狗共媚狂事度々也  
又入道好犬事同前都ニハ改元沙汰アツテ元弘二年四月廿八日ヨリ正慶ト號同五月十九日嗟  
峨釋迦眉間光ヲ放給不思議ノ瑞相奇代ノ事也トテ貴賤群集シケリ或人云ケルハ保元平治承  
久三ケ度五月光ヲ放給テ天下大亂此度何ホマ諸人は是ヲヒヌ宮ハ紀州十津川ニ忍居給テ東  
夷對治計略ヲ廻サル楠木兵衛正成去年赤坂城ヲハツシタリシカ元弘二年四月三日五百餘騎  
ヲ率シ湯淺城ニ押寄責落ヌ同十七日ニ先住吉天王寺打出六波羅ヨリハ隅田高橋ヲ兩六波羅  
ノ奉行トシテ在京畿内ノ勢七千餘騎馳向淀橋ノ橋爪ニ打葎合戦ニ及敵味方死亡輩數ヲ知ラ  
ス京勢利無シテ引退宇津宮馳向計略ヲ廻ラシ兩陣互引退此剋正成天王寺ニ參詣テ尊老ヲ招  
太子ノ未來記ヲ所望ス老ノ云是容易披ク可ニ非スト雖秘カニ見ス  
當入王九十六代天下一亂而主不安此時東魚來吞西鳥日投西天二百七十餘箇日西鳥來



濱東魚其後海内飯一三三年如獼猴者掠天下卅餘年大凶變飯一元  
 正成拜見仕テ先帝已ニ人王九十五代ニ當給ヘリ逆臣相摸入道ヲ治罰ノ明年ノ春ノ比君必ス  
 還幸成帝位ニ即セ給ヘシト勘テ金剛山ノ城ニ我身ハ楯籠吉野山ニハ大塔宮赤坂城ニ舍弟五  
 郎ヲ籠タリ去程ニ同元弘三年閏正月三日諸國ノ軍勢八萬騎ヲ四手ニ分テ三ノ城ヲ爲攻吉野  
 二階堂出羽入道道蘊大將ニテ二萬餘騎發向ス赤坂阿曾彈正少弼時春大將八萬餘騎進發金剛  
 山ヘハ大佛陸奥右馬助貞宗大將トシテ二十萬騎奈良路ヨリ向長崎惡四郎左衛門尉高貞侍大  
 將ヲ承テ自其勢十萬餘騎也吉野赤坂兩城ヲ攻落金剛山一處ニ籠ケリ金剛山ノ麓千刃破ト云  
 城也諸國軍勢責上リ二萬騎也此城ハ東西ハ谷深ノ人可上様モナク南北ハ金剛山ニ連テ而モ  
 峰絶タリ此城ニ千餘騎ニテ正成籠日々攻ケル毎日千人二千人打レスト云事ナシ餘ニ人ノミ  
 多打ケレハ暫軍ヲ止攻支度ヲ用意シテ種々ニ攻ケレハ城内ヨリモ種々ノ計ヲシテ寄手ハ多  
 討レケレハ城ハ少モ弱ラス爰上野國住人新田小太郎義貞ト申ハ八幡太郎義家後胤也先帝ノ  
 御方ニ參ラント思ヒケレハ此寄手有ナカラ計ヲ廻シ吉野ノ奥ニ御ナル大塔ノ宮ヨリ繪旨ヲ  
 申下シ虛病シテ下國ス赤松入道圓心ハ播州苔繩ノ城ヨリ打出テ山陽山陰兩道ヲ差塞中國ノ  
 兵共上ケルヲ舟坂山ニテ支四國土居得能先帝ノ御方ヲ申シテ四國悉隨之由聞近ク都ヘ攻上  
 ル可シト聞ヘ隱岐國ヲハ隱岐ノ判官近國ノ武士ヲ以宮門ヲ閉テ警固シ奉ル二月中旬ハ佐々  
 木富士名判官カ番ニテ侍ケルカ判官思様哀此君ヲ取奉リ謀叛ヲ起サハヤト思潜ニ官女ヲ以  
 テ申上ケルハ楠木兵衛正成金剛山城ハ強ル由聞候播州ニハ赤松入道圓心御方仕リ三千餘

騎ニテ六波羅ヘ可寄由其聞候四國河野カ一族土居得能等御方ヲ仕大船ヲ用意仕御迎ニ可參  
 トモ承候義經(編歟)カ當番ノ間ニ忍ヤカニ御出候テ鴨湊ヨリ御舟ニ召レ出雲伯耆ノ間ニ何  
 ケ浦ヘモ御舟ヲ被寄候ヘ義經爲奉攻罷向體ニテ參可ク候ト申入ケル此由官女奏サレケレ  
 ハ君有リカタタ聞思食テ或夜ノ宵ノ紛ニ御出有テ六條少將忠顯計召具シテ忝モ十善ノ天子  
 自ラ玉趾ヲ草鞋ノ塵ニ汚シ泥土踏セ給ケルコソ淺猿ケレ二月廿三日ノ事ナレハ月待程暗夜  
 ニソコトモ知ラヌ遠野道ヲタトリテ歩セ給ヘ共未習セ給ヌ御事ナレハ越カセ給タル計ニテ  
 御ケル處ニ恠氣ナル男一人出來君ヲ見奉リ勞ケニ思進鴨ノ湊ヘハ五十町計候ヘトモ道數多  
 候イテ御迷候スト存候ヘハ道シルヘ申候ハントテ君ヲ輕々ト負進テ湊ヘ入進テ此男走廻テ  
 伯耆ヘ渡商人船ヲ尋出シテ君ヲ乘奉リ暇申テ留リケリ此男只人ニハ非ケルカ船頭又心有者  
 ニテ屋形ヲコシラヘテ君ヲ深隱クシ奉追手ノ舟共百艘計ニテ奉追攻船中ヲ搜ケレ共深隱シ  
 進テ伯耆國名和ノ湊ニ置ケリ爰名和ノ又太郎長年ト云者アリ家富一族モ廣カリケレハ是ヲ  
 御憑アリ忠顯朝臣勅使トシテ長年カ武勇兼上聞ニ達スル偏御憑有ル可ク之由仰出サルト有  
 ケレハ折節又太郎ハ一族共ヲ呼集酒飲居タリケルカ弓箭ヲ取面目君奉憑戸ヲ軍門ニ曝シ名  
 ヲ後代ニ殘ン事生前ノ望也トテ此趣ヲ勅答申ヤカテ船上入進テ城櫛ヲ搆此山北ハ大山  
 連テ峙三方ハ地僻ニシテ峯ニ懸レル白雲ハ山腰ヲソ廻ケル去程ニ隱岐ノ判官大將トシテ三千  
 餘騎寄タリケレ共坂中ヨリ追下サレテ寄手多ク討レケリ去程ニ近國ノ勢共大略馳參シケリ  
 出雲守護鹽治判官高貞佐々木ノ富士名判官ト打連テ千餘騎ニテソ參リケル大山衆徒七百餘



騎淺山太郎八百餘騎ヲ始トシテ出雲伯耆安藝周防ニ弓箭ヲ携程武士共不參者ハ無リケリ去程ニ播州ヨリ赤松入道圓心子息帥律師則祐已下一族共國中ヲ靡シ數ケ處合戰打勝六波羅ヘ寄ント元弘三三月十二日ニ淀赤井山崎西邊ヲ燒散シケリ六波羅ニモ驚騷テ隅田高橋ニ在京ノ武士ヲ相副テ今在家作道西八條邊ヘ差向ケル桂川ヲ前ニシテ防ケルヲ則祐河ヲ越ケル程ニ赤松カ勢共少々越レテ六波羅大勢懸破ラレテ六波羅マテ引退其夜京中ニテ所々ニ軍アリ河野九郎左衛門ト陶山ノ次郎大將トシテ又大勢ヲ向ラレ赤松ハ暫攻戰テ引退六波羅ヘ寄事度々也此由船上ヘ聞ヘケレハ六條少將忠顯大將トシテ山陽山陰ノ兵三千餘騎ヲ京都ヘ指向ラル又君ノ第四ノ宮但馬國ニ流サレ給シヲ守護太田三郎左衛門奉取立近國ノ勢ヲ相催シ丹波篠村ヘ御出アリ四月二日ニ宮ハ篠村ヲ御立アツテ西山峰堂陣ヲ召ル御勢廿萬騎也殿ノ法印良忠ハ八幡陣取ル圓心ハ山崎ニ軍旅ヲ張レリ寄手係合テコソ寄ラルヘシ忠顯朝臣我勢ノ多ヲ憑獨高名ニセントテ四月八日六波羅ヘ寄ラレケルニ六波羅兼用意ノ事ナレハ方々ノ攻口ヘ勢ヲ差遣シ散々ヲ戰ケレハ寄手打負ケリ剩西山ノ陣ヲモ引退相摸入道此由ヲ聞大勢ヲ差上セ京都ヲモ警固シ船上ヲモ攻奉ル可シトテ一家ニハ名越尾張守高家并足利治部大輔高氏ヲ大將トシテ其勢七千餘騎四月十六日京着ス翌日ニ高氏ハ船上ヘ使者ヲ以テ御方ニ參可ク由申入ラレケリ四月廿七日ニハ八幡山崎ノ合戰ト兼テヨリ定ラレケレハ尾張守高家大手ノ大將トシテ七千餘騎作道ヨリ鳥羽ニ向ハル山崎八幡ノ官軍是ヲ聞サテハ馳向テ戰ヘトテ大渡ヲソ打越テ赤井河原ニ扣タリ赤松三千餘騎ニテ作道ヨリ寄ケリ高家馳向散々ニ戰ケ

ルカ討死シ給ケリ足利殿ハ兼ヨリ内通ノ趣有ケレハ丹波ヘ打越篠村ニ陣ヲ取近國ノ勢ヲ相催シ京都ヘソ向ハレケル官軍五月七日京ヘ寄ヘシト定ケレハ諸方ノ寄手口々ニ陣取京ハ東ニ方ヲ開タリケル足利殿二萬五千騎ノ勢ニテ押寄給ヘハ六波羅ニモ六萬餘騎ヲ三手ニ分ケリ大手搦手同時ニ軍始テ打ツ打レツ手負死人其數ヲ知ラス六波羅カタテハ難義也東一方開タリ御幸關東成奉リ重テ大軍ヲ催シ京都ヲ責可シトテ主上ヲ始進テ六波羅北南關東ヲ指落相フ南方左近將監時益ハ御幸ノ御供ニテ候ケルカ久々目路ノ邊ニテ流矢ニ中テ死ケリ北方越後守仲時察駕ノ御供ニテ候ケルカ近江番場ノ宿ニテ美濃尾張ノ大敵ノ事ヲ聞自害仲時ヲ始トシテ佐々木隱岐前司己下宗徒ノ人々四百三十二人同時ニ腹切主上ヲハ官軍取奉ル三種神器并玄象下濃二間ノ御本尊ニ至マテ先帝ノ五ノ宮方奉渡去程ニ昨日夜六波羅落ト聞ヘケレハ金剛山ノ寄手諸方ヘ散々ニ落宗トノ大將達十萬餘騎南都引退皆出家禪律ノ僧ニ成シカトモ召シ出サレテ大略誅セラレケリ元弘三五月七日六波羅落ケル事ヲ不知ケル上野國ヨリ五月五日新田小太郎義貞義助一族卅餘人宣旨ヲ三度拜之笠懸ノ野邊打出其勢僅カニ百五十餘ニハ過サリケリ越後等馳來其日二千餘騎ニ成甲斐信濃源氏五千餘騎ニテ八幡庄ニテ馳付又足利殿ノ若君千壽王殿上野國ヨリ二百餘騎ニテ打出給フ上野上總常陸武藏兵一日カ内ニ廿萬騎ニ及ヘリ鎌倉ヨリハ金澤武藏守貞將ニ五萬餘騎ヲ差副テ下河邊ヘ下サル一方ハ櫻田治部大輔兼光大將ニテ長崎次郎高重已下武藏上野ノ勢六萬餘騎ハ上道ヨリ入間河ヘ向ラル同十一日辰刻ニ武藏國小手差原ニ打菰源氏ノ陣ヲ見渡セハ其勢雲霞ノ如ク兩陣相近成テ互



時ヲ動ト作ル矢合鏑ヲ射遠程コソアレ源平ノ大勢入亂散々合戦打ツ打レツ手負死人其數ヲ知ス其日源氏ハ引退入間河ニ陣ヲ取平家モ又引退久米河ニ陣ヲ取兩陣其間僅カ廿里ナリ其夜ヲ待明シ平家ニ先ヲセラレシト源氏久米河ノ陣へ押寄平家モ定テ寄スラント待掛タル事ナレハ六萬餘騎ヲ一手ニ成テ戦ケルカ平家打負テ分倍ヲ差引退御方打負タル由鎌倉へ聞ヘケレハ相模入道ノ舍弟四郎左近大夫入道惠性ヲ大將トシ重廿萬騎差下サル其勢十四日ノ夜半計ニ分倍ニ着ケレハ平家勢力ヲ得テ進源氏平家ニ荒手加タル事ヲハ不知十五日ノ夜未明分倍押寄テ時ヲ作平家荒手大勢ト一ツニ成テ源氏ヲ中ニ取籠テ餘サスト責ケレ共電光ノ激メカスルカ如ニ戦ケリ去レモ其日打負テ源氏ハ堀兼ヲ差テ引退爰三浦大多和ノ平六左衛門尉義勝相模勢相具テ十五日夜ニ入テ源氏ノ陣ニ馳來義貞斜ナラス喜テ軍談合有テ義勝ニ被任去程ニ義勝三浦四萬餘騎カ最前ニ進テ五月十六日ノ寅刻ニ分倍川原へ押寄ル態ト旗手ヲモ下サス時ノ聲ヲモ揚ケス平家ノ勢ヲ出タシ抜カンカ爲也平家ハ數日ノ合戦ニ人馬モ疲タル上今敵寄ヘシ共不思寄ケルニヤ馬ニ鞍ヲモ不置物具モセス或酒ニ酔臥ルモアリ或遊君ト枕ヲ雙モアリ懸ケル所へ大多和と大勢ニテ馬ヲ閑々ト打近ケレハ少々騒立者モ有ケルヲ去比ヨリ三浦ノ大多和相模勢ヲ率シテ御方ニ參由聞ヘシ目出シトテサ、メキケル處ニ源氏三方ヨリ時聲ヲ動ト作テ平家ノ陣へ切テ入共時聲ニ周章迷テ馬ヨ物具ヨト遽キアヘル處へ義貞大手ヨリ切入大多和ヲ始トシテ大勢ハ搦手ヨリ切入散々ニ責ケル間平家一戦ニ破ラレテ大將四郎左近大夫入道殿ヲ始トシテ皆鎌倉ヘソ落上リケル去程ニ源氏ノ勢八十萬騎ト注セリ

此勢ヲ三手ニ分テ大館次郎宗氏江田ノ三郎行氏ヲ兩大將トシテ十萬餘騎ヲハ極樂寺切通へ向ラル堀口美濃守貞滿十萬餘騎巨福呂坂向ラル新田小太郎義貞舍弟脇屋ノ次郎義助將ノ命ヲ司其勢六十萬騎形勢坂ヨリソ向ラレケル鎌倉ニハ下河邊へ向ラレシ金澤武藏守貞將小山判官千葉介ニ打負テ上ル四郎左衛門大夫入道殿十七日ニ山ノ内へ引返ケルニ驚騒處ニ十八日卯ノ刻ニ村岡藤澤責(責イ)船片瀬十間酒屋五十餘ケ處ニ火ヲ懸テ敵三方ヨリ攻懸タレハ武士東西ニ馳違フ男女山ニ逃迷平家モ三手ニ分テ相防一方ハ金澤越後守有時ヲ大將ニテ三萬餘騎攻防ル一方ハ大佛陸奥守貞直ヲ大將ニテ五萬餘騎極樂寺ノ切通ヲ防カル一方赤橋相模守守時ヲ大將トシテ六萬餘騎洲崎ヲ防ル同日方々ノ合戦始テ其日暮ニ守時宣ケルハ足利殿ニ縁ナリトテ一家ノ人々ニ心置カル此軍ノ様ヲ見ニ運已ニ極リ又嫌疑ノ中ニ一日モ生テ人疑レハ生々ノ恥也トテ其夜自害八十餘人同時ニ自害シテ此陣破テ源氏山ノ内へ亂入極樂寺ノ切通へ向ハレケル大館ノ次郎宗氏打レテ片瀬マテ引退ト聞ヘケレハ義貞宗徒ノ兵二萬餘騎ヲ率シテ廿一日夜半計ニ片瀬腰越へ打廻テ極樂寺坂へ打臨平家ノ陣ヲ見給へハ北ハ切通ノ山高路險キニ城戸固ク調テ數萬ノ兵陣ヲ並ヒ居タリ南ハ稻村ケ崎ニテ浪打際ニ逆木ヲ繁ク引キ掛テ四五町カ程ニハ大船並櫓ヲ搔横矢ヲ射サセシト搆ヘタリ見之義貞馬ヨリ下甲ヲヌキ海上ヲ伏拜龍神ニ向テ傳承レハ日本主天照大神ハ本地ハ大日ノ尊像垂跡ヲ隱シ滄海ノ龍神ニ呈給ヘリ吾君ハ其苗裔トシテ逆臣ノ爲ニ西海ノ浪ニ漂給フ義貞令臣タル道鉄鉞ヲ取テ敵陣ニ莅其志偏王化ヲ資奉リ蒼生ヲ安セ令ント也仰願龍神八部忠義ヲ鑒ミ敵ヲ萬里ノ外



ニ退道ヲ三軍ノ陣ニ開シメ給ヘト信心ヲ凝シ祈念シテ自佩給ヘル金作ノ太刀ヲ解テ海底ニ被沈ケリ誠ニ龍神納受シ給ケン前々マテ干事無リケル稻村ケ崎俄ニ廿四町干上テ平沙正ニ渺々タリ前代未聞ノ事也夫ヨリ大勢切テ入處々軍モ是ヨリ破立テ敵鎌倉中ニ亂入所々ニ火ヲ擲タリ相撲入道殿ハ千騎計ニテ葛西カ谷東勝寺ヘ引籠給フ長崎ノ次部高重ハ武州ノ合戰ヨリ兩三日方々合戰ニ八十餘ケ度先懸敵軍ヲ靡スト云共敵ハ大勢成ルニ依テ御方打負ヌ其上方々攻口モ破ヌ太守ニ自害ヲ勸奉ラント思東勝寺ヘ馳歸相撲守自害ヲ進テ自害ヌ是始宗徒ノ一族四十三人凡此門葉タル人二百八十人各自害畢然ト雖凡四郎左近大夫入道惠性ハ諏訪木工左衛門入道眞性カ子息ニ諏方三郎盛高ハ相撲殿ノ次男龜壽丸ヲ懷取テ惠性盛高數萬敵軍中通信濃國ヘソ落行ケル元弘三年五月廿二日此日何ソヤ平氏ノ一門其恩願芳命ノ輩ヲ始トシテ鎌倉ヲ數ルニ死亡者六千餘人也元弘三五月十二日ニ都ヨリ千種頭中將忠顯朝臣足利治部大輔高氏赤松入道圓心カ許ヨリ早馬ヲ立テ兩六波羅沒落ノ由船上ヘ奏聞叡慮斜ナラス感シ思召シ同廿三日ニ船上ヲ御出アリテ腰輿ヲ山陰ノ東ヘ促サレケル早晚月卿雲客前驅後乘シ鹽冶判官高貞千騎ニテ先陣仕リ淺山ノ太郎後陣ニ打金持大和守ハ錦ノ御旗ヲ指テ左ニ候ス伯耆守長年ハ帶劔ノ役ニテ右ニ副廿七日播磨ノ書寫山行幸同廿八日法華山ニ行幸晦日ニ兵庫福嚴寺ニ朝餉處ヲ點テ御坐ケリ其日赤松入道父子四人五百餘騎ニテ參御感斜ナラヌ爰ニ一日御逗留アリ其日ノ午刻早馬二騎參テ羽書ヲ捧諸卿驚駭テ披テ見ニ新田小太郎義貞カ許ヨリ相撲入道已下此間大ニ脱文アリ六波羅ヲ責落ト云ヘ共關東ヲ攻ラル事勇大事成ヘシト叡慮

ヲ廻サレケル處此注進到來シケレハ主上ヲ始進セテ諸卿一同ニ猶豫ノ宸襟ヲ息メ傾悅ノ稱歎ヲ盡サル宜恩賞請ニ依ル可シト宣ル六月二日腰輿ヲ廻サル處ニ楠木ノ多門兵衛正成三千餘騎ニテ參向ス主上ハ御簾ヲ高卷テ正成ヲ近召ノ大儀早速ノ功偏ニ汝忠戰ニ有ト感シ被仰前陣仕六月五日東寺ニ臨幸攝政關白太政大臣大中納言八坐七辨五位六位内外ノ諸卿醫陰兩道ニ至マテ群集シテ地府ニ雲ヲ布天極ニ星ヲ列タリ一日御逗留アリテ六月七日ニ二條内裡ヘ還幸ナル又九州ノ朝敵モ即時滅亡シ六十餘州四十三日ノ中ニ靜謐シ聖運ノ至リ凡慮ニ及ビ難キ次第也

第九十七代ハ後醍醐院ノ重祚也建武四正慶ノ年號光嚴院ノ改元ナレハトテ是ヲ捨ラレテ本ノ元弘ニ返元弘三同六月十三日大塔ノ宮御入洛アリ一番ニハ赤松入道二番ニハ殿ノ法印三番ニハ四條少將四番ニハ中ノ院ノ中將數萬騎ヲ打セ其次ニ宮ハ赤地錦ノ直垂火威鎧獅子牡丹裾金物ヲ打タル草摺長メサレ兵庫鎌ノ太刀ニ虎皮ノ尻鞆入タルヲ太刀懸ノ半ニ結テサケ白篁ノ鴟羽ノ征矢ノ三十六差タルヲ等高二負成二處籐ノ弓銀ノツク打タルヲ持給フ白河原毛ノ馬ノ太ク逞キニ鑄掛地ノ鞍ヲ置厚總ノ鞆ヲカケ侍十二人ニ諸口ヲ押セテ小路狹ト歩セラル後陣ニハ湯淺山本ヲ始トシ二萬七千餘騎也其後妙法院ハ四國勢ヲ召具テ御上洛中務親王ハ土佐畑ヨリ御上洛圓觀上人文觀僧正忠圓僧正中納言藤房卿同上洛ス同四年ノ春ノ頃筑紫上總掃部助高政左近大夫貞義平氏ノ一族トシテ前亡ノ餘類集所々ニ逆黨ヲ招キ出ントス又河内國ノ賊徒等佐々目僧正ト立テ飯盛山ニ城脫歟搆ル由聞ユ伊豫ニハ赤橋ノ駿河守カ



子息駿河ノ太郎時茂ト云者有テ立烏帽子ノ峰ニ城ヲ構ル由聞ヘケレハ竹ノ僧正ヲ召サレテ  
 天下安鎮ノ法ヲ行ハル恩補ノ國々ノ事足利殿ハ武藏常陸下總三ヶ國舍弟左馬頭直義ハ遠江  
 國新田左馬助義貞ハ上野播磨國舍弟兵庫助義助ハ駿河國楠木判官正成ハ攝津國河内國名和  
 伯耆守長年ハ因幡伯耆兩國赤松圓心ニハ播州守護ヲ召上ラレ佐用ノ庄ヲ給ハル其外國々拜  
 領ノ輩多シ同四年七月ニ改元ニテ建武ニ移ル去ヌル春ノ比大塔ノ宮國々へ兵ヲ召事アリ内  
 々ハ高氏ヲ罰セントノ御企也此事准后ニ屬シテ高氏奏サレケルハ兵部卿ノ親王帝位ヲ奪ヒ  
 奉ントテ國々へ兵召ニ宣旨ヲ下サレ候由申入ラレケレハ國々へ御尋有ケルニ近國ヨリ宣旨  
 ヲ上覽ニ備ケレハ君大ニ逆鱗アリテ此宮ヲ流罪シ奉ル可シトテ結城判官親光伯耆守長年ニ  
 仰テ召捕奉テ馬場殿ニ押籠宮ノ御心中押計リ奉可シ五月三日直義方へ渡鎌倉ニ下奉テ二階  
 堂ノ谷ニ岩藏ヲ堀テ居進南ノ御方トテ女房一人計副給ヘケリ建武二年春比出雲鹽冶判官高  
 貞カ許ヨリ龍馬也トテ月毛ナル馬ヲ奉ル三月十一日八幡行幸アリ連ニ藤房諫言奉シカトモ  
 敵慮ニ背シカハ行幸ノ御共仕テ翌日遁世シテ大唐へ渡ト聞ヘシ也相摸入道ノ舍弟左近大夫  
 入道惠性ハ鎌倉ヲ落奥州へ下リ潜ニ京ニ上西園寺殿ヲ奉憑田舍侍ノ初召仕ハル體ニテ置  
 レ刑部少輔時澳ト名ヲ替テ謀叛ノ計略ヲ廻サレケル京都ノ大將龜壽丸相摸次郎時行ト號  
 シ關東ノ大將トシテ甲斐信濃勢ヲ催シテ名越ノ太郎時兼ヲ北國ノ大將トシテ越中能登ノ勢  
 ヲ催シ進ヘキ由ヲ議定シ主上御遊爲御幸ヲ申成テ我亭ニテ失奉ル可シト支度シテ御遊ノ案  
 内ヲ申サレケリ主上己ニ明日行幸ノ由仰出サル其夜夢想アリ女房御前ニ參リ申ト思召御夢

ハ覺ケリ去共議定ノ上ハトテ行幸有ケルニ神泉苑へ寶輦ヲ寄ラレタルニ池水俄ニ變白浪夥  
 シ怪ク思召處ニ竹林院ノ中納言公重卿馳參申シケルハ西園寺大納言公宗隱謀ノ企有テ臨幸  
 ヲ成由或方ヨリ告申候也還幸成テ橋本ノ中將文衡入道ヲ召レテ御尋有ル可シト奏セラレケ  
 レハ御夢ト申シヤカテ還幸アリテ結城判官ト伯耆守トヲ差副西園寺へ遣ス其勢又千餘騎押  
 寄大納言ハ此間ノ隱謀ハヤ顯ケリト思中々不驚橋本中將ハ落ヌ勅使大納言ヲ召捕奉リ文衡  
 入道拷問シケルニ殘ル所ナク白狀ス此上ハトテ大納言流罪ニ定シカ秘ニ被誅又宮ニ御弟ニ  
 テ御ケルカ掛ル事ヲ企テ天罰ヲ蒙給キ京都ノ支度相違シケルニ國々ノ凶徒等ハ止事ヲ得ス  
 一定シタル事ナレハ東國北國蜂起ス就中東國大將相摸次郎時行ハ相州次男也嫡子萬壽丸ト  
 云ハ叔父五大院ノ右衛門預ケシヲ相摸滅亡ノ刻ニ新田返忠ノ失セケリ去テ此男時行諱方三  
 郎三浦介入道同若狹五郎判官葦名入道ヲ始トノ坂東ノ大小名五十餘人與力シケレハ其勢ハ  
 二萬餘騎鎌倉へ責上小山判官秀朝澁川ノ刑部大輔武州ニテ出合散々ニ攻戰秀朝打負テ自害  
 ス左馬ノ助直義ハ此由ヲ聞テ無勢ニテハ中々惡カルヘシト將軍ノ宮ヲ具足奉リ八月廿六日  
 ニ鎌倉ヲ落ラレケル直義淵野邊甲斐守ニ宣ケルハ相摸次郎ヲ亡サン事輒スカルヘシ兵部卿  
 親王ヲ失奉ラスンハ當家可惡藥師堂ノ谷へ參テ失ヒ奉ル可シト云ハレケレハ甲斐守宮ノ御  
 座ノ所へ參雲上忿劇ノ間邊土へ暫御下候ヘト申サレ候トテ御與ヲ庭ニ昇居籠ヲ御出有ケル  
 カ汝我ヲ失ヘトノ使ニテソ有ラン心得タリトテ甲斐守ト無寸ト與給キ甲斐モ健者也與奉ケ  
 ルニ宮日比土樓御ケレハ御身スシミテ叶ハセ給ハス與伏奉テ御頭ヲカキ奉ラントシケルニ



刀先二寸計嚼切セ給テ御口ニ含給御頸ヲ給テ直義ニ見セ奉ラス捨テケリ直義鎌倉ヲ落テ上洛セラレケルカ駿河國入江庄海道一ノ難處也入江ノ左衛門春倫ヲ憑レケルニ子細ナク憑マレ奉テ御方ニ參ス此等ヲ召具テ三河マテ上矢矧ノ宿ニ陣ヲ取京都へ此由ヲ申サレケリ諸卿議奏アリテ急足利宰相高氏ヲ討手ニ下サレケリ高氏申サレケルハ去ル元弘御方ニ參依テ天下ノ卒皆官軍ニ屬勝事ヲ得タリ是偏高氏カ武功ト云ツ可シ今度征夷將軍ノ任ハ當家代々ノ重職也朝ノ爲身ノ爲望深シ次大亂ヲ即時ニ鎮ルハ士卒ノ功也又奏聞ヲ經遲々候ヘシ東八ヶ國ノ管領ヲ許ノ直ニ軍勢恩賞ヲ行ヘシ此ノ兩條御免ヲ蒙早速罷下ル可シト申入ラレケレハ勅答ニ東八ヶ國ノ事子細有ル可ラス征夷將軍ノ任ハ今度朝敵對治功ニ依可キ也トテ忝天子ノ御諱ノ字ヲ下被レテ尊氏ト改ラル面目ノ至也尊氏京ヲ立シニハ其勢僅カニ五百餘騎成シカ近江美濃尾張ノ勢馳付三河ニテ三萬餘騎ニ成ニケリ直義勢ヲ并テ五萬餘騎取返シテ又鎌倉參向相摸次郎是ヲ聞テ名越式部ノ大輔大將トシテ東海東山兩道責上ラントテ其勢三萬餘騎八月三日鎌倉ヲ立ントシケル夜大風吹家々ヲ破ケル間爲方無テ軍勢五百餘人大佛殿ニ逃入テ居タリケル大佛殿虹梁棟柱微塵ニ折レテ倒ケル間有ケル者五百餘人一人モ殘ラス打殺レケリ戰場ノ門出ト各忍ヒシノヘリ去共大儀ヲ企ル上ハ式部大輔鎌倉ヲ立八月七日遠江佐夜中山ヲ越ヘ橋本ニ陣ヲ取ル相公此由ヲ聞同八日ニ平家ノ陣ヘ押寄テ終日鬪ケルニ平家打負引退是始數ヶ度ノ合戰ニ平家打負ケリ源氏ノ先懸ニハ仁木細川ノ人々也箱根山コソ海道第一ノ難處ナレトテ平家爰ニテ固ク支ヘシヲ佐々木佐渡判官入道々廣身命ヲ捨馳上リ散

々ニ戰テ爰ヲモ打破テ夫ヨリ鎌倉マテ攻懸ラレテ諏方三河守ヲ始トシテ宗徒ノ大名四十三人大御堂ノ内へ走入テ各自害シケリ名越太郎時兼カ北陸道ノ大將三萬餘騎ニテ京ニ責上シニ越前加賀トノ堺大聖寺々云所敷地上木山岸爪生ノ者共同心シテ打散シケレハ爰ニテ散々ニ成ニケリ是ヲ中前代ト云也足利相公勅許ニ任東八ヶ國ヲ軍士ニ被行ケルニ元弘ノ初相摸入道追伐時新田義貞ノ拜領地又士卒ニ申行ハレタル所々ヲ今度尊氏支配ナリケレハ人々ヲ語テ尊民卿カ叛逆ノ企有由ヲ叡聞ニ達ス其上兵部卿大塔親王ヲ失ヒ奉ル事偏隱謀ノ初也ト頻ニ奏ケレハ逆鱗有テ又尊氏直義等ヲ對治スヘキ由ノ宣旨ヲ下サル一ノ宮中務卿親王東國ノ管領奉成新田左兵衛督義貞ヲ大將軍トシテ東國へ下サレケリ是新田足利ノ中遠根元也トソ建武二年十一月十九日義貞京ヲ立テ鎌倉へ進發ス其勢七千餘騎大小名三百餘人其勢六萬餘騎東海道ヲ下ル東山道搦手ニテ大知院ノ宮洞院ノ左衛門督家世ヲ始テ六千餘騎黒田ノ宿ヨリ東山道へ向ハル足利相公ハ君ノ逆鱗有所ハ兵部卿親王ヲ失奉ル故也ハ尊氏カ知サル所也退陳謝ヲ申ヘシ夫モ不叶ハ出家ノ體ニ可成不忠ヲ不存由ヲ脱文アリ子孫殘ス可キニ非スト有ケレハ一家ノ人々皆遞レ終給テ左馬頭殿ト御談合アリテ鎌倉ヲ立給フ吉良石堂桃井細川斯波仁木ヲ始トシテ外様ノ大名ニハ小山判官佐々木佐渡判官入道土岐入道三浦佐竹小田宇津宮武田河越高坂始トシテ其勢二十萬六千餘騎十一月廿三日鎌倉ヲ立同廿七日三河國矢矧ノ宿ニ着ニケリ義助六萬餘騎ニテ押寄散々ニ攻戰直義軍利非スノ而鷺坂へ引退義貞彌大勢ニ成責ケレハ爰ヲモ引退駿河手越ニ陣ヲ取散々ノ合戰爰ヲモ引退箱根坂ニ支テ合戰同十二月



十一日兩軍相支處ニ鎌倉勢土岐存幸三浦因幡守赤松筑前守馳加ツテ竹ノ下ヨリ野七里ノ敵ヲ打靡シカハ義貞ノ大勢散々ニ成ニケリ箱根坂ノ軍破テ義貞引退勝乘テ直義攻上去程ニ官軍又利失テ所々ノ合戦ニ打負テ尾張國阿子賀洲保マテ引退十二月十日讚岐ヨリ高松二郎頼重注進足利一族細川卿律師定禪去月廿六日旗ヲ近國凶徒等悉順之由申ケリ同十一日備前國住人兒島三郎高德カ許ヨリ注進シケルハ去月九日當國ノ住人佐々木三郎左衛門尉信胤已下國人等定禪カ語ヲ得テ福山ノ城ニ楯籠由申ケリ同日ニ丹波國ヨリ確井丹波守盛景申入ケルハ十二月十九日當國住人久下彌三郎時重以下國人等悉御敵ニ成ヌト注進ス去程ニ尾州へ飛脚下先都ヲ守護有ル可シト有ケレハ左兵衛督義貞上洛セラレケリ尊氏將軍ハ八十萬騎ノ勢ヲ牽シ東海道押テ上建武三年二月七日近江國ニソ着ニケル卿律師ハ四國中國ノ勢ヲ率テ正月二日播磨ノ大藏谷ニ着赤松信濃守京ヨリ逃下ケルニ行合テ互ニ喜ヒ元弘佳例也トテ赤松前陣仕其勢二萬餘騎正月八日芥川ニ陣ヲ取正月九日辰刻將軍八十萬餘ノ勢ニテ大渡ノ西ノ橋爪ニ押寄タリ橋桁ヲ少々渡テ軍アリ筏ヲ組ンテ渡押シ破ラレテ不渡懸所ニ卿律師山崎ノ軍ニ打勝テ夫ヨリ軍勢京ニ攻入ケレハ義貞已下ノ人々モ東へ引返大渡ノ手モ京へ亂入義貞主上ヲ具足奉リ比叡山へ遷幸ナル同十一日將軍八十萬餘騎ニテ入洛叡山ヲ責ラル可トテ先三井寺へ軍勢ヲ差遣ケリ爰奥州ノ國司源中納言顯家卿ハ大勢ニテ上ケルカ東坂本ニ着此勢ニ力ヲ得テ義貞正成同心シテ三井寺へ押寄テ火掛ケレハ防戦ニ堪ヘス將軍方ハ京へ引退同十二月廿七日晦日ノ度々ノ合戦ニ又將軍方利無ク中國へ發キ給ケルカ熊野別當法橋道有カ

未童ノ體ニテ藥師丸トテ有ケルヲ京ニ留置持明院殿ノ院宣申賜テ君ト君トノ御爭ニ天下ヲ成ント仰有テ日野中納言殿へ進ラル我攝州へ打越へ顯家卿義貞十萬餘騎ニテ京ヲ立テ攝州芥川ニ着二月五日也六日手島河原ノ合戦度々ノ軍ニ將軍方利無シカハ大友カ參タル舟ニ召テ筑紫へソ落給フ軍勢十萬餘騎有シカ御供三百騎ニハ過サリケリ將軍ハ棟堅ノ大宮司ノ許へ入御小貳入道妙惠ヲ御憑有ケルニ懸テ領掌申所ニ一族共俄ニ心替シテ官軍ニ成シカハ妙惠ハ自害ス去程ニ菊池大勢ヲ以寄來將軍己ニ自害セントシ給ケルヲ直義諫申テ多々良濱へ打出給フ直義香椎宮奉拜御祈念有刻鳥木ノ枝ヲ喰ヘテ飛來直義冑上落シケリ當宮ノ擁護也憑モシクテ馳向給フ仁木ノ越後守大高細川大友島津島山上杉已下三百騎計也敵三萬餘騎也シカレ軍ノ習敵打負テ引退御方勝ニ乘九州打順四月廿六日ニ太宰府立同廿八日纜ヲトキテ五月一日安藝嚴島へ船ヲ寄三日參籠其結願ノ日三寶院ノ僧正持明院殿ヨリノ院宣ヲ持下ル尊氏所願成就シヌト喜給テ四日ニ嚴島ヲ立給ニ四國中國勢馳參新田義貞備中備前城共責由聞へケレハ左馬頭直義大將トシテ廿萬六千騎ノ勢ヲ陸路上ラレ將軍ハ兵船七千餘艘ニテ海上ヲ上ラル三月四日新田左中將義貞中國對治ノ綸命ヲ蒙テ下向セラル中國ノ勢付テ六萬餘騎ニ成ニケリ赤松頼重テ十余日逗留ス其隙ニ白旗ノ城ヲ拵ラヘテ楯籠義貞ハ此城ヲ取卷數日責ケレ落ス去程ニ將軍大勢ニテ責上リ給ト聞テ義貞ハ兵庫ニ引退主上大ニ驚給テ正成ヲ召シ急兵庫へ罷下テ義貞ニ力合ス可シト仰下サレケレハ正成畏テ申旨有ケレハ勅定ノ上ハトテ下向シケルカ思子細ヤ有ケン嫡子正行カ十一歳ニ成ケルヲ河内へ返シ様々ノ庭訓ヲ



殘シケリ正成義貞ニ奉向敬慮ノ越愚意ノ旨様々奉語去程ニ五月十五日ノ辰ノ刻ニ澳ヨリ數萬ノ船順風ニ帆ヲ揚漕來陸ヨリ色々ノ旗幾千萬ト云事モナク數萬ノ軍勢寄セ來ル義貞モ大敵ヲ防ントス澳ノ船ヨリ大鼓ヲ鳴時ヲ作レハ歩路五十萬騎請取テ聲ヲ合官軍モ又五萬餘騎一動ニ動ト時ヲ作ルニ天地モ碎ケ落坤軸モ折領計也正成ヲ始トシテ七十餘人自害ス義貞ハ尊氏直義湊河ヨリ上給ニ掛合散々戰給シニ打死セントシ給シヲ義助諫ニ依テ上洛セラレタリ義貞六千餘騎ニ打成テ上洛セラレケレハ五月廿九日主上ハ三種ノ神器ヲ先立テ龍駕山門へ廻サル月卿雲客ヲ奉始惣大將義貞子息越後守義顯脇谷ノ左京大夫義助ヲ始トシテ一家大小名其勢六萬餘騎供奉セララル本院持明院殿ハ兼テ尊氏御内通ノ事有レハ日野中納言資名三條ノ中將實繼供奉ノ東寺へ遷幸ナル將軍斜ナラス悦テ本堂ヲ皇居ト定山門責ラル可キ議定有テ六月二日大手搦手五十萬騎差遣ス大手ハ吉良石堂大將トシテ廿萬騎大津松本園城寺ニ陣ヲ取搦手ニ仁木細川大將トシテ十萬騎今道越へ向坂本へハ高豐前守大將ニテ廿萬騎赤山下北白川ニテ支ヘタリ方々攻口ノ合戰數度高名豐前守師家ハ虜レテ唐崎首刎ラル六月五日同廿日マテ度々ノ手負死人其數ヲ知ス其後京都へ官軍寄來事度々也去程尊氏卿勳テ主上へ使者ヲ以密申サレケルハ義貞カ讒言ニ依テ元弘ノ始大功ヲ致候シモ徒ニ罷成候ヌ所詮宥免ヲ蒙御方ニ參聖運ノ萬歲ヲ仰ヘシ然密ニ還幸成奉ヘシト奏サルレハ則勅答有テ還幸ニ定ヌ義貞ハ申旨有リト云へ共一宮ヲ供奉仕テ越前ニ下ル可トテ已腰輿ヲ京洛へ廻サル直義御迎ニ參テ主上ヲハ花山院入進四門ヲ閉一ノ宮ニ天子ノ位讓テ義貞供奉仕テ越前金ヶ崎ニ籠

給フ主上御位ノ義モ無テ御ケレハ同四年八月廿八日忍テ花山ノ院ヲ御出有テ大衆御憑有テ吉野へ還幸成ヌ將軍ヨリ越前大將ヲ下サル同年十一月八日ヨリ所々ニ出テ合戰日夜ニ不絶曆應四康永三貞和五

第九十八代持明院光嚴後伏見院ノ皇子光明院本下於建武四年六月十日即位建武五年三月六日ニ北國ノ大勢金崎ヲ取卷事年内ヨリ成ケレハ兵糧ニ攻困歟ル由聞ヘケレハ攻口ヲ固守ケル城内ノ大將新田越後守義顯也義貞義助計略ノ爲ニ同國杣山城へ密忍出御ケリ高越後守師泰金崎大將成ケルカ城攻タル由聞四方同時責ケレハ城中ノ人々出合散々ニ責戰太勢切入ケレハ叶ハスシテ一宮中務卿親王ヲ奉始越後守義顯己下軍兵八百六十七人自害打死同五年十月三日改元アツテ曆應ニ移十一月五日除目尊氏ハ正三位官大納言ニ遷ル征夷大將軍ニ成直義叙從上四品ニ官ヲ宰相ニ任ス義貞義助ハ金崎没落ノ後所々隱御ケルカ何マテ角テハ有ルヘキトテ敗軍ノ兵ヲ集テ國中へ打出ケリ又兵三千餘騎也此事京へ聞ヘケレハ足利尾張守高經大將ニテ北陸道七ヶ國ノ勢ヲ下シ所々ニ於テ合戰數度也義貞ノ郎等畑ノ六郎左衛門時能ト云者加賀國人等ヲ語テ國中ノ城共數ヶ所打落又諸國宮方起中ニモ奥州ノ國司又五十四郡ヲ催シ十萬餘騎ニテ八月十九日白川ヲ立下野打越鎌倉ノ管領ニハ足利左馬頭義詮御ケリ上杉民部大輔憲顯細川阿波守和氏已下武藏相摸勢八萬餘騎差下サル利根川ニ於テ散々ニ戰鎌倉勢利無シテ引退爰芳賀兵衛入道禪可ハ主ノ少將入道公綱カ次男加賀壽丸ヲ大將トシ將軍方へ馳付ケリ相摸次郎時行モ伊豆國ヨリ五十餘騎ニテ管根ニ陣ヲ取義詮未十一歳ニテ御



ケルカ一ト軍セテ鎌倉ヲ落事有ルヘカラストテ待給所ニ國司勢新田左中將ノ次男德壽丸勢ヲ并十萬八千餘騎十二月廿八日ニ鎌倉ヘ寄ケリ散々合戰及處ニ斯波三郎杉本ニテ謀ケレハ是ヨリ陣破軍勢亂入シケレハ大將左馬頭殿ヲ具足奉リ高上杉己下人々思々ニ忍ケリ顯家以下人々ハ正月八日ニ鎌倉立上洛ス其勢五十萬騎也其後鎌倉勢方々ヨリ馳集テ三萬餘騎ニ及ヘリ國司後攻ニ上ル勢道ヨリ馳付テ五萬餘騎成美濃國青野カ原ニテ後詰勢國司ノ勢掛合テ合戰ニ及土岐頼遠桃井直常芳賀兵衛入道高上杉ノ人々散々戰テ被疵重テ都ヨリ高越後守師泰大將トノ近江源氏ノ人々同心ニ馳下テ二月六日近江國黑地川ニ陳ヲ取國司一ト軍ノ伊勢ノ國ヘ打越伊賀路ヲ經テ奈良ニテ合戰數度自夫ヨリ攝州安部野ニテ國司滅亡ス建武五年五月二日義貞六千餘騎ニテ越前府ヘ打出所々城ヲ打落由聞ケレハ顯信卿敗軍ノ兵ヲ率シテ八幡山ニ楯籠處ニ洛中勢數ヲ盡シ發向シテ城ヲ圍事數日也ケレハ吉野ノ主上忝モ宸筆ヲ以其堺ノ合戰ヲ閣テ京都ノ征伐ヲ可急八幡陣危ニ臨メリト遊サレタリ源平何朝敵ヲ平クト云共宸筆ノ勅書ヲ下サレタル其例ナシ超涯ノ面目也夜ヲ日ニ繼參上ヲ急ク所ニ八幡城落ヌ同七月二日足羽合戰ト催サレケレハ國中官軍打集黑丸城ヲモ責ントスルニ藤島城責ントスルニ細川出羽守鹿草ノ彦太郎大將トシテ藤島ノ寄手ヲ追討ント三百餘騎ニテ横畷ヲ廻ケルニ義貞端無行合タリ細川カ方ハ歩立ニテ楯ヲ突射手ヲ集テ射サセケルニ義貞乘給ヘル馬射サセ倒ケレハ義貞弓矢ノ筈打敷テ起揚ントスル處ニ白羽ノ矢一眞向テハツシ眉間ノ只中ニ立ヌ急所手成ケレハ手ツカラ刀拔テ自吭ヲカキ切深泥ノ上ニ臥給ヌ越中國住人氏家中務丞重國

首ヲ取黑丸城ヘ馳歸此由ヲ申ニ尾張守若新田ニテヤ有ラン夫ナラハ額ニ疵有ヘシトテ洗セテ見給ニ疵有太刀ヲ取寄テ見給ニ滿仲ヨリ傳タル是(藤)丸鬼切也サテ首ヲ朱唐櫃ニ入テ京ヘ上セリ曆應元年ニ四夷八蠻悉起リシカハ聖運開ヌト喜合ケル處ニ顯家卿義貞卿モ其流矢ノ爲損命シ給シカハ南方ノ人々モ憑方モ無リケルニ剩同二年ノ八月十六日遂崩御成ケル祇候ノ人々皆々散々成ケリ南方ニハ建武ヨリ改元アリテ延元ト申延元三年ニ當也同十月十三日先帝第七ノ宮天子ノ位ニ即セ給後村上ノ院ト號延元二年九月十八日脇谷刑部卿義助ハ美濃國根尾ノ城破テ吉野殿ヘ參上ス曆應三年四月二日伊豫國ニテ死シ給ヘリ四國合戰數日也曆應五年四月廿七日ニ改元アリテ康永元年ト云三月廿七日法勝寺九重塔炎上金堂講堂等寺内悉燒失花頂山五重塔醍醐寺七重塔同時燒天狗鬼形者雲上ニ見ケリ希代珍事也同四年八月ハ天龍寺供養也例ノ山門ヨリ妨申ケレハ當日ハ御幸ナシ翌日御結縁行幸アリ貞和四年九月十七日細川陸奥守顯氏藤井寺ノ合戰ニ打負楠木ハ少勢成シカ共勝ニ乘去共細川ハ天王寺ニ楯籠山名伊豆守時氏ヲ大將ニテ十一月廿三日六千餘騎ヲ河内ヘ差下サル安部野ノ合戰ハ同廿六日也南方ノ軍難義也トテ執事武藏守師直越後守師泰兩大將ニテ發向ス諸大名兩手著都合其勢十六萬騎也此勢四條河原ニ陣ヲ取楠木帶刀正行次郎正時吉野殿ニ參暇ヲ申其勢二千餘騎ニテ四條繩手ヘ押寄テ散々ニ戰テ兩人打死敵味方死亡事其數ヲ知ラス和田新發意モ討レケリ此ヲ討湯淺ノ八郎ハ狂死ニ死ニケリ去程ニ師直五萬餘騎ヲ率ノ吉野山ヘ押寄ケリ佗所遷幸ナレハ神社佛閣共云ス悉燒散テソ歸洛シケル淺猿シカリシ罪業也同五



年正月五日四條繩手ノ合戦ニ和田楠木カ一類皆亡フ師直カ過分日來ニ超過セリ爰妙吉侍者ト云僧有テ直義ニ秘ニ申ケルハ師直師泰對治セラレテ天下我任候ヘカシ彼者共奮前代未聞也ト連々申サレケレハケニモトヤ思召ケン師直ヲ誅セン支度シ給ケルヲ粟飯原ト云者返リ忠シテ師直ニ知セケリ直義上杉島山大高ナトニ談合有ケルカ事顯テ師直ハ小路殿ヘ寄ントスト聞ヘケレハ將軍聞召シテ小路殿ヲ呼御申有テ將軍ノ御所ニ御坐有ケルヲ師直大勢ヲ以將軍ノ御所ヲ取卷奉小路殿ヲ賜ラント頻ニ申ケレハ將軍大ニ御怒有テ仰ケレハ去ハ上杉伊豆守ト島山大藏少輔ヲ給ヘキ由申ケレハ兩人ヲ被出流罪セヨト仰ケレハサン候トテ越前ヘ遣シテ死ニ行ヌ直義尙シ角テハ惡カリナントテ御出家有テ錦小路堀川ニ幽ナル栖ニソ御シケル貞和五年義詮御成務關東ハ基氏御下向同年三月廿八日改元アツテ觀應ト號第九十九代崇光院仁益光嚴院ノ一ノ御子觀應二文和四延文五康安一觀應元年錦小路殿直都ヲ落和州越智ヘ入給ヘハ同十二月二日上杉民部大輔憲顯上州ヨリ打立責上同年伊勢國ヨリ寶劔出現ス日野大納言資明卿ノ申沙汰アツテ已入洛有シヲ坊城大納言經顯卿執權トテ申破キ本主下野阿闍梨圓成ニ返サレケリ依之ニ經顯御家亡給ケリ同二年二月十九日吉野宮天王寺ヲ立八幡山ニ寸同廿日京合戦武家打負江州引退同閏二月廿日新田兵衛佐同武藏守鎌倉ヘ責上將軍與新田武藏國府原ニ於テ合戦尊氏打勝同廿八日信州幸坂宮并新田武州高麗原合戦亦尊氏打勝同二月近江ヨリ義詮都ヘ入同廿五日武家討手八幡城攻ケルニ同五月十日御敵治沒歟落第百代後光嚴院仁彌光嚴院ノ二御子文和四延文五康安一貞治六文和三年六月九日吉野宮方都

ハ打入武家打負美濃國垂井庄成行幸新千載爲定卿奉之新拾遺爲明卿奉之同七月廿八日基氏島山國清武州ノ入間川御發向同廿九日尊氏御上洛同九月廿四日主上并武家人武同十月二日義詮中國ヘ御發向同十二月廿四日主上江州武射寺ヘ行幸同四年正月廿一日左兵衛佐直冬山名時氏挑井直常己下東寺籠同二月六日山崎甲内義詮與山名楠木合戦山名打負引退同七月將軍東山ニ陣ヲ召ル同三月十二日東寺沒落ス延文三年九月十九日新田兵衛佐義興武州丹波河ノ船中ニテ自害同四年十月七日ニ島山國清坂東軍兵引率シテ南方對治ノ爲ニ上洛ス同十二月廿二日將軍義詮南方御發向五年四月紀州龍門城攻落同晦日河内龍善寺城沒落同五月九日東條楠木城攻落同廿八日將軍御上洛康安元年十月廿二日島山入道々誓關東落豆州神甘ノ城ニ籠降參後ハ南方頭陀ス同十二月七日主上將軍江州御下向同十九日入洛貞治元年八月十六日及數度合戦若犬丸退散基氏豆州御發向同九月十八日島山降參又鎌倉ヨリ亦逐電康安當年六月ヨリ十一月マテ早ノ五穀モ悉枯大地震モ日ニ二三度宛不止江州湖モ三丈六尺干テ様々ノ不思議アリ諸方ノ宮方國々ニ蜂起セリ細川相摸守清氏モ朝敵ニ成右馬頭武州賴春モ討レケリ貞治元年二月主上還幸同二年八月廿日宇津宮退治ノ爲ニ基氏御發向有芳賀伊賀守高貞八百餘騎ヲ率シテ武州若林ニテ馳付奉リ散々合戦ニ及高貞打負テ引返ス基氏對治ノ爲小山祇園城ヘ入御宇都宮氏綱降參ス同三年十二月廿日春日御神木斯波大夫入道々朝カ宿所七條東洞院奉振同六年十二月義詮御逝去同年四月廿六日基氏御逝去應安元年六月十七日武州河越合戦同八月六日宇都宮御對治九月廿日降參永安寺殿氏滿御代也



第一代雄仁今上ハ後光嚴院一御子應安七永和四康曆二永德三至德三新後拾遺爲重卿奉之  
應安七年十二月七日春日御神木歸坐永和元年十二月九州合戰御方打勝同三年正月十三日又  
九州合戰菊池打死七月十一日探題今川少貳ヲ打康曆二年小山下野守義政爲御退治氏滿御發  
向降參其後永德二年四月十三日義政小山城ヲ落糟尾山ニ於自害至德二年六月義政子若犬丸  
小山城打入鎌倉御所六月十八日御發向數度合戰ニ及ヒ若犬丸退散

第百二代幹仁雄仁皇子嘉慶二康應一明德四應永卅四嘉慶二年四月十八日穴戶ノ男體城沒落  
小田一族等楯籠上杉中務少輔、追禪助大將ト爲テ對正康應元年卯月十三日鎌倉前濱血ニ成  
リヌ寶治元年六月血成三浦亡<sup>●</sup>和五年八月十四日ニ血成高武州帥直御所卷セシ也明德二年  
十二月晦日山名隆興守氏清已下一家悉御敵成八幡ヨリ京へ攻入討死鹿園院太政大臣義滿則  
時御對治氏清當日打死應永元年南方帝當今御合體アツテ御入洛サカノ大覺寺ニ皇居三種神  
器内裏へ奉飯入同三年二月十三日又小山若犬丸小山城打入同十八日鎌倉殿白河關御發向田  
村人々沒落同四年正月十五日小山若犬丸奧州會津自害子息二人召上ラレ六面澳へ流サル氏  
滿法名道仙永安寺殿ト號同五年十一月四日鎌倉殿御逝去同十年六月大内介義弘入道御敵ト  
成長州ニ馳下數千騎ヲ相催シテ十一月八日和泉國境ノ濱兵船三百餘艘皆岸ニ着即時御勢差  
遣數度合戰ニ及フ同十二月廿一日攻落義弘自害シ給フ大相國八幡ヨリ歸洛同十五年正月十  
八日野州那須山燒崩同日硫黃空ヨリ降常州那珂河硫黃<sup>本マ</sup>五六六年也同十六年五月六日大  
相國薨御<sup>義滿</sup>鹿園院殿ト號<sup>法名道雄</sup>同十五<sup>本マ</sup>七月廿二日鎌倉御所御逝去<sup>兼勝</sup>勝光院殿ト號將軍義持

同十七年庚寅正月廿一日又那須山燒崩麓里打埋人百八十餘打殺牛馬其數ヲ知ラス同日天鳴  
事夥雷ノ聲ノ如ク空ニハ雲<sup>本マ</sup>大島モ鳴勸狀ニハ天狗動ト云ヘリ同十九年正月四日大星  
月中ニ居兩光赤同七月三日大風

第百三代當今御即位仙洞幹仁皇子治十六年應永卅四正長一永享<sup>本マ</sup>同廿二年六月十三日日吉神  
輿入洛々中大雪降同廿三年九月九日伊豆大島燒同十月二日新御堂御所<sup>兼隆</sup>永安寺殿次男乙御  
所清<sup>兼滿</sup>兼御子上杉右衛門佐入道禪秀勸申ニ依御旗揚給フ鎌倉殿管領上杉安房守憲基カ亭  
佐介へ入御同六日合戰御方打負然間鎌倉殿駿州へ御進發瀨名川與安樂寺御坐安房守并佐竹  
左馬助義憲兩人越後へ下向候同十二月十五日義憲越後ヨリ打出同十九日臼井坂越シ上州武  
州數ケ度ノ合戰打勝テ正月十一日ニ鎌倉入給フ滿隆并殿御所禪秀以下六十餘人正月十日雪  
下於テ自害同十七日鎌倉殿還御同廿六年七月十五日九州探題澁川左京大夫<sup>兼滿</sup>注進狀云蒙古  
高麗引合兵船五百餘艘對馬國押寄ル彼島打取之處探題并小貳以下兵共押寄散々合戰ニ及之  
刻天地震動大風吹雷鳴神變種々中女人御方ノ船ヨリ出多ノ敵船ヲ覆ス刺蒙古ノ大將ノ弟ヲ  
虜スト小貳注進ス不思議神變ト云々同廿七年七月廿日卯時ヨリ巳ノ時マテ瓦子相賀鹽干事  
九度魚多ク打上ラル同八月十日鎌倉大地震十七度同十二月二日洪水人也同廿九年閏十月十三日  
佐竹上總入道<sup>兼常</sup>蒙御不審ヲ比企ノ谷法花堂ニテ自害家人十三人討死子息一人同卅年五月廿  
八日鎌倉殿ニ小栗并眞壁御退治爲ニ結城マテ進發同八月二日小栗沒落眞壁同前五日宇都宮  
御退治同卅二年二月廿七日京都方御所御逝去同月鹿島浦ニ鯨寄事數千疋ト云ヘリ同九月八



日鎌倉御所炎上又八幡宮ニ狐鳴又今宮傍ニ天狗大木ヲ以テ家作ト云ヘリ同卅三年正月十八日日光山々上大水出テ坊共數ヶ所押流御橋落河打埋正長元年正月當今崩同正月十八日大將殿持御逝去仍御舍弟青蓮院御遺跡相續シテ左大將殿ト申御名乘義教卅五戌年生當年飢饉餓死者幾千萬ト云數ヲ知ラス鎌倉中ハ二萬人ニ及ト聞ヘ三日病同一年有改元永享元年ト有シカトモ鎌倉ニ用ラル所三年ニテ正長十一嘉吉四文安四寶德三亨德四康正一長祿ト有シ

第百四代今上仙洞幹仁御養君伏見院ノ皇孫御年二宮八歲永享二年庚戌十一月御受禪

永享壬子三月十二戌時大地震同八月大將唐船被立御一見ノ爲ニ兵庫へ御成其次須磨明石マテ御成同十月富士御遊覽ト爲テ十八日駿州今川ノ總州御會申御沙汰有リ凡京都ヨリ駿州マテ道作所々ノ御所國々ノ守護其經營絕常篇也同五年癸丑九月十六日大地震鎌倉築地崩極樂寺ノ塔ノ九輪落テ惣シテ唐物共多損大山ノ二王ノ頸落前代未聞也同六年甲寅正月十六日大地震如來御入滅至于應永卅四年丁未二千三百七十九年

大同元年<sup>丙戌</sup>至々々々己未六百十九年

延喜元<sup>辛酉</sup>々々々々 五百廿五年

承久三<sup>辛巳</sup>々々々々 二百六年

安元<sup>庚寅</sup>々々々々 百五十年

寬正六文正一應仁二文明十八長亨二延德三明應九文龜三永正十七大永七亨祿四天文

神明鏡下卷終 以一本再校了

明治三十五年三月天文九年庚子臘月拾五日於松庵書之云々の奥書ある古本と以て三校せり行間小字にて傍書せる者即これなり

近藤瓶城  
近藤圭造

神皇正統錄上

天神七代

第一國常立尊

陽御神也天地開始之時空中生一物其狀如葦牙便化爲神即此尊是八頭八手足腹尾如大蛇在五行之德御年數凡百千億萬歲而無始无終

第二國狹槌尊

陽御神也御年數凡八百億萬歲

第三豐斟淳尊

陽御神也御年數凡八百億萬歲

第四泥土煮尊

陽御神也

沙土煮尊

陰御神也

二神御年數凡二百億萬歲

第五大戸道尊

陽御神也

大苦邊尊

陰御神也

二神御年數凡二百億萬歲

第六面足尊

陽御神也

惶根尊

陰御神也



二神御年數凡二百億萬歲

從泥土養尊至面足尊三代雖在男女之形无婚合之義

第七伊奘諾尊 男神也

伊奘册尊 女神也

二神御治曆凡二萬三千四十歲是陰陽都(和歌)合之大數也无始无終此男女御神凡萬物父母也云々昔天之浮橋之上而共相議曰此下豈國无乎乎ト天之瓊ヲ指下而之ヲ探給青海アリ其銚瀉凝堅テ一之島ト成リ之ヲ礮馭盧島ト名ツク時ニ一ノ洲ヲ出生シ給淡路洲是也二ノ御神其島ニ天降給テ夫婦交合ノ義ヲ成給茲ニ因テ此二ノ神ヲ以テ婚合ノ始トス二ノ御神即天カ下ニ於テ大八洲ヲ定メ山海江河草木ヲ造リ給又議テ曰豈國ノ主无ン乎ト即一ノ女三男ヲ産給所謂日神月神蛭兒素盞鳥尊是也日神ハ伊奘諾尊也此御神即國ノ主ト成給月神トハ月讀尊今ノ高野ノ丹生大明神是ナリ此御神ハ山ヲ領シ給蛭兒トハ西宮ノ大明神夷三郎殿是也此御神ハ海ヲ領シ給素盞鳥尊トハ今ノ出雲ノ大社是也此御神ハ惡事ヲ好給ニ依テ神意ニ背給出雲國ニ被流給ト云々其後二御神者淡路國ニ宮造而隱給訖

以上天神七代

第一地神五代天照太神 女體

御治天凡二十五萬歲ニ而无始无終是伊奘諾尊之御女也

第二正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 天照大神素盞鳥尊在欲其尊和砥八坂瓊曲玉給時陰陽成生

而此尊誕生給御治天凡三十萬歲而始モナク无終

第二天津彦々火瓊々杵尊

天忍穗耳尊御子也御母栲幡千々姬高皇產靈尊御女也御治世凡三十一萬八千五百三十二年此御神始テ降化于下界

第四彦火々出見尊

火瓊々杵尊第二御子也御母木花開邪姬大山祇神女也御治世凡六十三萬七千八百九十二年當テ此神ノ御時震旦國ニ盤古大王誕生云々

第五彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊

彦火々出見尊御子也御母豐玉姬海童第二女也御治世凡八十三萬六千四十二年從火瓊々杵尊至葺不合尊三代筑紫日向國御座此神御宇當八十三萬五千六百七十六年釋迦佛天竺迦毘羅國鹿野苑而四月八日明星出ル時誕生云々

人皇歷代

第一代神武天皇 御諱神日本盤余彦天王 葺不合尊第四御子也御母玉依姬海童之小女也葺

不合尊八十三萬五千九百九十二年庚午正月朔日御誕生御年五十二而辛酉歲御即位此年支那周十八代惠王十七年ニ相當ル御世ヲ治給事七十六年而御崩御于時御年一百二十七歲此帝ノ御宇五十七年ニ當テ老子楚國ニ誕生ス支那ハ周二十二代定王三年丁巳九月十四日云々胎内ニ宿ル事八十一歲白髮而誕生ス故ニ老子ト號ス成人之後身ノ長一丈二尺也龍顏而



額廣ク金色也耳長ク大而二門有目太ク眼ニ光有テ唇厚ク齒四十八アリ足ノ裏ニ文ヲ備手中ノ筋直而曲ラス其形最奇異也周朝ニ仕テ守藏室ノ史ト成ル孔子周ニ適テ道ヲ老子ニ學世ニ有事凡八十餘年也迦葉菩薩ノ化身ト云々

二代綏靖天皇 御諱神淳名川耳天皇 神武天皇第三御子也御母媛踏鞬五十鈴媛命事代主神之大女也神武天皇二十九年己丑歲御誕生御年五十二而庚辰歲御即位御世ヲ治給事三十二年而五月崩御于時御年八十四歲此帝御宇三十一年ニ當テ孔子魯國ニ誕生ス支那ハ周二十四代靈王二十一年庚戌十一月四日云々父ハ叔梁紇母顏氏之女徵在是娶子ナシ尼丘山ノ神ニ祈テ子ヲ求ム遂孕テ孔子ヲ生ム故ニ孔子ノ頂ノ窪キ事彼尼丘山ノ頂ニ似タリ云々誕生ノ時ニ及テ二龍來テ庭繞五老庭降下ル是五星精也顏氏家ニ天樂ヲ開忽ニ虛空ニ聲有テ云天感而聖人ヲ生ス故ニ音樂ヲ以テストモ云リ成人ノ後身ノ長九尺六寸其頭ハ堯王ニ似タリ其額ハ舜王ニ似タリ其頸ハ臯陶ノ如ク其肩ハ子產ニ似タリ腰以下禹王之三寸及ハス  
三代安寧天皇 御諱磯城津彥玉手看天皇 綏靖天皇太子也御母ハ五十鈴依媛命事代主神之小女也綏靖天皇十五年甲午歲御誕生御年二十而癸丑年御即位御世ヲ治給フ事三十八年而十二月崩御于時御年五十七歲 此帝御宇二十八年ニ當テ顏回魯國ニ生ス支那ハ周ノ二十五代景王二十四年庚辰歲云々父ハ顏路魯國人也凡顏回者孔子門弟子三千第一之人也十八歲而白髮成月光菩薩之化身云々

四代懿德天皇 御諱大日本彥耜友天皇 安寧天皇第二御子也御母淳名底仲媛命事代主神之

孫鴨王之女也綏靖天皇二十九年戊申歲御誕生御年四十四而辛卯歲御即位御世ヲ治給事三十四年而九月八日崩御于時御歲七十八歲此帝ノ御宇二十年ニ當テ顏回死ス支那ハ周ノ十六代敬王二十九年庚戌歲也于時年三十一歲 此帝ノ御宇三十二年當テ孔子卒支那ハ周ノ二十六代敬王四十一年壬戌夏四月己丑日也于時年七十三歲魯城北泗上ニ葬光淨菩薩之化身云々孔子之聖德繁懼不出耳(本マ)

五代孝照天皇 御諱觀松彥香殖稻天皇 懿德天皇太子也御母皇后天豐津媛命息石耳命之女也懿德天皇五年乙未歲御誕生御年三十二而寅歲御即位御世ヲ治給事八十三年而八月五日崩御于時御年一百十四歲 此帝御宇三年ニ當テ支那ニ而越王勾踐軍ヲ起シテ吳王夫差滅支那ハ周二十七代元王三年戊辰歲也此帝御宇二十五年庚寅歲當テ熊野權現紀伊國牟婁郡現給或書曰神武天皇御宇五十八年戊午歲出現云々熊野權現ト現シ給事紀伊國岩田河邊ニ一ノ獵師アリ其名ヲ河刀千世ト號或時山ニ入テ獵ヲスル時一ノ熊ヲ射タリ血ヲ尋テ跡ヲ趣テ行ニ一ノ楠木ノ本ニ至ル其時具シタル犬梢ヲ見テ 頻ニ吠ル。千世怪ヲ成テ之ニ問テ曰(此所脫文アルヘシ) 月何カ故ニ空ヲ離テ梢ニ掛ル月復何ソ三ツ有哉天變歟光物歟太以覺束ナシ云々于時權現託宣而朕天變ニ非ス光物ニナシ東土衆生ヲ濟爲ニ西天佛生國ヨリ遙ニ此國ニ來ル即三所權現ト申ス汝速ニ社壇ヲ造リ我ヲ崇ムヘシト示給是ニ於テ千世忽渴仰ノ思ヲ成シ殊ニ歸依ノ心ヲ致シ遂ニ假殿ヲ營勸請シ奉ル云々 本宮證誠殿ハ是无量壽佛之垂迹也西ノ御前ハ是千手觀音ノ垂迹也中御前ハ是藥師如來ノ垂迹也云々



六代孝安天皇 御諱日本足彥國押人天皇 孝安天皇第二御子也御母世襲足媛尾張連遠祖瀛  
津世襲之妹也孝照天皇四十九年甲寅歲御誕生御年三十六而已丑歲御即位世ヲ納給事一百  
二年而正月九日崩御于時御年一百三十七歲

七代孝靈天皇 御諱大日本根子彥太瓊天皇 孝安天皇太子也御母押媛蓋天足彥國押人命之  
女也孝安天皇五十一年己卯歲御誕生御年五十三而辛未歲御即位御世ヲ治給事七十六年而  
二月八日崩御于時御歲一百二十八歲此帝御宇五年乙亥歲ニ當テ近江國水湖ト成此帝御宇  
三十二年ニ當テ秦始皇帝誕生ス支那ハ周三十七代赧王五十六年壬寅歲ナリ此帝御宇四十  
五年乙卯歲當テ秦始皇即位天下ヲ分而三十六郡トス年十三歲 此帝御宇六十三年癸酉歲  
ニ當テ燕太子丹荆軻秦巫陽ヲ以潛ニ始皇ヲ襲フ還而二人共ニ誅伐セラル三年之後乙亥歲  
始皇燕ヲ攻而太子丹ヲ討滅ス此帝御宇七十二年ニ當テ秦始皇泰山ニ上而封禪ノ祭ヲ爲給  
時風雨ニ值給一ノ松ノ木ノ本ニ寄テ其難ヲ凌給之ニ因テ其松ヲ大夫ニ封ス支那ハ始皇ニ  
十八年壬午歲也同二十九年癸未歲西天竺ヨリ室利防等十八人ノ沙門佛法弘通爲ニ支那ニ  
來ル處ニ始皇之ヲ惡テ獄舍ニ禁ラル俄ニ金剛神有テ獄門ヲ打碎而之ヲ出ス云々  
八代孝元天皇 御諱大日本根子彥國牽天皇 孝靈天皇ノ太子也御母ハ細媛命磯城縣主大目  
ノ女也孝靈天皇十八年戊子歲御誕生御年六十一ニ而丁亥歲御即位御世ヲ治給事五十七年  
ニ而九月二日ニ崩御于時御年一百十七歲此帝御宇二年ニ當テ秦ノ始皇惡道ヲ成ノ餘ニ一  
天下ノ詩書文書悉取集之ヲ燒捨ラル煙止サル事三十餘日ナリ翌年己丑歲又學匠儒者ヲ捕

聚テ之ヲ坑ニ堀埋ム事百六十餘人云々 同年咸陽宮ヲ立ル東西五百步南北五十丈也此年  
始皇三十五年也 此帝御宇五年ニ當テ辛卯歲七月始皇海上ヲ巡テ沙丘ニ至而崩御于時御  
年五十歲凡世ヲ治事三十七年此帝御宇八年ニ當テ楚項羽大軍ヲ引率而咸陽ニ攻入始皇ノ  
御孫子嬰皇帝ヲ殺奉リ咸陽宮ヲ燒火ノ消サル事三月云々 此帝御宇十三年ニ當テ漢高祖  
楚項羽ヲ攻滅ス支那ハ漢高祖五年己亥歲也 此帝御宇二十年ニ當テ丙午歲夏四月漢高祖  
崩御支那ハ漢十二年也治世凡十二年

九代開化天皇 御諱稚日本根子彥大日日天皇 孝元天皇第二子也御母鬱色謎命穗積臣遠祖  
色雄命之妹也孝元天皇七年癸巳歲御誕生御年五十二而甲申歲御即位御世ヲ治給事六十年  
ニ而四月九日崩御于時御年一百一十一歲此帝御宇十八年ニ當テ支那ニ始而年號ヲ建ラル建  
元ト號漢六代武帝元年也 此帝御宇五十八年ニ當テ辛巳歲春蘇武胡國ニ赴ク支那ハ漢武  
帝天漢元年ナリ 此帝御宇六十年ニ當テ漢朝ニ初テ搾酒酤支那ハ武帝天漢三年癸未歲  
也

十代崇神天皇 御諱御間城入彥五十瓊天皇 開化天皇第三御子ナリ御母伊香色謎命物部氏  
遠祖大綜麻杵之女也開化天皇十年癸巳歲御誕生御年五十二而甲申歲御即位御世ヲ治給事  
六十八年而十二月五日崩御于時御年一百二十歲 此帝御宇十年癸巳歲將軍號始ル同十一  
年甲午歲五十鈴河上ニ天照太神宮ヲ立ル 此帝御宇十七年庚子歲日本ニ始而船ヲ造ル  
同年支那ニ而蘇武胡國ヨリ漢地ニ還ル支那ハ漢七代昭帝始元五年也



十一代垂仁天皇 御諱活目入彥五十狹茅天皇崇神天皇第三御子也御母御間城姫大彥命之女也崇神天皇二十九年壬子正月朔日御誕生御年四十一而壬辰歲御即位御世ヲ治給事九十九年ニ而七月朔日崩御于時御年一百四十歲此帝御宇三十五年丙寅歲諸國ニ詔而池溝開耕作ヲ勸メ給 此帝御宇九十四年ニ當而佛法天竺ヨリ漢土ニ渡リ即摩騰法蘭二人ノ僧來テ經像ヲ帝ニ獻ル支那ハ後漢二代明帝永平八年乙丑歲也同十年丁卯歲明帝白馬寺ヲ建而二人之僧ヲ置ル是寺之始歟

十二代景行天皇 御諱大足彥忍別天皇 垂仁天皇第三御子也御母日葉洲媛丹波道主之王之女也垂仁天皇三十七年戊辰年御誕生御年八十一而辛未歲御即位御世ヲ治給事六十年而十一月七日崩御于時御年一百四十歲 此帝御宇十年庚辰年近江國湖中ニ竹生島始現

十三代成務天皇 御諱稚足彥天皇 景行天皇第四御子也御母八坂入姫命八坂入彥王子女也景行天皇十三年癸未歲御誕生御年四十九而辛未歲御即位御世ヲ治給事六十一歲而六月十一日崩御于時御歲一百八歲

十四代仲哀天皇 御諱足仲彥日天皇 日本武尊第二御子也成務天皇太子无故ニ御姪ヲ以太子ト爲給御母兩道入姫命垂仁天皇之御女也成務天皇十九年己丑歲御誕生御年四十四而壬申歲御即位御世ヲ治給事九年而二月六日崩御于時御年五十二歲 越前國氣比明神是ナリ

十五代神功皇后 氣長足姬尊仲哀天皇之后 開化天皇之曾孫氣長宿禰王之女也御母葛城高

額媛成務天皇四十年庚戌歲御誕生仲哀天皇九年庚辰歲帝崩御之後春三月御懷胎而自新羅百濟高麗ヲ討從給同年冬十二月筑紫而譽田別皇子ヲ產給應神天皇是也明年辛巳歲春二月群臣百寮領而長門國豐浦宮移給同年冬十月群臣皇后尊而皇太后ト曰同三年癸未歲春正月譽田別皇子皇太子立給御世ヲ治給事六十九年而四月十五日崩御于時御年一百歲 香椎大明神是也 此帝御宇十一年辛卯歲住吉大明神長門國豐浦京ニ垂跡云々 此帝御宇四十七年丁卯歲百濟國ヨリ經典馬鷹等渡ル

十六代應神天皇 御諱譽田天皇 仲哀天皇第四御子也御母氣長足姬尊神功皇后也仲哀天皇九年庚辰歲御誕生御年七十一而庚寅歲御即位御世ヲ治給事四十一年而二月十五日崩御于時御年一百一十一歲八幡大菩薩是也 此帝御宇十四年癸卯歲百濟國ヨリ衣類裁縫女工渡ル衣服ヲ裁縫事是ヨリ始ル明年甲辰歲百濟國ヨリ又經典諸物之博士等渡ル 此帝御宇三十七年丙寅歲吳國ヨリ吳織穴織等二人織妃來ル

十七代仁德天皇 御諱大鷦鷯天皇 應神天皇第四御子也御母仲姬命五百入彥皇子之孫女ナリ 應神天皇二十一年庚戌歲御誕生皇子御兄弟相讓而御位ニ即給ハサル事三年ナリ此帝遂ニ御年二十四而癸酉歲御即位御世ヲ治給事八十七年而正月十六日崩御于時御年一百十歲平野大明神是ナリ此帝御宇四年丙子歲帝自高臺登遙人煙之衰タルヲ見給テ民百姓ヲ憐課役ヲ免給同十年己卯歲帝又臺ニ上テ遙ニ煙氣盛ナルヲ見給テ

高キ屋ニ上テ見レハ煙タツ民ノカマトハ賑ニケリ此帝御宇六十二年甲戌歲水室ヲ始ル



同御宇七十八年庚寅歲武内大臣蘇我初十二代景行天皇之御宇十六年丙戌歲誕生而ヨリ以來是ニ至テ三百十餘歲ヲ經而六代帝御世ニ遇リ云々六代景行天皇 成務天皇 仲哀天皇 神功皇后 應神天皇 仁德天皇ナリ

十八代履中天皇 御諱去來穗別天皇 仁德天皇ノ太子也御母磐媛命葛城襲津彥ノ女也仁德天皇十七年己丑歲御誕生御年七十二而庚子歲御即位御世ヲ治給事六年而三月朔日崩御于時御年七十七歲

十九代反正天皇 御諱瑞齒別天皇履中天皇御弟同御母ナリ仁德天皇四十年壬子歲御誕生初而生レ給時御齒一ッ骨ノ如シ御容姿美麗也之ニ依テ御名トスル也御年五十五丙午歲御即位御世ヲ治給事六年而正月廿二三日崩御于時御年六十歲

二十代允恭天皇 御諱雄朝津間稚子宿禰天皇 反正天皇御弟同御母也仁德天皇六十二年甲戌年御誕生御年三十九而壬子歲御即位御世ヲ治給事四十二年而正月十四日崩御于時御年八十歲 此帝御宇八年己未歲春二月藤原ニ行幸而密衣通姫ニ值給是仁德天皇之御姪稚淳毛二岐皇子ノ御女也 此帝ノ御后忍坂大中姬御妹ナリ後ニ紀伊國玉津島明神ト現レ給

二十一代安康天皇 御諱穴穗天皇 允恭天皇第二御子也御母忍坂大中姬命稚淳毛二岐皇子之女也履中天皇二年辛丑歲御誕生御年五十四而甲午歲御即位御世ヲ治給事三年而八月九日御從弟眉輪王之爲ニ弑レ給于時御年五十六歲

二十二代雄略天皇 御諱大泊瀨幼武天皇 允恭天皇第五御子也御母安康天皇同仁德天皇七十五年丁亥歲御誕生御年七十一而丁酉歲御即位御兄安康天皇御敵眉輪王市邊押磐皇子ヲ殺給御世ヲ治給事二十三年而八月七日崩御于時御年九十五歲 此帝御宇九年ニ當テ支那ニ而沉慶錢鑄ル南朝宋六代明帝泰始元年乙巳歲也此帝御宇二十二年戊午歲丹波國水江浦島之子仙宮ニ入

二十三代清寧天皇 御諱白髮武廣國押稚日本根子天皇 雄略天皇第三御子也御母葛城韓姬也允恭天皇三十二年癸未歲御誕生御年三十八而庚申歲御即位御世ヲ治給事五年而正月十六日崩御于時御年四十二歲 此帝御誕生之時白髮也故白髮天皇ト號シ奉ル云々

二十四代顯宗天皇 御諱弘計天皇御名ヲ更而來目稚子之天皇ト號奉ル履中天皇之御孫磐坂市邊押別皇子之御子也御母黃媛允恭天皇二十九年庚辰年御誕生御兄億計皇子相讓而久御位ニ即給ハス之ニ依テ御姊飯豐天皇朝ニ臨テ政ヲ秉給之所ニ冬十一月ニ至テ飯豐天皇崩御茲因遂ニ乙丑歲四十六而御即位御世ヲ治給事三年而四月崩御于時御年四十八歲此帝御宇元年乙丑歲三月上巳日曲水宴ヲ始給

二十五代仁賢天皇 億計皇子御諱大脚御名ヲ更テ大爲字鳥郎天皇顯宗天皇御兄也同御母也允恭天皇三十七年戊子歲御誕生御年四十一而戊辰歲御即位御世ヲ治給事十一年而八月八日崩御于時御年五十一歲

二十六代武烈天皇 御諱小泊瀨稚鷦鷯天皇 仁賢天皇太子也御母春日大娘皇后雄略天皇御



女也 允恭天皇三十八年己丑歲御誕生御年十而仁賢天皇十一年冬十二月御即位元年己卯歲ナリ頻惡事ヲ造給間萬人咸怖恐奉ル御世ヲ治給事八年而十二月八日崩御于時御年十八歲 此帝御宇二年庚辰歲帝惡逆餘ニ孕ル女ノ腹ヲ開而見給同三年辛巳歲帝又人之爪ノ甲ヲ放而薯蕷ヲ堀セ給同四年壬午歲帝又人ノ頭ノ髮ヲ拔而樹ニ昇ラシメ地ニ落而死スルヲ見給 同五年癸未歲帝又人ヲ塘中ニ伏シメ若外ニ流レ出レハ矛ヲ以テ刺殺給同七年乙酉歲又人ヲ樹ニ昇シテ之ヲ射テ地ニ墜ヲ見テ笑給云々

二十七日繼體天皇 御諱男大迹御名ヲ更テ彥大尊ト號奉ル應神天皇第九御子隼總別皇子其御子大迹王其子私斐王其子彥主人王子也御母振媛活目七代之孫女也允恭天皇四十年辛卯歲御誕生御年五十七而丁亥歲御即位御世ヲ治給事二十五年而二月崩御于時御年八十一歲越前國足羽大明神是也此帝御宇十四年ニ當テ達摩南天竺ヨリ支那ニ渡ル支那ハ梁武帝普通元年庚子年也達摩ハ是南天竺香至國王第三王子也姓ハ刹帝利本名ハ菩提多羅也釋尊ヨリ佛法眼ヲ傳而二十八代祖師也釋尊御入滅ヨリ此年ニ至テ一千四百六十九年也

二十八代安閑天皇 御諱勾大兄廣國押武金日天皇 繼體天皇長子ナリ御母日子媛尾張連草香之女也雄略天皇十年丙午歲御誕生御年六十九而甲寅歲御即位御世ヲ治給事二年而十二月崩御于時御年七十歲 大和國金峰山權現是也

二十九代宣化天皇 御諱武小廣國押盾天皇 繼體天皇第二御子也御母安閑天皇ト同シ雄略天皇十一年丁未歲御誕生御年七十ニシテ丙辰之歲御即位世ヲ治給事四年而二月十八日崩

御于時御年七十二歲 此帝御宇二年ニ當テ達摩支那而入寂ス是ヲ熊耳山ニ葬少林寺ニ塔ス塔ヲ空觀ト號支那ハ梁武帝大同三年丁巳十月五日云々此帝御宇三年戊午歲大和國金峯權現顯給

三十代欽明天皇 御諱天國開廣庭天皇 繼體天皇嫡子也御母手白香皇后 仁賢天皇之御女也繼體天皇三年己丑歲御誕生御年三十一而宣化天皇四年十二月御即位元年庚申歲也御世ヲ治給事三十二年而四月十五日崩御于時御年六十三歲 此帝御宇十三年壬申歲百濟國聖明王佛像經典貢同十五年甲戌易者曆者醫者之三博士渡ル 此帝御宇三十一年而庚寅八幡始豐前國宇佐ニ現給

三十一代敏達天皇 御諱淳中倉太珠敷天皇 欽明天皇第二子也御母石姬皇后 宣化天皇女也繼體天皇十八年甲辰歲御誕生御年四十八而欽明天皇三十二年辛卯四月御即位元年壬辰歲也御世ヲ治給事十四年而八月十五日崩御于時御年六十二歲 此帝御宇二年癸巳正月朔日聖德太子御誕生用明天皇第一之御子御母穴穗部間人ノ皇女也太子御誕生已前母后之御夢ニ金色之僧一人來而我ハ是救世ノ菩薩也ト言已而御口中へ躍入ト覺給テ後御喉之裏ニ物ヲ吞如ニ而娠給八月ニ及テ御胎中而言聲外ニ聞給正月朔日母后假染ニ厩ニ至リ給ニ覺ス而御誕生于時金色ノ光西ノ方ヨリ來而宮中ヲ照ス此ニ至テ十二月也御諱豐聰厩戶之皇子ト號奉ル又上宮太子トモ八耳太子トモ申也後御諱聖德太子ト號奉ル云々 此帝御宇六年丁酉歲冬十一月百濟國ヨリモ經論僧尼佛大工等ヲ貢ル 同八年己亥新羅國ヨリ釋迦像



ヲ貢ル今奈良興福寺ニ有 同十四年乙巳歲守屋大臣佛ヲ燒テ難波堀江ニ棄ル此時一天ニ雲无而頻ニ雨降云々

三十二代用明天皇 御諱橘豐日天皇 欽明天皇第四御子也御母堅鹽媛欽明天皇八年丁卯歲御誕生。御年二十九而敏達天皇十四年乙巳九月五日御即位御世ヲ治給事二年而四月九日崩御于時御年四十一歲。此帝御宇丁未歲秋七月聖德太子守屋大臣ヲ誅罰シ給 同冬攝津國玉造ノ岸上ニ於テ四天王寺ヲ建立シ給云々

三十三代崇峻天皇 御諱泊瀨部天皇 欽明天皇第十二御子也御母小姊君稻目宿禰女也用明天皇二年丁未八月二日御即位元年戊申歲也御世ヲ治給事五年而十一月三日蘇我馬子謀而帝ヲ殺奉ル此帝御宇二己酉歲秋七月諸國之境ヲ定ム

三十四代推古天皇 御諱豐御食炊屋姬天皇 欽明天皇御中女也御母用明天皇同欽明天皇十五甲戌歲御誕生幼御時御名ヲ額田部皇女ト曰御年十八歲而敏達天皇ノ后ニ立給御年三十九而崇峻天皇五年壬子歲冬十二月御即位元年癸丑歲也廢戶皇子ヲ立テ皇太子ト而攝政トシ給是攝政之始也廢戶皇子ハ即聖德太子是也御世ヲ治給事三十六年ニ而三月七日ニ崩御于時御年七十六歲 此帝御宇元年癸丑年冬十月天王寺ヲ難波ノ荒陵ノ東ニ徙サル故ニ荒陵寺ト曰又敬田寺ト曰也 此帝ノ御宇十二年甲子歲、聖德太子十七ヶ條ノ御憲法ヲ作り給 同十三年乙丑歲高麗國ヨリ始而黃金ヲ貢ル 同二十一年癸酉歲聖德太子大和國片岡山ニ而達摩ニ逢給同二十二年甲戌之歲大職冠誕生天兒屋根之尊ヨリ二十代御食卿之子也藤原氏之

元祖也 此帝御宇二十九年辛巳二月廿二日聖德太子薨給于時御年四十九歲

三十五代舒明天皇 御諱息長足日廣額天皇 敏達天皇之御孫彥人大兄皇子之皇子也御母糠手姬皇女推古天皇元年癸丑歲御誕生御年三十七ニ而已丑歲御即位御世ヲ治給事十三年而十月九日崩御于時御年四十九歲此帝御宇五年ニ當テ支那ニ而塞山拾得天台山ニ隱ル云々 支那ハ唐二代太宗皇帝貞觀七年癸巳歲也 此帝御宇六年甲午正月朔日役行者誕生大和國葛木上郡茅原村人也

三十六代皇極天皇 御諱天豐財重日足姬之天皇又寶皇女ト號奉ル敏達天皇之曾孫押坂彥人大兄皇子之孫茅渟王之女也御母吉備姬王推古天皇二年甲寅歲御誕生御年四十九而壬寅歲春正月御即位御世ヲ治給事三年明年乙巳歲夏六月ニ至而御位ヲ孝德天皇讓給 此帝御宇三年當テ唐太宗皇帝御髻ヲ剪給テ藥ニ澆キ功臣李世勣ニ賜ル云々支那ハ唐貞觀十八年甲辰歲也

三十七代孝德天皇 御諱天萬豐日天皇又輕皇子ト曰 皇極天皇之御弟御母是同推古天皇四年丙辰歲御誕生御年五十而乙巳歲御即位御世ヲ治給事十年而十月十日崩御于時御年五十九歲 此帝御即位元年ヲ大化ト號此年大職冠入鹿臣ヲ斬殺同御宇大化五年ニ始テ八省百官ヲ置給 同六年庚戌歲長門國穴戶ヨリ白雉ヲ獻ル故ニ大化之年號改而白雉元年トス 三十八代齊明天皇 御諱前ニ見タリ皇極天皇御年六十二而乙卯歲重テ御即位世ヲ治給事七年而七月二十四日崩御于時御年六十八歲此帝御宇三年丁巳年始而孟蘭盆會ヲ設ラル



三十九代天智天皇 御諱天命開別天皇又葛城皇子ト曰舒明天皇ノ太子ナリ御母皇極天皇也  
推古天皇二十二年甲戌歲御誕生御年四十九而壬戌年御(即脫歟)位 御世ヲ治給事十年而十  
二月三日崩御于時御年五十八歲 此帝御宇元年壬戌歲宮中ニ於テ鼠馬ノ尾ノ中ニ而子ヲ  
產高麗國我朝屬兆也 同四年乙丑歲鎌足內大臣大職冠ト號同八年己巳歲十月十三日大職  
冠中臣氏改藤原ノ姓ヲ賜ル 同十六日薨于時年五十六歲

四十代天武天皇 御諱天淳中原瀛真人天皇幼御時大海人ト曰後ニ淨見原天皇ト號奉ル天智  
天皇御弟御母是同壬申年五月天智天皇之御子大友皇子兵ヲ聚而帝ヲ襲給處ニ軍敗レ皇子  
自縊死給明年癸酉年二月二十七日御即位御世ヲ治給事十五年而九月九日崩御于時御年六  
十五此帝元年壬申歲白鳳元年トス 同三年甲戌歲春三月對馬國ヨリ始而銀ヲ出ス 同七  
年戊寅八月三日八坂塔建 同十一年壬午年藤原房前誕生是大職冠ノ御孫淡海公ノ子也  
同十五年丙戌歲大和國ヨリ赤雉ヲ獻ル故ニ白鳳之年號ヲ改テ朱鳥元年トス

四十一代持統天皇 御諱高天原廣野姬天皇幼御時鷓野讚良ト曰天智天皇第二御女也御母遠  
智姬名更美濃津子娘ト曰天武天皇之后也孝德天皇大化元年乙巳歲御誕生丁亥年ヲ以元年  
トスト云凡御年四十六而庚寅歲正月朔日百寮神璽寶劍內侍所之三種神器ヲ上奉ル御位ニ  
即申也御世ヲ治給事十年文武天皇大寶二年壬寅年崩御于時御年五十八歲

四十二代文武天皇 御諱天之眞宗豐祖父天皇 天武天皇之御孫草壁太子後ニ諡ヲ岡本天皇  
ト申ス第二御子也御母阿閉皇女天智天皇第四之御女元明天皇是也天武天皇白鳳十二年癸

未年御誕生御年十五而丁酉年八月朔日御即位五年之後辛丑歲始而大寶之年號ヲ建御世ヲ  
治給事十一年而慶雲四年丁未六月十五日崩御于時御年二十五歲此帝ノ年號 前四年大寶  
三年 慶雲四年也 此帝御宇四年庚子歲春三月元興寺道昭入滅是日本ニ火葬之始也大寶  
二年壬寅年斗升ヲ造而諸國ニ下サル 慶雲四年丁未六月二十二日大地震又長八丈橫一丈  
二尺而頭一ツニ面三ツ在鬼來ル

四十三代元明天皇 御諱日本根子天津御代豐國成姬天皇幼御時阿閉皇女ト曰天智天皇第四  
皇女也御母宗我孀蘇我山田石川丸大臣之女也即草壁太子之妃也齊明天皇七年辛酉歲御誕  
生御年四十而文武天皇慶雲四年丁未七月十七日御即位元年戊申歲也御世ヲ治給事七年元  
正天皇養老五年辛酉十二月四日崩御于時御年六十一歲 此帝年號 和銅七年也此帝御宇  
和銅元年戊申歲歌人安陪仲丸誕生是安陪朝衡之子也同三年庚戌歲和州奈良興福寺御建立  
是大職冠御子淡海公之御願也其大職之釋迦像考大職冠之御作也 同六年癸丑年諸國郡鄉  
之名ヲ定ム 同年山城國嵯峨法林寺建立 此年ニ當テ唐七代玄宗皇帝御即位于時御年二  
十八歲御名者隆基唐六代睿宗皇帝第三御子也御世ヲ治給事四十三年也所謂開元二十九年  
天寶十四年ナリ

四十四代元正天皇 御諱日本根子高瑞淨足姬天皇又水高皇女ト曰草壁太子之御女也御母文  
武天皇ト是同天武天皇白鳳九年庚辰歲御誕生御年三十六而乙卯歲秋九月御即位御世ヲ治  
給事九年聖武天皇天平二十年戊子歲夏四月崩御于時御年六十九歲 此朝年號靈龜二年養



老七年也 此帝御宇靈龜二年丙辰歲權現熊野ニ入給子細前ニアリ五代孝昭天皇之御宇之ヲ記ス 養老元年丁巳歲吉備大臣渡唐ス支那ハ唐七代玄宗皇帝御宇開元五年也或本靈龜二年丙辰歲ト有養老三年己未歲始女房ノ衣裳之樣ヲ定ラル同四年庚申歲大職冠御子淡海公彥給 同年舍人親王日本紀ヲ撰給是天武天皇之御子後ニ崇道天皇ト申也 同五年辛酉歲大和國長谷觀音像ヲ造高二丈六尺十一面觀音也

四十五代聖武天皇 御諱天璽國押開豐櫻彥天皇 文武天皇之皇子ナリ御母藤原夫人宮子淡海公不比等ノ御女也文武天皇大寶元年辛丑歲御誕生御年二十四ニ而甲子歲二月四日御即位御世ヲ治給事二十五年ナリ孝謙天皇天平勝寶八年丙申五月二日崩御于時御年五十六歲 此朝年號神龜五年天平二十年也此帝御宇神龜二年乙丑三月十八日柿本人丸死ス同四年丁卯春三月大和國長谷寺建比丘道明沙彌德道力ヲ勦而之ヲ建立ス同五年戊辰歲九月流星長事二丈四尺ニ而宮中ニ墮天平元年己巳歲光明皇后后立給于時御年二十九歲是淡海公第一御女也 同三年辛未歲紀伊國海水變而血ノ如ナル事五日ヲ經タリ同四年壬申歲夏大旱五穀成セス秋八月大風吹 同五年癸酉歲伊豆國三島大明神現給本地藥師如來也云々 同六年甲戌歲正月十一日光明皇后奈良興福寺ニ於テ西金堂ヲ營ム夏四月大地震 同年吉備大臣飯朝ス支那ハ唐七代玄宗皇帝開元二十二年也 同十年戊寅年筑紫松浦大明神現給 同十一年ニ當テ支那ニテ孔子之謚ヲ文宣王ト號セラル支那ハ唐七代玄宗皇帝開元二十七年己卯歲也 同十四年壬午歲奧州ニ而赤雪降事二寸夏六月京中ニ於テ飯ノ如ナル物降下

同十五年癸未歲十月十五日帝近江國信樂ニ於テ奈良ノ大佛像ヲ銅ヲ以鑄創給是盧舍那佛長十六丈云々 同十七年ニ當テ大唐ニ而楊大眞ノ名ヲ楊貴妃ト號ラル大唐ハ玄宗皇帝天寶四年乙酉歲也 同十九年ニ當テ大唐ニ而楊貴妃安祿山ヲ子トス此年玄宗皇帝天寶六年丁亥歲也 同年中將姬誕生は大職冠四代橫菽右大臣豐成公之女也

四十六代孝謙天皇 御諱阿閉内親王又高野姬ト曰聖武天皇御女也御母光明皇后贈太政大臣不比等之御女也元正天皇養老三年己未歲御誕生御年三十一ニ而己丑歲七月二日御即位御世ヲ治給事十年也天武天皇之御孫舍人親王ノ御子大炊王皇太子トシ給而御位ヲ讓後御出家有テ法基尼ト申奉ル之ニ依テ偏ニ佛法ニ歸給問更ニ謚ヲ奉ラル因テ寶字二年戊戌歲百官尊號ヲ奉テ之ヲ稱云々 此朝年號 天平勝寶八年天平寶字二年也 此帝御宇天平勝寶元年己丑二月二日行基菩薩入滅于時年八十二歲當初三十九代天智天皇之御時誕生而ヨリ以來天武天皇持統天皇文武天皇元明天皇元正天皇聖武天皇孝謙天皇迄八代之御代ヲ經タリ云々 不詳可尋是和泉國大鳥郡人高志氏百濟國王之流也 同年奧州ヨリ始テ黃金ヲ貢 同四年壬辰四月九日東大寺大佛供養聖武天皇御幸云々 此年近江國石山寺建 同七年當テ大唐ニ於テ安祿山亂ヲ發其明年夏六月都ニ攻入自皇帝ト稱 同秋七月玄宗皇帝蜀國ヘ幸給又供奉之士卒申進ニ依テ揚國忠ヲ始テ貴妃ノ姊妹ヲ殺シ馬冤而楊貴妃ヲ縊殺サル 此年玄宗第三ノ御子肅宗逆徒ヲ退治給同秋七月甲子靈武而即位給支那ハ即唐八代肅宗皇帝至德元年丙申歲也 天平寶字元年丁酉歲帝御寢殿承塵裏ニ天下太平ノ四字自生此帝ニ



當テ大唐春正月安慶諸<sup>結</sup>李諱兒<sup>精</sup>ヲ使テ父安祿山ヲ殺秋九月郭子儀又安慶諸ヲ殺冬十二月玄宗皇帝蜀國ヨリ還給支那ハ唐八代肅宗皇帝至德二年也

四十七代廢帝天皇 御諱大炊天皇天武天皇之御孫一品舍人親王第七子也御母山背上總守當麻老女也聖武天皇天平五年癸酉歲御誕生二十六ニ而孝謙天皇口天平寶字二年戊戌歲御即位元年ハ己亥年也御世ヲ治給事六年ニ而事在テ淡路國被流給後稱德天皇天平神護元年乙巳歲冬十月崩御于時御年三十三歲此朝年號 天平寶字尙六年也此帝御宇寶字四年庚子歲夏六月光明皇后崩御于時御年六十歲 同六年壬寅年先帝ヲ法基尼ト號奉ル此年ニ當テ夏四月甲寅日玄宗皇帝<sup>帝</sup>神龍殿ニ而崩御于時御年七十八歲支那ハ唐八代肅宗皇帝寶應元年壬寅歲同七年癸卯六月二十三日當麻曼茶羅現

四十八代稱德天皇 御諱法基尼孝謙天皇御年四十七ニ而乙巳年重而御即位帝弓削道鏡法師ヲ寵幸給而太政大臣之官ヲ授又法皇ノ位ニ昇百寮ノ朝賀ヲ受サシメ給御世ヲ治給事五年也光仁天皇寶龜元年庚戌八月四日崩御于時御年五十二歲 天平神護二年神護景雲三年也此帝御宇此朝年號。天平神護元年乙巳年 南都西大寺建立 同年右大臣豐成公嘉同二年丙午歲弓削道鏡法皇ノ位ヲ受 神護景雲元年丁未歲下野國日光山立 此年傳教大師誕生名ハ最澄近江國志賀郡人父三津百枝其先支那國東漢十四代獻帝流也父百枝子无故比叡山ノ麓神ニ祈而求タル子也七日ヲ期スルニ第四ノ曉靈夢ノ告ヲ得テ其母娠テ遂之ヲ產云々 同二年戊申正月九日春日大明神河内國平岡ヨリ大和國三笠山ニ徙給

四十九代光仁天皇 御諱白壁王天智天皇御孫施基皇子御諡ヲ田原天皇ト曰第六子也御母紀

椽姫贈太政大臣紀諸人之女也元明天皇和銅二年己酉歲御誕生御年六十二ニ而庚戌之歲十月朔日御即位御世ヲ治給事十二年ニ而天應元年辛酉歲十二月二十三日崩御于時七十三歲此朝年號 寶龜十一年 天應一年也 此帝御宇寶龜九年ニ當テ大唐ニ詩人杜子美潭州ニ於テ死ス年五十九歲支那ハ唐九代代宗皇帝太曆五年庚戌歲也當初唐六代睿宗皇帝先天元年壬子歲牛以來玄宗肅宗代宗三代之世ニ遇 此年紀伊國粉河寺立那賀郡一人獵師アリ大伴孔子ト云奇特之瑞現有ニ依テ之ヲ建云々 同二年辛亥歲星西南ニ隕聲雷ノ如此年渤海國使京ニ入同三年壬子歲弓削道鏡死 同四年癸丑歲當テ大唐ニ白樂天誕生支那ハ唐九代代宗八年也 同五年甲寅歲弘法大師誕生名空海讚岐國多度郡人父佐伯田公母阿刀氏女也夢ニ梵僧一人來懷ニ入ト覺即孕胎内ニ在事十二月ニ而生焉 同年山城國高雄神護寺立是八幡大菩薩ノ託宣ニ依テ帝之ヲ建立シ給云々 同六年乙卯歲中將姬卒給于時年二十九歲 同八年丁巳歲冬早山城國宇治川水絶ル同九年戊午歲猫ト鼠ト穴ヲ同而居 同十年己未歲三島明神伊豫國ヨリ伊豆國ニ遷給此年歌人安陪仲九大唐ニ而死支那ハ唐九代代宗皇帝大曆十四年也同十一年庚申歲京城寺々雷火ノ爲ニ燒 天應元年辛酉歲慶俊法師山城國愛宕山ヲ開

五十代桓武天皇 御諱山部親王又日本根子皇統<sup>流</sup>珍照天皇 光仁天皇第一御子也御母皇太夫人新笠贈正二位高野乙繼之女ナリ聖武天皇天平九年丁丑歲御誕生御年四十五ニ而光仁天



皇天應元年辛酉四月二日御即位元年壬戌歲御世ヲ治給事二十四年平城天皇大同元年丙戌三月十六日崩御于時御年七十歲柏原天皇是也此帝年號延曆二十四年ナリ此帝御宇延曆二年癸亥五月四日入幡託宣ニ而我名ヲ大自在王菩薩ト曰ヘシト也 同三年甲子歲冬十一月都ヲ山城長岡ニ遷同六年丁卯歲夷國兵此國へ襲來ル同七年戊辰歲傳教大師比叡山根本中堂ヲ立創同十二年甲戌十月二十一日都ヲ山城國愛宕郡ニ遷平安城ト號今ノ京是也 同十四年乙亥歲坂上田村丸征夷將軍トノ東夷ヲ追討 同十五年丙子歲鞍馬寺立是大職冠五代孫阿波守藤原伊勢人不思議之瑞現在依テ之ヲ建立 同年冬東寺ヲ立創教王護國寺是也 同十九年庚辰歲駿河國富士山白燒山川水色皆紅ノ如 同二十年辛巳歲田村將軍東夷ヲ征伐 同廿三年甲申歲夏五月弘法大師遣唐使藤原賀能從而大唐ニ渡支那ハ唐十代德宗皇帝貞元廿年也秋八月衡州ニ著同年秋七月傳教大師遣唐使菅原清公ニ從テ大唐ニ渡此年支那ハ同貞元二年也貞元廿一年夏五月遣唐使藤原賀能船乘而歸朝 此年日本延曆廿四年乙酉歲也 同廿四年乙酉歲京都東山清水寺建是坂上田村丸之本願也其初延曆十七年戊寅歲田村將軍鹿獵此所ニ來爰延鎮阿闍梨ニ値不思議ノ瑞相ヲ聞ニ依テ大悅自宅ヲ移寺ト爲千手觀音之佛像ヲ造而之ヲ置

五十一代平城天皇 御諱安殿又日本根子天排國高彥天皇又奈良帝ト曰桓武天皇之長子也御母皇太后乙牟漏贈太政大臣藤原良繼女也光仁天皇寶龜五年甲寅歲八月十日御誕生御年三十二而桓武天皇延曆二十四年乙酉五月十八日御即位 或本同廿五年丙戌三月十八日御即

位延曆年號ヲ改大同トス御世ヲ治給事四年ニ而四月朔日御位ヲ御弟賀美能皇子ニ禪給而後大和國平城ノ舊都還御有其後淳和天皇天長元年甲辰七月五日崩御于時御年五十七歲

此朝年號 大同四年也 此帝御宇大同元年丙戌歲并手左大臣橘諸兄公萬葉集ヲ撰

五十二代嵯峨天皇 御諱神野又賀美能桓武天皇第二御子也御母平城天皇ト是同桓武天皇延曆五年丙寅歲九月七日御誕生御年□□ニ而平城天皇大同四年四月十三日御即位元年庚寅歲也御世ヲ治給事十四年ニ而御位ヲ御弟大伴太子ニ禪給後嵯峨離宮遷給其後仁明天皇承和九年壬戌七月十五日崩御于時御年五十七歲 此朝年號弘仁十四年也 此帝御宇弘仁二年辛卯五月廿三日將軍坂上田村丸薨 此年大唐靈照女入滅支那ハ唐十二代憲宗皇帝元和六年也同五年甲午五月八日皇子東三條左大臣常公源姓賜源氏此ニ始ル 同七年丙申歲弘法大師紀伊國ニ於テ高野山金剛峰寺建立シ給 同八年丁酉年僧正遍照誕生俗名良峰宗貞桓武天皇第十二御子大納言良峰安世王之子也同十年己亥歲春三月僧ノ官位ヲ定ラル同十一年庚子歲空海ニ傳燈大師ノ位ヲ賜云々同十三年壬寅歲春二月最澄ニ傳燈大師ノ位賜 同夏六月四日中道院ニ於テ入滅于時年五十六歲傳教大師是也 同年融大臣誕生帝第三皇子也 同十四年春正月東寺空海ニ賜

五十三代淳和天皇 御諱大伴又日本根子高讓彌遠天皇又西院帝ト曰桓武天皇第三之御子也御母皇太后旅子贈太政大臣藤原百川女也延曆五年丙寅歲御誕生御年三十八ニ而嵯峨之天皇弘仁十四年癸卯歲夏四月御即位元年甲辰年也御世ヲ治給事十年也仁明天皇承和七年庚



申三月十七日崩御于時御年五十五歲此帝年號天長十年也此帝御宇天長二年乙巳歲丹波國水江浦島子仙宮ヨリ故郷ニ歸仙宮ニ入ヨリ以來此ニ至テ三百四十八年ヲ經 同年在原業平誕生平城天皇之御孫阿保親王第五子也母伊登內親王是桓武天皇第八御女也同五年戊申歲染殿后御誕生御諱明子是大職冠七代御孫攝政大臣藤原良房公女ナリ 同九年壬子歲山城國醍醐寺開山聖寶誕生讚岐國人光仁天皇後胤ナリ

五十四代仁明天皇 御諱正良又日本根子天皇聰慧天皇又深草天皇ト曰嵯峨天皇第二御子也御母皇太后嘉智子贈太政大臣橘清友女也嵯峨天皇弘仁元年庚寅歲御誕生御年廿四ニ而淳和天皇天長十年癸丑三月六日御即位元年甲寅年也御世ヲ治給事十七年ニ而嘉祥三年庚午三月廿一日崩御于時御年四十一歲此朝年號承和十四年嘉祥三年也此帝御宇承和二年乙卯三月廿一日弘法大師高野山ニ於テ入定于時六十二歲先七日諸弟子ト共ニ彌勒之名ヲ唱其期ニ及テ坐ヲ正而毘盧印ヲ結泊然而入定云々同五年戊午歲五月廿日氷雪降 同十四年丁卯歲文德天皇御子惟高親王誕生此年ニ當テ大唐白樂天死年七十四歲支那ハ唐十七代宣宗皇帝大中元年丁卯歲也承和十二年乙丑歲菅丞相誕生宰相菅原是善卿御子也北野天神是也嘉祥三年三月廿一日仁明天皇崩御同廿四日山城國深草山ニ而御葬之時良峯宗貞悲ニ絶ス而警ヲ切火中ニ投入即出家僧遍昭是也又花山僧正トモ曰也

五十五代文德天皇 御諱道康仁明天皇長子也御母皇太后順子五條后ト曰閑院左大臣藤原冬嗣公之女也淳和天皇天長四年丁未歲秋八月御誕生御年廿四ニ而仁明天皇嘉祥三年庚午歲

夏四月御即位元年辛未歲也御世ヲ治給事八年ニ而天安二年戊寅八月廿七日崩御于時御年三十二歲田邑天皇是也 此朝年號仁壽三年 齊衡三年 天安二年也 此帝御宇仁壽三年癸酉六月四日平家先祖一品式部卿葛原親王薨給是桓武天皇第五皇子也齊衡二年乙亥五月五日大地震大佛頭地ニ落天癸元年丁丑三月三日帝一宮惟高親王四宮惟仁親王御位諱有

五十六代清和天皇 御諱惟仁文德天皇第四御子御母皇太后明子染殿后ト曰攝政太政大臣藤原良房公之女也仁明天皇嘉祥三年庚午三月廿九日御誕生御年九歲ニ而文德天皇天安二年戊寅十一月七日御即位元年己卯歲也御世ヲ治給事十八年ニ而十一月廿九日御位ヲ皇太子ニ禪給陽成院元慶三年己亥五月八日御出家法名素真同四年庚子十二月四日崩御于時御年卅一歲水尾天皇是也 此朝年號 貞觀十八年也 此帝御宇貞觀元年己卯歲冬十月字佐八幡大菩薩山城國男山鶴峰ニ移給是今年大安寺行教和尚豐前國宇佐八幡宮ニテ一夏九旬ニ晝ハ諸大乘經ヲ讀夜密呪ヲ誦法藏已滿ル夜夢中ニ八幡曰朕法施ヲ受事久シ之ニ依テ行教ニ離ン事ヲ欲セス行教都ニ還ハ朕又隨行ヘシ王城ノ側ニ居テ當ニ皇祚ヲ護耳爰ニ行教山崎ニ著其夜又夢ニ八幡曰行教我居所ヲ見云々俄覺テ便起東西見レハ男山鶴峰上ニ大光ヲ現之ニ依テ晨光處至行教便ニ事ヲ錄奏聞ス帝擢工部ニ詔字佐祠ニ准新宮ヲ建ラル世人見處彌陀觀音勢至之三尊行教和尚之袈裟ノ上ニ現テ登給云々 是ニ因テ社内ニ三像ヲ安置ス 同五年癸未五月五日天寒而霜降 同六年甲申正月十四日天台坐主圓仁後慈入滅爰圓仁坊ハ比叡山中堂ニ近シ我清淨靈場之側而滅度ヲ取可ラス云々于茲及十四



日之夜ニ入慈叡房ニ移リ門弟等ト共ニ阿彌陀ヲ念シ子刻ニ至手ニ印ヲ結口ニ呪ヲ誦シ北首ニ而入滅于時年七十一歲是下野國都賀郡人父壬生氏崇神天皇ノ後胤也凡廣學貴德利益甚深ナル事恰權者ノ再誕云々 同八年丙戌歲秋八月比叡山延曆寺開山最澄諡ヲ賜傳教大師ト號 同歲天台坐主圓仁諡ヲ賜慈覺大師ト號 同十年戊子歲圓珍後智證大師天台坐主ニ任同夏六月近江國志賀郡三井寺ヲ以傳法灌頂ノ道場ト而圓珍ニ賜 同十一年己丑歲祇園社始而王城東山麓ニ移サル 同十三年辛卯歲時平大臣誕生後菅丞相ヲ御父關白藤原基經公御母文德天皇之御弟人康親王之御女也 同十五年癸巳二月廿日惟高親王薨御于時御年廿六歲是文德天皇第一御子御母紀靜子右兵衛尉名虎之女也

五十七代陽成院 御諱貞明清和天皇第一御子御母皇太后高子二條后ト曰贈太政大臣藤原長良之女也清和天皇貞觀十年戊子十二月十六日御誕生御年十歲ニ而元慶元年丁酉正月三日御即位御世ヲ治給事八年ニ而二月四日御位ヲ避給村上天皇天曆三年己酉九月廿一日御出家同廿九日崩御于時御年八十二歲 此朝年號 元慶八年也 此帝御宇元慶四年五月廿八日左近中將在原業平卒去于時年五十六歲 同七年癸卯歲歌人壬生忠岑誕生木工允忠衡之子也 同八年甲辰歲歌人紀貫之誕生紀文幹子也 同歲遠江國濱名橋ヲ設

五十八代光孝天皇 御諱時康仁明天皇第二御子御母皇太后澤子贈太政大臣藤原總繼之女也淳和天皇天長七年庚戌歲御誕生御年五十五ニ而陽成院元慶八年甲辰二月廿二日御即位元年乙巳歲也御世ヲ治給事三年ニ而仁和三年丁未八月廿六日崩御于時御年五十八歲小松天

皇是也 此朝年號仁和三年也此帝御宇仁和元年乙巳歲秋十月沙石降苗損 同二年丙午三月十三日 東寺塔雷火之爲燒失 同三年丁未歲聖寶上人山城國醍醐寺之開山也傳法阿闍梨之位ヲ賜 同歲七月晦日大地震海水陸ニ漲上溺死者多シ

五十九代宇多天皇 御諱定省亭子院ト曰光孝天皇第三御子御母皇后班子皇女二品式部卿仲野親王之御女也清和天皇貞觀九年丁亥五月五日御誕生御年二十一ニ而光孝天皇仁和三年丁未十月廿二日御即位元年戊申歲也御世ヲ治給事十年ニ而寬平九年丁巳七月五日御位ヲ皇太子ニ禪給醍醐天皇昌泰二年己未十月十四日御出家法名金剛覺改而空理朱雀院承平元年辛卯七月十九日崩御于時御年六十五歲寬平法皇是也 此帝御宇仁和四年戊申歲比叡山禪唐院御建立 寬平元年己酉歲夏五月石清水八幡宮寶藏震動 同五月十二日桓武天皇四代孫高望王始而平姓賜而上總介ニ任 同年六七月霖雨降而大洪水人多餓死 同二年庚戌正月十九日僧正遍昭入滅于時年七十四歲當初比叡山ニ登慈覺大師之室ニ於テ出家之後天台ノ教法ヲ學ス亦勅而惣持院ニ於テ智證大師ニ三部之灌頂ヲ受云々 同三年辛亥歲淨藏貴所誕生是洛陽人宮内卿善清行第八子母嵯峨天皇之孫女也夢ニ天人來胎内ニ入ト覺テ之ヲ娠云々 同四年壬子十月廿九日天台坐主圓珍後智證大師齋供常ノ如而昏ニ及定印結端坐而念佛ス五更水乞口ヲ嗽伽口取之戴右脇而入滅戴處ノ衣ヲ即枕トス于時年七十八歲其曉滿山ニ音樂ヲ聞云々は讚岐國那珂郡人父宅成母弘法大師之姪也當初圓珍誕生以前母夢ニ舟ニ乗テ海ニ浮仰テ旭ヲ見其光赫奕手舉而之ヲ把トスルニ俄其母之口飛入ト覺遂孕云々



同六年甲寅歲小野道風誕生是宰相岑守之孫小野篁之子也同歲淨藏貴所四歲ニ而千字文ヲ讀凡一聞二知聰敏尤雙ナシ 同歲四月蒙古來 同七年乙卯八月廿五日河源左大臣源融公薨于時年七十四歲同年丁巳歲淨藏貴所七歲而好テ出家セン事ヲ求

六十代醍醐天皇御諱敦仁字多天皇第一御子御母贈皇太后胤子勸修寺內大臣藤原高藤公之女也光孝天皇仁和元年乙巳正月十八日御誕生御年十三而宇多天皇寬平九丁巳七月十三日御即位元年戊午歲也御世ヲ治給事三十三年而延長八年庚寅九月廿二日御位ヲ皇太子ニ禪給同廿九日天台座主尊意ヲ御戒師ト而御出家アリ法名金剛寶同日崩御于時御年四十六歲

延喜帝是也 此朝年號 昌泰三年 延喜廿二年 延長八年也 此帝御宇延喜元年辛酉正月廿五日菅丞相鎮西ニ配流是時平大臣之讒奏ニ依テ也 同二年壬戌歲醍醐寺開山聖寶僧正ニ任 同年淨藏貴所松尾明神ニ詣還ル處寬平法皇西郊ニ幸給路中ニ而之ヲ叡覽有喜御弟子ト成勅而比叡山ニ上登壇受戒セシム其後諸師ニ隨テ教ヲ受法ヲ付屬 同三年癸亥二月廿五日菅丞相鎮西之御廢處筑前國於テ薨御于時年五十九歲御遺骸同三笠郡安樂寺ニ納奉宰府天神是也 同年空也上人誕生是文德天皇ノ御弟常康親王之子也 同四年甲子歲寬平法皇洛外ニ於テ仁和寺御造營御室御所是也 同五年乙丑歲古今集ヲ撰紀友則紀貫之凡河內躬恒壬生忠峯等之ヲ撰 同九年己巳歲本院左大臣時平公故菅丞相之崇ヲ受病痾ニ沈給仍淨藏貴所ヲ請而加持セシムルノ處白晝ニ青蛇二時平大臣左右耳ヨリ頭出淨藏父清行ニ示云我天帝告讒佞之怨報ント而貴子淨藏貴所法力ヲ以テ我ヲ押ル願ハ嚴誠ヲ加給云

々之ニ依テ淨藏貴所ヲ諫而潛ニ去纔門ヲ出ルニ時平大臣即薨給于時年三十九歲 同歲聖寶僧正醍醐ヲ賜勅願寺トス 同四月普明寺ニ於テ病ニ伏ス寬平法皇幸而之ヲ問給同七月六日入滅于時年七十八歲 同十年庚午歲河內國信貴毗沙門出現 同十三年壬申歲多田滿仲誕生是清和天皇三代孫六孫王經基之子也母武藏守藤原敦有之女也 同十四年甲戌五月二日京家六百十七字燒失是菅丞相靈之祟ニ依テ也 同十五年乙亥七月五日暉形月ニ似リ 同年痲瘡甚業流 同十六年ニ當春三月支那國ニ於テ布袋和尚岳林寺東廊之石上ニ而入滅支那ハ後梁三代末帝貞明二年丙子歲也 同歲五月七日源氏正統貞純親王薨御于時御年四十三歲是清和天皇第六皇子也此親王一條大宮桃園池ニ於テ七尺之龍ト爲之由時人多以薨ヲ見仍桃園親王ト曰 同十七年丁丑十二月朔日奈良東大寺燒亡講堂僧坊等百廿四間燒 同十九年己卯歲藤原仲平安樂寺ヲ建立 同廿一年辛巳歲冬十月高野開山空海謚ヲ賜弘法大師ト號 延長元年癸未歲春三月王城夥雷電洛中之諸人太以震恐是菅丞相靈之祟ニ依也 同二年甲申歲大和國ヨリ八足ノ兔ヲ獻足ニ背ヨリ出 同四年丙戌大和國多武峰總社建立 同歲秋八月帝大井川ニ行幸アリ同五年丁亥歲帝大原野ニ行幸親王公卿等供奉之行粧偏花ヲ飾見人耳目ヲ驚ス 同年冬十二月天台坐主圓珍三井寺之住持謚ヲ賜智證大師ト號 同六年戊子歲性空上人播磨國書之開山誕生是敏達天皇十一代之孫橘善根之子也母ハ源氏ノ女也年來生處之子各難產也仍性空ヲ孕之時毒藥ヲ吞胎壞而產ニ及時覺スシテ誕生ス生出時右ノ手ヲ拳不開父母強之啓ニ一針アリ生而三日ニ忽失隱父母愁而求ニ庭ノ叢ノ中ニ安坐幼ヨ



リ老ニ至而面ニ微笑ノ姿アリ 同七年己丑歲管丞相靈之祟ニ依テ王城洛中大ニ雷電而雨  
荒風烈而世界闇之如大洪水出家々ヲ漂京白河ノ人民多以溺死 同八年庚寅歲夏雷電鳴  
震而遂大内清凉殿ニ落此時大納言藤原清貫卿裝束ニ雷火烘付之ニ依テ悶躁ト雖消ス而遂  
ニ燒死ス右大辨平希世ハ心剛ニ而儀勢ヲ現之處五體直ミテ倒死ス近衛忠包髮髮ニ火付而  
燒死ス紀蔭連煙ニ咽絶入云々

六十一代朱雀院 御諱寬明醍醐天皇第十一御子御母皇太后穩子關白太政大臣基經公之女也  
醍醐天皇延長元年癸未七月十四日御誕生御年八歲而同八年庚寅十一月廿一日御即位元年  
辛卯歲也御世ヲ治給事十六年ニ而天慶九年丙午四月十三日御位ヲ皇太弟ニ禪給村上天皇  
天曆六年壬子二月十四日御出家法名佛毘壽同八月十五日崩御于時御年三十歲 此帝年號  
承平七年 天慶九年也 此帝御宇承平元年辛卯六月八日大雪降 同二年壬辰歲鹿大内承  
明門ニ走入而射害 同歲相馬小次郎平將門東國ニ於テ叛逆ヲ企伯父常陸大掾平國香滅而  
關東ヲ從ヘ下總國相馬郡ニ居住而平親王ト自稱ス是桓武天皇六代ノ孫鎮守府將軍良將之  
次男也 同四年甲午五月廿七日大地震同冬十月海賊追捕事ヲ定ラル 同五年乙未三月六  
日比叡山中堂管丞相靈之祟ニ依テ燒亡 同四月四日夜大霜降 同七年丁酉四月十五日大  
地震 同年性空播摩國書寫之開山十歲而法花經ヲ持天慶元年戊戌歲空也上人王城ニ入市鄺ニ於テ彌  
陀名號ヲ唱諸人ヲ勸化時人之ヲ呼而市上人ト云釋光勝俗姓言沙彌而自空也ト稱 同年十  
二月六日京都ニ於而大雪降積事一丈 同三年庚子春正月淨藏貴所勅ニ依テ比叡山橫川ニ

於テ大威德ノ法修朝敵平將門ヲ降伏于時將門弓矢ヲ帶燈燄上立伴僧皆見須臾流鏑聲東ヲ指テ  
去 同二月廿三日ニ平將軍貞盛將門追討之宣旨ヲ蒙ニ依テ倭藤太秀鄉等之官軍ヲ引率而  
下總國相馬館ヘ發向爰將門四千餘騎ノ軍兵ヲ率而辛島郡口山ニ對陣翌廿四日未刻矢合而  
互責戰之處凶徒強而官軍戰劣之間或被討或疵ヲ蒙者數ヲ知ス之ニ依テ貞盛秀鄉等引退之  
處官軍多以逃亡爰將門勝ニ乘官軍ヲ責襲于時貞盛秀鄉等精兵二百餘人ヲ揃具而返合身命  
ヲ棄競戰之間將門遂秀鄉カ爲ニ打捕レ訖 同四月廿五日將門首上洛入洛之後洛中ヲ渡獄  
門之前ノ樹ニ掛ラル 同年七月十六日天滿天神始而右近馬場ニ現給是下京七條之坊ニ住  
處之婢女文子ニ詫宣而我右近馬場ニ棲ト欲云々爰其女甚貧賤而宮社ヲ營事不能依繼家側  
ニ祠ヲ構而之ヲ崇訖 同四年辛丑歲朝敵藤原純友滅亡是相馬將門同意而西海ヲ往反シ謀  
叛ヲ企ニ依テ也閑院左大臣冬嗣公五代之孫太宰大貳良範之子也 同年秋八月道賢沙門冥  
途ニ往是大和國金峰山ノ藏王權現之教ニ依行也 同五年壬寅歲惠心僧深信橫川誕生大和  
國葛木郡人父ハ正親母清原氏也父母共ニ高尾寺ニ詣子ヲ祈求母夢ニ一人之僧來一ノ玉ヲ  
與ト覺而即娠云々 同七年甲辰歲大和國長谷寺炎上 同年天下大風吹 同年丙午歲長谷  
寺再興アリ

六十二代村上天皇 御諱成明醍醐天皇第十四御子御母皇太后穩子關白基經公女也朱雀院御  
一腹之御弟也醍醐天皇延長四年丙戌六月二日御誕生御年二十一而朱雀院天慶九年丙午四  
月廿二日御即位元年丁未歲也御世ヲ治給事廿一年ニ而康保四年丁卯五月廿五日先御出家



法名覺貞後崩御于時御年四十二歲 此朝年號 天曆十年 天德四年 應和三年 康保四年也 此帝御宇天曆元年丁未六月九日天滿天神右近馬場ヨリ北野移宮社之構尤纒也 同二年戊申歲夏空也上人比叡山ニ上坐主延昌ニ從得度 同五年辛亥歲京中疫病ニ依テ諸人多以死空也上人ノ憐而自十一面觀音之像ヲ造之ヲ祈時ニ及テ疫病止佛像之長一丈洛東ニ於テ四衆ヲ勸テ一寺ヲ建立六波羅密寺ト名テ彼佛ヲ安置ス 同九年乙卯三月十二日天滿天神近江國比良神主良種七歲之子御詔宣之事神詔之如ク王城之北野ニ一夜之間ニ數千本之松生ス是ニ依テ朝日寺ノ沙門最珍ト七條之婢女文子ト力ヲ勸テ靈社ヲ建立 同十年丙辰歲淨藏貴所王城東山麓八坂ノ塔ヲ加持ス是日來塔之傾事斜也諸人之ヲ見爰塔之傾事其方必凶事ナリ今是塔者王城ニ向而傾淨藏曰我又之ヲ思ニ早修治スベシ云々依郡(群歟)公財ヲ施ント欲其夜淨藏露次ニ坐而塔ニ向加持而已ニ房ニ還弟子仁瑞偶庭ニ出而之ヲ見ニ微風西ヨリ來テ塔婆少搖寶鐸聲ヲ作朝之ヲ見塔婆端直ニ成都人走集而之ヲ見而隨喜感歎ス天德二年戊午歲兼明親王右大臣ニ任ス 同三年己未歲九條右丞相藤原師輔公北野天神之宮社ヲ改而大厦之構ヲ成神威ヲ崇ラル本地十一面觀音之靈應也 同四年庚申九月廿四日內裏燒ル都ヲ山城國愛宕郡宇多村ニ遷テ以來今度始而炎上 應和元年辛酉六月十五日六孫王經基始而源姓ヲ賜 同十一月十日卒去于時年四十五歲是清和天皇之御孫女右大臣能有公之御女也此六孫王者洛陽西八條池ニ於テ龍ト爲而住ム云々凡武門源氏正統弓馬達者武略ニ長歌人鎮守府將軍タリ同三年癸亥歲秋八月空也上人洛東六波羅堂ニ於テ金

字大般若經六百卷各水晶軸ヲ以テ供養于時名德僧衆六百人會合爰ニ乞骸人夥集其中ニ比丘形之者アリ淨藏貴所遙ニ之ヲ見テ大驚上坐ニ請此比丘更辭退之氣無又言淨藏一盂之飯以之ニ與其飯四斗ヲ盛云々爰比丘皆食盡淨藏又飯ヲ薦又之ヲ盡諸人此比丘ヲ怪又多食スル處悉之ヲ見彼比丘食已テ後淨藏揖而之ヲ送還去後與ル處之飯元ノ如而敢散セス或人怪之ヲ問淨藏答曰是文珠菩薩之應化也一會歎伏同年八月廿日清涼殿ニ於テ宗論アリ同年性空上人于時上野介方用後向國霧島ニ往テ而菴ヲ結テ住ス或日數ヲ阻テ食シ或無食ニ而月日ヲ送處ニ夢中ニ而度々美食ヲ受テ之ヲ食ト覺後腹中飽滿ス是ヲ以苦行而食ヲ絶ト雖身體肥滑也寒夜ト雖蔽衣ヲ著故膚氷ノ如シ爰寒ヲ忍而妙經ヲ讀誦忽菴ノ上ヨリ物ヲ覆テ寒ヲ防云々 康保元年甲子歲小野道風卒去于時年七十一歲 同年十一月廿一日淨藏貴所洛陽東山雲居寺ニ於テ入滅于時年七十四歲凡淨藏顯密之學匠而悉曇天文易道ト筮醫道管絃歌道文章伎藝等以通達古今无雙之名德也 同三年丙寅二月十三日兩日出 同年性空上人日向霧島ヨリ筑前國背振山ニ移住或時法花經ヲ讀誦スルニ年十五六歲ノ兒童數多左右ニ來テ同經ヲ誦其容貌奇麗而音韵又清雅也

六十三代冷泉院 御諱憲平村上天皇第二御子御母中宮安子右大臣藤原師輔公之女也村上天皇天曆四年庚戌五月廿五日御誕生御年十八而村上天皇康保四年丁卯十一月十一日御即位元年戊辰歲也御世ヲ治給事二年而安和二年己巳歲八月十三日御位ヲ皇太弟ニ禪給一條院



寬弘八年辛亥十月廿四日崩御于時御年六十二歲 此朝年號 安和二年也  
 六十四代圓融院 御諱守平村上天皇第五御子御母冷泉院ト同村上天皇天德三年己未二月二日御誕生年十一而冷泉院安和二年己巳九月十二日御即位元年庚午年也御世ヲ治給事十五年而永觀二年甲申八月廿七日御位ヲ御兄冷泉院第一皇子ニ禪給華山院寬和元年乙酉八月廿九日御惱ニ依テ御出家法名金剛法又覺如一條院正曆二年辛卯二月十二日崩御于時御年三十三歲 此朝年號 天祿三年 天延三年 貞元二年 天元五年 永觀二年也 此帝御宇天祿三年壬申歲祇園會始 同年牛頭天皇播磨國ニ垂迹 同年九月十一日空也上人入滅于時年七十歲最後ニ及淨衣ヲ著手ニ香爐ヲ執端坐而門弟ニ語曰無量之聖衆來迎而室ニ滿云々已息絶ト雖手中之香爐聊以傾事ナシ時異香室ニ薰音樂天ニ響而已 天延元年癸酉三月十三日北野宮盡燒亡 同年大和國水晶之如ナル玉碎而降 同三年乙亥八月廿四日夜滿月申ノ方ニ出 同年十二月十六日月蝕遂形不見 貞元々年丙子歲春二月夜々鬼如者行 同年六月十八日未曾有大地震不絕同二年丁丑歲八月十五日多田滿仲出家法名滿慶 天元三年庚辰七月九日猛風王城南羅生門ヲ吹キ倒 同四年辛巳歲比叡山三井寺不和ニ成是智證大師門徒余慶法師法性寺之坐主ニ補ニ依テ慈覺大師之門徒等禁廷ニ之ヲ訴之間兩門是ヨリ不和ニ依テ智證大師門徒比叡山ヲ出而別院ニ居

六十五代華山院 御諱師貞冷泉院第一皇子御母贈皇太后懷子攝政太政大臣藤原伊尹公之女也冷泉院安和元年戊辰十月廿六日御誕生御年十七而圓融院永觀二年甲申十月十日御即位

元年乙酉歲也御世ヲ治給事三年而寬和二年丙戌六月廿二日御位ヲ退而同廿三日花山寺ニ於テ御出家法名入覺一條院寬弘五年戊申二月八日崩御于時御年四十一歲華山法皇是也 此朝年號 寬和二年也



神皇正統錄中

六十六代一條院 御諱懷仁圓融院第一皇子御母皇后詮子後東三條院ト曰攝政太政大臣藤原兼家公之女也圓融院天元三年庚辰六月一日御誕生御年七歲而華山院寬和二年丙戌七月廿二日御即位元年丁亥歲也御世ヲ治給事二十五年而寬弘八年辛亥六月十三日御位ヲ冷泉院第二皇子ニ禪給同十九日御惱ニ依テ御出家法名精進覺同廿二日崩御于時御年三十三歲此朝年號ニ永延二年 永祚一年 正曆五年 長德四年長保五年 寬弘八年也 此帝御宇永延元年癸亥歲嵯峨釋迦宋朝ヨリ我朝ニ渡是齋然法師之將來スル處也 同年圓融院南都之諸寺ニ御幸アリ 同二年戊子歲性空上人之菴室化人來テ告テ曰播磨國書寫山ハ是鷲峰ノ一峰也此ニ居者ハ菩提心ヲ發而六根淨ヲ得云々性空彼山ニ至西洞ニ菴ヲ結茅ヲ以席トシ紙ヲ以衣ト而佛法ヲ修行ス漸精舍ヲ建立而書寫山圓教寺ト號 永祚元年己丑八月三日三方ニ日出後合而一成 同年十月三日古今無雙之大風吹又大洪水出 正曆四年癸巳五月廿日筑前國太宰府天神ニ太政大臣正一位之官位ヲ贈 長德二年丙申十一月六日北野社燒 同三年丁酉八月廿七日多田滿仲法師死去于時年八十六歲同四年戊戌歲天下諸人疱瘡ヲ煩ハスト云事ナシ 長保元年己亥歲莖一ニ而花二開白蓮花ヲ獻 同三年辛丑五月九日紫野疫神ヲ祭御靈會是也 同四年壬寅歲花山院書寫山ノ性空上人之庵室ニ幸給延源阿闍梨ニ勅而性空ノ像ヲ圖シ并行業事等ヲ記サル于時山動地震上皇并供奉人等大ニ驚皆性空ヲ畏性空曰敢以恐事勿爰圖像成就之處又山川大動震上皇地ヲ下給テ性空ヲ禮シ給 寬弘

三年丙午歲異國ノ賊船來 同四年丁未三月十三日播磨國書寫開山性空上人妙法華經ヲ讀誦而入滅于時年八十歲凡性空胸ノ間ニ阿彌陀像ヲ彫而能他心ヲ知云々

六十七代三條院 御諱居貞冷泉院第二御子御母皇太后超子攝政太政大臣藤原兼家公之女也

圓融院貞元元年丙子正月三日御誕生御年三十六而一條院寬弘八年辛亥十月十六日御即位元年壬子歲也御世ヲ治給事五年而長和五年丙辰正月廿九日御位ヲ一條院第二皇子ニ禪給後一條院寬仁元年丁巳四月十九日御出家法名金剛行同五月九日崩御于時御年四十二歲

此朝年號 長和五年也 此帝御宇長和元年壬子三月廿四日四方山白雪 同二年ニ當テ支

那國ニ於テ開寶寺ノ塔金色光耀支那ハ大宋三代眞宗皇帝大中祥符六年癸丑歲也 同三年

甲寅二月九日內裏炎上 同三月十二日新羅ト合戰アリ 同四年乙卯正月廿一日內裏又燒

同五年ニ當テ夏六月支那ニ於テ蝗虫群飛而天ニ徹ス同秋九月青州ニ於テ蝗虫群飛而海

ニ赴海岸ニ積ル事一百餘里支那ハ大宋三代眞宗大中祥符九年丙辰歲也

六十八代後一條院 御諱敦成一條院第二御子御母皇太后彰子後上東門院ト曰攝政關白藤原

道長公之女也一條院寬弘五年戊申九月十一日御誕生御年九歲ニ而三條院長和五年丙辰二

月七日御即位元年丁巳歲也御世ヲ治給事二十年而長元九年丙子四月十七日御位ヲ皇太弟

ニ禪給同日崩御臨終ニ御出家于時御年二十九歲 此帝年號 寬仁四年 治安三年 萬壽

四年 長元九年也 此帝御宇寬仁元年丁巳六月十日源信和尙惠心僧比叡山橫川之坊室而

門弟子ヲ集最期之所存ヲ言說之ヲ見聞之徒各淚ヲ流便定印ヲ結端坐而入滅于時年七十六



歲此時天樂空ニ響異香四方ニ薰シ山中之草木悉靡訖後宋朝皇帝入滅之事ヲ傳聞惠心僧都之道譽ヲ感廟塔ヲ建立而影像ヲ安置セラル 同四年ニ當テ四月支那ニ於テ月二而南ニ見文那ハ大宋三代眞宗皇帝天禧四年庚申歲也 治安元年辛酉七月廿四日源賴光卒去是清和天皇五代孫多田滿仲之嫡子也凡內裏守護猛貴名將ト而武略ニ長歌人神通權化人也昇殿極庸內藏頭中宮進左兵衛尉兵部丞上總上野等介左馬權頭正四位下春宮亮等ニ任攝津下野等十餘箇國之受領タリ 萬壽三年癸亥歲一條院皇后藤原彰子御飾ヲ落サル法名清淨覺上東門院ト號 同四年丁卯歲夏四月大雪降積事四尺五寸 長元元年戊辰歲下總國千葉先祖上總介平忠常亂逆是平家元祖萬原親王五代孫隆興介忠賴之次男也武藏押領使而自日本將軍ト稱 同二年己巳歲京中諸人腫事ヲ病時人福來病ト云同三年庚午八月廿一日上東門院慶命法師ニ詔而東北院ヲ供養 同四年辛未歲賴光弟河內守源賴信平忠常ヲ追討 同七年甲戌八月九日大風吹 同九年ニ當テ支那ニ於テ皇帝詔而五千人童子ヲ選梵學ヲ習ハス 同年十二月十九日詩人東坡誕生支那ハ大宋四代仁宗皇帝景祐三年丙子歲也 六十九代後朱雀院 御諱敦良後一條院御弟御母又同一條院寬弘六年己酉十一月廿五日御誕生御年二十八而後一條院長元九年丙子七月十日御即位元年丁丑歲也御世ヲ治給事九年而寬德二年乙酉正月十六日御位ヲ皇太子ニ禪給同十八日御出家同崩御于時御年三十七歲 此朝年號 長曆三年 長久四年 寬德二年也 此朝御宇長曆元年ニ當テ秋七月支那國於テ流星數百西南ニ流同冬十二月大地震民舍壞倒而壓死者二萬二千三百人傷者五千六百

人也大地破裂而泉火出其狀黑沙之如支那ハ大宋四代仁宗皇帝景祐四年丁丑歲也 同三年己卯歲比叡山衆徒ト直方ト合戰長久二年辛巳歲源義家誕生<sup>後八幡太</sup>是清和天皇六代孫伊豫守賴義之嫡子也母伊豆國北條先祖上野介平直方之女也誕生以前父賴義八幡宮ニ詣而祈念之處社壇ニ於テ三寸之靈劍賜之由靈夢ヲ蒙依テ其且枕邊而一之小劍ヲ得之ニ依テ神德ヲ仰感涙ヲ拭即之ヲ安置而一家之重寶トス彼靈夢ヲ蒙月妻室懷妊而即男子ヲ生義家是也同年法成寺塔地震之爲ニ倒 同年ニ當テ宋朝都ニ於テ春二月藥降下支那ハ大宋四代仁宗皇帝慶曆元年辛巳歲也 同四年癸未歲牛頭ニアル犢ヲ產 同年ニ當テ冬十一月支那ニ於テ河北ニ赤雪降即宋慶曆三年也 寬德元年甲申歲南都興福寺炎上 同二年ニ當テ支那ニ於テ詩人山谷誕生支那ハ宋慶曆五年乙酉歲也 七十代後冷泉院 御諱親仁後朱雀院第一皇子御母尚侍贈正二位嬉子攝政關白藤原道長公之女也後一條院萬壽二年乙丑八月三日御誕生御年二十一而後朱雀院寬德二年乙酉四月十日御即位元年丙戌歲也御世ヲ治給事廿三年而治曆四年戊申四月九日御位皇太弟ニ禪給 同日崩御于時御年四十四歲 此朝年號永承七年 天喜五年 康平七年 治曆四年也 此帝御宇永承元年丙戌歲冬南都興福寺燒 同二年丁亥歲春源義家七歲ニ而八幡宮ノ社壇ニ於テ元服依八幡太郎ト號是誕生以前父賴義靈夢ヲ蒙ニ依テ也 同六年辛卯三月廿八日山城國宇治郡平等院供養是大戰冠十三代孫攝政關白藤原賴通公建立之寺也 天喜二年甲午九月廿二日未刻河內國ニ於而聖德太子之未來記ヲ掘出 同五年丁酉歲多田滿仲孫子河內



守賴信嫡子源賴義勅定ニ依テ奥州ニ發向而安倍貞任同宗任ト合戰ス 康平三年庚子五月四日興福寺燒 同五年壬寅十一月廿九日伊豫守源賴義遂安倍貞任同宗任等ヲ誅伐是安倍賴時之子等也奥州衣河ノ館ニ居住西白河ノ關ヲ限トナシ東ハ外濱ヲ限其間行程十餘日其中央ニ關ヲ構是ヲ衣ノ關ト云悉以之ヲ領知ス賴時男子四人女子四人并郎從等此處ニ於テ簷ヲ並門々ヲ構而國郡ヲ掠領

七十一代後三條院 御諱尊仁後朱雀院第二御子御母皇太后禎子內親王後陽明門院ト曰三條院之御女也後一條院長元七年甲戌七月十八日御誕生御年三十五而後冷泉院治曆四年戊申七月廿二日御即位元年戊申歲也御世ヲ治給事四年而延久四年壬子十二月八日御位ヲ皇太子ニ禪給白河院延久五年癸丑四月廿一日御出家法名金剛行同五月七日崩御于時御年四十一歲 此朝年號 延久四年也 此帝御宇延久元年己酉歲平等院ニ於テ一切經會ヲ修 同二年庚戌五月廿一日虛空ニ鼓聲有而不止 同八月八日幡宮始而放生會 同三年辛亥正月廿六日帝始而稻荷祇園兩社ニ行幸

七十二代白河院 御諱貞仁後三條院第一御子御母贈皇太后茂子權中納言藤原公成之女也後冷泉院天喜元年癸巳六月廿一日御誕生御年二十而後三條院延久四年壬子十二月廿九日御即位元年癸丑歲御世ヲ治給事十四年而應德三年丙寅十一月廿六日御位ヲ皇太子ニ禪給堀川院永長元年丙子八月十日御惱ニ依テ御出家法名融觀崇德院大治四年己酉七月七日崩御于時御年七十七歲 此朝年號 延久尙一年 承保三年 承曆四年 永保三年 應德三年

也 此帝御宇承曆元年丁巳歲藍婆鬼ト云鬼京中ニ充滿十歲已前之子等ヲ多以取失同年法勝寺九重塔建 永保元年辛酉歲比叡山衆徒等三井寺ヲ燒 同年興福寺衆徒多武峰ヲ燒 同二年壬戌夏大旱信覺雨ヲ祈同三年癸亥歲秋九月源義家勅定ニ依テ奥州發向而將軍三郎清原武衡同四郎家衡等ヲ退治 應德三年丙寅歲城南離宮鳥羽殿建 凡此帝ヨリ始テ院ニ而天下之政ヲ知給是則朝儀政道亂姿也云々

七十三代堀川院 御諱善仁白川院第二御子御母中宮賢子右大臣源顯房公之女也白河院承曆三年己未七月九日御誕生御年八歲而白川院應德三年丙寅十二月廿六日御即位元年丁卯歲也御世ヲ治給事二十一年而嘉承二年丁亥七月十九日御位ヲ皇太子ニ禪給同日崩御于時御年二十九歲 此朝年號 寬治七年 嘉保二年 永長一年 承德二年 康和五年 長治二年 嘉承二年也 此帝御宇寬治二年戊辰歲白川院高野山ニ御幸于時弘法之御影堂ヲ開 同四年庚午歲春正月熊野御幸 同年帝清水寺行幸一七日御參籠 同五年辛未二月八日高野山御幸 同六年壬申歲大和國金峰山御幸 同七年癸酉歲日吉社御幸 同八月七日郁芳門天狗ノ爲ニ投 嘉保元年甲戌歲源爲義誕生是八幡太郎義家之次男對馬守義親之子也 同二年乙亥歲覺鑿根來山誕生是肥前國人平將門屬胤也累代武略之家也 永長元年丙子五月五日雷降大サ梅之如 同年平忠盛誕生是桓武天皇十一代孫讚岐守平正盛之嫡子母清原爲業之女也 承德二年戊寅八月八日大洪水康和元年己卯歲都西山良峰開山源算入滅 同三年辛巳歲源義家之次男義親勅宣ヲ背ニ依テ出雲國ニ配流 同年ニ當テ支那ニ於テ詩人蘇



東坡卒于時六十六歲支那ハ宋八代徽宗皇帝建中靖國元年也 長治二年乙酉六月二日北地ニ紅ノ雪降事五寸 同年源賴政誕生是源賴光五代孫兵庫頭仲政之嫡子母藤原友實女也 同年ニ當テ支那ニ於テ詩人山谷宣州ニ卒于時六十一歲是江西之詩祖ト而悟道發明孝行第一之人也 嘉承元年丙戌四月七日陸奧守源義家病ニ依テ出家 同二年丁亥歲源義家弟義綱賀茂次郎ト號姪義忠殺害之事ニ依テ虛名ヲ得之間之ヲ追討ヘキ之旨源爲義宣旨ヲ蒙發向處義綱ハ近江國甲賀山楯籠即之ヲ責襲之間忽出家而降參依テ爲義之ヲ召具而上洛子息四人其場ニ而自害爰義綱入洛之後陳謝ニ依テ死罪ヲ宥佐渡國ニ配流 同年十二月十九日平正盛太政清源義親八幡太郎追討之宣旨ヲ蒙出雲國ニ下向

七十四代鳥羽院 御諱宗仁堀川第一御子御母贈皇太后茨子贈太政大臣藤原實季之女也堀川院康和五年癸未正月十六日御誕生御年五歲而堀川院嘉承二年丁亥十一月朔日御即位元年戊子歲也御世ヲ治給事十六年而保安四年癸卯正月廿八日御位ヲ皇太子ニ禪給崇德院永治元年辛酉三月十日御出家法名空覺後白河院保元元年丙子七月二日崩御于時御年五十五歲 此朝年號 天仁二年 天永三年 永久五年 元永二年 保安四年也此帝御宇天仁元年春正月平正盛出雲國於テ流人源義親追討 同月九日義親首並郎等四人首上洛即正盛隨身スル處也入洛之後大路ヲ渡獄門ノ前ノ樹ニ掛 同元年戊子八月十七日虛空ニ聲有テ鼓ノ如シ數日斷マス 同年八月十八日源義家卒于時年六十八歲凡源氏一流正統虎賁猛將勇威武略ニ長神通權化ノ人歌人弓馬ノ達者也內裏昇殿使宣旨ヲ蒙鎮守府將軍兵部大輔治部少

輔左近將監左衛門尉馬允正四位下左馬權頭等ニ任シ陸奥下野等七箇國之受領タリ同二年己丑二月廿五日始而北野御忌日ヲ行ハル 天永元年庚寅歲興福寺ト延曆寺ト合戰 同三年壬辰五月廿八日大雹降 永久元年癸巳歲歌人俊成卿誕生是御堂關白道長公五代孫權中納言藤原俊忠之子也母伊豫守藤原敦家之女也冷泉家ト號元永二年己亥歲平清盛誕生是桓武天皇十二代孫刑部卿忠盛之嫡男也或說鳥羽院皇祖母祇園女御云々 同年ニ當テ夏五月宋朝ニ於テ大洪水洛外水高事十餘丈支那ハ宋八代徽宗皇帝宣和元年己亥歲也 保安元年庚子歲相摸國鎌倉立 同四年癸卯歲源義朝誕生 是清和天皇十代孫六條判官爲義嫡子也母淡路守藤原忠清之女也

七十五代崇德院 御諱顯仁鳥羽院第一御子御母中宮璋子後待賢門院ト曰大納言藤原公實之女也鳥羽院元永二年己亥五月廿八日御誕生御年五歲而鳥羽院保安四年癸卯二月十九日御即位元年甲辰歲也御世ヲ治給事十八年而永治元年辛酉十二月七日鳥羽院之御計ト而御位ヲ皇太弟ニ禪給後白河院保元元年丙子七月十一日御謀叛合戰敗北 同十二日仁和寺ニ於テ御出家同廿三日讚岐國御配流二條院長寛二年甲申八月廿六日御廢處讚岐國志戸ニ於テ崩御于時御年四十六歲 此朝年號 天治二年 大治五年 天承一年 長承三年 保延六年 永治一年也 此帝御宇大治二年丁未冬十月白河院鳥羽院高野山ニ御幸 同年大原良忍上人融通念佛ヲ始 長承元年壬子三月十三日洛東三十三間堂御堂供養得長壽院ト號導師天台座主東陽坊忠尋僧正也是則鳥羽院之御願寺ト而平忠盛太政清之ヲ造營一千一體之千手觀



音像ヲ居奉 同年佐渡國流人源義綱重而追討ニ依テ廢處ニ於テ遂自害是八幡太郎義家之弟母同シ當初父賴義賀茂社ニ而元服ヲ加ニ依テ加茂次郎ト號陸奧美濃等七箇國受領石橋黨之先祖也 同二年癸丑四月七日法然上人誕生出家之後源空ト號是美作國稻岡人也父時國母秦氏女也父母共ニ子无事ヲ愁而佛神ニ祈母夢ニ剃刀ヲ吞ト覺而孕生後頭ハ圩而眼黃而光有親族之ヲ奇特トス 保延元年乙卯十二月五日日三並出 同二年丙辰三月廿三日鳥羽勝光院供養鳥羽院御幸六宮百司參集見聞人耳目ヲ驚 同三年丁巳歲平重盛小松殿是也 誕生是平清盛之嫡子母修理大夫藤原宗兼女也 同四年戊午歲平時政誕生是相摸國北條也 是余吾將軍惟茂九代孫北條四郎大夫時方之子母伴爲房之女也 同五年己未歲源爲朝鎮西八郎是也 誕生是六條判官爲義之八男母江口之遊女也永治元年辛酉四月廿日榮西洛東建仁寺謙會壽福寺等之開山也 誕生是備中國吉備津宮人賀陽氏薩摩守貞政之曾孫也母孕而八月而四月廿日明星出時困惱事无而誕生 人曰傳聞月滿口而生者其父母ニ不孝也云々母之ヲ聞ヨリ乳ヲ吞セサル事三日兒又呱ス陽嚴ト云僧其家ニ往來スルノ間或時此事其父ニ告ル父大ニ噴曰兒已死哉否對曰未死爰陽嚴其母ヲ誠テ養育 同年法然上人九歲而小弓矢ヲ以テ父ノ敵源長明カ額ヲ射其疵瘡ト成遂死ス幼稚身ト而忽父ノ敵ヲ討事誠以奇妙

七十六代近衛院 御諱體仁鳥羽院第八御子御母皇后得子後美福門院ト曰贈左大臣藤原長實之女也崇德院保延五年己未五月十八日御誕生御年三歲而崇德院永治元辛酉十二月廿七日御即位元年壬戌歲也御世ヲ治給事十四年而久壽二年乙寅七月廿三日崩御于時御年十七歲

凡此帝御位ニ即給事先崇德院之皇子御座ト雖鳥羽院法皇御氣色ニ依テ之ヲ立給畢 此朝年號 康治二年 天養一年 久安六年 仁平三年 久壽二年也此帝御宇康治二年癸亥十二月十二日根來開山覺鑿入滅于時年四十九歲是大唐惠果阿闍梨之再來也始高野山ニ住後根來ニ移又傳法院密嚴院等ヲ建立法性寺關白忠通公深以信仰 久安元年乙丑七月廿二日大彗星出天變甚 同三年丁卯四月廿八日加賀國白山比叡山之末寺ト成 同年法然上人十五歲而比叡山功德院皇圓之室ニ於テ出家是ヨリ後三箇年之間天台之學ニ通達書ヲ讀事三遍而其儀自彰テ苦勞ナシ 同年四月八日源賴朝誕生是左馬頭義朝之三男母熱田大宮司藤原季範之女也同年和田義盛誕生是平家先祖葛原親王十代孫杉本太郎平義宗之嫡男也仁平元年辛未歲茂仁王御誕生高倉宮是也 是後白川院皇子御母從三位成子季成卿之女也 同三年癸酉正月十九日刑部卿平忠盛卒于時年五十八歲是清盛公之父也三十三間堂造立之人也 同年源義仲誕生木曾殿是也 是源爲義次男帶刀先生義賢之子也母遊女也 同年源賴政勅定依テ宮中ニ於テ鷓ヲ射落久壽二年乙亥四月十五日慈鎮和尚青蓮院三代之門跡 誕生是法性寺關白忠通公之御子御母北政所女房加賀從五位上仲光之女也同年七月廿日ノ日鳥羽法皇之御計ニ依テ後白河踐祚アリ崇德院之御謀叛是ヨリ起是日來美福門院之御訟ニ依テ也 同年八月十六日源義賢爲義次男又木曾義仲父 武藏國大倉館ニ於テ姪惡源太義平之爲ニ被討訖 同年三浦介上總介等ニ課テ下野國那須野ニ而狐ヲ狩給玉藻前是也 同年冬鳥羽院御宿願ニ依テ熊野ニ御參詣アリ此時權現天下兵亂之御託宣アリ果而翌年保元ニ合戰有テ貴賤共ニ多以滅亡



七十七代後白河院 御諱雅仁鳥羽院第四御子御母崇德院同崇德院大治二年丁未九月十一日御誕生御年二十九而近衛院久壽二年乙亥十月廿六日御即位元年丙子歲也御世ヲ治給事三年而保元三年戊寅八月十一日御位ヲ皇太子ニ禪給高倉院嘉應元年己丑六月十七日御出家法名行直承安二年壬辰十月十日一身阿闍梨前僧正覺忠之ヲ奏後鳥羽院文治三年丁未八月廿三日天王寺ニ於テ御灌頂前僧正公顯御師タリ建久三年壬子三月十三日崩御于時御年六十六歲 此朝年號保元三年也 此帝御宇保元元年丙子歲春鳥羽法皇比叡山御幸于時禪唐院ニ納置處之傳教大師修禪定具足等之事衆徒中ニ勅問アル處ニ皆悉辭退之ニ依テ少納言入道信西ニ勅問アリ爰信西才學廣博ナルニ依テ三塔之秘事等悉以勅答申依之供奉之公卿以下山門之衆徒等各奇異之思成云々 同年七月二日鳥羽院崩御ノ後軍兵等武具ヲ調テ東西ヨリ都ヘ入集事是知足院關白忠實公之三男惡左府賴長公年來崇德院ニ御謀叛事申勸ニ依テ也 同六月關々之警固ト而官軍等ヲ其處ニ差向是勅定ニ依テ也 同月平基清清盛次男大和路ニ向之處法性寺一ノ橋邊而院方ノ兵源親治大和住人宇野七郎合戰爰親治猛威ヲ振雖官軍多勢ニ依テ遂擄捕基盛即之ヲ具而入洛 同十日夜崇德院鳥羽院御所ニ御幸其後惡左府并院方軍兵平正弘源為義平忠正清盛叔父等父子郎等共ニ集其勢一千餘騎云々爰源為朝為義八男今夜內裏高松殿ヲ攻奉ヘキノ由謀申之處惡左府御承引ナシ云々是院方敗軍之基也同十一日寅刻源義朝為義嫡子計申ニ依テ官軍等白河殿崇德院之御所ニ押寄セ合戰所謂源義朝平清盛源賴政源重成足利義康源光信源季實隱岐惟重平實俊藤原資經平信兼等內裏方軍兵其勢一千七百餘騎云々義

朝清盛大將軍ニ而殊武勇ヲ勵合戰爰源為朝八郎生年十八歲院方ノ大將軍ト而古今無雙之弓勢ヲ現數多之官軍ヲ射害之ニ依テ平清盛軍兵ヲ率而相向雖其猛威懼引退之處郎從山田惟行伊賀住人後ニ之聞テ耻テ多勢ノ中ヨリ只一騎引退為朝ノ陣向高聲名謁而矢ヲ發處ニ即答之矢ニ射害サル其後為朝兄義朝之兵ト合戰之處ニ兩方之郎從等互討死爰義朝郎從武藏國住人齋藤實盛金子家忠等殊武勇ヲ勵實盛ハ為朝專一兵惡七別當ヲ討捕家忠ハ為朝陣ニ而彼郎從高間兄弟ヲ同時ニ討取大剛ノ譽ヲ現之處ニ為朝之ヲ感還而鎌ヲ許云々源賴政于時也頭是白川殿東門攻入之處平忠正平馬助多田賴章等防戰西門ニ於テハ源為義于時六父子五人身命ヲ棄而相戰自余之陣々皆此ノ如依之勝負未決處義朝奏聞ヲ經白河殿ニ火ヲ放之間院方之軍兵悉以退散此時崇德院御沒落惡左府又流矢ニ中給訖凡此一亂前代未聞ト謂主上新院御連枝關白忠通公左府賴長公又御兄弟武士之大將源義朝父弟ニ別而內裏參平清盛同忠正ハ叔姪而合戰ス 同日夜ニ入內裏而除目行ハル惡左府御兄關白忠通公元如氏長者ニ補給子刻ニ及ヒ武士之勸賞安藝守清盛播磨守ニ任下野守義朝左馬頭ニ任新判官義康ハ藏人ニ任而昇殿ヲ許同十四日惡左府大和國奈良邊而遂薨給 同十七日源為義比叡山西塔北谷黑谷而出家法名義法ト號是去合戰敗軍之時崇德院ニ供奉而如意山ニ隱入處課ニ依テ供奉スル處之兵等方々退散之時為義ハ東坂本邊ニ沒落ス其後登山而此ノ如其後相具之五人ノ子別而嫡子義朝ヲ憑都ニ皈入 同十九日平忠正去合戰敗北之後淨土谷而出家ヲ遂深隱居之處為義入道義朝ヲ憑都ニ入之由聞及之間即姪之清盛ヲ憑テ出來之處之ヲ申承テ父子五



人共ニ六條河原而首ヲ斬是義朝ニ父ヲ斬セン計也爰爲義ヲ誅スヘキ由宣旨ノ處義朝度々  
 ニ及テ嗟申ト雖勅免無ニ依テ鎌田正清ニ課テ七條西朱雀而之ヲ誅于時年六十三歲今日凡  
 院方之軍兵而頸ヲ斬者七十餘人云々義朝重而宣旨ヲ蒙ニ依テ賴賢賴仲爲宗爲成爲仲等之  
 五人之舍弟處々而尋出即船岡山麓而之ヲ誅是去合戰之時院方軍兵ニ依テ也其後幼稚弟乙  
 若龜若鶴若天王等至迄宣旨ニ依テ彼處ニ而頸ヲ斬訖此日四人之子等之母之ヲ聞而悲歎ニ  
 絶ス桂川ノ淵而身ヲ投死于時年三十七歲是美乃國住人内記平太夫行遠之女青墓長者大炊  
 之妹也 同廿一日瀧口三人官使一人南都ニ行向添上郡川上村般若野而葬處之左府御死骸  
 ヲ堀起而實檢日數ヲ經ニ依テ其形見ヘス故ニ之ヲ路傍ニ捨テ還上 同廿三日崇徳院ヲ讓  
 岐國遷奉是去合戰敗北之時仁和寺之寬遍法務坊ニ入御之間即此處ヨリ御配流 同八月二  
 日惡左府之御子四人配流兼長卿ハ出雲國師長卿ハ土佐國隆長卿ハ常陸國範長禪師ハ安藝  
 國ニ被流給 同九月二日源爲朝近江國百濟寺邊隱居之處佐渡重定ノ爲ニ擄捕是去合戰敗  
 北之後尋搜雖猛威ヲ振ニ依テ容易之ヲ捕事不能而遂逐電爰爲朝年來之住國鎮西ニ赴欲處  
 ニ折節所勞ニ依テ彼處ニ隱居此日浴室在之處源重定多勢ヲ以之ヲ擄捕 同八日京都ニ召  
 進北陣渡而後義朝課テ左右肩ヲ拔死罪ヲ宥伊豆國大島配流其後近邊之島七八箇處ヲ押領  
 同年平政子二位下號賴朝之御壘所誕生是北條平時政之女也同二年丁丑歲平清盛太宰大貳ニ任  
 七十八代二條院朝之御壘所御諱守仁後白河院長子御母贈皇太后懿子贈太政大臣藤原經實之女也近衛  
 院康治二年癸亥六月十七日御誕生御年十六而後白河院保元三年戊寅十二月廿日御即位元

年己卯歲也御世ヲ治給事七年而永萬元年乙酉六月廿五日御位ヲ皇太子ニ禪給同七月廿八  
 日崩御于時御年二十三歲也 此朝年號 平治一年 永曆一年 應保二年 長寬二年 永  
 萬一年也 此帝御宇平治元年己卯源義經誕生是左馬頭義朝之九男母九條院雜仕常磐也小  
 名ヲ牛若丸ト號同年十二月四日平清盛同重盛父子等宿願ニ依テ熊野ニ赴テ河九日夜ニ入  
 藤原信賴卿惡右衛門督下號平清盛熊野參詣之間ヲ伺而源義朝同賴政光保光基季實等ヲ相語其勢五  
 百餘騎ヲ以院御所三條殿ニ押寄信西入道之一類ヲ尋搜御所ヲ放火後白河院ヲ取奉大内一  
 品御書所ニ押籠奉是年來不義之逆心ヲ企信西入道ニ確執ヲ挿依テ也同丑刻信西之宿所姊  
 小路西洞院宅ヲ責襲放火之ヲ尋搜ト雖信西兼而其意ヲ得ルニ依テ當時他所ニ在テ其難ヲ  
 遁是去天變ヲ見ニ依テ也同十日信西子息五人闕官上卿ハ花山院忠雅職事ハ右中辨成賴也  
 早除目被行而信賴ハ大臣大將ヲ兼是日來之望ニ依テ也源義朝播磨守ニ任源重成ハ信濃守  
 ニ任多田賴章ハ攝津守ニ任源兼忠ハ左衛門尉ニ任康忠ハ右衛門尉ニ任足立遠元ハ右馬允  
 任鎌田正清ハ右兵衛尉ニ任而名ヲ改政家凡義朝今不義之謀叛ニ與事日來之忠功他ニ異而  
 平家ニ勝ト雖其恩賞薄ニ依テ連々宿意ヲ挿ニ依テ也爰惡源太義平義朝嫡子所存ニ依テ官位ヲ  
 辭退偏清盛父子之歸洛ヲ攝津國阿倍野ニ而之ヲ待受即時ニ誅伐之由謀申之處信賴之ヲ用  
 ス是誠謀叛之一類悉以滅亡基也同日源光保先祖信西之首ヲ取都ニ還入是去九日天變其凶  
 ヲ前ニ依テ信西即其難ヲ遁シ爲潛宇治路ニ赴田原ノ奥ニ往テ自土中ニ堀埋爰光保尋來堀  
 起テ見ニ未息絶即首ヲ取テ還是去保元ニ信西計申ニ依テ官使ヲ以惡左府ノ御死骸ヲ堀起



之ヲ實檢ス親彼怨念之致處也同十五日信西首ヲ大路ニ渡獄門前ノ樹ニ掛ラル此時天俄暗而星出同十九日清盛子息重盛之諫ニ依熊野參詣ヲ遂ス而六波羅之宿所ニ歸入同廿日公卿僉議有而信西子等十二人ヲ流罪ニ定ラル同廿六日夜主上潛六波羅ニ行幸アリ是別當惟方兄光賴卿之諫ニ依テ大炊御門經宗共而逆徒ノ軍兵等大内ノ警固スト雖潛謀出奉ニ依テ也爰平重盛同經盛賴盛等三百餘騎ノ勢ヲ以土御門東洞院ニ於テ之ヲ待受奉御車之前後ヲ守護六波羅ニ入奉偏是平家繁昌之基也同夜後白河院藤原成賴之申勸ニ依テ潛仁和尚御幸アリ同廿七日主上皇潛他所行幸之由藤原成親之告ニ依テ信賴并大内ニ籠處之兵等太以仰天然ト雖今更猶豫及サルニ依テ軍勢集兵具ヲ調門々ヲ堅平家軍兵襲來ルヲ相待之處平重盛五百餘騎之軍兵ヲ率而待賢門ヨリ責入之處惣大將信賴卿防戰ニ及ス前後ヲ忘引退之間惡源太義平大怒自懸向十七騎之兵ヲ以猛威ヲ振競戰之處平家之軍士叶ス而引退重盛亦兵ヲ改而重テ攻入義平又武勇ヲ勵責戰而敵ヲ遙追攻之間重盛遂協ハスシテ希有而六波羅歸爰平賴盛清盛弟軍兵ヲ引率而郁芳門ニ襲來之處大將軍義朝子息朝長賴朝並義盛義朝弟義信平賀重成等之軍士ヲ以攻戰之處賴盛暫相戰ト雖協ス而引退之ニ依テ源氏大内テ出而平家ヲ追攻之處宣旨ニ依テ平氏兵其間ニ大内ニ入替入替源氏之軍兵ヲ防之間源氏大内ニ歸入事不能而六波羅へ攻寄爰源賴政ハ源家之一類タルニ依テ義朝ト共而六波羅ニ向ト雖且朝敵タル事ヲ思且不義ノ謀叛與事ヲ顧猶豫處ニ義平之ヲ見尤大怒責戰依テ遂ニ一類別而六波羅皇居ニ參近而源氏ヲ射云々是義平之短慮之致處也義平即六波羅ニ攻寄之處相從兵

共命ヲ忘武勇ヲ勵金子家忠保元ノ合戰ニ爲朝ノ陣ニ懸入高間兄弟ヲ討取名譽ヲ施兵也今又軍將之前ニ進猛威ヲ振合戰ス義平既六波羅ニ懸入之處清盛名謁而相戰ント欲義平大悅攻入之間平家ノ兵防戰ス爰義平ノ兵終日之合戰ニ疲ニ依テ遂引退之處父義朝之ヲ見テ大ニ怒攻入之間正清等之郎從無勢ヲ以多勢ニ勝ン事不能之赴諫言ヲ加ニ依テ遂此ヨリ沒落ス爰ニ小原ヲ經テ龍華越ニ赴之處西塔法師等之ヲ遮留ント欲之間齋藤實盛カ計略ヲ以避々其難ヲ遁處又龍華越ニ於テ横川法師等多勢襲來而之ヲ討留ントス進退維ニ谷之間相從處之兵各志ヲ一而責戰ニ依テ彼輩協ス而遂逃散ス此時源義隆義隆六男頸ノ骨ヲ被射而命ヲ留ム又源朝長義朝次男右ノ股ヲ被射訖其後義朝ハ近江國ニ出テ所存ニ依テ相從處之郎從ヲ分散而子息并義信重成政家金王丸等僅八騎一所而落下之處賴朝長途ニ泥ニ依テ遂相從云々又逆心之張本信賴初小松重盛待賢門ヨリ責入之時前後ヲ忘却シ防戰ニ及ス而引退之處義朝等之軍士平氏ヲ追テ大内ヲ出之間其儘逐電而仁和寺御堂ニ參上皇ヲ憑奉潛隱居ス同廿八日平賴盛教盛等承而仁和寺ニ於テ隱居處謀叛之輩五十餘人搦捕六波羅ニ將參信賴卿ハ張本ニ依テ松浦重俊ニ課テ遂首ヲ斬又源季實同子季盛ハ遁處无而父子共誅セラル又日叙位除目行テ清盛ハ正三位ニ叙嫡子重盛ハ伊豫守次男基盛ハ大和守三男宗盛ハ遠江守舍弟賴盛ハ尾張守伊藤景綱ハ伊勢守ニ任上卿ハ花山院忠雅職事ハ藏人朝方也同日叛逆輩七十三人之官職ヲ止爰義朝ハ東國ヲ志漸美濃國ニ赴之所寒風膚ヲ破白雪路ヲ埋行步進退ナラス而定康ト云者忽然而其所ニ參向平氏之追捕ヲ遁ン爲ニ先氏寺大吉堂ノ天井之内ニ隱置院主



阿願房ヲ始住僧等ヲ以警固シテ後私宅ニ請相勞奉翌年ノ暮マテ又青墓宿之長者大炊之許而  
 休息給彼女延壽ハ義朝ノ妾タルニ依テ也爰義朝偏平家ヲ追討事ヲ思ニ依テ其計略ノ爲ニ  
 嫡子義平ニ於テハ飛驒國ニ赴次男朝長ニ於テハ信乃國ニ赴之處朝長ハ長途之深雪凌ニ依  
 テ龍華越而被處之疵太以堪難之間偏死ヲ致シ事ヲ請之處父義朝之爲ニ刺害ル于時年十六  
 歲是義朝之次男母ハ修理大夫範兼之女也爰青墓之鄉人等多勢競起而義朝ヲ襲之所ニ源重  
 成多田滿仲會弟滿政六代孫佐渡源太重實末男式部大輔ト號子安森邊ニ走向我是義朝也ト名謁而自害于時年廿九歲重成義朝  
 之命ニ替ニ依テ萬死ヲ遁希有而夜ニ入此宿ヲ出ラル其後大炊之弟鷲栖源光ヲ憑海上ヲ經  
 而尾張國智多郡野間内海ニ於テ譜第家人長田忠致之宅ニ着暫休息是郎從鎌田政清之舅タ  
 ルニ依テ也 永曆元年庚辰正月三日源義朝家人長田忠致カ爲ニ殺害セラル于時年卅八歲  
 又鎌田正清同誅セラル年義朝ト同シ是後藤太秀郷十代孫鎌田通清之子長田忠致忽身之不義ヲ忘貪欲無道而大  
 惡逆ヲ思企所也同七日義朝並正清之首上洛是長田忠致同子景致不次賞ヲ望ノ爲ニ持來處  
 也仍平兼行出納康通等二條京極千手堂ニ行向之ヲ請取而實檢同九日兼行信房義守範守朝  
 忠季通等之檢非違使人行向首ヲ請取西洞院ヲ上リニ之ヲ渡左獄門之苦棟木ニ掛同十八日  
 平家郎從難波經遠多勢ヲ以源義平之旅宿三條烏丸ニ行向而之ヲ攻襲之所惡源太武勇ヲ振  
 之餘ニ事無而遂其難ヲ遁テ逐電是日來飛驒國ニ在テ平家追討之策ヲ回之所父滅亡ノ間事  
 以相違之ニ依テ一人ト雖平家ヲ討而宿意ヲ散ン爲潛上洛而舊好之家人志内景澄ヲ憑隱居  
 時々平家ヲ伺ニ依テ也 同廿五日難波經房之郎從橘貞綱近江石山寺邊ニ於テ多勢ヲ以源

義平ヲ生捕而六波羅ニ進其後經房ニ課テ六條河原ニ而頭ヲ斬于時年二十歲是義朝之嫡子  
 母橋本遊女也最後ニ及荒言惡口ヲ吐我死後雷公ト成經房等之怨敵ヲ降伐云々 同二月九  
 日平家郎從平宗清朝長首并賴朝ヲ召具而六波羅ニ參著是去年十二月之末父ト一所而沒落  
 之時長途之雪中ニ泥ニ依テ近江國小野宿邊ヨリ父ニ殿之間所々ニ於テ漂泊之所ニ淺井北  
 郡ニ而或老尼之ヲ見相憐而即茅屋ニ歸老父ト共ニ相勞之間此所ニ於テ暫休息今年春二月  
 始山路ヲ經此所ヲ出ルノ所或谷河邊而鶴師ニ遇彼憐憑テ美濃國青墓長者大炊之宅ニ到後  
 商人ノ形ヲ假是ヨリ東國ニ赴之所關カ原而平宗清ニ行逢之間即生虜上洛宗清又青墓而朝  
 長首ヲ尋出同之ヲ所持ニ依テ也 同十一日夜ニ入義朝之息女夜又女美乃國杭瀬河ニ而身  
 ヲ投是父滅亡并朝長之事悲歎ニ依テ也同三月廿日源賴朝死罪ヲ遁伊豆國ニ配流是平清盛  
 之繼母池尼公憐成偏誅戮ヲ免ノ由賴宥申ニ依テ也應保元年辛巳歲新熊野日吉等之社建  
 同年藤原定家卿誕生是御堂關白道長公五代孫俊成卿之子母若狹守親忠之女也 同二年壬  
 午歲一女四子ヲ生 長寬二年甲申八月廿六日崇徳院御廢所讚岐國志渡ニ而崩御于時御年  
 四十六歲其後同國白峰ニ於テ葬奉讚岐院是也 同年平義時誕生是北條四郎時政之次男也  
 同年畠山重忠誕生是葛原親王十二代孫秩父莊司平重能之次男也 永萬元年乙酉歲或女  
 頭二手四足ニアル子ヲ生之ヲ占ニ兵亂之兆也同年賴朝弟源希義父義朝之緣坐ニ依テ土佐  
 國相良莊ニ配流是駿河國住人香貫ト云者平家召進ニ依テ也同年六月七日洛邊蓮華王院ノ  
 西砌ニ於テ醴泉涌出



七十九代六條院 御諱順仁二條院第一御子御母大藏少輔伊岐兼盛之女也二條院長寬二年甲申十一月十四日御誕生御年二歲而二條院永萬元年乙酉七月廿六日御即位元年丙戌歲也御世ヲ治給事三年而仁安三年戊子二月十九日御位ヲ後白河院第五皇子ニ禪給高倉院安元二年丙申七月十七日崩御于時御年十三歲 此朝年號 仁安三年也 此帝御宇仁安元年丙戌歲平清盛內大臣ニ任 同二年丁亥歲平清盛太政大臣ニ任 同年源為朝伊豆國大島ヨリ鬼栖島ニ渡鬼童ヲ以テ奴而自宅ニ還之ヲ使 同年七月三日夜平清盛之馬尾鼠巢ヲ作同三年戊子歲夏四月榮西葉上房明菴、號是建仁寺壽福寺等開山商船ニ乘而大宋國ニ渡支那ハ大宋十一代孝宗皇帝朝乾道四年也宋朝而同夏五月四明ヲ起丹丘ニ赴處適本國之重源後乘坊是也遇則相伴天台山ニ登教ヲ受 同年七月七日相國清盛父子一類攝津國布引瀧歷覽之時難波經房雷公之爲ニ蹴殺サル是源義平之首ヲ斬者也 同年秋九月榮西重源ト共ニ日本ニ歸朝 同年十一月十二日平清盛公病ニ依テ出家法名淨海ト號

八十代高倉院 御諱憲仁後白河院第五御子御母皇后滋子後建春門院ト曰贈左大臣平時信之女也二條院應保元年辛巳九月三日御誕生御歲八歲而六條院仁安三年戊子三月廿日御即位元年己丑歲也御世ヲ治給事十二年而治承四年庚子二月廿一日御位ヲ皇太子ニ禪給安德天皇養和元年正月十四日平賴盛池殿於崩御于時御年二十一歲 此朝年號 嘉應二年 承安四年 安元二年 治承四年 此帝御宇嘉應元年己丑歲春三月洛東山清水瀧絕失一同年六月十七日後白河院法住寺殿於テ御出家法名行眞御戒師三井前大僧正覺忠御剃手ハ法印

尊覺權大僧都公顯也 同二年庚寅歲比叡山衆徒清水寺ヲ燒 同年夏四月源為朝鎮西八郎是也伊豆國大島館ニ於テ自害于時年三十三歲先而子息爲賴島冠者ト號害于時年八歲是當初配流之時伊豆國住人狩野介茂光之領地ヲ押領依テ即茂光京都ニ訴申之所院宣ヲ賜之間伊東祐親北條時政宇佐美政光同實政加藤太光員加藤次景廉澤宗家仁田忠常天野遠景等相語彼島へ押寄之ヲ責襲之處爲朝弓勢ヲ振兵船ヲ射破多之軍兵ヲ滅之後館ニ歸テ自害云々 同年秋九月京中櫻梅桃李花悉皆開 承安元年辛卯春三月平清盛公第二之女德子後建禮門院御入內當今之中宮 同年正月廿三日南方ニ赤光アリ大サ車輪ノ如シ 同年夏藤原成親卿平康賴俊寬僧都等東山鹿谷ヲ會所ト而多田行綱等之武士ヲ相語平家追討之謀玆ヲ企 同二年壬辰歲十一月十七日蓮華王院佛光ヲ放 同三年癸巳歲平相國入道淨海俗名清盛攝津國兵庫於テ島ヲ築時人之ヲ經島ト云又築島トモ云 同年本願寺開山親鸞上人誕生是大職冠十九代孫日野家余流皇太后宮大進藤原有範之子也 同年高尾文覺上人伊豆國ニ配流 同四年癸巳三月三日源義朝九男遮那王九十六歲而潛鞍馬寺東光坊ヲ忍出東國ニ赴是下總國住人源重賴深酒諸陵助商人橋次末春ヲ憑同道ニ依テ也此日近江國鏡宿ニ著夜ニ入テ自元服ヲ加源九郎義經ト名乘 同年清水子安塔供養同年法然上人源空比叡山黑谷ヲ出而洛東山麓吉水ニ遷專修念佛之宗旨ヲ立安元二年丙申歲朝夷名義秀誕生是和田義盛之三男母木曾義仲妾巴女也 同年九月廿八日俊成卿病ニ依テ出家法名釋阿 同年德大寺實定卿左大將任治承元年丁酉四月廿八日大內裏炎上并公卿等之舊跡家屋數箇所燒失大內裏ハ此後建事ナシ或本大極殿



同年五月廿七日多田行綱攝津國福原へ馳下太政入道之宅ニ行向成親卿等之謀叛返忠 同年六月一日平家太政入道兵所々ニ差遣成親卿以下之謀叛之輩ヲ搦捕同日逆心張本西光法師朱雀大路而頭ヲ斬是清盛公ニ對面縛之身而大惡口ヲ吐者也元信西入道之郎黨左衛門尉師光也去平治元年冬十二月信西田原奧ニ而堀埋時師光自髻ヲ切西光ト稱當時後白河法皇近習之者也 同二日成親卿死罪ヲ遁備前國ニ配流是小松重盛公申宥ニ依テ也日ヲ經テ後難波經遠ニ課テ遂殺害又成經成親之子康賴俊寬等薩摩國鬼界島ニ流サル 同年六月廿九日天治先帝諡ヲ奉テ崇徳院ト號 同二年戊戌春正月彗星東方出十八日光ヲ映 同年三月廿四日信濃國善光寺炎上 同年七月三日鬼界島ノ流人成經康賴召返俊寬ニ於ハ太政入道猶以憤ヲ含ニ依テ之ヲ除赦免之事中宮清盛第二之女御產御祈禱依テ也同二年己亥三月十六日昏ニ及而流人成經康賴都ニ歸入康賴是ヨリ而東山雙林寺ニ閑居同年夏五月平重盛公小松内宿願ニ依テ熊野參詣時人命乞ト云同年七月廿八日平重盛病ニ依テ出家法名靜蓮亦名證空 同八月一日平重盛公薨于時歲四十三歲時人本朝賢人ト云同十一月十五日清盛入道日來愁鬱ニ依テ朝家ヲ恨奉師長公以下公卿四十二人之官職ヲ止當時關白基房公ヲ太宰權帥ニ徙備前國湯迫ニ流奉基房公此時淀古川邊ニ於テ出家年三十五歲同廿日清盛入道沙汰而後白河院鳥羽離宮押籠奉時人偏是崇徳院御怨念之及處也云々同四年庚子四月九日夜ニ入入道源三位賴政子息仲綱等ヲ相具而潛高倉宮後白河院第二之皇子茂仁王是也之御所ニ參源賴朝以下之源氏等ヲ相催平家ヲ滅天下ヲ執給由申勸是平清盛入道ヲ討滅ヘキ旨日來之事有ト雖私ノ計略ヲ以大宿意ヲ

遂難ニ依テ也仍宗信ニ課テ令旨ヲ下サル爰源義盛賴朝叔父折節在京之間此令旨ヲ帶東國ニ向先賴朝ニ相觸其外之源氏等ニ傳ヘキ之趣ヲ含ラル義盛入條院藏人ニ補而名ヲ行家ト改同廿七日高倉宮令旨伊豆國北條館ニ到着之間源賴朝謹而之ヲ拜見即行家持來所也 同五月十五日高倉宮諸國源氏等ニ賜所之令旨露顯之間同戊刻源兼綱光長等平家之下知ニ依テ兵ヲ率高倉宮御所ニ押寄爰宮賴政之告ヲ得給ニ依テ之ニ先テ遁出之間尋搜奉雖遂見給ハス此間宮之侍長谷部信連相戰光長等之郎等五六人疵ヲ被其後光長土岐先祖多勢ヲ以信連ヲ搦捕還去々十四日後白河院鳥羽殿ヨリ八條鳥丸御所ニ還御是平宗盛申宥ニ依テ也 同十九日賴政入道近衛河原宅自火ヲ放一族家人等ヲ相具而高倉宮ノ御方ニ參向是去十五日宮潛ニ三井寺ニ入御ニ依テ衆徒法輪院ヲ御所ニ構之由風聞ニ依テ也 同廿六日卯刻宮南都ニ赴給是三井寺ハ無勢之間奈良大衆ヲ憑給ニ依テ也賴政一族并寺衆徒等御伴ニ候爰宮宇治平等院ニ而御休息之所平家軍將知盛雅雅盛以下太政入道之子孫家人二萬餘騎ヲ率競襲奉之ニ依テ賴政一族三井寺法師等橋之中板ヲ外河ヲ阻防戰筒井淨妙坊一來法師等橋桁ヲ渡而責戰一來法師爰而討死仍合戰勝負ヲ決雖處平家之軍兵足利忠綱先陣而川ヲ渡之間二萬餘騎ノ軍兵等續テ之ヲ渡競攻之所賴政以下宮方軍兵命ヲ忘而防戰ト雖無勢ニ依遂敗北爰賴政今年七十六歲而父子一族共ニ自害高倉宮ハ南都ニ向給處光明山ノ鳥居前ニ於テ流矢ニ中給間平家侍飛驒判官景高郎從馳來之ヲ討奉于時御年三十歲此事ニ依テ諸國ノ源氏等皆以追討スヘキノ旨其沙汰アリ 同六月二日都ヲ攝州福原ニ移即行幸其後白河法皇清盛入



道之沙汰而樓御所ニ押籠奉軍兵ヲ以警固ス是高倉宮御謀叛之事ニ依テ也 同七月六日後  
 白川院福原樓御所ニ於テ平家追討之院宣ヲ源賴朝ニ給是文覺上人光能卿ニ屬テ潛申請ニ  
 依テ也 同八月十七日源賴朝日來令旨院宣ヲ賜ニ依テ譜第之家人等ヲ相催處今日夜ニ入  
 鼻北條時政佐々木定綱兄弟加藤次景廉等之兵ヲ以伊豆ノ目代山本判官平兼隆ヲ誅伐是且  
 國敵ノ爲且意趣ヲ挿給之故先平家追討之試ト而征伐所也惡右衛門尉藤原信賴之緣坐ニ依テ去  
 永萬元年三月十一日當國ニ流サレ嗟而二十一年之春秋ヲ送今日始而義兵ヲ起 同廿三日  
 賴朝三百餘騎ヲ率而相模國石橋山ニ陣取之所平家人大庭景親以下三千餘騎伊藤祐親入道  
 三百餘騎ヲ率而前後ヲ攻襲昏ニ及景親等已數千兵ヲ以責戰之間真田義忠武藤三郎等討死  
 賴朝無勢之間協ハス而遂戰負曉ニ及杉山ノ中ニ退入 同廿四日賴朝杉山内堀口邊ニ陣ス  
 ル之所景觀等大軍ヲ率而重テ競襲之間賴朝後ノ峰ニ遁給此間景廉實政等御後ニ留而防戰  
 賴朝又弓箭之藝ヲ振事度々ニ及北條父子高綱景廉等數返合々々攻戰ニ依テ遂險阻ニ攀登  
 其難ヲ遁其後潛箱根山ニ到所別當行實之忠計ニ依テ弟子永實之宅ニ隱居給 同廿四日曉  
 三浦之輩荒二郎義澄和田義盛等賴朝ノ御陣ニ參向之所去石橋杉山等ノ合戰ニ源家敗軍ノ  
 間思ヒノ外馳歸其路次由比ノ濱ニ於テ畠山重忠ト數刻相戰之所畠山戰負而遂引退 同  
 廿五日賴朝箱根山隱居給ニ依テ山中ノ惡徒等之ヲ攻襲ノ所行實計申之間箱根通ヲ經土肥  
 鄉ニ赴給 同廿六日畠山且平家之恩ヲ報セン爲且由比濱ノ會稽ヲ雪爲河越重賴江戶重長  
 等ヲ相催大軍ヲ率三浦一類楯籠所之衣笠城ヲ攻襲之ニ依テ義澄義盛等之一類防戰ト雖昨

今之合戰ニ力疲矢種盡之間夜中ニ及城ヲ遁去是平義明三浦大介是也和田義盛之祖父也之諫ニ依テ賴朝之存  
 否ヲ尋ンカ爲也 同廿七日辰刻三浦大介義明河越重賴江戶重長等ノ爲メニ衣笠城ノ邊ニ  
 而遁ニ討ル于時年八十九歲齡已ニ八旬ニ及之上殊扶兵之無ニ依テ也是作日義澄義盛等城  
 中ヲ遁出之時之ヲ扶持スト雖所存ニ依テ殘留所也 同日義盛義澄等之一族海上ヲ經安房  
 國ニ赴 同廿八日賴朝實平等ヲ具土肥眞名鶴崎ヨリ船ニ乘安房國ニ赴給 同日大庭景親  
 飛脚ヲ京都ニ進是賴朝謀叛之事ニ依テ也 同廿九日賴朝安房國平北郡獵島ニ着給北條時  
 政三浦一族等此所ニ參向太以欣悅 同九月二日景觀使節福原ニ著是賴朝院宣ヲ被義兵ヲ  
 起之由申所也 同六日平家賴朝追討之院宣ヲ賜是東國所々之飛脚ニ驚去二日清盛入道院  
 御所ニ參望申ニ依テ也 同七日本會義仲日來平家ヲ滅家ヲ興スヘキ志有之所賴朝東國ニ  
 於テ義兵ヲ起之由遙ニ之ヲ聞忽本意ヲ現ント欲所平家ノ方人平賴直信乃國住人笠原平吾今日兵ヲ率  
 而木曾ヲ攻襲之間義仲方ノ兵村山義直範覺法師等信濃國市原ニ而合戰ス義直等頗雌伏ニ  
 依テ是ヲ木曾ニ告仍義仲大軍ヲ率競到之間賴直等之ニ怖引退 同九日賴朝征伐ト而平家  
 ノ官軍首途 同十二日賴朝安房國ヨリ上總國ニ赴相從所之精兵三百餘騎ニ及 同十七日賴  
 朝下總國ニ赴給千葉介常胤父子共ニ參向 同十九日上總介廣常國中ノ兵ヲ相催テ萬餘騎  
 率隅田河邊ニ而賴朝御陣ニ參向相從奉 同廿二日賴朝追討爲平家ノ軍將惟盛忠度知度等  
 齋藤實盛ヲ以先陣ト而福原ヲ起 同廿九日小松惟盛忠度知度等源氏追討之爲關東ニ發向  
 是去石橋杉山等之合戰之事大庭景觀告申ニ依テ也 同十一月日賴朝鷺沼之旅館ニ而御弟醍



醐禪師全成小名始而御對面是高倉宮令旨ヲ下之由傳聞潛醍醐寺ヲ忍出修行ノ體ヲ以下之  
 由之ヲ申賴朝大ニ其志ヲ感給 同二日賴朝三萬餘騎之軍兵催集武藏國ニ赴給 同四日畠  
 山重忠江戶重長等長井ノ渡ニ參向是日來源家ヲ叛三浦ノ輩ト合戰スト雖今ニ於テハ忠節  
 ヲ致ヘキ之由陳謝依テ賴朝軍勢ニ召加ラル 同六日賴朝相模國ニ着給畠山重忠先陣ニ候  
 千葉介常胤後陣ニ候 同十三日平家將軍惟盛數萬騎ヲ率而駿河國手越ノ驛ニ下着 同十  
 四日甲州源氏武田信義安田義貞等之一族日來賴朝之催ニ依テ軍兵二萬騎ヲ引率駿河國ニ  
 赴爰駿河目代橘遠茂長田入道等甲斐國對治之爲彼國ニ赴之處鉢山邊ニ而不慮ニ相向合戰  
 ス遠茂長田等多勢ヲ以防戰ト雖不協而遂長田父子討死遠茂擄捕從軍等悉以逃亡 同十五  
 日賴朝始而鎌倉御亭ニ入御 同廿日賴朝廿萬餘騎ヲ率駿河國賀島ニ到是去十三日平家軍  
 兵當國ニ着陣ニ依テ也爰平惟盛忠度知度富士河之西岸ニ陣之所夜半ニ及武田信義潛件後  
 ヲ襲之間富士河ニ集居所ノ水鳥等群立其羽音偏軍勢ノ粧ニ似之ニ依テ平氏之軍兵等驚騷  
 天之曙ヲ待ス而逃登 同廿一日賴朝平家ヲ追而攻上之由軍勢等ニ下知所常胤廣常義澄等  
 先悉東國ヲ鎮テ後攻上之由諫申ニ依テ此度ハ延引仍黃瀬河ノ宿ニ迂給之所舍弟義經源九  
 佐藤繼信忠信等召具始而此所參向是兄賴朝義兵ヲ起給之由傳聞ニ依テ與州秀衡館ヨリ馳  
 參所也 同廿三日賴朝相模國府ニ於テ始而勳功ノ賞ヲ行或本領ヲ安堵或新恩ヲ蒙又去八  
 月合戰之時度々ニ及而源家ヲ攻襲所之專一之兵景親等遂此所ニ降參依テ人々ニ課囚人之  
 輩召預 同廿六日囚人景親大庭黃瀬河ノ邊ニ於首ヲ斬是兄景義ニ課セ合ル所也 同廿七

日賴朝佐竹秀義等退治之爲常陸國ニ御進發 同十一月二日平家大將惟盛以下功無而洛ニ  
 歸入 同四日賴朝常陸國府ニ着即軍勢ヲ以佐竹秀義楯籠所之金沙城ヲ攻襲之所要害堅固  
 而容易責得事難云々 同五日秀義之叔父佐竹藏人義弘之歸忠依テ上總權介廣常城之後ヲ  
 回鬨音ヲ造其聲殆城郭ヲ響ス是圖サル所也秀義及郎從等防禦之術ヲ忘周章騷橫行ス廣常  
 彌力ヲ得攻戰之間防戰所之軍兵等遂敗北依秀義跡ヲ暗云々 同六日廣常秀義沒落之跡ニ  
 入城壁ヲ燒拂ヒ其後軍兵ヲ方々ニ分遣秀義ヲ搜求之所深山ニ入テ後與州ノ方ニ赴云々  
 同七日廣常等歸參又佐竹藏人參上而御家人タルヘキ之田望申之所即許容給 同日志田義  
 廣藏人行家二人共賴朝之叔父等常陸國府ニ參賴朝ニ謁申 同十七日賴朝鎌倉ニ還著 同日和田義盛  
 侍所別當ニ補是賴朝之安否未定之時兼而望申ニ依テ御許容之ニ依テ上首ヲ閣キ役付 同  
 廿一日福原新都ヨリ還幸主上ハ五條內裏法皇ハ法住寺殿へ還御云々是山門之詔詔ニ依テ  
 也時人都ニ還云々 同廿三日前關白基房公備前國廢所ヨリ歸洛 同十二月一日平知盛以  
 下數千騎ヲ率而近江國ニ發向源氏山本義經柏木義兼等ト合戰源氏身命ヲ捨防戰ト雖平家  
 多勢ヲ以火ヲ放責破之間協ハス而遂敗北是賴朝同意之由其聞有ニ依テ也 同十一日清盛  
 入道重衡ヲ以三井寺ヲ攻襲是當寺衆徒去五月高倉宮守護ニ依テ也南都同滅亡云々此事日  
 來沙汰無之所賴朝東國ニ於テ合戰ヲ遂之間衆徒定テ與歟之由平家思慮ヲ回ニ依テ也 同  
 十二日三井寺平家ノ爲ニ燒失金堂以下堂舍佛閣聖教等大略以灰燼ト成此時平家ノ爲ニ討  
 ル、所ノ大衆法師等八百餘人云々 同廿五日重衡朝臣數千官兵ヲ率而南都發向首途云々



同廿八日重衡南都攻破衆徒ヲ亡寺中ニ火ヲ放之間東大寺興福寺郭内之堂塔一字ト而其炎ヲ免カレヌ佛像經論同以灰爐ト成爰火焰大佛殿ニ懸之間其周章堪ス而身ヲ抛燒死者三人兩寺之間ニ意ナラス燒死スル者一百餘人也

八十一代安徳天皇 御諱言仁高倉院第一御子御母中宮德子後建禮門院ト曰太政大臣平清盛公之女也高倉院治承二年戊戌十一月十二日御誕生御年三歲而治承四年庚子四月廿二日御即位元年辛丑歲也御世治給事三年而壽永二年癸卯七月廿五日外戚之一族ニ被引而西海ニ赴給三種神器同具奉後鳥羽院文治元年乙巳三月廿四日長門國海上ニ於テ平家之一類滅亡之時ニ及御沒海于時御年八歲寶劍亦沉失訖 此朝年號養和一年 壽永二年也 此帝御宇養和元年辛丑正月十一日梶原景時始而源賴朝ニ候是文筆ニ携スト雖言語ニ巧者也仍專賴朝ノ御意ニ相叶云々 同十四日高倉院六波羅池殿ニ於テ崩御是日來御腦之所亂世并南都三井寺等之燒失嘆思召ニ依テ御腦頻重給云々 同二月一日平家軍將知盛等東國ニ發向 同九日源義基之首并舍弟四人義資義廣等大路ヲ渡首ニ於テハ獄門ノ前ニ樹ニ掛ラル是八幡太郎義家之五男石河義時ノ子等也日來賴朝同意之聞有ニ依テ去年冬十二月河内國石河郡ニ於テ平家之爲ニ討取ニ依テ也 同十二日平知盛同清經行盛等近江國ヨリ歸洛 源氏追討之爲ニ東國發向之所知盛卿之所勞依テ也俱美乃國ニ於テ討取所ノ源氏等之首同入洛所謂小河重清三浦義明上田重康父子冷泉賴典葦敷重義伊達家忠兄弟越後太郎重家兄弟等也 同十三日豐前國宇佐大宮司公通之飛脚六波羅着是九州住人等謀叛ヲ起ニ依テ也

同十六日近江美濃ニ而討取所之源氏等之首洛中ヲ渡獄門ノ樹ニ掛 同十七日伊豫國之飛脚六波羅着是四國住人河野等平家ヲ背謀叛ヲ起ニ依テ也同十九日賴朝義仲ニ同意所之東國北國之凶徒等征伐スヘキ由之宣旨平資永越後國住人城大郎藤原秀衡奥州住人兩人ニ下サル 同廿五日平家太政入道重病ヲ受 同廿九日鎮西ニ於テ合戰之事アリ是肥前菊池豐後緒方等平家ヲ叛ニ依テ原田種直九州之軍勢二千餘騎ヲ相催責戰菊池等之郎從多以疵ヲ被云々 同閏二月四日戊刻清盛入道九條河原口盛國宅而薨于時年六十四歲遺言曰三箇日已後喪禮スヘシ遺骨ハ播磨國山田法華堂ニ納佛事ハ毎日修スヘカラス七日毎ニ候スヘシ京都ニ於テ追善ヲ成スヘカラス子孫偏賴朝追討之計ヲ營ヘシ云々同八日源氏追討之院應御下文ヲ平家ニ賜是平宗盛申請ニ依テ也 同十日宗盛家人景高大夫判官千餘騎ヲ率而東國ニ發向 同十五日院應御下文ヲ東海道ノ諸國ニ下ス之間平重衡之ヲ帶精兵千餘騎ヲ率而東國ニ發向 同廿三日藤原國綱五條大納言是也清盛之朋友薨是閑院左大臣冬嗣公十一代孫左馬權頭盛邦之子也同日賴朝叔父志田義廣三郎先連々骨肉之好ヲ忘自立ヲ思ニ依テ三萬餘騎之軍勢ヲ卒鎌倉方ニ赴先足利忠綱ヲ相語是賴朝ヲ背者也亦小山朝政ヲ語所小山ハ元來足利ニ不快ナル上賴朝ニ忠ヲ存ニ依テ僞テ先領狀ス爰義廣悅ヲ成彼館ニ來所朝政無勢ナリト離計略ヲ以戰之間義廣忠綱等遂敗北 同年親鸞上人本願寺之開山九歲而青蓮院慈鎮和尚于時道之門弟成專天台教法ヲ學 同三月十日源行家父子卿公義圓賴朝之弟泉重光等尾張參河兩國之兵ヲ相具而墨俣河ニ陣スル所平家大將重衡惟盛道盛忠度知度等多勢ヲ率同河之西ニ對陣昏ニ及行家計ヲ回潛責襲



所重衡卿舍人金石丸其形勢ヲ見尤奔還之ヲ告依テ平家先而攻襲之間源氏頗度ヲ失遂敗軍  
 此時義圓賴朝弟少名乙若丸高田盛綱カ爲ニ討ル源行賴行家忠度之爲ニ生捕ラル重光兄弟平盛久カ爲  
 ニ討死相從所之軍兵或河ニ入溺死或平家之爲ニ命ヲ亡者凡六百九十餘人也 今年四月正  
 月之間大飢饉 同五月廿五日戌刻客星長ニ出色青赤而芒角 同六月十四日信濃國橫田河原  
 而木曾義仲城資永越後住人合戰資永多勢ト雖義仲之武略ニ依テ遂敗軍 同八月三日平家侍平  
 貞能肥後守多勢ヲ率而九州ニ下向是九州之住人等平家ヲ叛ニ依テ也 同十三日奥州秀衡ニ  
 於テハ賴朝ヲ追討越後國城資永ニ於テハ木曾追討スヘキ由宣下アリ是平家ノ申行ニ依テ  
 也 同日城資永從五位下越後守ニ任 同十五日平經正北國ニ進發是木曾追討之爲也同十  
 六日平通盛北國ニ發向又伊勢守清綱上總介忠清館貞保等東國ニ發向是賴朝追討之爲也  
 同廿五日藤原秀衡從五位上陸奥守ニ任是賴朝追討之爲也 同九月三日城資永木曾追討之  
 爲軍勢ヲ率而發向セント欲所已刻頓死是天譴ヲ蒙歟 同四日本會義仲平家追討之爲北陸  
 道ヲ回所先陣根井太郎越前國水澤ニ到而平家軍將通盛之軍勢ト已合戰始 同七日阿波成  
 良民部大夫平家之下知ニ依テ伊豫國ニ亂入河野以下在廳等ト合戰河野無勢ニ依テ雌伏同十月  
 三日平家軍將惟盛卿源氏追討之爲東國ニ發向 同日皇嘉門院崇德院崩御 同十一月六日青蓮  
 院主道快後慈鎮和尚ト曰名改而慈圓ト號 同十一日平道盛行盛等北國ヨリ歸洛經正ハ若狹國ニ逗  
 留 同廿五日中午德子院號ヲ蒙給而建禮門院ト曰安德天皇之御母也 壽永元年壬寅三月  
 廿六日本會追討之爲平家之軍勢首途 同四月五日賴朝江島ニ赴給文覺上人ヲ以江島辨才

天ニ而祈禱始是奥州秀衡調伏之爲也今日即鳥居ヲ立其後還和 同八月十二日酉刻源賴家  
 誕生後金吾將軍ト曰是賴朝之長男母政子北條時政之女也 同九月十五日本會追討之爲北國ニ發向  
 スル所之平家之軍兵等悉以歸洛已塞氣ニ屬スル間在國難義之由披露ト雖誠ハ木曾カ武  
 略ヲ怖ニ依テ也 同廿五日源希義賴朝一腹之弟土佐國吾河郡年越山ニ而蓮池家綱平田俊遠等爲  
 ニ追討セラハ是去永萬元年父義朝之事ニ依テ當國ニ配流之所近年兄賴朝東國ニ於テ兵ヲ  
 起ニ依テ平家之下知スル所也 同十月三日平宗盛內大臣ニ任 同二年癸卯三月廿六日本  
 會追討之爲平家官軍首途 同四月十七日本會追討之爲平家大軍ヲ引率而北國發向其ヨリ  
 東國ニ攻入賴朝ヲ追討云々 同廿七日平家越前國隱城ニ於テ合戰是木曾軍兵此城ニ楯籠  
 ニ依テ也爰平泉寺長吏齋明カ謀叛ニ依テ源氏軍兵責落サル之ニ依テ平家所々之合戰ニ討  
 勝而加賀國ニ攻入 同五月九日越中國般若野ニ而平家軍將平盛俊越中前司木曾軍將今井兼平  
 合戰平家所々而勝利ヲ得ニ依テ盛俊先而此所ニ相向ト雖協ハス而引退 同十一日本會義  
 仲平家追討之祈誓ト而越中國植生新八幡ニ願書ヲ上是去比平家追討之爲越後國府ヲ起而  
 當國ニ陣スルニ依テ也爰平家七萬餘騎ヲ率而俱梨伽羅到下等之所々ニ陣スル所ニ木曾策  
 ヲ回夜ニ入而之ヲ攻落平家大勢多此而滅亡ス谷ニ落埋死者凡一萬八千餘人云々 同十二  
 日曙木曾平家ヲ追而責戰搦手軍將平知度清盛之末子也遁所無而討死此時源平多以滅 同六月一  
 日加賀國安宅渡而源平合戰是去比敗軍スル所ノ平家此所ニ陣スルニ依テ也木曾ハ諸方之  
 軍兵ヲ集責襲平家亦戰負而長並一松成合等之所々引退平家兵股野景久大庭景親之弟此而討死齋



藤別當實盛源光盛手塚太郎爲二討ル是元來源氏之家人ト雖去平治源義朝滅亡之間後所領ニ就テ平家ニ屬所也大職冠之會孫河邊左大臣魚名公末流利仁將軍十七代之後胤也其後平家所々之合戰ニ打負軍兵過半滅而希有歸洛燧長畝三條野並松鹽越須河山長並一松成合篠原安宅宮腰俱梨伽羅志雄山竹濱等所々之合戰旨徒軍兵討死依テ去四月之下向ニハ十萬餘騎タリト雖今六月ノ歸洛ニハ三萬餘騎ニ過ス 同七月廿二日本曾山門大衆ヲ相語ニ依テ五萬餘騎ヲ率而比叡山ニ登惣持院ヲ城郭トス是北國ニ於テ所々之合戰討勝平家ヲ攻落ニ依テ也 同廿四日夜ニ入後白河院右馬助資持供奉而潛鞍馬御幸其ヨリ比叡山潛幸 同廿五日平家一類主上女院ヲ供奉悉以都落是木曾義仲攻上ニ依テ也此時池賴盛精盛都ニ殘留彼母池尼去永曆始賴朝之死罪ヲ宥ニ依其報恩ノ爲兼而申ニ依テ也 同廿六日法皇比叡山東塔南谷圓融房ニ入御之間公卿殿上人等參集 同日藏人行家宇治路ヲ經テ京ニ入其外此ノ兩將ニ相續所之軍兵等多勢入洛 同廿七日法皇比叡山ヨリ蓮華王院ノ御所へ還御 同廿八日義仲行家院御所ニ召是平家追討之由仰下所也 同廿九日平氏追討之御下文ヲ諸國ニ下 同八月六日平家一類公卿殿上人衛府諸司等到迄官職ヲ止 同十日法皇蓮華王院御所ヨリ南殿ニ徙給其後除目行義仲ハ左馬頭兼越後守ニ任從五位下ニ叙行家備後守ニ任是勳功賞也 同十六日兩人トモニ任國ヲ嫌申ニ依テ義仲ハ伊豫守ニ遷行家ハ備前守ニ遷其外源氏等各勳功賞ヲ蒙 同十七日平家一類筑前國太宰府ニ着菊池石戶曰粹戶槻松浦之輩主上ヲ守護奉 同十八日平家沒官之所領等源氏ニ宛給凡五百餘箇所也 同日行家義仲院ノ昇

殿ヲ聽日來上北面ニ准 同廿日高倉院第四御子法住寺殿ニ於テ御踐祚于時御年四歲後鳥羽院是後白川法皇之詔命ニ依テ也 同九月二日平家追討之御祈之爲院ヨリ公卿勅使ヲ伊勢太神宮ニ立ラル 同九月中旬平清經家之運命ヲ顧而豐前國柳浦ノ沖ニ於テ入水是小松重盛公之三男也 同十月一日備中國水島ニ於テ平家義仲軍兵ト合戰源氏軍將海野行廣源義清細川之先祖等也平家軍將重衡通盛教經等也源氏遂敗軍而多以討死源義清ハ平盛綱越中次郎兵衛ニ討レ海野行廣ハ平景清カ爲ニ討ル其外高梨高信等平教經ノ爲ニ射害サル之ニ依テ當國住人等皆平家ニ歸伏 同九日賴朝本位ニ復而右兵衛權佐ニ還任 同十一月播摩國室山ニ於テ平家又藏人行家源重弘山田次郎等合戰平家之軍將ハ平教盛父子重衡卿以下景經盛次忠光家長等也平家多勢ニ依テ源氏遂敗北黃楊有重ハ平盛次カ爲ニ討レ織戶重行ハ平景清カ爲討死此間行家重弘等希有而和泉國ニ引退之ニ依テ備前播磨兩國之兵等多以平家ニ隨付云々 同十九日本曾義仲法住寺殿後白川法皇御所也ヲ攻破御所中燒拂之間同楯籠所之官軍等多以討死此時八條宮明雲僧正天台座主等討レ給是日來木曾狼藉ヲ致ニ依誅伐之由知康壹岐判官等申行官軍ヲ召集御所中ニ相籠ルニ依テ也 同廿日法皇ヲ五條內裏ニ押奉軍兵ヲ以守護 同廿八日公家武家共ニ四十九人之官職ヲ止是法住寺殿御謀叛之事ニ依テ木曾申行所也 同十二月十日法皇五條內裏ヨリ業忠大膳大夫宿所六條西洞院ノ宅ニ御幸是松殿基房公木曾ニ於テ御教訓有ニ依テ也



神皇正統錄下

八十二代後鳥羽院 初顯德院ト號ス御諱尊成高倉院第四御子御母殖子後七條院ト曰修理大夫藤原信隆之女也高倉院治承四年庚子七月十四日御誕生年五歲而元曆元年甲辰七月廿八日御即位元年甲辰歲也御世ヲ治給事十五年而建久九年戊午正月十一日御位ヲ皇太子ニ禪給順德院承久三年辛巳五月十五日關東征伐ノ官符ヲ諸國下サル、之處同六月十五日東軍還而官軍ヲ敗リ京都ニ亂入ス 同七月六日鳥羽院ニ遷給同八月方計ヲ失給忽ニ御出家法名良然同十三日隱岐島ニ遷奉四條院延應元年己亥二月廿二日崩御于時御年六十三歲隱岐院是也此朝年號 元曆一年 文治五年 建久九年也 此帝御宇元曆元年甲辰正月六日木曾義仲從四位下ニ叙ス 同十日征夷大將軍ニ任ス是狼藉ヲ宥ニ依テ也 同十九日常陸國鹿島之社僧夢想之事アリ是當社明神木曾并平家追討之爲ニ京都ニ赴キ御坐云々 同廿日戌刻黑雲鹿島寶殿ヲ覆テ四方暗而闇ノ如シ御殿大ニ震動ス鹿鷄等多以群集爰ニ彼黑雲西方ヘ亘ル鷄一羽雲中ニ有見人希代之奇特トス賴朝之ヲ聞身ヲ清メ庭上下テ遙ニ彼社ノ方ヲ伏拜給彌信仰之誠ヲ催サル云々件ノ時京鎌倉共ニ以テ雷鳴地震ス 同日源範賴蒲冠同義經源九等賴朝御使ト而數萬騎ノ軍兵ヲ率而洛ニ入是日來平家并木曾追討スヘキ之由後白河法皇ノ仰ニ依テ也爰ニ範賴ハ大手ノ軍將ト而勢田ヨリ入義經ハ搦手之軍將ト而宇治ヨリ入之處木曾カ軍兵等宇治橋之中板ヲ外シ河ヲ阻テ之ヲ防之間佐々木高綱先陣而河ヲ渡之ニ依テ數萬騎之兵相續テ渡訖勢田ニ向處之大手ノ軍兵ハ稻毛重成計トシテ田上瀨ヲ

渡木曾源義廣賴朝叔父今并兼平以下軍兵ヲ以テ兩道ニ於テ防戰トイヘトモ無勢ニ依テ遂敗

軍範賴義經畠山重忠澁谷重國梶原景季等相具而六條殿ニ馳參仙洞ヲ守護シ奉ル此間源忠

賴次郎以下之兵諸方ニ競走之處近江國粟津原ノ邊ニ於テ相摸國住人石田爲久遂木曾義仲

ヲ誅戮ス于時年三十一歲亦郎從今并四郎兼平同此時討死ス 同二十一日源義經木曾義仲

討取之由奏聞ス晚ニ及テ樋口兼光兼平兄搦進是去頃木曾使トノ石川判官代追討ノ爲河内國

ニ到處ニ石川逃亡之間空以飯洛ス爰大渡ノ邊ニシテ主人滅亡之事ヲ聞トイヘテ押以テ京

ニ入之處義經家人等馳向相戰之後之ヲ生虜云々 同廿六日檢非違使等七條河原ニ出向木

曾義仲并高梨忠直今并兼平根并行親等之首ヲ請取テ大路ヲ渡獄門ノ前ノ樹ニ懸ル又囚人

兼光同相具而渡訖 同廿九日關東兩將平家追討ノ爲ニ軍兵ヲ率西國ニ赴 同二月二日澁

谷重國奉而五條西朱雀ニ於テ囚人樋口兼光ヲ誅此兼光ハ武藏國兒玉之輩親昵ノ間頻死罪

ヲ宥ラルヘキ旨申請之所義經事ノ由奏聞スト雖遂以免許ナシ云々 同五日酉刻源氏兩將

攝津國ニ着七日之卯刻以テ矢合ト定ム範賴ハ大手軍將トノ五萬六千餘騎ヲ引率ス義經ハ

搦手ノ軍將トノ二萬餘騎ヲ引率ス平家はヲ聞資盛有盛等ヲ軍將トノ七千餘騎ヲ率シ當國

三草山之西ニ陣ス源氏亦同山之東ニ陣ス間三里隔ツ爰ニ源義經田代冠者信綱土肥次郎實

平ニ評定ヲ加ヘ夜半ニ及テ攻襲之處平家驚駭テ遂分散ス 同七日寅刻義經先勝タル兵七

千餘騎ヲ引分一谷之後鷓越ニ著爰ニ武藏國住人熊谷直實平山季重等卯刻ニ潛ニ一谷ノ前

ヲ廻海道ヨリ而城ノ木戸口ニ襲寄源氏之先陣之由高聲ニ名謁ス爰ニ平家ノ兵盛次景清忠